茨城県教育財団文化財調査報告第71集

主要地方道大洗友部線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

ヨナ川遺跡
大館遺跡
小館遺跡

平成3年9月

財団法人　茨城県教育財団

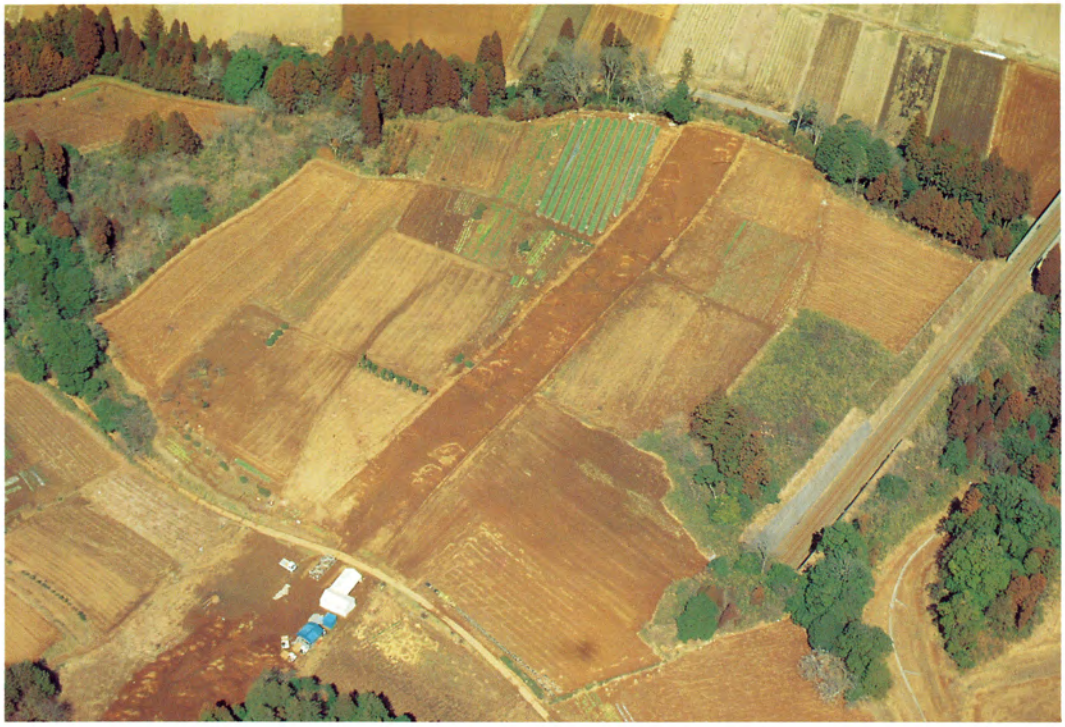
茨城県教育財団文化財調査報告第71集

主要地方道大洗友部線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

ヨナ川遺跡
大館遺跡
小館遺跡

平成3年9月

財団法人　茨城県教育財団



ヨナ川遺跡全景（空撮）

ヨナ川遺跡出土遺物

大館・小館遺跡全景（空撮）

序

茨城県は，県勢発展のため常陸那珂地区開発をはじめ大きなプロジェクトに取り組んでおり，交通体系の整備は，県土の発展基盤として重要な位置を占めています。主要地方道大洗友部線道路改良工事もその一環として計画されたものです。改良工事地内の東茨城郡大洗町成田町には，埋蔵文化財の包蔵地であるヨナ川遺跡，大館遺跡及び小館遺跡が確認されておりました。

このたび，財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，平成2年10月から平成3年3月にかけて主要地方道大洗友部線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，ヨナ川遺跡，大館遺跡及び小館遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料として，また，教育，文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会，大洗町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜わりましたことに対し，深く感謝の意を表します。

平成3年9月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，平成2年度に茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，発掘調査を実施した，茨城県東茨城郡大洗町に所在するヨナ川遺跡，大館遺跡及び小館遺跡の発掘調査報告書である。

なお，3遺跡の所在地は，次のとおりである。

ヨナ川遺跡　　東茨城郡大洗町成田町字よな川1,720ほか
大館遺跡　　東茨城郡大洗町成田町字大館2,887ほか
小館遺跡　　東茨城郡大洗町成田町字小館2,460ほか

2　ヨナ川遺跡，大館遺跡，小館遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		礒田　勇	昭和63年6月～
副理事長		小林　元	昭和63年4月～平成3年7月
		角田　芳夫	平成3年7月～
常務理事		小林　洋	平成元年4月～平成3年3月
		本田　三郎	平成3年4月～
事務局長		一木　邦彦	平成元年4月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成2年4月～
企画管理課	課長	北沢　勝行	平成2年4月～
	課長代理	水飼　敏夫	平成2年4月～
	主任調査員	小山　映一	平成2年4月～平成3年3月
	主任調査員	根本　康弘	平成3年4月～
	係長	園部　昌俊	昭和63年4月～平成3年3月
	主事	飯島　康司	平成3年4月～
	主事	吉井　正明	平成元年4月～
	主事	大貫　吉成	平成2年4月～
調査課	課長(部長兼務)	石井　毅	平成元年4月～
	調査第三班長	柴　正	平成2年度
	調査員	中村　敬治	平成2年度調査
	調査員	吉川　明宏	平成2年度調査
整理課	課長	沼田　文夫	平成2年4月～
	主任調査員	中村　敬治	平成3年度　整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，第3章「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，大館・小館の縄張り等については中世城郭研究会の三島正之氏にご指導をいただいた。

目　　次

序
例言
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査方法 …… 1
　　1　地区設定 …… 1
　　2　基本土層の検討 …… 2
　　3　遺構確認 …… 2
　　4　遺構調査 …… 3
　第3節　調査経過 …… 3
第2章　位置と環境 …… 5
　第1節　地理的環境 …… 5
　第2節　歴史的環境 …… 6
第3章　遺構・遺物の記載方法 …… 10
　第1節　遺構・遺物の記載方法 …… 10
　第2節　表の見方について …… 12
第4章　ヨナ川遺跡 …… 17
　第1節　遺跡の概要 …… 17
　第2節　遺構と遺物 …… 17
　　1　竪穴住居跡と出土遺物 …… 17
　　2　土坑 …… 97
　　3　溝 …… 99
　　4　地下式壙 …… 105
　　5　土製品・石器・石製品・鉄製品 …… 107
　　6　遺構外出土遺物 …… 118
　第3節　考察 …… 123
　　1　竪穴住居跡と出土土器について …… 123
第5章　大館遺跡・小館遺跡 …… 133
　第1節　大館遺跡 …… 133

1　遺跡の概要 …… 133
2　調査経過と方法 …… 133
3　調査結果 …… 133
第2節　小館遺跡 …… 135
1　遺跡の概要 …… 135
2　調査経過と方法 …… 136
3　調査結果 …… 136
第3節　考察 …… 138
結語 …… 143
写真図版

挿図目次

第1図　調査区呼称方法概念図 …… 1
第2図　ヨナ川遺跡土層柱状図 …… 2
第3図　ヨナ川・大館・小館遺跡周辺遺跡位置図 …… 8

ヨナ川遺跡

第4図　ヨナ川遺跡遺構配置図 …… 15～16
第5図　第1号住居跡出土遺物実測図 …… 18
第6図　第1号住居跡実測図 …… 19
第7図　第2号住居跡実測図 …… 20
第8図　第2号住居跡出土遺物実測図 …… 21
第9図　第3号住居跡実測図 …… 22
第10図　第3号住居跡出土遺物実測図 …… 23
第11図　第4号住居跡実測図 …… 24
第12図　第4号住居跡出土遺物実測図 …… 25
第13図　第5号住居跡実測図 …… 26
第14図　第5号住居跡竈実測図 …… 27
第15図　第5号住居跡遺物出土位置図 …… 28
第16図　第5号住居跡出土遺物実測図(1) … 30
第17図　第5号住居跡出土遺物実測図(2) … 31
第18図　第6・7号住居跡実測図 …… 33
第19図　第6号住居跡出土遺物実測図 …… 34
第20図　第8号住居跡実測・遺物出土位置図 …… 36
第21図　第8号住居跡出土遺物実測図 …… 37
第22図　第9号住居跡実測図 …… 39
第23図　第9号住居跡出土遺物実測図 …… 40
第24図　第10号住居跡実測図 …… 41
第25図　第10号住居跡出土遺物拓影図 …… 41
第26図　第11号住居跡実測図 …… 42
第27図　第11号住居跡出土遺物実測図 …… 43
第28図　第12号住居跡実測図 …… 44
第29図　第12号住居跡竈実測図 …… 45
第30図　第12号住居跡遺物出土位置図 …… 46
第31図　第12号住居跡出土遺物実測図(1) … 47
第32図　第12号住居跡出土遺物実測図(2) … 48
第33図　第13号住居跡出土遺物実測図 …… 50
第34図　第13号住居跡実測図 …… 51
第35図　第14号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 53
第36図　第14・15号住居跡実測図 …… 54
第37図　第14号住居跡炉・第15号住居跡竈実測図 …… 55
第38図　第15号住居跡出土遺物実測図 …… 56
第39図　第14号住居跡覆土上層投棄遺物実測・遺物出土位置図 …… 57
第40図　第16号住居跡実測図 …… 59
第41図　第16号住居跡竈実測図 …… 60
第42図　第16号住居跡出土遺物実測図 …… 61
第43図　第17号住居跡実測図 …… 63
第44図　第17号住居跡遺物出土位置図 …… 64
第45図　第17号住居跡出土遺物実測図 …… 65
第46図　第18号住居跡実測図 …… 67
第47図　第18号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 67
第48図　第19号住居跡実測図 …… 68
第49図　第19号住居跡出土遺物実測・拓影図 …… 69
第50図　第20号住居跡実測図 …… 70
第51図　第20号住居跡出土遺物実測図 …… 71
第52図　第21号住居跡実測図 …… 72

第53図　第21号住居跡出土遺物実測図 …… 73
第54図　第22号住居跡実測図 …… 74
第55図　第23号住居跡実測図 …… 76
第56図　第23号住居跡出土遺物実測図 …… 76
第57図　第24号住居跡実測図 …… 77
第58図　第24号住居跡出土遺物実測図 …… 78
第59図　第25-A・B号住居跡実測図……80
第60図　第25-B号住居跡出土遺物実測図 …81
第61図　第26号住居跡実測図 …… 82
第62図　第26号住居跡竈実測図 …… 83
第63図　第26号住居跡出土遺物実測図 …… 84
第64図　第27号住居跡実測図 …… 86
第65図　第28・29号住居跡実測図 …… 88
第66図　第28号住居跡竈実測図 …… 89
第67図　第28号住居跡遺物出土位置図 …… 90
第68図　第28号住居跡出土遺物実測図(1) … 91
第69図　第28号住居跡出土遺物実測図(2) … 92
第70図　第28号住居跡出土遺物実測図(3) … 93
第71図　第29号住居跡出土遺物実測図 …… 95
第72図　第30号住居跡実測図 …… 96
第73図　第30号住居跡出土遺物実測図 …… 96
第74図　土坑実測図(1) …… 100
第75図　土坑実測図(2) …… 101
第76図　土坑実測図(3) …… 102
第77図　第１号溝実測図 …… 103
第78図　第２・３号溝実測図 …… 104
第79図　第１号地下式壙実測図 …… 106
第80図　土製品実測図(1) …… 108
第81図　土製品実測図(2) …… 109
第82図　土製品実測図(3) …… 110
第83図　石器実測図(1) …… 115
第84図　石器実測図(2) …… 116
第85図　石器・石製品・鉄製品実測図(3) … 117
第86図　遺構外出土遺物拓影図(1) …… 119
第87図　遺構外出土遺物拓影図(2) …… 120
第88図　遺構外出土遺物実測・拓影図(3) … 121
第89図　遺構外出土遺物実測図 …… 122
第90図　ヨナ川遺跡時期別住居跡
配置図 …… 127 ～ 128
第91図　土器分類図(1) …… 130
第92図　土器分類図(2) …… 131

大館遺跡・小館遺跡

第93図　大館・小館遺跡地形及び調査区域図
…… 132
第94図　大館遺跡Ａ・Ｂ・Ｃトレンチ
土層断面・トレンチ設定図 …… 134
第95図　小館遺跡Ａ・Ｂトレンチ
土層断面・トレンチ設定図 …… 137
第96図　大館・小館遺跡概念図 … 141 ～ 142

表　目　次

表1　ヨナ川遺跡・大館遺跡・小館遺跡周辺
遺跡一覧表 …… 9
表2　ヨナ川遺跡住居跡一覧表 …… 96 ～ 97
表3　ヨナ川遺跡土坑一覧表 …… 98 ～ 99
表4　ヨナ川遺跡出土土製品
一覧表…… 107,111 ～ 114
表5　ヨナ川遺跡出土石器・石製品一覧表 …117
表6　ヨナ川遺跡出土鉄製品一覧表 …… 118

写真図版目次

ヨナ川遺跡

PL 1　調査前風景，遺構確認状況，テストピット土層

PL 2　第 1 ～ 7 号住居跡，第 5 号住居跡遺物出土状況

PL 3　第 8 ～ 14 号住居跡，第 12 号住居跡遺物出土状況

PL 4　第 14 ～ 19 号住居跡，第 14 号住居跡覆土上層投棄遺物出土状況，第 17 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

PL 5　第 20 ～ 26 号住居跡，第 26 号住居跡遺物出土状況

PL 6　第 27 ～ 30 号住居跡，第 28 号住居跡・貯蔵穴遺物出土状況

PL 7　第 3 ～ 6，8 ～ 12，15・16 号土坑

PL 8　第 11・12・15 ～ 20 号土坑

PL 9　第 20 号土坑断ち割り断面，第 1・2・21・27 号土坑，第 1 ～ 3 号溝第 1 号地下式壙

PL10　第 2 ～ 6 号住居跡出土遺物

PL11　第 8・9・12 号住居跡出土遺物

PL12　第 12 号住居跡出土遺物

PL13　第 13・15 号住居跡出土遺物，第 14 号住居跡覆土上層投棄遺物

PL14　第 16・17 号住居跡出土遺物

PL15　第 17・18・20・23・24・26 号住居跡出土遺物

PL16　第 28 号住居跡出土遺物

PL17　第 28 号住居跡出土遺物

PL18　第 26・30 号住居跡出土遺物

PL19　遺構外出土遺物，第 10・14・18・19 号住居跡出土遺物

PL20　遺構外出土遺物（第 86 図）

PL21　遺構外出土遺物（第 87 図）

PL22　遺構外出土遺物（第 88 図）

PL23　球状土錘（第 80・81 図）

PL24　球状・管状土錘（第 81・82 図）

PL25　土製品，石器，石製品，鉄製品

大館遺跡・小館遺跡

PL26　大館遺跡調査前・後全景，大館遺跡 A・B トレンチ

PL27　大館遺跡 B・C トレンチ，小館遺跡調査前・後全景

PL28　小館遺跡 A・B・C トレンチ

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

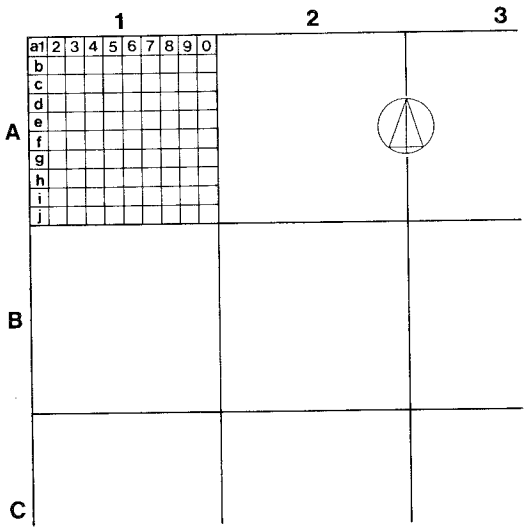
県道大洗友部線は，東茨城郡大洗町を起点とし，同郡茨城町で国道6号と交差して西茨城郡友部町を結ぶ主要地方道である。県内の産業活動の活発化に伴い，その基盤ともなる交通体系の整備は県勢発展の基本として取り組まれて来た。特に，大洗港は北海道と首都圏を結ぶフェリー貨物を中心とした商港及び首都圏を対象としたレクリェーション港湾として，年々整備されつつあり，それに伴い大洗町内の交通量も増加して来た。そこで，茨城県は，交通量の緩和と道路網の整備を図るため，夏海地内において現在の道路に平行して新たに道路を建設することとなった。

工事に先立ち，昭和62年10月9日，茨城県は，茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し，茨城県教育委員会は現地踏査を実施し工事予定地内にヨナ川遺跡，大館遺跡及び小館遺跡の3遺跡の存在を確認した。昭和63年9月28日に茨城県教育委員会と茨城県は，文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果，現状保存が困難であるとし，記録保存の処置を講ずることとなり，調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し，平成2年10月1日からヨナ川遺跡（2,276 ㎡），大館遺跡（1,587 ㎡）及び小館遺跡（1,089 ㎡）の調査を実施することとなった。

第2節　調査方法

1　地区設定

発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。日本平面直角座標第Ⅸ系座標，X軸（南北）＋30,720 m，Y軸（東西）＋63,480 mの交点を（D2a1）基準点として40 m方眼を設定し，この40 m四方の区画を大調査区（大グリッド）とした。さらに，この大調査区を東西，南北に各々十等分して4 m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。



第1図　調査区呼称方法概念図

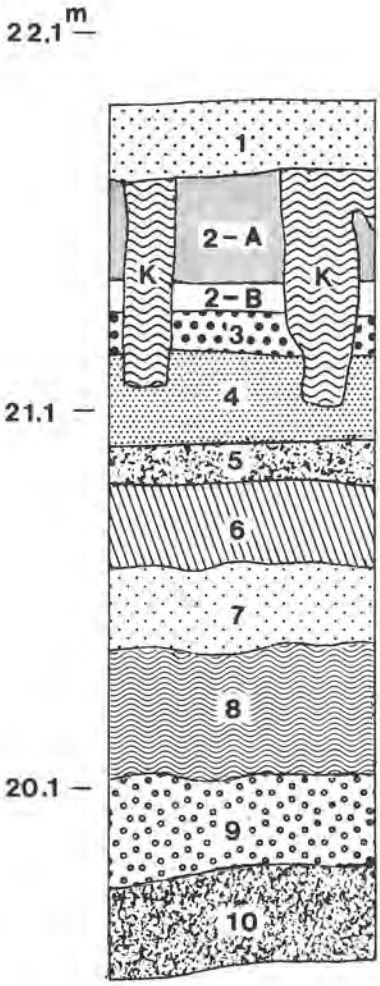
調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず，大調査区の名称は，北から南へ「A」・「B」・「C」……，西から東へ「1」・「2」・「3」……とし，その組み合わせで「A1区」，「B2区」……のように呼称した。さらに，大調査区を4m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に，北から南へ「a」・「b」・「c」…「j」，西から東へ「1」・「2」・「3」…「9」・「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせて，「A1a₁」区・「B2b₂」区のように呼称した。

なお，基準点の測量杭打ちは，財団法人茨城県建設技術公社に委託した。

2　基本土層の検討

ヨナ川遺跡のC1i₉区内にテストピットを設定し，深さ2.5mまで掘り下げ，第2図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は表土（耕作土）で，20cmほどの厚さを有し，ローム粒子・ローム小ブロックを多量に含む締まりの弱い暗褐色土である。第2層はローム粒子を多量に含む褐色土であるが，ロームの硬さにより2層に細分できる。上層の2-A部は，若干やわらかい部分が多く，下層の2-B部は硬く締まりがある。本層の上面が「遺構確認面」に当たる。第3層は，ローム粒子・鹿沼軽石を多量に含む褐色土である。第4層は，明黄褐色の鹿沼軽石層である。トレンチャーによる耕作跡が第4層まで達している。第5層は，ローム・黒色粒子を少量含む褐色土である。第6層は，褐色のローム層であり，若干の粘性をおびる。第7層は，褐色のローム層であり，ブロック状に剥離する。第8層も褐色のローム層であるが第7層よりも若干砂質である。第9層は，褐色の砂質ローム層である。第10層は，褐色のローム質砂層であり，第9層よりも砂分が多い。砂は，ロームにまだらに混入する。



第2図　ヨナ川遺跡土層柱状図

3　遺構確認

調査前の遺跡の現況は，畑地として耕作されてきた状況にあり，表面から弥生式土器片や土師器の破片が採集されていることから，弥生時代後期から奈良・平安時代の遺構の存在が予想された。

調査区域全体にグリッドを設定し，調査面積の16分の1，次いで8分の1の割合で試掘を行った。その結果，調査区域のほぼ全域に遺構（住居跡・土坑等）が存在することが認められたので，担当者間で協議し，重機を導入して速やかに調査を進められるように図った。そして，バックホーによる表土除去と作業員による遺構確認作業を行い，住居跡31軒・土坑25基・溝3条等を確認した。

4　遺構調査

ヨナ川遺跡における遺構の調査は，次の方法で行った。

住居跡の調査は，長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設け，4区に分けて掘り込む「四分割法」を基本とした。地区の名称は，北から時計回りに1～4区とした。堀・溝の調査は，適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し，掘り込みを実施した。土坑の調査は，長径で二分割して掘り込む「二分割法」で行った。

土層観察は，色相・含有物・混入物の種類や量及び粘性・締まり具合等を観察して，分類の基準とした。色相の判定は，「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物の取り上げについては，住居跡，堀，溝及び土坑の各区と遺物番号，出土位置，レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の出土状況の平面実測は，水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は，標高をもとに水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は20分の1を基本としたが，竈や部分的な微細図については10分の1の縮尺で作成した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成を基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては，野帳及び調査記録カードに記録し，さらに遺構カードに整理した。

第3節　調査経過

ヨナ川遺跡，大館遺跡及び小館遺跡の発掘調査は，平成2年10月1日から平成3年3月31日までの6か月にわたって実施された。以下，調査の経過について，その概要を月ごとに記述する。

10　月　　発掘調査に必要な事務所や現場倉庫の設置，調査器材搬入及び作業員の雇用を行った。

11　月　　2日には，発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って鍬入れ式を挙行した。ヨナ川遺跡の清掃作業を行い，遺跡内にグリッドを設定し，遺跡南側からグリッド試掘を開始した。テストピットにより土層の観察を行うと共に，グリッド試掘を北側へ拡張した。

12　月　　3日，重機による表土除去を開始し，併せて遺構確認作業を開始した。7日には，表土除去及び遺構確認作業が終了した。その結果，住居跡31軒，土坑25基，溝3条が確認された。10日から遺跡北端部の第1号住居跡から本調査を開始した。28日から年末年始の休業のため，安全対策を施して現場を閉鎖した。

1　月　　7日から調査を再開した。ヨナ川遺跡の遺構調査と平行して，大館遺跡，小館遺跡の試掘を行った。その結果，大館遺跡，小館遺跡とも地山が砂層であることを確認した。

2　月　　大館遺跡，小館遺跡の調査前風景を記録するため，5日に航空写真を撮影した。16日にヨナ川遺跡において，現地説明会を開催し，遺構，遺物を一般公開した。小雨にもかかわらず約130名の見学者が訪れた。18日から大館遺跡，小館遺跡に重機を導入してトレンチの掘削を開始した。大館遺跡には北側からA・B・Cの3本のトレンチを，小館遺跡にも同じく，北側からA・Bの2本のトレンチを設定した。各トレンチの清掃後，土層の写真撮影，実測という作業順序であった。作業現場が30°前後の傾斜地のため，安全に留意しながら作業を進めた。

3　月　　ヨナ川遺跡の調査を進める一方，航空写真撮影のための遺跡清掃を実施した。15日に航空写真を撮影した。18日から，補足調査や資料整理を行い，22日に，ヨナ川遺跡，大館遺跡及び小館遺跡の安全対策を実施し，26日には，一切の現地調査を完了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

ヨナ川遺跡，大館遺跡及び小館遺跡は，東茨城郡大洗町に所在する。

大洗町は，人口20,745人（平成2年10月1日現在）を有し，茨城県のほぼ中央部東端，県都水戸市の南東約12㎞に位置している。町域は，東西約2.5㎞，南北約9.0㎞，面積約23.09㎢で，南北に細長い町である。北は那珂川を挟んで那珂湊市，東は太平洋，南は鹿島郡旭村，西は涸沼及び涸沼川を隔てて東茨城郡常澄村，同郡茨城町に接している。

大洗海岸は早くから景勝地，海水浴場として知られ，観光，保養施設が立ち並び，夏には多くの海水浴客が訪れている。産業別人口構成（昭和60年度）をみると第1次産業が11.7%，第2次産業が29.5%，第3次産業が58.8%であり第3次産業の比率が高い。漁獲量（属人－大洗居住者による漁獲量）は，6.1万t（平成元年）で大部分はマイワシ，ツノナシオキアミ，次いでサンマ，カタクチイワシなどである。町南域の成田町は，稲作や野菜栽培が行われ，特にさつまいもの栽培が盛んである。

また，この地域には，日本原子力研究所大洗研究所をはじめ，原子力関係の施設がある。

町の西側から南側にかけて，太平洋岸を国道51号が走り，それに平行するように，鹿島臨海鉄道大洗鹿島線が運行している。昭和60年には，大洗港と北海道の室蘭港及び苫小牧港間に，それぞれカーフェリーが就航し，大洗町は首都圏と北海道を結ぶ港湾都市として，経済面で大きな発展が期待されている。

当町は，南の鹿島郡旭村，鉾田町より連続する鹿島台地の北東部に位置する。北は那珂川と大洗台地，西は涸沼及び涸沼川の形成する肥沃な水田地帯，東は大洗海岸といった南北に長い地形を占めている。海岸線は，北部の大洗岬で白亜紀の砂岩・礫岩が岩礁状に露出しているが，大部分は砂浜海岸からなり，砂丘地帯となっている。涸沼方面では，狭深な小支谷が形成されており，起状に富んでいる。

沖積低地は，涸沼，涸沼川及び那珂川流域に広く発達する以外，小支谷の周辺に僅かに分布する程度である。

ヨナ川遺跡は，大洗町の南西部（夏海地区）の鹿島台地北東部に位置している。遺跡の位置する台地は，標高21m～24mで，西側に涸沼とその湖岸の低湿地帯が開け，南，北側には涸沼からの支谷が入り込んで舌状台地の様相がみられる。台地は畑地として利用され，さつまいも等の農作物が栽培されており，北側の低湿地との比高は約20mである。

大館遺跡は，ヨナ川遺跡の南西約1㎞の涸沼に面した舌状台地の先端部（標高約24ｍ）に位置している。

小館遺跡は，大館遺跡の北東側に隣接する舌状台地の先端部（標高約23ｍ）に位置している。

第2節　歴史的環境

「茨城県遺跡地図」[1]によれば，大洗町には81の遺跡が認められる。その中で報告されている遺跡を時代別に述べてみる。

先土器時代の遺跡は確認されてはいないが，先土器時代の石器がドンドン山遺跡[2]＜1＞，磐船山遺跡[3]＜15＞付近で発見されている。このことから大洗町の台地は水や食糧が得やすく，関東ローム層の堆積している場所に，当時の人々が住んでいたことを窺い知ることができる。

縄文時代の遺跡は，その多くが西側の涸沼川方面に所在している。31か所の遺跡が確認されているが，中期から後期の遺跡が最も多く，草創期，早期及び晩期の遺跡は非常に少ない。貝塚は磯浜と大貫地区に，それぞれ3か所づつ存在する。草創期，早期の遺跡としては，ドンドン山遺跡が挙げられ，夏島式，花輪台式，田戸下層式及び田戸上層式の土器や石器が採集されている。磐船山遺跡からも，田戸下層式の土器が採集されている。前期の遺跡は10遺跡が確認されている。前述のドンドン山遺跡，磐船山遺跡からは，浮島式の土器が採集されている。中期の遺跡は，最も多く18か所が確認されている。吹上遺跡[4]＜20＞では，貝塚や住居跡が確認され，五領ケ台式，大木系及び加曽利Ｅ式の土器をはじめとして，おびただしい数の貝刃，土錘，石錘，貝輪，釣針やイノシシ，シカなどの哺乳類，スズキ，マフグ，ドチサメなどの魚類，カモ，ツルなどの鳥類及び貝類各種が出土している。おんだし遺跡[5]＜14＞では，加曽利Ｅ式土器を中心に石器なども収集されている。後期の遺跡は，15か所が確認されている。大貫Ａ[6]＜11＞・Ｂ貝塚[7]＜12＞からは，称名寺式，堀之内式，加曽利Ｂ式及び安行Ｉ式の土器が収集されている。

弥生時代の遺跡は，37遺跡が確認されている。その半数が夏海地区に集中している。時期的には，後期のものが圧倒的に多い。磐船山遺跡から出土した弥生式土器については，那珂川下流域の弥生時代を研究する標準資料として，磐船山式という名称が付けられている。長峯遺跡[8]＜38＞からは，多くの磐船山式，十王台式の土器と磨製石斧が出土している。髭釜遺跡[9]＜22＞からは，銅鏃や鉄製農具の鎌，鉄鏃も出土している。南藤太郎遺跡[10]＜68＞，千天遺跡[11]＜66＞からも弥生時代後期の十王台式土器が多数出土している。

古墳時代の遺跡としては，鏡塚古墳群[12]＜8＞が挙げられる。これらは，鹿島台地と大洗台地の中間の独立丘陵上にあり，その中心を占めるのが，前方後円墳の鏡塚古墳及び北方100ｍに位置する円墳の車塚古墳である。鏡塚古墳後円部の粘土槨内部からは，内行花文鏡，変形四獣鏡，

勾玉，管玉，石製模造品，直刀，刀子及び櫛などの優れた副葬品が多数発見されている。車塚古墳は，直径 90 m を越える県内最大の円墳である。古墳時代の土師器，須恵器の散布や住居跡の発掘調査により，町内の広い範囲にわたって，集落跡のあったことが確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は，磯浜地区から夏海地区にかけて漸増する傾向がみられ，大洗町全域で 52 遺跡が知られる。遺跡は台地全体を生活の場としたものが多く，規模も一段と大きくなっている。

中世の遺跡として，小館(こだて)遺跡(14)< 81 >がある。出土土器の大甕は，室町時代にまで下らない建武中興期から南北朝期までの時期のものであろうとしている。

以上のように大洗町には，水資源に恵まれた洪積台地上に，原始・古代から中世にかけての多くの遺跡があり，この地に人々の生活が営まれてきたことが窺える。

※　文中の<　>の番号は，表 1，第 3 図中の該当遺跡番号と同じである。

注･引用参考文献

(1)　茨城県教育委員会「茨城県遺跡地図」 1989 年

(2)(3)(6)(7)(8)(12)(13)　大洗町教育委員会 「大洗町史」 1986 年

(4)　大洗町教育委員会 「茨城県吹上遺跡」 1977 年

(5)　大洗町教育委員会 「茨城県おんだし遺跡」 1975 年

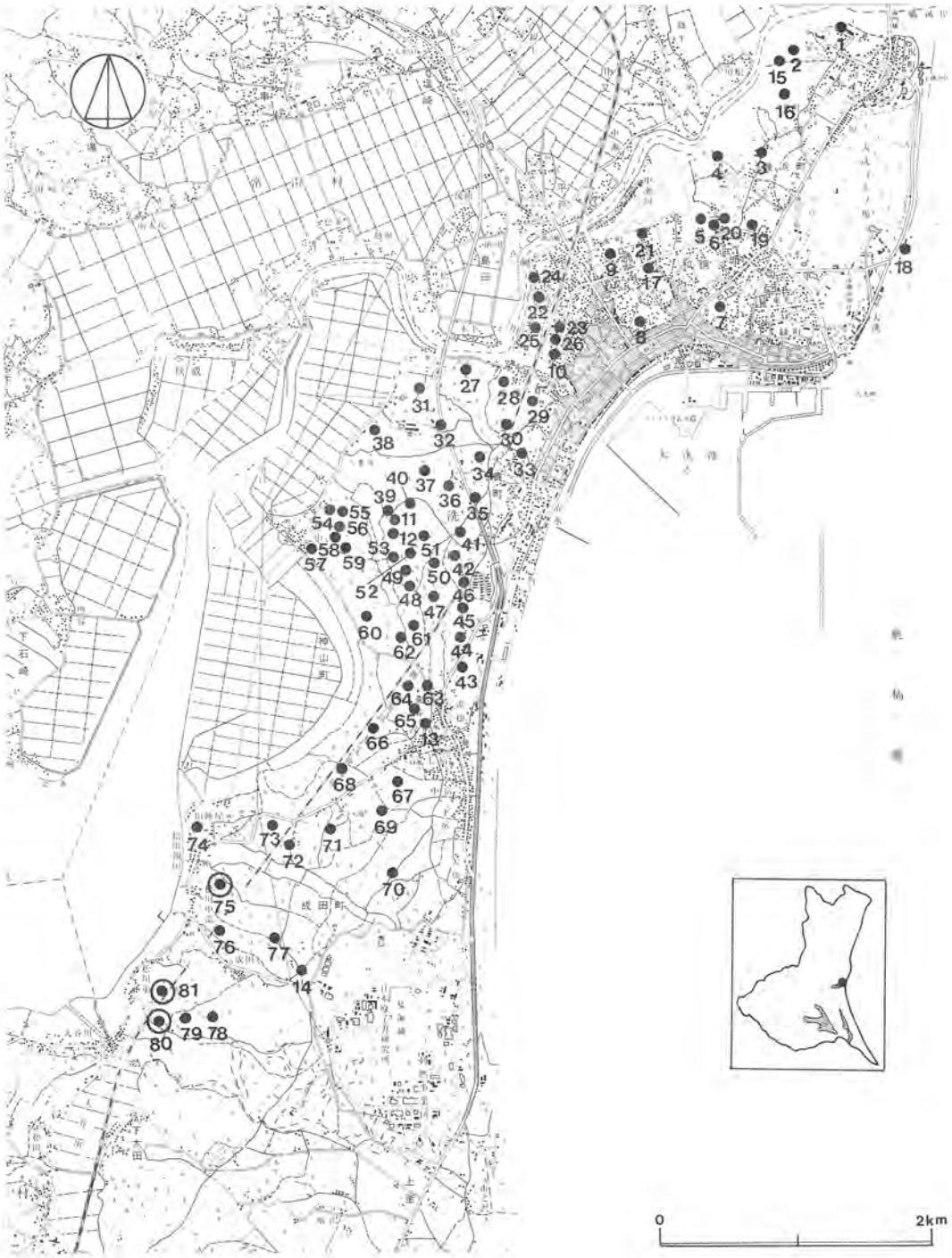
(8)　大洗町教育委員会 「茨城県大洗町長峯遺跡」 1973 年

(9)　大洗町教育委員会 「髭釜」 1980 年

(10)　大洗町教育委員会 「南藤太郎」 1980 年

(11)　大洗町教育委員会 「千天」 1980 年

(14)　大洗町教育委員会 「茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告」 1978 年



第3図　ヨナ川・大館・小館遺跡周辺遺跡位置図

表1　ヨナ川遺跡・大館遺跡・小館遺跡周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	遺跡の時代				
		縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
1	ドンドン山遺跡	○	○	○		
2	岩船山遺跡			○		
3	前圷遺跡	○			○	
4	宮田遺跡		○		○	
5	磯浜A貝塚	○				
6	磯浜B貝塚	○				
7	釜堀遺跡	○				
8	鏡塚古墳群			○		
9	一本松遺跡	○			○	
10	勘十郎堀貝塚	○				
11	大貫A貝塚	○				
12	大貫B貝塚	○				
13	ヤゲン寺遺跡	○				
14	おんだし遺跡	○			○	
15	磐船山遺跡		○		○	
16	二葉町遺跡	○			○	
17	米蔵地遺跡		○		○	
18	大洗海岸遺跡		○			
19	上の山遺跡		○	○	○	
20	吹上遺跡	○				
21	団子内遺跡		○	○	○	
22	髭釜遺跡		○	○	○	
23	五柳遺跡		○	○	○	
24	田辺遺跡			○		
25	堂林A遺跡		○	○	○	
26	堂林B遺跡		○	○	○	
27	船渡遺跡		○	○		
28	ウツギ遺跡					○
29	富士山古墳			○		
30	富士の腰遺跡			○	○	
31	ヘロ内遺跡		○	○	○	
32	官女平遺跡		○	○	○	
33	権現坂横穴			○		
34	寺ノ上A遺跡		○	○	○	
35	寺ノ上B遺跡			○	○	
36	寺ノ上C遺跡			○	○	
37	鬼窪遺跡			○	○	
38	長峯遺跡		○	○	○	
39	落神A遺跡	○	○	○	○	
40	落神B遺跡	○		○	○	
41	中畑A遺跡			○	○	
42	中畑B遺跡	○		○	○	
43	矢場久保遺跡			○		
44	御中山遺跡			○	○	
45	栗林A遺跡	○		○	○	
46	栗林B遺跡			○		
47	栗林C遺跡			○	○	
48	古内遺跡	○		○		
49	登城遺跡	○	○	○	○	
50	飛城遺跡			○	○	
51	常福寺A遺跡	○				
52	常福寺B遺跡	○		○	○	
53	常福寺C遺跡	○	○	○		
54	川口遺跡	○				
55	蜂内A遺跡	○	○	○		
56	蜂内B遺跡		○	○		
57	長町遺跡		○			
58	前峯遺跡		○			
59	天子遺跡	○	○	○	○	
60	後新古屋遺跡		○	○	○	
61	稲荷前遺跡	○	○			
62	仲天子遺跡			○	○	
63	荒谷遺跡			○		
64	天神西A遺跡			○	○	
65	天神西B遺跡			○	○	
66	千天遺跡	○	○	○	○	
67	四反遺跡	○	○	○	○	
68	南藤太郎遺跡		○	○	○	
69	明後内遺跡		○	○	○	
70	小出山遺跡		○	○	○	
71	日中内遺跡		○	○	○	
72	大峯遺跡		○	○	○	
73	興吾遺跡		○	○	○	
74	旧陣屋遺跡		○	○	○	
75	ヨナ川遺跡	当		遺		跡
76	居尻遺跡			○	○	
77	椎木下遺跡		○	○	○	
78	国屋遺跡			○	○	
79	石塚遺跡			○	○	
80	大館遺跡	当		遺		跡
81	小館遺跡	当		遺		跡

第3章　遺構・遺物の記載方法

第1節　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構･遺物の記載方法は，下記の要領で統一した。

(1)　使用記号

名　称	竪穴住居跡	土　坑	溝	ピット
記　号	SI	SK	SD	$P_{1..}$

(2)　遺構･遺物の表示方法

(3)　遺構番号

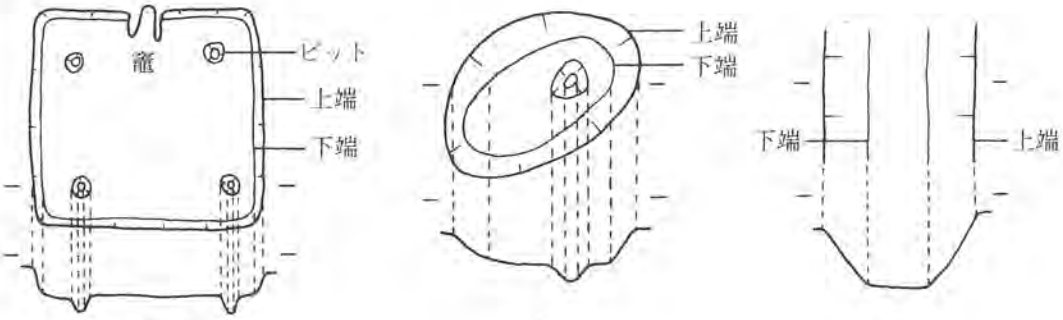
遺構番号については，調査の過程において遺構の種別毎，調査順に付したが，整理の段階で遺構でないと判断したものは，欠番とした。

(4)　土層の分類

各遺構における堆積土の土層については，調査時に，含有物，色調，粘性及び締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行った。

なお，色調については「新版標準土色帖」（小山正忠･竹原秀雄編著･日本色研事業株式会社発行）を使用し，図版実測図中に土層解説を記載した。

(5)　遺構実測図の記載方法



住居跡　　土坑　　溝

①　住居跡は，縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに3分の1または4分の1に縮小して掲載した。

② 土坑は，縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに3分の1に縮小して掲載した。

③ 竈·炉は，10分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに3分の1・4分の1に縮小して掲載した。

④ 溝は，縮尺20分の1の原図を3分の1に縮小し，トレースして版組みし，それを適宜に縮小して掲載した。

⑤ 実測図中のレベルは標高であり，m単位で表示した。

また，同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し，標高が異なる場合は各々表示した。

⑥ 本文の住居跡の記載について

○「位置」は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○「重複関係」は，住居跡の切り合い関係を記した。

○「平面形」は，壁の上端部で判断し，方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。（　）を付したものは，推定を表す。

方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの），長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）

○「規模」は，壁の上端部の計測値であり，長軸×短軸の順にm単位で表記した。壁高は，残存壁高の計測値である。（　）を付したものは現存値を示す。

○「主軸方向」は，竈を通る線を主軸として，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。（　）を付したものは，推定を表す。

○「長軸方向」は，炉を通る長軸を，「主軸方向」に準じて計測し表示した。

○「壁」は，床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直，65°～80°を外傾，65°未満を緩傾さらに90°以上を内傾とした。

○「壁溝」は，その形状や規模を記述した。

○「床」は，形状や床質等を記載した。

○「ピット」は，その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し，P_1・P_2はピット番号を表し，さらに，ピットの直径と深さを記述した。

○「貯蔵穴」は，その形状を記述し，数字は長径，短径及び深さを示した。

○「覆土」は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」，撹乱を受けている場合は「撹乱」と記した。

○「遺物」は，遺物の種類と数，さらに出土遺物や状態を記述した。

また，遺構の平面図中に(2)で示した記号を用い，出土位置をドットで表示し，接合できたものは実線で結んだ。出土遺物に付した番号は，遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。

○「所見」は，当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

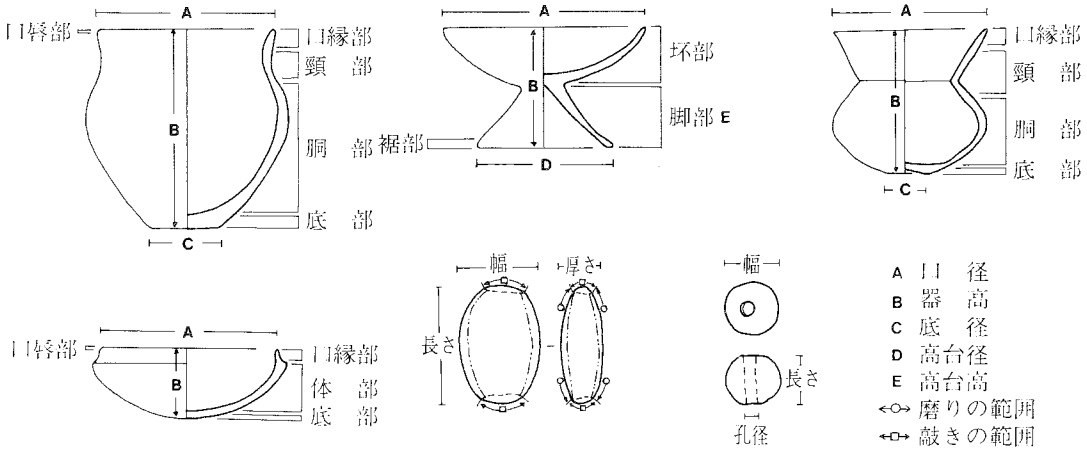
(6) 遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については，実測図･拓影図･写真等により掲載した。

① 土器の実測図は，原則として中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

② 土器拓影図は，右側に断面を図示した。

③ 遺物は，原則として実測図をトレースしたものを3分の1に縮小して掲載した。しかし，種類や大きさにより異なる場合もある。



第2節　表の見方について

1　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主（長）軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸（m）×短軸（m）	壁高（cm）						

① 位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリット名をもって表示した。

② 主（長）軸方向は，座標北をN－0°とし，東（E）・西（W）に何度傾いているかを表示した。

（例　N－10°－E，N－10°－W）（　）を付したものは推定である。

③ 平面形は，現存している形状の上端面で判断し，方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。

方形（短軸：長軸＝1：1.1未満）　長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上）

④ 規模の欄の長軸・短軸は，上端の計測値であり，壁高は残存壁高の計測値である。

⑤ 床面は，平坦，凹凸，皿状及び緩い起伏とに分類して表記した。

⑥　柱穴数は，平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。

⑦　炉・竈は，その種類を記した。

⑧　覆土は，自然堆積のものは「自然」，人為堆積のものは「人為」と表記し，撹乱を受けている場合は「撹乱」と記した。

⑨　出土遺物は，実測個体数を除いた遺物の種類と，出土土器片の数を記した。

⑩　備考は，重複関係等について記した。

2　土坑一覧表

土坑番号	位　置	長径方向（長軸方向）	平面形	規　模（m）		壁面	底面	覆土	出土遺物	備　考	図版番号
				長径×短径	深　さ						

①　土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また，整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。

②　平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

円形（短径：長径＝１：1.2 未満のもの）楕円形（短径：長径＝１：1.2 以上のもの）

③　規模の欄の長径・短径は，上端部の計測値（m）で表した。

④　壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

⑤　その他の項目については，住居跡一覧表の記載方法に準じた。

3　出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土･色調･焼成	備　考

①　図版番号は，実測図中の番号である。

②　法量は，A－口径　B－器高　C－底径　D－高台径　E－高台高，単位は cm である。推定値は〔　〕，現存値は（　）を付した。

③　胎土･色調･焼成の欄は，上から胎土，色調及び焼成の順で記した。色調については，前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については，焼き締まって硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剝落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。

④　備考の欄は，土器の残存率，実測（P）番号，出土位置，その他必要と思われる事項を記した。

4　土製品一覧表

図版番号	器　種	台帳番号	長さ×幅（cm）	孔　径（cm）	重　量（g）	出土地点	備　考

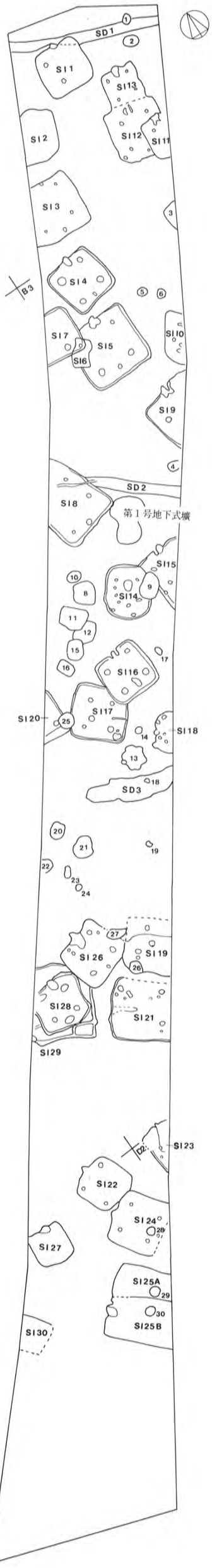
①　図版番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

②　重量の欄で，（　）を付した数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

5　石器・石製品一覧表

図版番号	器　種	法　量				石　質	出土地点	台帳番号	備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）				

①　図版番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。



第12号住居跡

第9号住居跡

第14号住居跡覆土土層投棄遺物

第14号住居跡覆土土層投棄遺物

第16号住居跡

第28号住居跡

第28号住居跡

第4図　ヨナ川遺跡遺構配置図

第4章　ヨナ川遺跡

第1節　遺跡の概要

ヨナ川遺跡は，大洗町の南西部，鹿島台地北端部の舌状台地上に立地し，現況は，畑地となっている。調査区は，舌状台地縁辺部の，長さ南北に約150 m，幅東西に約15 m，面積2,276 ㎡で，弥生時代後期から奈良・平安時代の複合遺跡である。

今回の調査によって検出された遺構は，弥生時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡31軒，土坑29基，地下式壙1基及び溝3条である。

弥生時代の遺構は，竪穴住居跡4軒で，調査区全域から検出されている。平面形は隅丸長方形を呈しており，その内の2軒からは，炉が検出されている。

古墳時代の遺構は，竪穴住居跡24軒で，調査区全域から検出されている。平面形は方形あるいは長方形を呈し，一辺が6～7 mの大型の住居跡も検出されている。炉をもつ住居跡は1軒，竈をもつ住居跡は17軒，それぞれ検出されている。

奈良・平安時代の遺構は，竪穴住居跡3軒で，調査区の南部に検出されている。平面形は方形を呈しており，2軒からは竈が検出されている。

その他，土坑29基の中には，粘土貼土坑も1基検出されている。

遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20 cm）に40箱程出土している。弥生時代の遺物は，弥生時代後期後半に比定される十王台式土器片が，住居跡の床面から出土している。古墳時代の遺物は，土師器の甕，甑，坏，高坏等が主に出土しており，須恵器では，甕，壷，提瓶，鴟，坏等が出土している。奈良・平安時代の遺物は，土師器の甕や須恵器の坏が出土している。土製品では，球状土錘，管状土錘，紡錘車等が出土し，特に球状土錘，管状土錘はほとんどの住居跡から出土している。土坑や溝からは，少量の縄文式土器片，弥生式土器片，土師器片，須恵器片，管状土錘等が出土している。

第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

当遺跡からは，調査区全域から31軒の竪穴住居跡が検出されている。検出された住居跡のほとんどが，耕作による撹乱を受けている。

また，複合している住居跡は，18軒である。以下，検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第6図）

位置　調査区の北部，A3f5区を中心に確認されている。

重複関係　第1号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸5.18 m，短軸5.00 mの方形を呈している。

主軸方向　N－3°－W

壁　壁高は，8～22 cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　全体がトレンチャーによる撹乱を受けているが，残存部分は硬く，ほぼ平坦である。

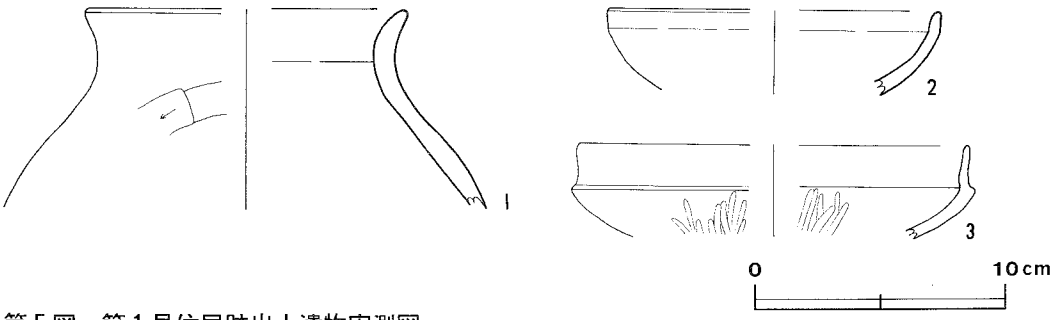
ピット　2か所（P_1・P_2）が検出され，規模は径40～43 cm，深さ30～40 cmを測る。規模や配置からみて主柱穴とは考えにくい。

竈　北壁中央部に付設されている。壁を27 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ80 cm，幅78 cmを測る。撹乱を受けており，袖部のみが残っている。火床には焼土が僅かに見られ，煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片143点（甕片，坏片）が，覆土上層，中層から出土している。特に土師器のほとんどが甕の胴部片である。第5図1の甕は竈前方の覆土下層から，3の坏は南東部覆土下層から出土している。

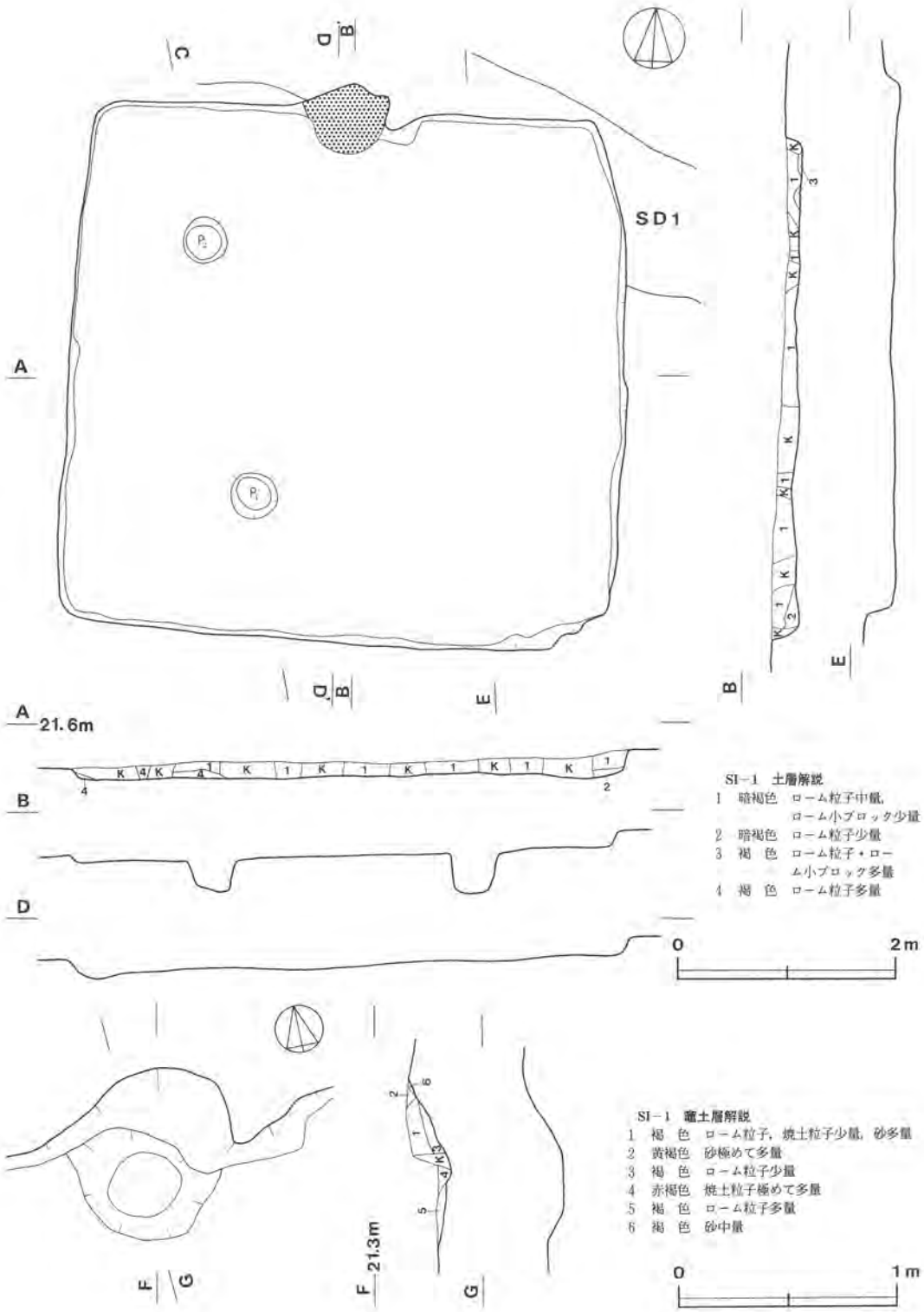
所見　本跡は，重複関係から第1号溝より新しい時期に構築されており，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第5図　第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第5図 1	甕 土師器	A〔13.0〕 B（8.1）	胴部欠損。口縁部は外反する。	胴部外面ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P1　5％ 覆土下層
2	坏 土師器	A〔13.2〕 B（3.3）	口縁部と体部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P3　10％ 覆土
3	坏 土師器	A〔15.6〕 B（3.7）	底部欠損。口縁部と体部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ後，ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P4　5％ 覆土下層



第6図　第1号住居跡実測図

第2号住居跡（第7図）

位置　調査区の北西端部，A3h3区を中心に確認されている。

規模と平面形　西側の2分の1程が調査区外に延びているが，一辺が5.28 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

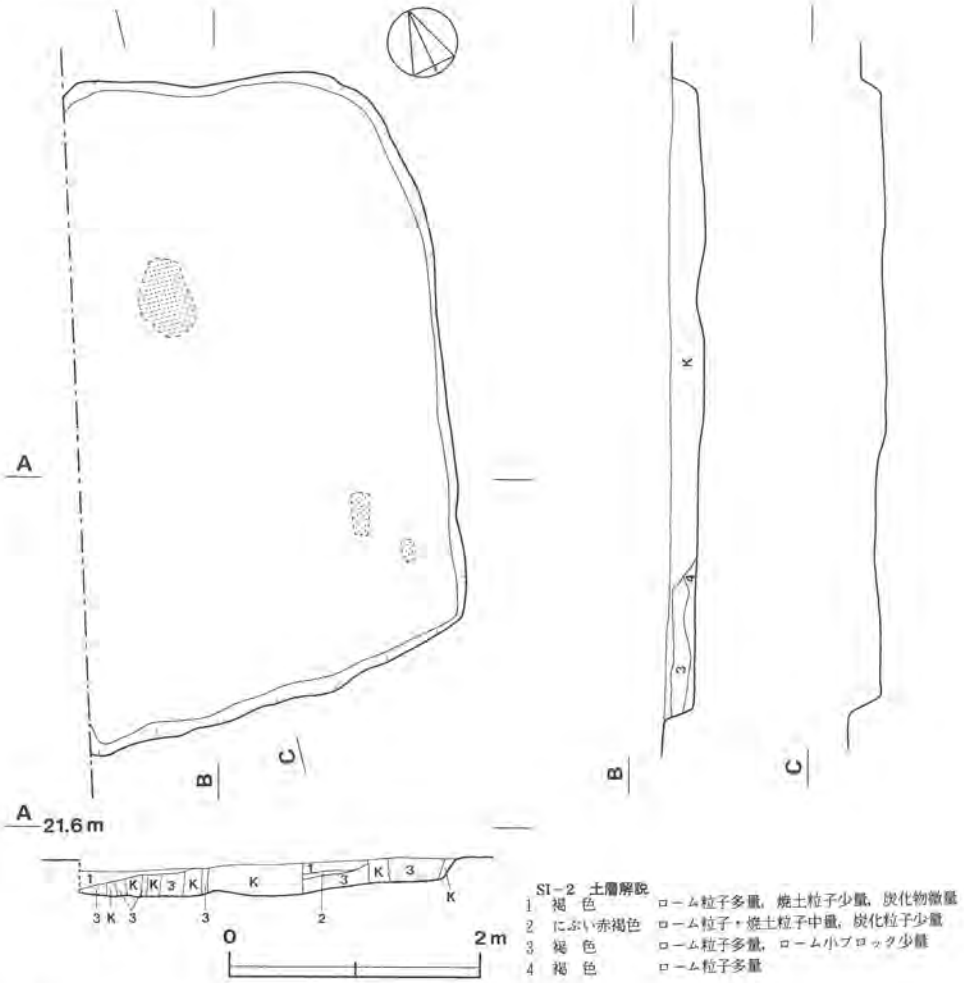
主軸方向　N－16°－E

壁　壁高は，南壁で16 cm，東壁で26 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　床面のほとんどは，トレンチャーによる撹乱を受けているが，残存部分は硬く，ほぼ平坦である。

竈　竈は検出されなかったが，西側の2分の1程が調査区外に延びているため，その部分に付設されているものと思われる。

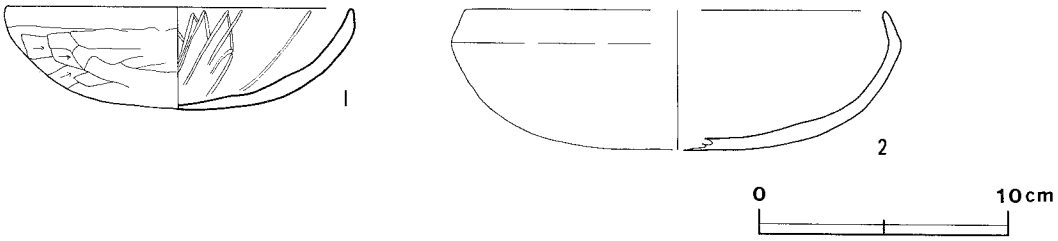
覆土　自然堆積と思われる。



第7図　第2号住居跡実測図

遺物　土師器片85点（甕片，坏片）が，主に南東部の覆土上層，中層から出土している。第8図1の坏は南東部の覆土中層から，2の坏は東部の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第8図　第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第8図 1	坏 土師器	A　14.0 B　4.1	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面横ナデ後，縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P7　80% 覆土中層
2	坏 土師器	A〔13.2〕 B（3.3）	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は，やや内傾する。	体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P8　40% 覆土中層

第3号住居跡（第9図）

位置　調査区の北西端部，A3i3区を中心に確認されている。

規模と平面形　西側の3分の1程が調査区外に延びているが，一辺が6.70 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－1°－E

壁　壁高は北壁から東壁にかけて20 cm，南壁で40 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

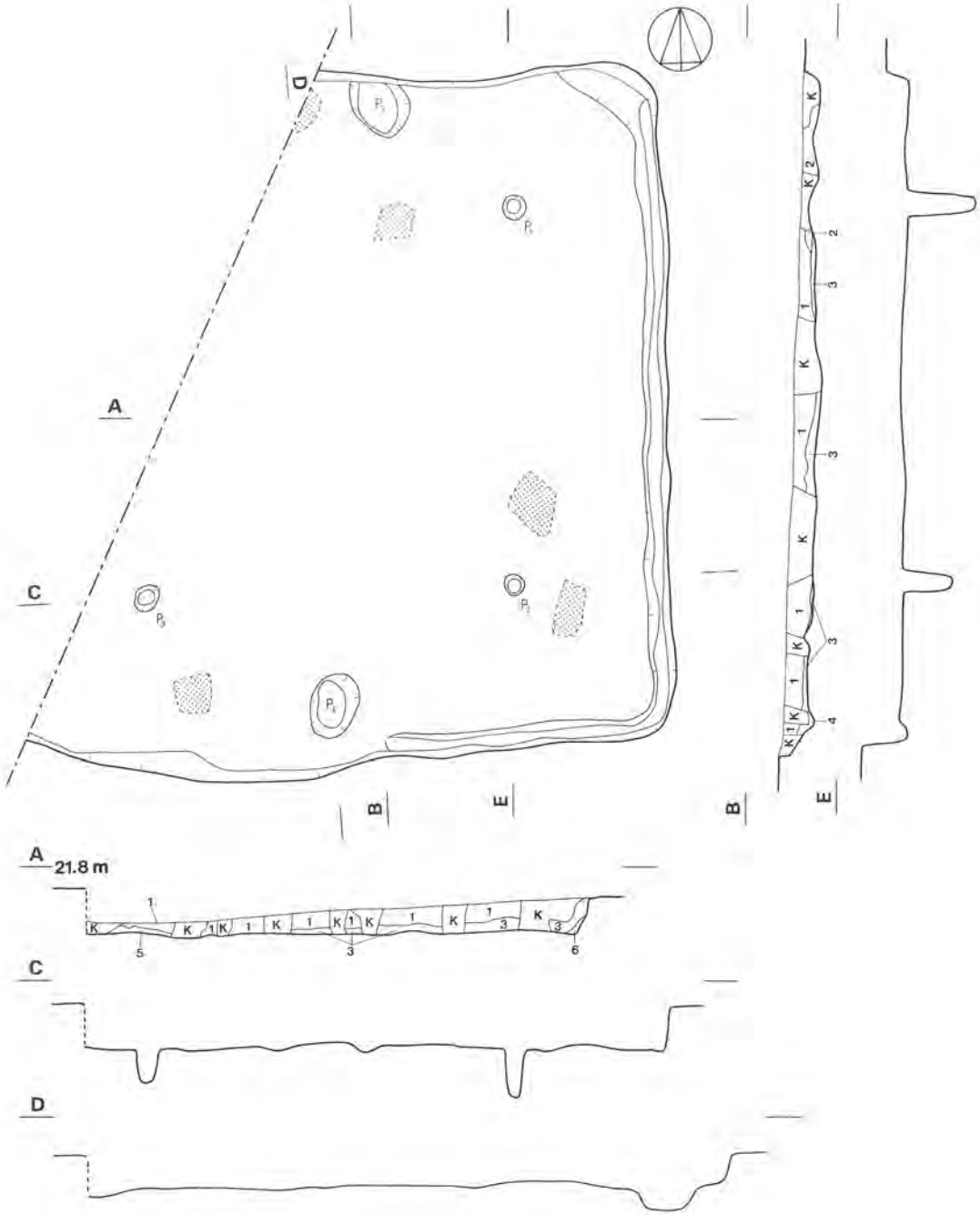
床　撹乱を受けて凹凸状を呈している。

ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_3は径17～26 cmの円形を呈し，深さ31～60 cmを測り規模や配列から主柱穴と考えられる。P_4は径58 cm程の円形を呈し，深さ23 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P_5は径50 cm程の円形を呈し，深さ9 cmを測り，性格は不明である。

竈　竈は検出されなかったが，西側の3分の1程が調査区外に延びているため，その部分に付設されているものと思われる。

覆土　全体にローム小ブロックが多量に含まれ，人為堆積と思われる。

遺物　土師器片189点（甕片，坏片）が，主に覆土の上層，下層から出土したが，これらは細片



SI－3　土層解説

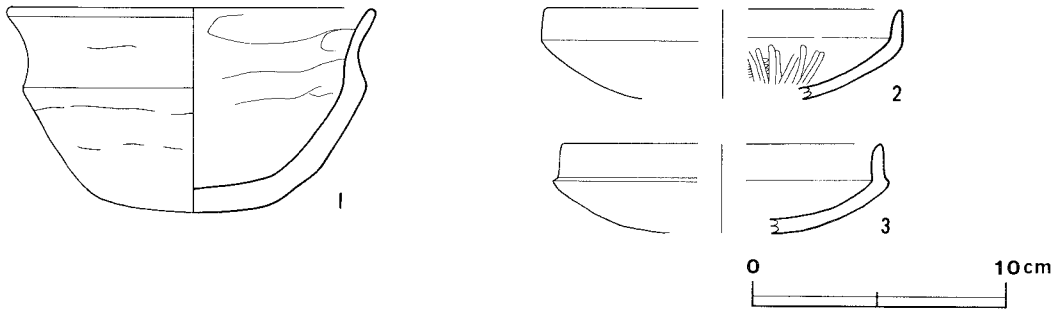
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
4　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量
5　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子極めて多量

0　2m

第9図　第3号住居跡実測図

で，大部分が甕の胴部片である。第10図1の椀は北東コーナー付近覆土中層から，2の坏は南東コーナー付近覆土上層から出土している。

所見　本跡は，床面から焼土が多量に検出されていることから，焼失家屋と思われる。本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第10図　第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第10図 1	椀 土師器	A　14.4 B　8.3	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，上位に稜を有する。稜から上位はやや内傾し，口縁部が外反する。	体部内・外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 13　90% 北東コーナー付近 覆土中層
2	坏 土師器	A〔14.2〕 B（3.6）	口縁部と体部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 15　20% 南東コーナー付近 覆土上層
3	坏 土師器	A〔12.8〕 B（3.6）	口縁部と体部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 ・石英 橙色 普通	P 16　10% 南東コーナー 覆土中層

第4号住居跡（第11図）

位置　調査区の北西部，B3a$_2$区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸5.44 m，短軸5.36 mの方形を呈している。

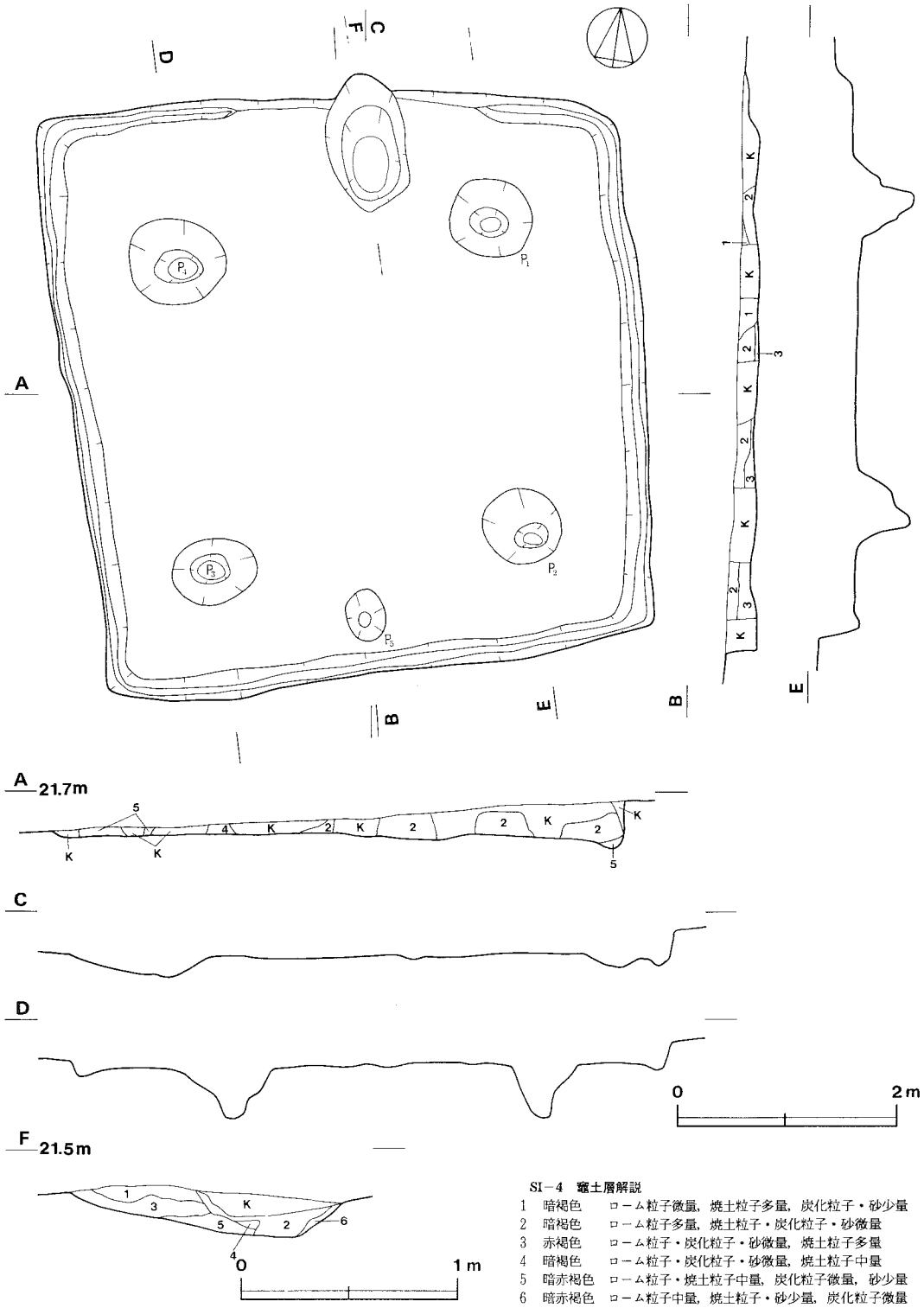
主軸方向　N－19°－W

壁　壁高は15～38 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周し，上幅20～30cmを測り，深さは10cm程で，断面形はU字状を呈している。

床　床面は，平坦で全体によく踏み固められて硬い。

ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は，径61～88 cmの円形を呈し，深さ45～54 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径59 cm程の円形を呈し，深さ12 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。



SI－4　竈土層解説

1　暗褐色　ローム粒子微量，焼土粒子多量，炭化粒子・砂少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・砂微量
3　赤褐色　ローム粒子・炭化粒子・砂微量，焼土粒子多量
4　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・砂微量，焼土粒子中量
5　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子微量，砂少量
6　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・砂少量，炭化粒子微量

第11図　第4号住居跡実測図

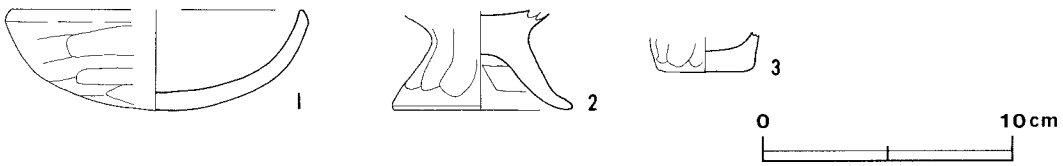
竈　北壁中央部に付設されている。壁を21 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ128 cm，幅71 cmを測る。火床は床面を20 cm程掘り窪めており，火熱によって赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片170点（甕片，甑片，坏片，高坏片）が，主に床面及び覆土中層から出土している。第12図1の坏は南東壁際の覆土上層から，2の高坏の脚部は南壁中央部際の覆土中層から，3の手捏土器は竈前方の床面から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。

SI－4　土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子極めて多量，焼土粒子微量
5　褐　色　ローム粒子極めて多量



第12図　第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第12図 1	坏 土師器	A〔11.8〕 B　4.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部と体部との間に不明瞭な稜を有する。	体部外面ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 27　25% 覆土上層
2	高　坏 土師器	B（4.0） D　7.2 E　3.0	脚部片。脚部は短く，外傾し，裾部はラッパ状に開く。	外面ヘラ削り。内面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 32　40% 覆土中層
3	手捏土器	B（1.6） C　4.0	平底。体部はほぼ直立し，口縁部は器厚が薄い。	体部外面に縦位のヘラ削り。 手捏ね。内面に指頭痕。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 33　80% 竈前方 床面

第5号住居跡（第13・14図）

位置　調査区の北西部，B3c2区を中心に確認されている。

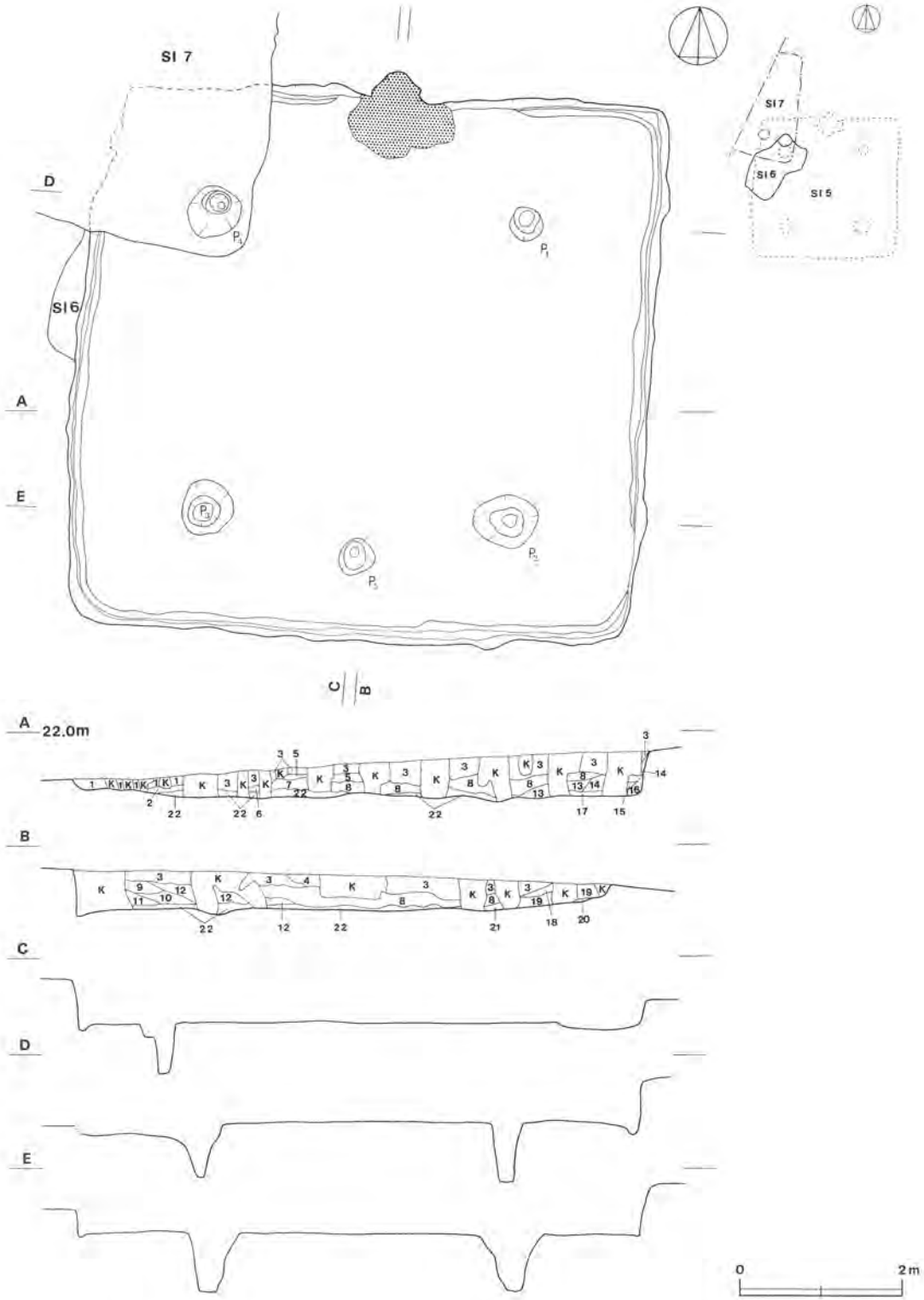
重複関係　西側を第6号住居跡に，北西コーナー部を第7号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸7.10 m，短軸6.88 mの方形を呈している。

主軸方向　N－0°

壁　壁高は，東壁で65 cm，西壁で35 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

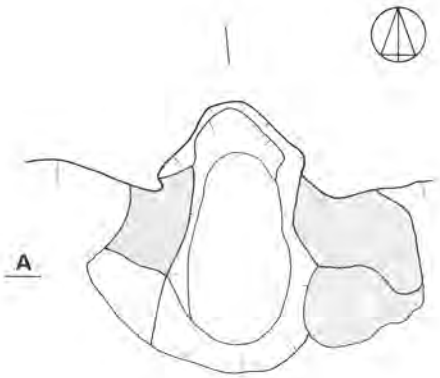
壁溝　壁下を全周し，上幅10～20cmを測り，深さは10cm程で，断面形はU字状を呈している。

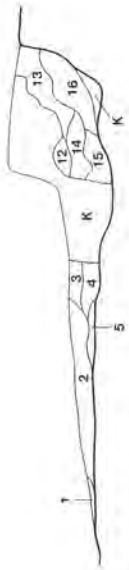


第13図　第5号住居跡実測図

SI－5　土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・粘土微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，砂少量
6　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
7　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・粘土少量，焼土粒子・炭化物微量
9　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
10　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
11　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
12　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
13　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
14　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量，炭化粒子微量
15　暗赤褐色　焼土粒子多量
16　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物中量
17　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，炭化物少量
18　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
19　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子・粘土微量
20　褐　色　山砂極めて多量
21　にぶい褐色　粘土極めて多量
22　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物中量

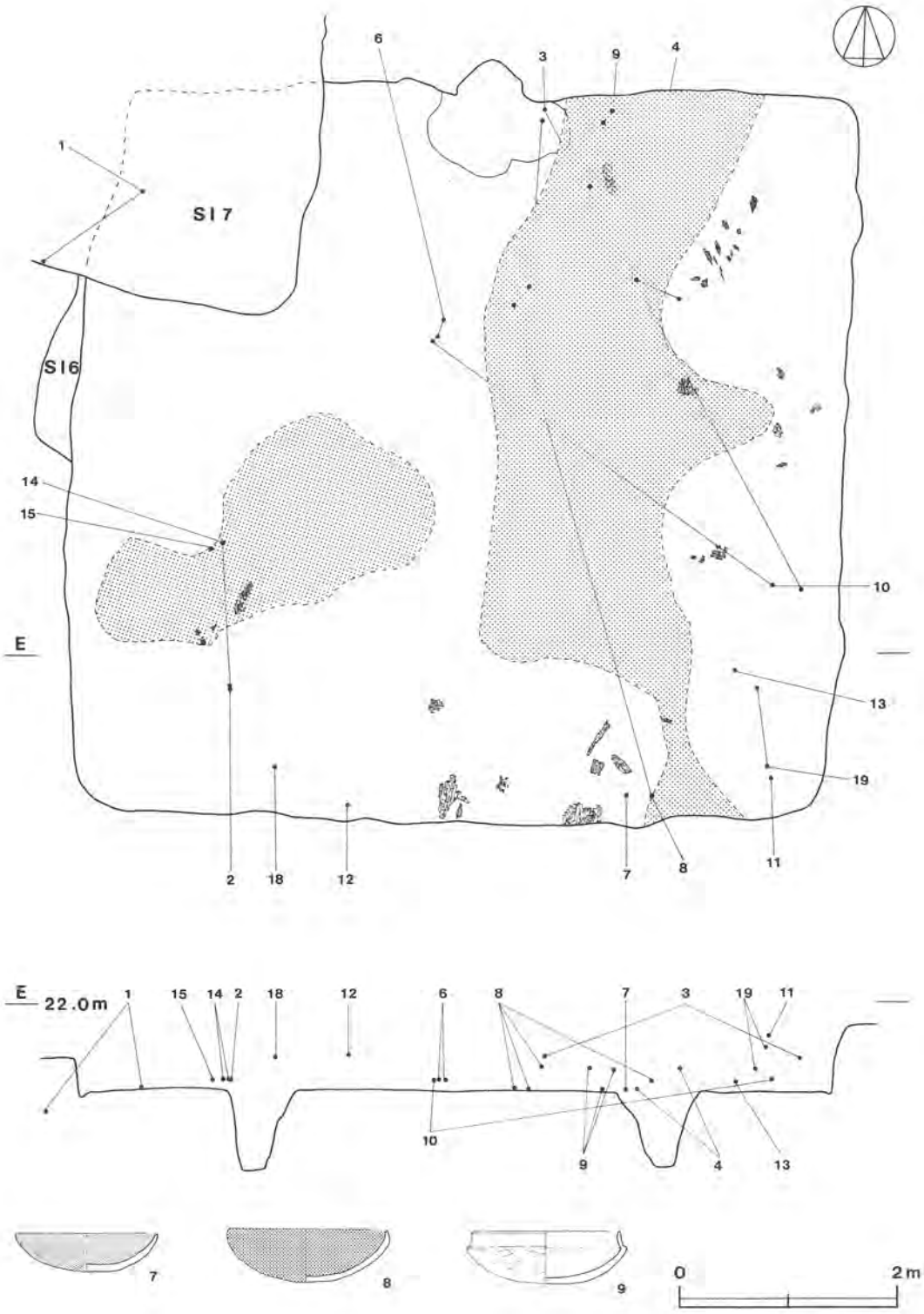




SI－5　竈土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，炭化物多量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
3　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，砂多量
4　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子中量
5　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
6　にぶい赤褐色　焼土小ブロック多量，炭化物少量，砂中量
7　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，砂中量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，砂中量
9　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，砂中量
10　褐　色　ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量，砂多量
11　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物多量
12　にぶい赤褐色　砂極めて多量
13　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，砂極めて多量
14　暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化物・砂少量
15　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，砂中量
16　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂中量

第14図　第5号住居跡竈実測図



第15図　第5号住居跡遺物出土位置図

床　平坦であり，竈周辺及び床中央部が特に踏み固められ堅緻である。

ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は，径41～82cmの円形を呈し，深さ40～78cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径45cmの円形を呈し，深さ65cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　北壁中央部に付設され，規模は長さ109cm，幅134cmを測る。壁を37cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。撹乱されているが，両袖部の一部が残存している。東側袖部の内壁は火熱を受け赤変し，火床の一部は東袖部よりに確認され，火熱を受け赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

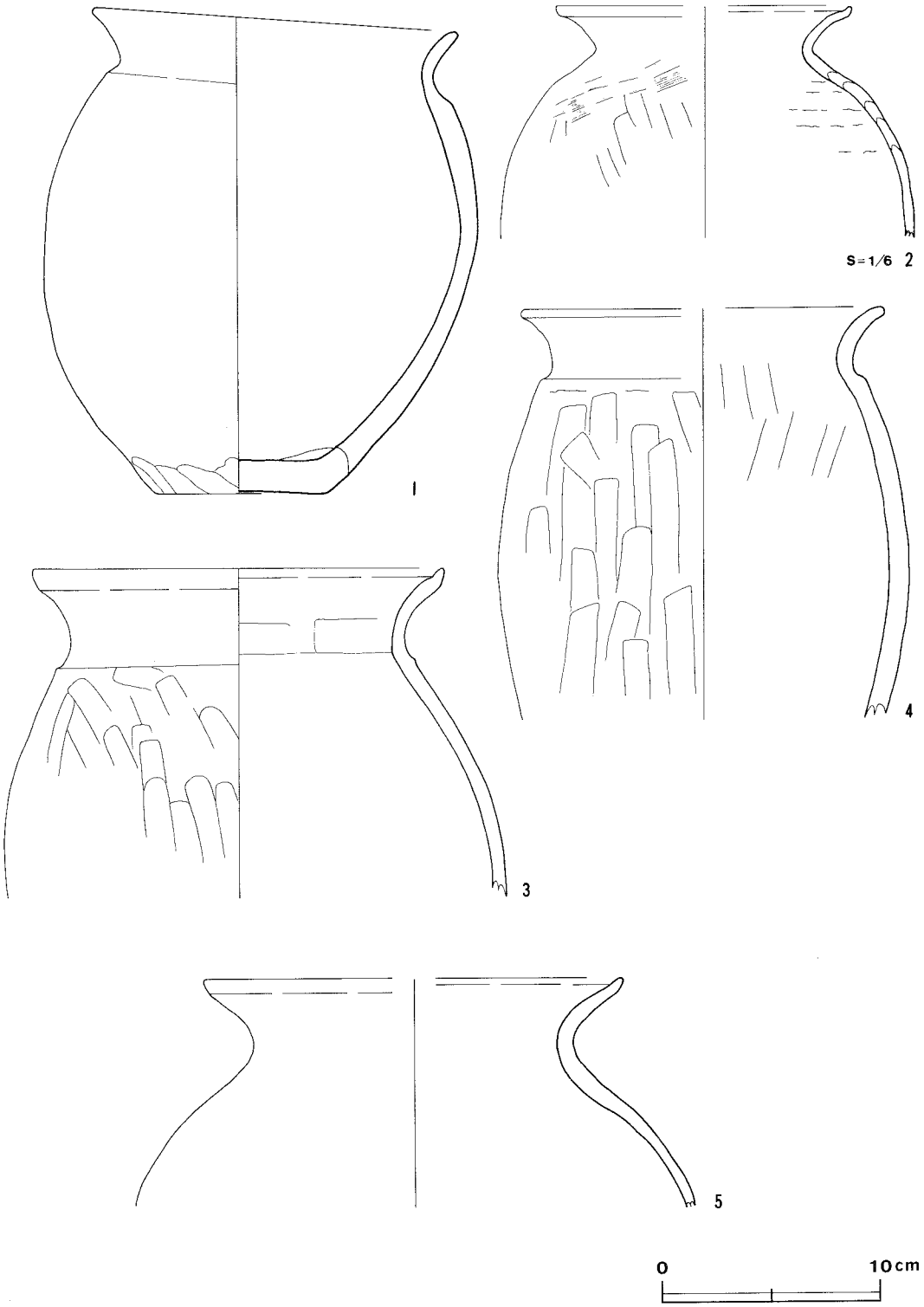
覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片643点（甕片，坏片，高坏片），須恵器片1点（壷片）が，住居跡全域から出土している。第16図2の甕は西コーナー付近の覆土下層から，3の甕は南東コーナー付近覆土中層から，第17図7の坏は南東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

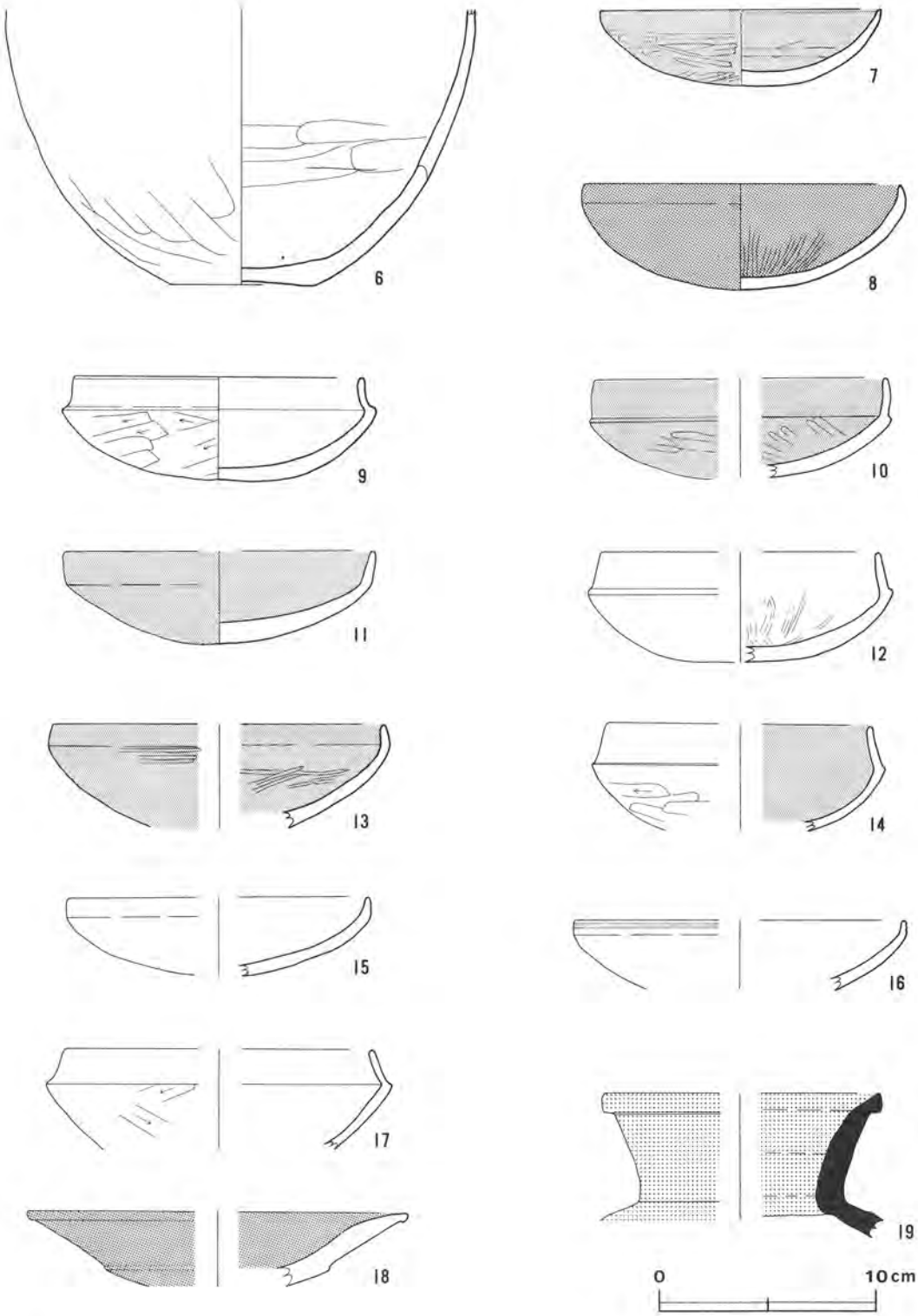
所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられるが，同時期の第6号住居跡及び第7号住居跡より古い時期に構築されている。床面からは焼土や炭化物が多量に検出されていることから，焼失家屋と思われる。

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	甕 土師器	A 16.7 B 22.6 C 7.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，胴中央部に最大径を有する。口縁部は外反する。	底部ヘラナデ。 胴部外面縦位のヘラ削り，内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 灰白色 普通	P36　70% 北西コーナー 床面
2	甕 土師器	A〔26.6〕 B（21.4）	胴下半部欠損。胴部は内彎し，頸部はくびれ，口縁部は強く外反する。	胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P34　40% 覆土下層
3	甕 土師器	A 19.0 B（15.4）	底部欠損。胴部は内彎し，頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	胴部外面縦位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P35　40% 覆土中層
4	甕 土師器	A〔16.6〕 B（19.2）	底部欠損。胴部は内彎し，頸部にくびれをもち，口縁部は外反する。	胴部内・外面縦位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	P37　30% 覆土中層
5	甕 土師器	A〔19.4〕 B（10.7）	頸部から口縁部にかけて丸みをもって外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 淡赤橙色 普通	P39　15% 竈前方 覆土中層
第17図 6	甕 土師器	B（12.8） C 6.8	上げ底気味の平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ，内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P43　40% 覆土下層
7	坏 土師器	A 13.0 B 3.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は短く直立する。	体部外面ヘラ磨き，内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P47　90% 南東コーナー 付近床面
8	坏 土師器	A 14.6 B 4.9	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部との間に不明瞭な稜を有する。	体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面赤彩。	砂粒 赤色 普通	P46　80% 中央部 覆土下層



第16図　第5号住居跡出土遺物実測図 (1)



第17図　第5号住居跡出土遺物実測図 (2)

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第17図 9	坏 土師器	A　13.3 B　4.8	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 48　70% 竈東側 覆土中層
10	坏 土師器	A〔13.6〕 B（4.6）	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	体部内・外面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・長石 灰白色 普通	P 49　45% 覆土下層
11	坏 土師器	A〔14.4〕 B　4.3	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 50　40% 覆土上層
12	坏 土師器	A〔12.8〕 B　5.1	体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラ削りの後軽いナデ，内面ヘら磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 ・雲母 にぶい橙色 普通	P 51　30% 覆土上層
13	坏 土師器	A〔15.4〕 B（4.7）	体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は短くやや内傾する。	体部内・外面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒 明褐色 普通	P 52　25% 南東コーナー付近 覆土下層
14	坏 土師器	A〔12.2〕 B（4.9）	体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P 53　20% 覆土下層
15	坏 土師器	A〔14.0〕 B（3.7）	体部は緩く内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は短く，直立する。	体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P 55　20% 覆土下層
16	坏 土師器	A〔15.3〕 B（3.3）	体部は緩く内彎する。口縁部は短く直立し，外面には2本の沈線を有する。	体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 56　15% 覆土中層
17	坏 土師器	A〔14.2〕 B（4.6）	体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部ははやや内傾する。	体部外面ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	P 58　10% 覆土中層
18	高　坏 土師器	A〔17.7〕 B（3.4）	脚部欠損。坏部はやや内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反する。	体部，口縁部内・外面横ナデ。 内・外面赤彩。	砂粒・長石 橙色 良好	P 64　10% 覆土上層
19	壷 須恵器	A〔12.8〕 B（6.7）	頸部はやや外傾し，口縁部は外反する。	頸部内・外面横ナデ。 頸部内・外面自然釉付着	砂粒・長石 灰色 良好	P 65　10% 覆土中層

第6号住居跡（第18図）

位置　調査区の北西部，B3c1区を中心に確認されている。

重複関係　第5号住居跡と第7号住居跡を掘り込んでいる。

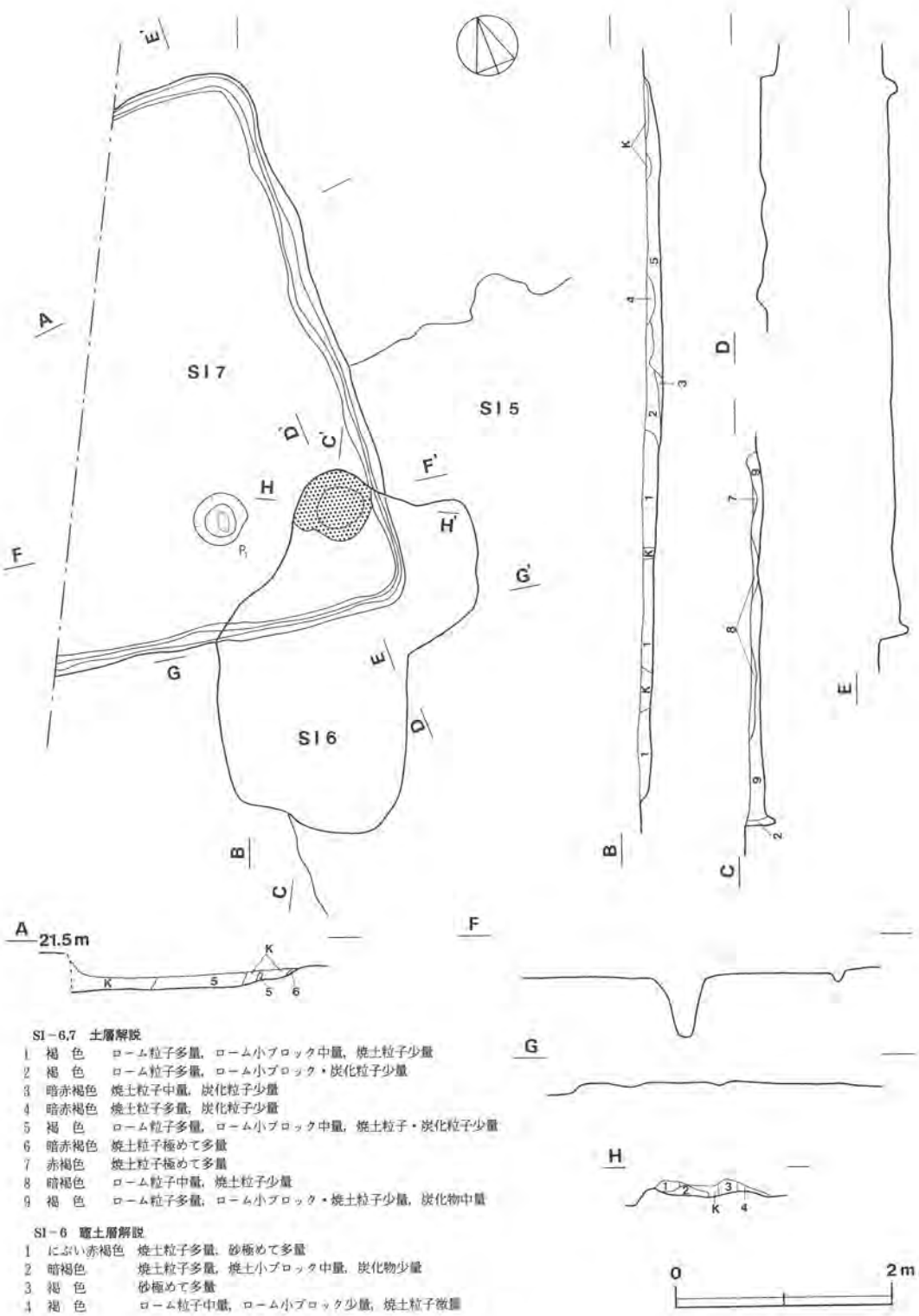
規模と平面形　一辺が3.40 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－23°－E

床　ほぼ平坦であり，竈付近には硬化面が残存している。第5号住居跡と重複する部分には，厚さ10 cm程の貼床がされている。

ピット　検出されなかった。

竈　北壁中央部に付設されているが，撹乱され，火床及び両袖の一部が僅かに遺存しているに過ぎず，規模等については，不明確である。火床は床面を僅かに掘り窪め，熱を受けて赤変硬化している。



SI－6,7　土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化粒子少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
6　暗赤褐色　焼土粒子極めて多量
7　赤褐色　焼土粒子極めて多量
8　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
9　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，炭化物中量

SI－6　竈土層解説

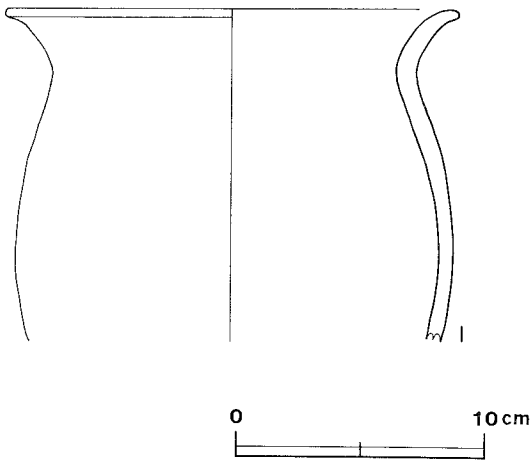
1　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，砂極めて多量
2　暗褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化物少量
3　褐　色　砂極めて多量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量

第18図　第6・7号住居跡実測図

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片30点（甕片，坏片）が，床面及び覆土下層から出土している。第19図1の甕は竈前方の床面から出土している。

所見　本跡は，古墳時代後期に比定される住居跡と考えられるが，貼床が，第5号住居跡の床の上と第7号住居跡の周溝の上から検出されていること等から，本跡は，この同時期の2軒の住居跡より新しく構築されたものである。



第19図　第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	甕 土師器	A 18.1 B（13.4）	底部欠損。胴部は内彎し，頸部から口縁部にかけて丸みをもって外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P66 50% 竈前方 床面

第7号住居跡（第18図）

位置　調査区の北西部，B3b1区を中心に確認されている。

重複関係　第5号住居跡を掘り込み，第6号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　西側3分の2程が調査区外に延びているため，詳細は不明であるが，一辺が5.15m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－5°－E

壁　壁高は，15～28cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　上幅7～25cm，深さ6～10cmを測り，断面形はU字状を呈しており，壁下を全周しているものと思われる。

床　全体に平坦であり，よく踏み固められている。

ピット　1か所（P_1）検出され，径50cmの円形を呈し，深さ57cmを測る。規模等から主柱穴と考えられる。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　遺物の出土はなかった。

所見　本跡の東壁中央部と南東コーナー付近に焼土が検出されていることから，焼失家屋と思われる。3分の2程が調査区外に延びているため，詳細は不明であるが，本跡は，重複関係等から，

第5号住居跡より新しく，第6号住居跡より古い時期に構築されている。遺構の形態等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。

第8号住居跡（第20図）

位置　調査区の北西部，B2f9区を中心に確認されている。

重複関係　第2号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　西側3分の1程が調査区外に延びているが，1辺が6.50 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－21°－W

壁　壁高は38～42 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　上幅12～20 cm，深さ5～10 cmで，断面形はU字状を呈し，壁下を全周すると思われる。

床　全体に平坦であり，よく踏み固められている。

ピット　4か所（P_1～P_4）検出され，P_1～P_3が径26～49 cmの円形を呈し，深さ75～86 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_4は84 cm程の円形を呈し，深さ60 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　竈は検出されなかったが，西側3分の1程が調査区外に延びているため，調査区外に付設されているとものと思われる。

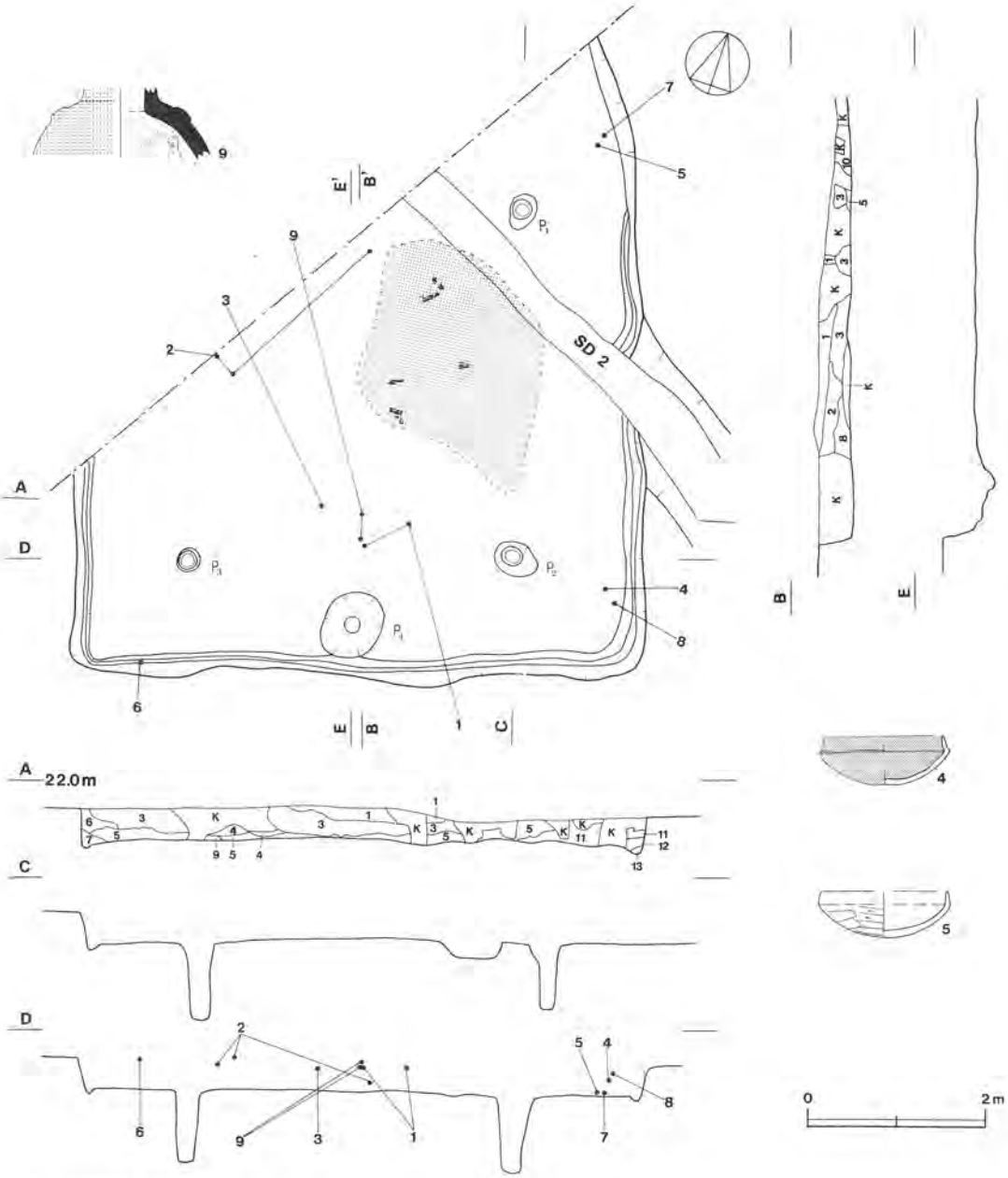
覆土　全体的にローム小ブロックが多量に含まれ，人為堆積と思われる。

遺物　土師器片423点（甕片，坏片，高坏片），須恵器片3点（壷片，提瓶片）が，床面全域の覆土中層及び下層から出土している。第21図4の坏は南東コーナー付近の覆土中層から，9の提瓶は床面中央部南側の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　床面全域から，焼土が検出されていることから，焼失家屋と思われる。本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。

第8号住居跡出土土器観察表

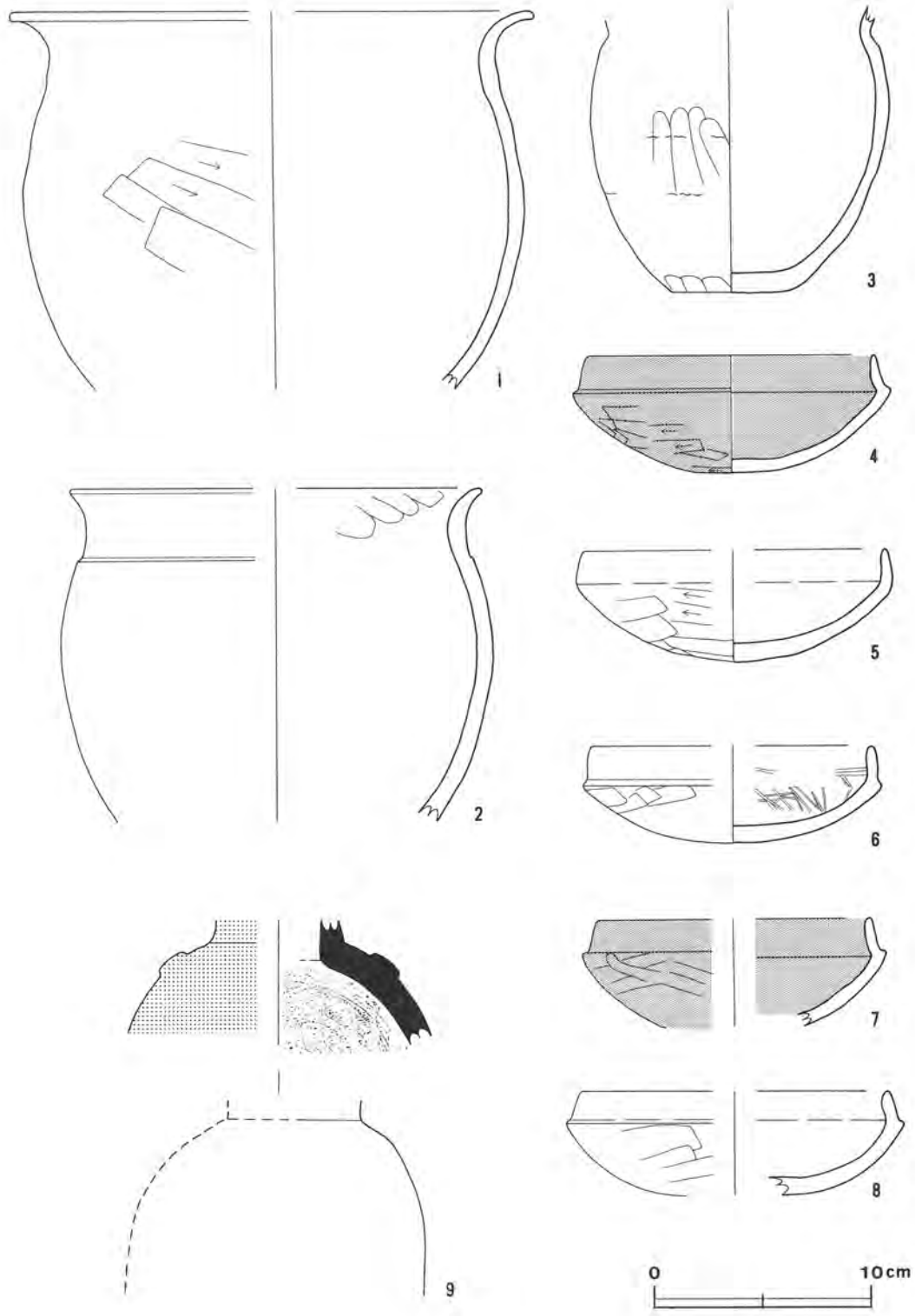
図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	甕 土師器	A〔24.0〕 B（17.5）	体部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は強く外反する。	胴部外面ヘラナデ。 頸部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P 68　30% 覆土上層
2	甕 土師器	A〔18.9〕 B（15.5）	胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部との境に稜を有する。頸部は直立し，口縁部は外反する。	胴部外面剝離で調整不明。頸部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 67　30% 覆土上層
3	小型甕 土師器	B（13.1） C　5.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は外反する。	底部ヘラ削り。胴部外面縦位のヘラナデ，内面横位のヘラナデ。 頸部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色，普通	P 73　65% 覆土上層



SI－8　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，
3　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
5　褐　色　ローム粒子極めて多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
7　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量
8　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子少量
9　褐　色　ローム粒子・炭化物多量
10　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化物少量
11　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量，焼土粒子微量
12　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
13　褐　色　ローム粒子多量
14　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量

第20図　第8号住居跡実測・遺物出土位置図



第21図　第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第21図 4	坏 土師器	A　13.2 B　5.4	体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面横位のヘラ削り後軽いナデ。内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 74　100% 南東コーナー 覆土中層
5	坏 土師器	A〔14.1〕 B　5.2	体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 75　50% 北コーナー付近 床面
6	坏 土師器	A〔13.0〕 B　4.5	体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 76　50% 覆土上層
7	坏 土師器	A〔12.6〕 B（5.0）	体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面横位のヘラ削り，内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 77　25% 北コーナー付近 床面
8	坏 土師器	A〔14.2〕 B（4.8）	体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色，普通	P 78　25% 覆土上層
9	提　瓶 須恵器	B（5.7）	体部は，片側が偏平な球体をなす。体部上方にボタン状突起が貼付されている。	回転かき目調整。 自然釉。	砂粒・長石 灰色 良好	P 79　20% 覆土上層

第9号住居跡（第22図）

位置　調査区の北東部，B3f2区を中心に確認されている。

規模と平面形　南東部の4分の3程が調査区外に延びているが，一辺が6.00 mの方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－14°－W

壁　壁高は36 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北西壁下に検出され上幅10～20 cm，深さ10 cmを測り，断面形はU字状を呈している。

床　平坦であり，全体的によく踏み固められている。

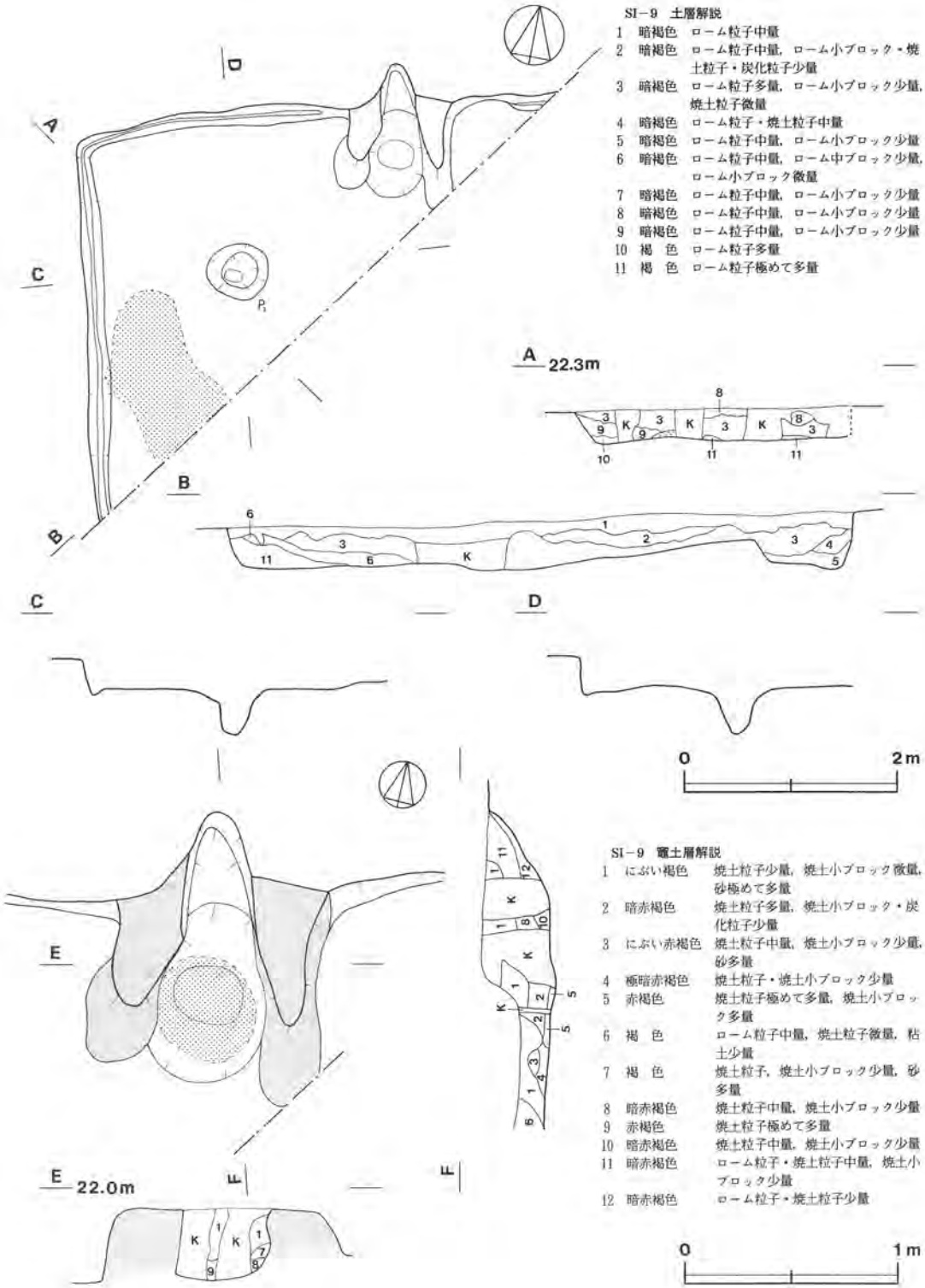
ピット　1か所（P_1）検出され，径57 cm程の円形を呈し，深さ42 cmを測り，規模等から主柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設されている。壁を39 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ126 cm，幅111 cmを測る。火床は床面を皿状に僅かに掘り窪め，レンガ状に赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片169点（甕片，甑片，坏片，高坏片）が，主に竈西側付近の床面及び覆土下層から出土している。第23図1の甑は竈西側付近の床面から潰れた状態で出土している。

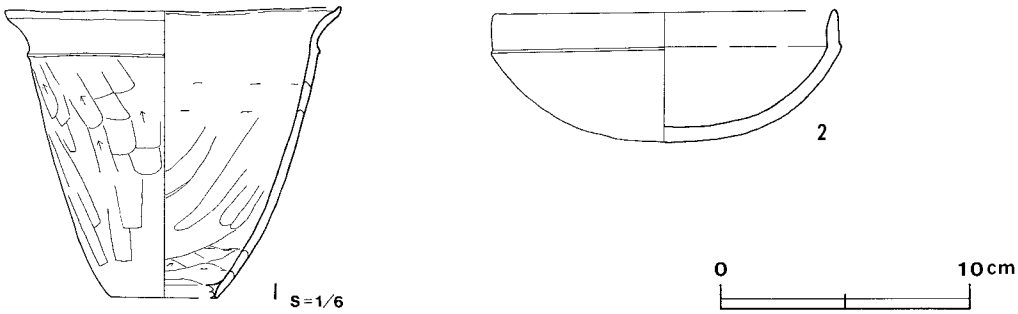
所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第22図　第9号住居跡実測図

第9号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第23図 1	甑 土師器	A　26.6 B　23.5 C　7.8	二孔式。胴部は外傾気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	胴部内・外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P 81　90% 竈西側付近 床面
2	坏 土師器	A　13.9 B　5.4	丸底。 口縁部と体部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 82　70% 覆土中層



第23図　第9号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡（第24図）

位置　調査区の北東部，B3d3区を中心に確認されている。

規模と平面形　東側3分の2程が調査区外に延びているため，全容は明らかではないが，長軸が5.40 m程の隅丸長方形を呈する住居跡と推定される。

長軸方向　N－32°－E

壁　壁高は16～18 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

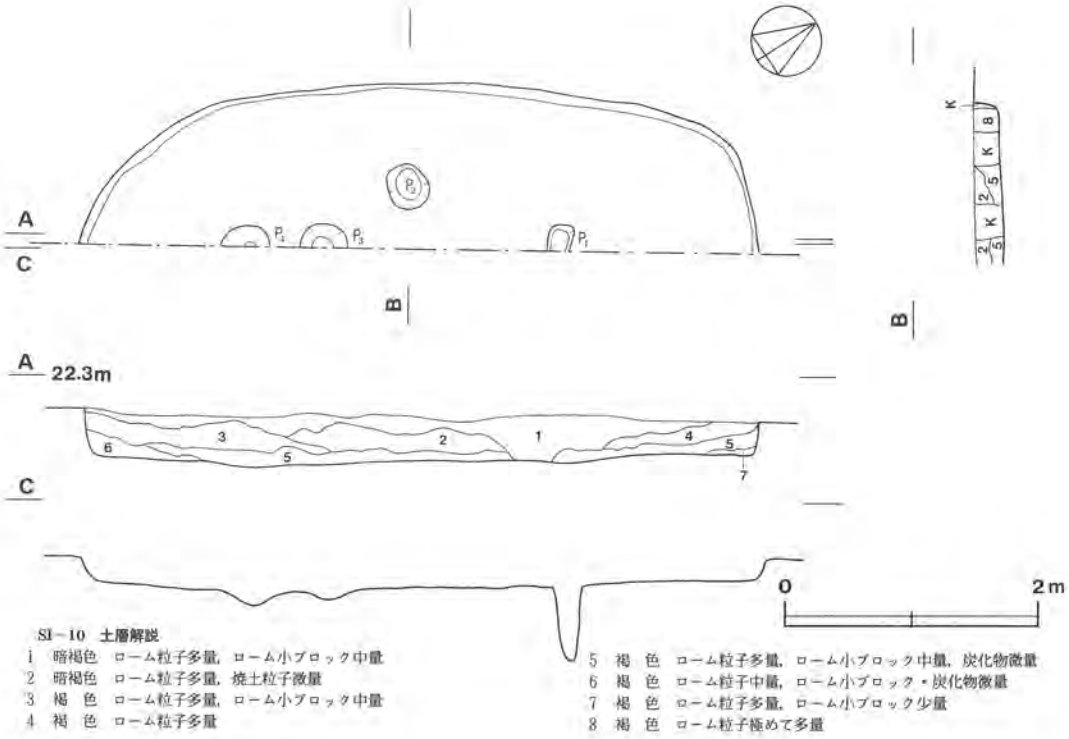
床　全体的に平坦であり，硬くしまっている。

ピット　4か所（P_1～P_4）検出されている。P_1は径20 cmの円形を呈し，深さ59 cmを測り，配置や規模等から主柱穴と考えられる。P_2～P_4は径15～38 cmの円形を呈し，深さ7～11 cmを測っているが，いずれも規模等から，主柱穴や梯子ピットとは考えにくい。

覆土　自然堆積と考えられる。

遺物　弥生式土器片30点（甕片，壺片）が，住居跡南部の床面から出土している。土師器片51点（甕片，坏片）は，覆土上層から出土しており，流れ込みと思われる。

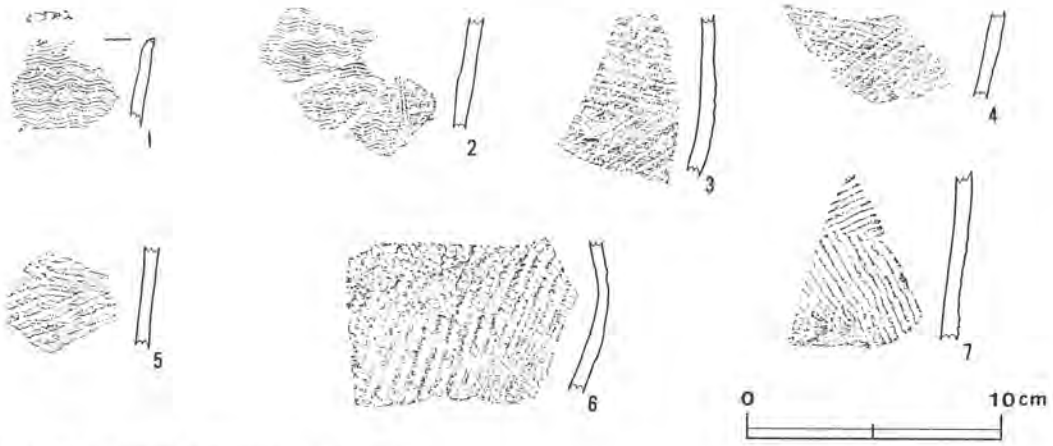
所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から弥生時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第24図　第10号住居跡実測図

第10号住居跡出土遺物拓影図（第25図）

1は口縁部片であり，4本1条の横走波状文が施され，口唇部には刻み目を有する。2は頸部片であり，櫛描の波状文が施されている。3～7は，いずれも胴部片である。3～5は，附加条2種の縄文が，6は，複節の附加条1種の縄文が施されており，7は，無節縄文が羽状に施されている。



第25図　第10号住居跡出土遺物拓影図

第11号住居跡（第26図）

位置　調査区の北東部，A3i6区を中心に確認されている。

重複関係　北側が第12号住居跡を掘り込んでいる。

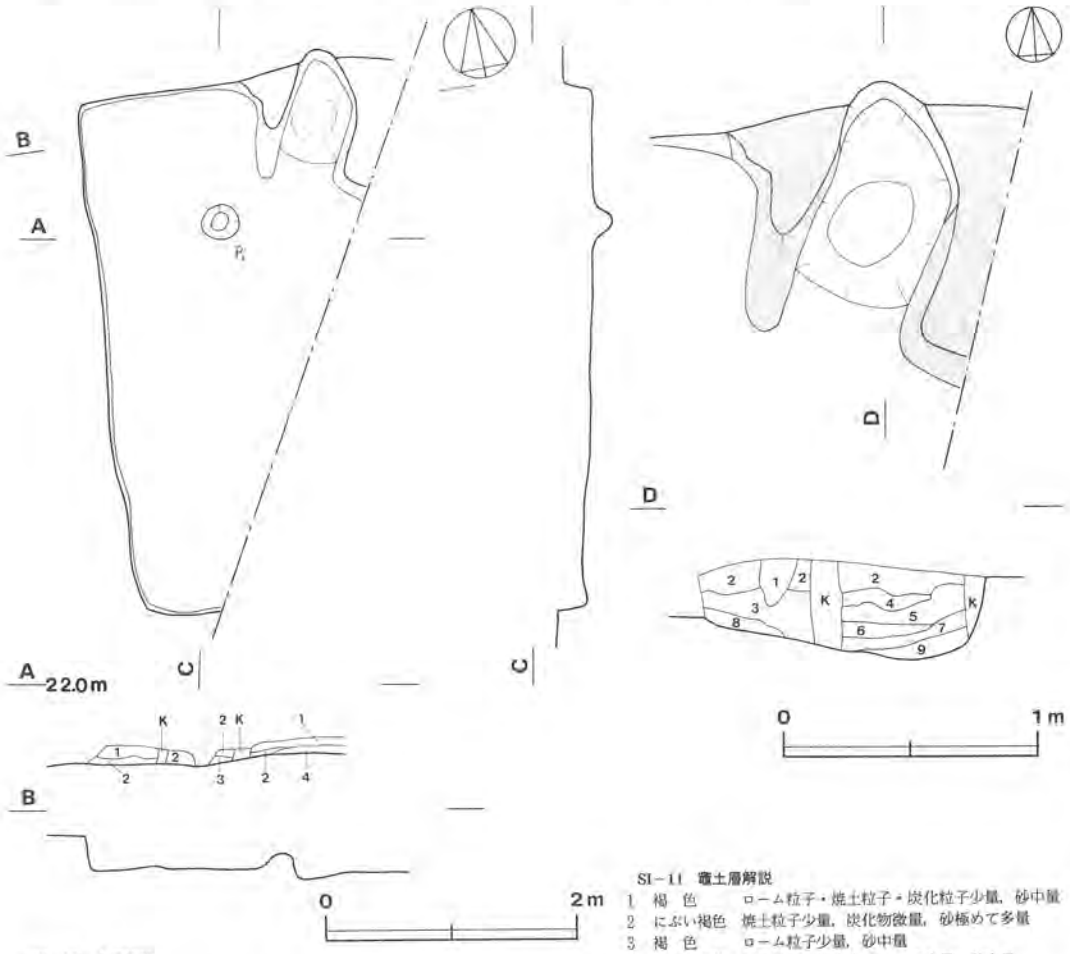
規模と平面形　東側2分の1程が調査区外に延びているが，一辺4.20 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－4°－E

壁　壁高は，21～26 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　全体に平坦で，比較的しまっているが，ロームを含む黒褐色土で構築された貼床と思われる。

ピット　1か所（P_1）検出され，規模は径30 cm，深さ16 cmを測り，主柱穴と考えられる。



SI－11　土層解説

1　褐　色　　ローム粒子極めて多量
2　暗褐色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
3　褐　色　　ローム粒子極めて多量
4　にぶい赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，炭化物少量

SI－11　土層解説

1　褐　色　　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，砂中量
2　にぶい褐色　焼土粒子少量，炭化物微量，砂極めて多量
3　褐　色　　ローム粒子少量，砂中量
4　にぶい褐色　焼土粒子・焼土小ブロック少量，砂中量
5　暗赤褐色　　ローム粒子多量，焼土粒子中量
6　赤褐色　　焼土粒子極めて多量，焼土小ブロック多量
7　褐　色　　ローム粒子少量
8　暗褐色　　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
9　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

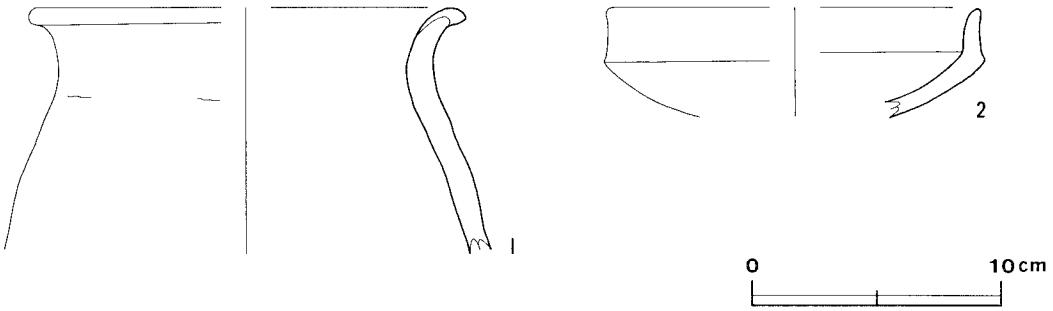
第26図　第11号住居跡実測図

竈　北壁中央部に付設されているが，撹乱を受け遺存状態はよくない。壁を16 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ111 cm，幅96 cmを測る。火床は，床面を僅かに掘り窪め，火熱を受け赤変している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　全体的にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積と思われる。

遺物　土師器片66点（甕片，坏片），須恵器片1点（壷片）が，主に竈南西付近の床面及び覆土下層から出土し，竈内からは土師器の甕胴部片が11点出土している。第27図2の坏は，竈南西側の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第27図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	甕 土師器	A〔17.0〕 B（9.9）	胴部欠損。口縁部は外反する。	胴部内・外面剝離のため調整不明。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミスにぶい赤褐色 不良	P83　15% 覆土中層
2	坏 土師器	A〔15.2〕 B（4.4）	口縁部と体部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石にぶい褐色 普通	P84　15% 竈南西側 覆土下層

第12号住居跡（第28図）

位置　調査区の北東部，A3i5区を中心に確認されている。

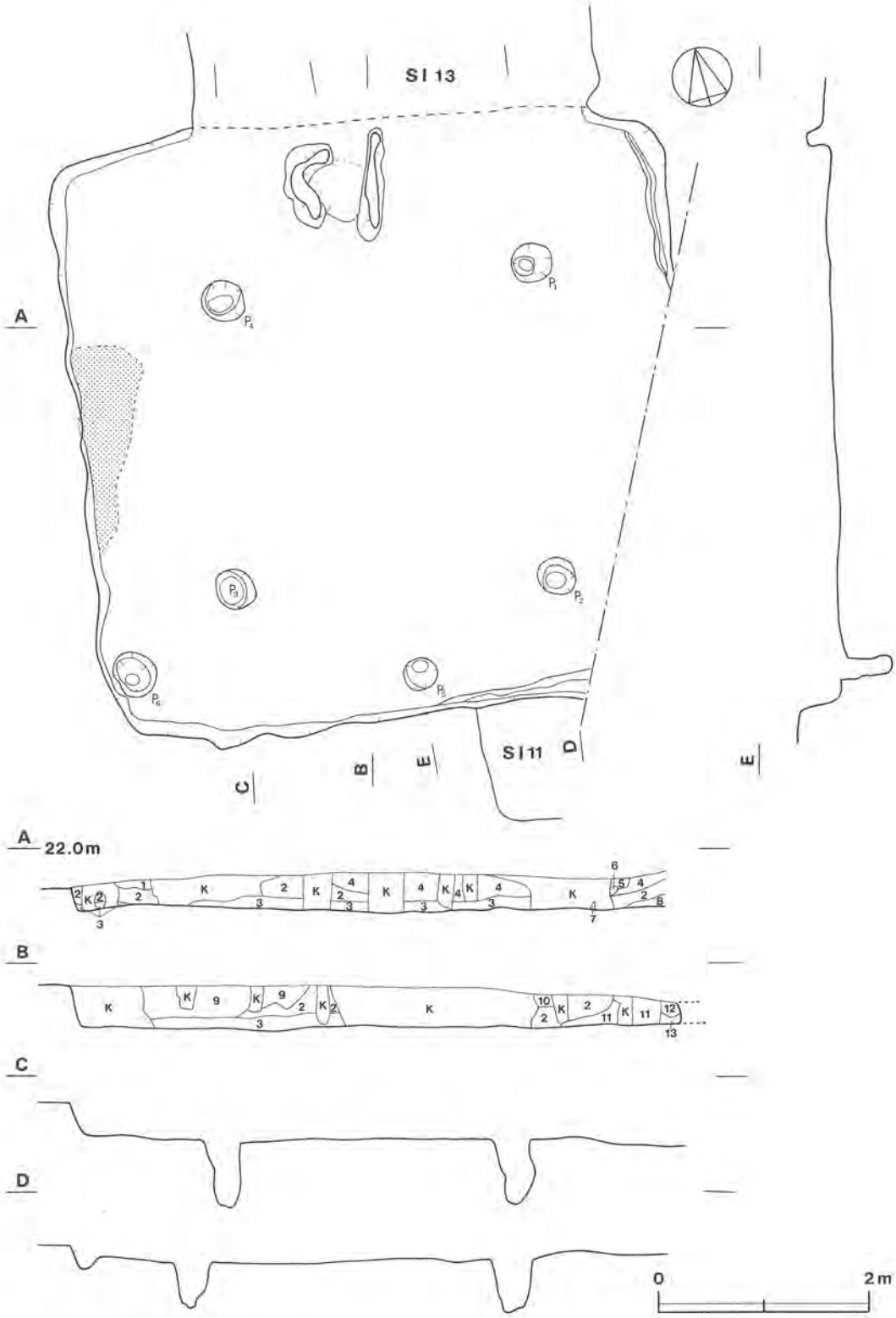
重複関係　南東コーナーが第11号住居跡に，北側が第13号住居跡に，掘り込まれている。

規模と平面形　重複により明確ではないが，長軸5.93 m，短軸5.83 mの方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－9°－E

壁　壁高は，西壁で20～24 cm，南壁で36～40 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

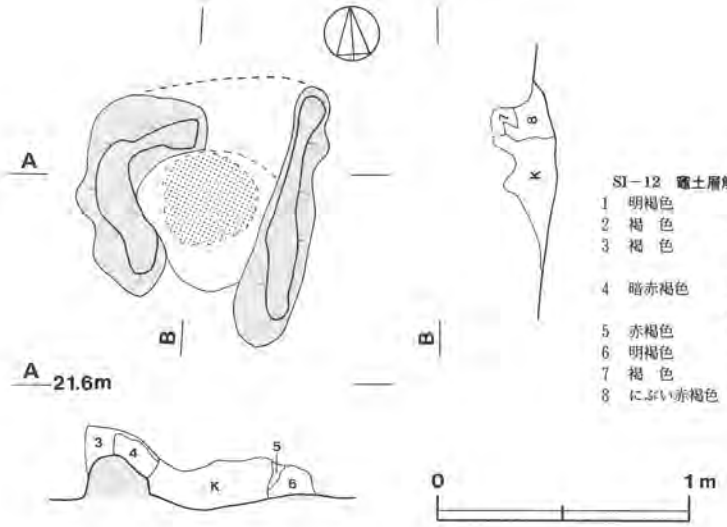
壁溝　東壁，南壁下の一部に遺存しており，上幅5～12 cm，深さ5～12 cmを測り，断面形はU字状を呈している。



第28図　第12号住居跡実測図

SI－12　土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
2　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　褐　色　ローム粒子極めて多量，焼土粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
6　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量
7　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
8　褐　色　ローム粒子中量
9　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
10　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物中量
11　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，砂多量
12　褐　色　ローム粒子多量，砂少量
13　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量



SI－12　竈土層解説

1　明褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・砂少量
3　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量，砂多量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物少量，砂多量
5　赤褐色　焼土粒子多量，炭化物少量，砂多量
6　明褐色　ローム粒子・焼土中ブロック・砂多量
7　褐　色　ローム粒子中量，砂多量
8　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量

第29図　第12号住居跡竈実測図

床　平坦でよく踏み固められて硬く，特に竈前方部は堅緻である。

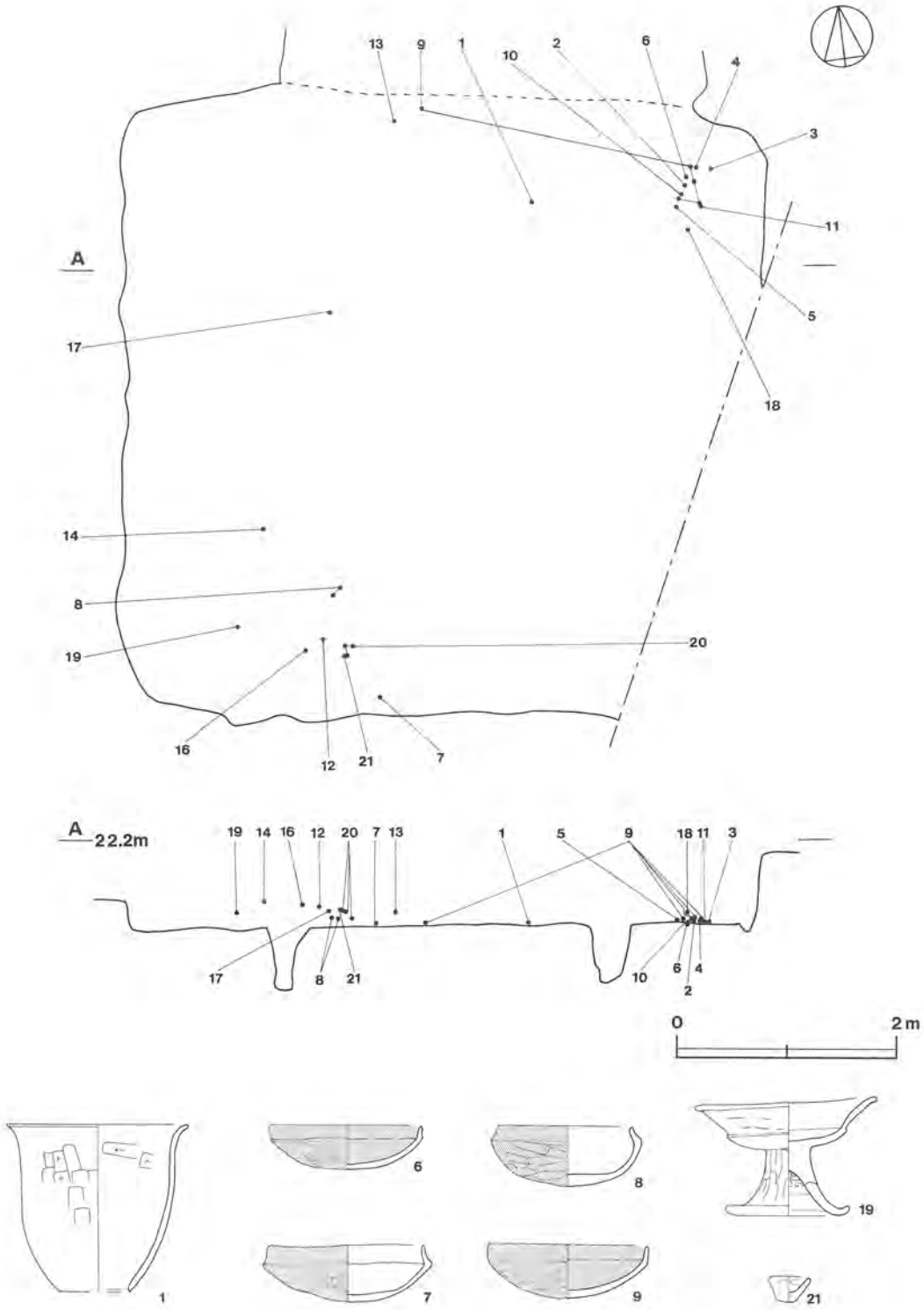
ピット　6か所（P_1～P_6）検出されている。P_1～P_4は径35～43 cmの円形を呈し，深さ43～62 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径34 cm程の円形を呈し，深さ48 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P_6は径46 cm程の円形を呈し，深さ19 cm程を測り，補助柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設され，砂と粘土で構築されているが，耕作による撹乱と第13号住居跡に掘り込まれて，両袖が僅かに遺存している状況である。火床は，径36 cm程の円形を呈し，7 cm程床面を掘り窪められており，赤変硬化している。

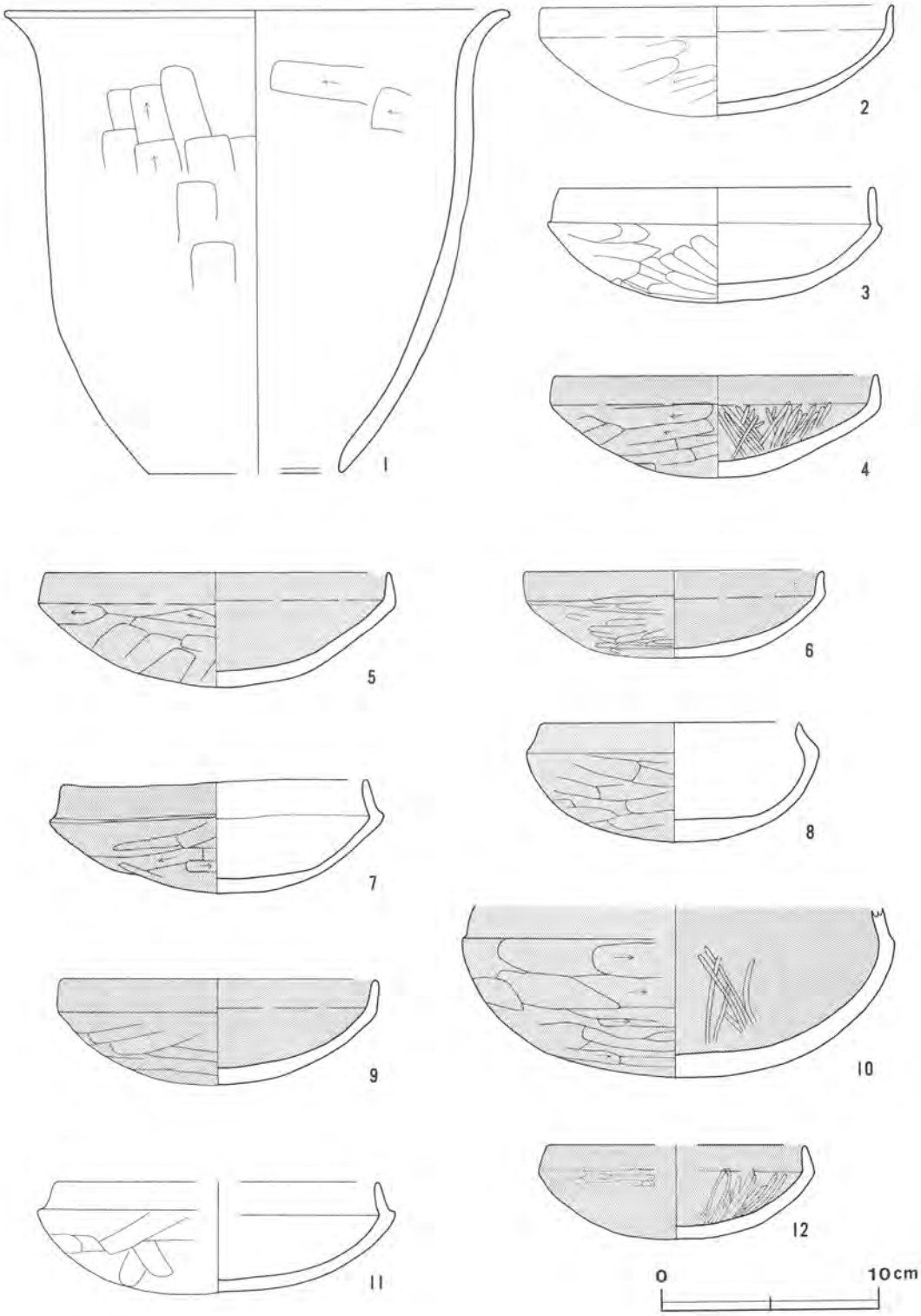
覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積と思われる。

遺物　土師器片642点（甕片，坏片，高坏片）が，住居跡全体の床面及び覆土から出土している。第31図2，3，4，5，6の坏は北東コーナー床面から出土している。8の坏は南壁の西側覆土中層から，第32図19の高坏は南西コーナー覆土中層から横位の状態でそれぞれ出土している。

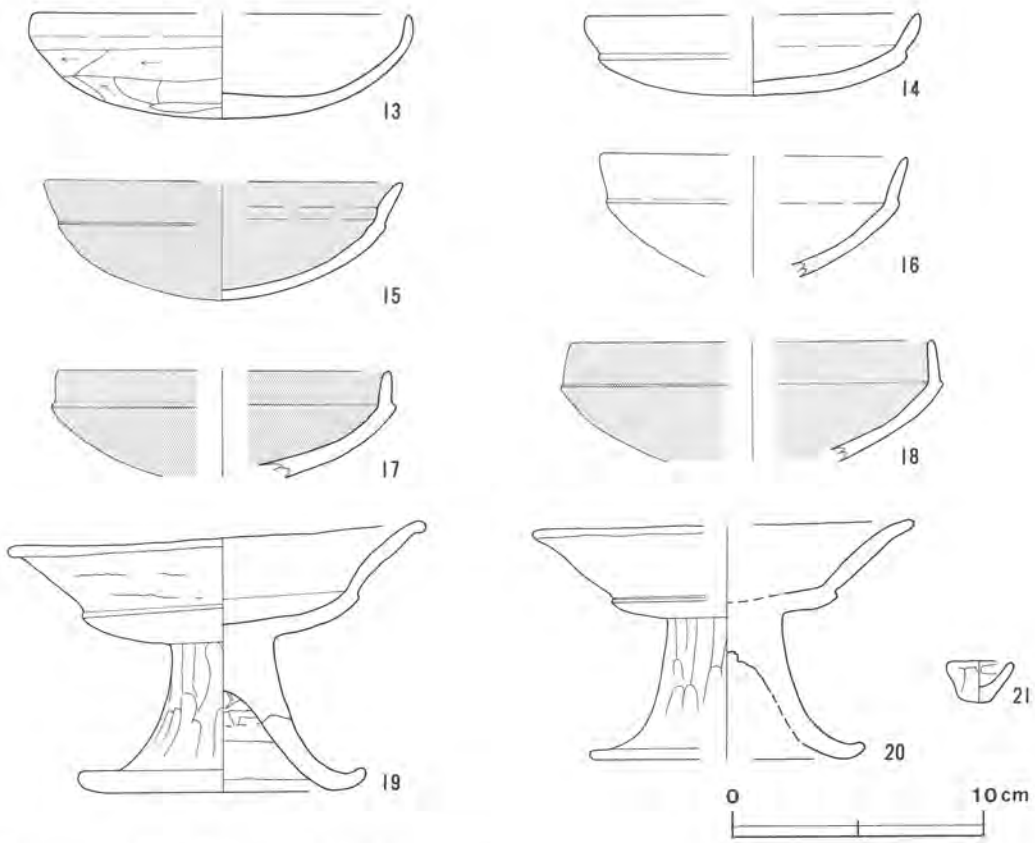
所見　本跡は，重複関係から第11号住居跡及び第13号住居跡よりも古い時期に構築されている。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第30図　第12号住居跡遺物出土位置図



第31図　第12号住居跡出土遺物実測図 (1)



第32図　第12号住居跡出土遺物実測図（2）

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第31図 1	甑 土師器	A　22.8 B　21.4 C〔8.4〕	無底式。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	胴部外面縦位のヘラ削り，内面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P 86　70% 北東部 床面
2	坏 土師器	A　16.0 B　5.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	P 88　90% 北東コーナー 床面
3	坏 土師器	A　14.4 B　5.3	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P 89　80% 北東コーナー 床面
4	坏 土師器	A　14.9 B　4.7	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 90　80% 北東コーナー 床面
5	坏 土師器	A　15.9 B　5.3	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい褐色 良好	P 91　80% 北東コーナー 床面

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第31図 6	坏 土師器	A　13.8 B　4.1 C　4.1	平底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 浅黄橙色 普通	P 92　80% 北東コーナー 床面
7	坏 土師器	A　14.0 B　5.3	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り後，ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 外面黒色処理。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P 94　75% 中央部 床面
8	坏 土師器	A　11.7 B　5.4	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。 外面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 93　75% 南西部 覆土中層
9	坏 土師器	A　14.5 B　4.8	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 95　70% 北東コーナー 床面
10	坏 土師器	B（7.9）	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面横位のヘラナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P 87　65% 北東コーナー 床面
11	坏 土師器	A〔14.8〕 B　5.2	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	P 96　60% 北東コーナー 床面
12	坏 土師器	A〔11.7〕 B　4.4	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラナデ後ヘラ磨き，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 98　50% 覆土上層
第32図 13	坏 土師器	A〔14.9〕 B　5.2	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は短く直立する。	体部外面横位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 97　40% 竈西側 覆土中層
14	坏 土師器	A〔13.2〕 B　3.2	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 99　40% 覆土上層
15	坏 土師器	A〔14.2〕 B　4.8	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P 100　30% 覆土上層
16	坏 土師器	A〔12.2〕 B（4.9）	体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 101　30% 覆土上層
17	坏 土師器	A〔13.2〕 B（4.3）	体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P 102　30% 覆土上層
18	坏 土師器	A〔14.4〕 B（4.8）	体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい橙色 やや不良	P 103　30% 覆土中層
19	高　坏 土師器	A　16.4 B　10.9 D　10.5 E　6.0	脚部はラッパ状に開く。坏部はやや内彎して立ち上がり，下位に明瞭な稜を有する。口縁部は外反する。	裾部内・外面横ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ，内面横位のヘラナデ。坏部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 良好	P 104　70% 覆土中層
20	高　坏 土師器	A〔15.1〕 B　9.7 D〔10.9〕 E　5.9	脚部はラッパ状に開く。坏部は緩く短く内彎する。坏部下位に明瞭な稜を有する。口縁部は大きく外反する。	裾部内・外面横ナデ。脚部外面縦位のヘラナデ，内面剝離。坏部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 良好	P 105　40% 覆土中層
21	手捏土器	A　2.5 B　1.7	丸底。体部は外傾する。	底部内面に指頭痕。 手捏ね。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P 106　100% 覆土中層

第13号住居跡（第34図）

位置　調査区の北東部，A3h6区を中心に確認されている。

重複関係　南側が第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　一辺が3.70 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－8°－E

壁　壁高22～29 cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　遺存している床面は凹凸しているが，竈付近はよく踏み固められている。

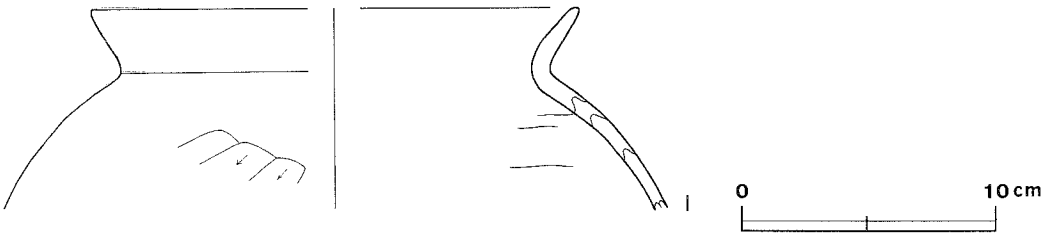
ピット　4か所（P1～P4）検出され，径18～37 cmの円形を呈し，深さ28～47 cmを測り，いずれも規模や配列から主柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設されている。壁を35 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。遺存状態は悪いが，規模は長さ131 cm，幅51 cmを測る。火床は床面を10 cm程掘り窪められ，レンガ状に硬く焼けている。煙道は火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積と思われる。

遺物　土師器片415点（甕片，坏片，高坏片），須恵器片1点（高坏片）が，主に住居跡東部の覆土中層及び下層から出土している。第33図1の甕は，南東部覆土中層から出土している。

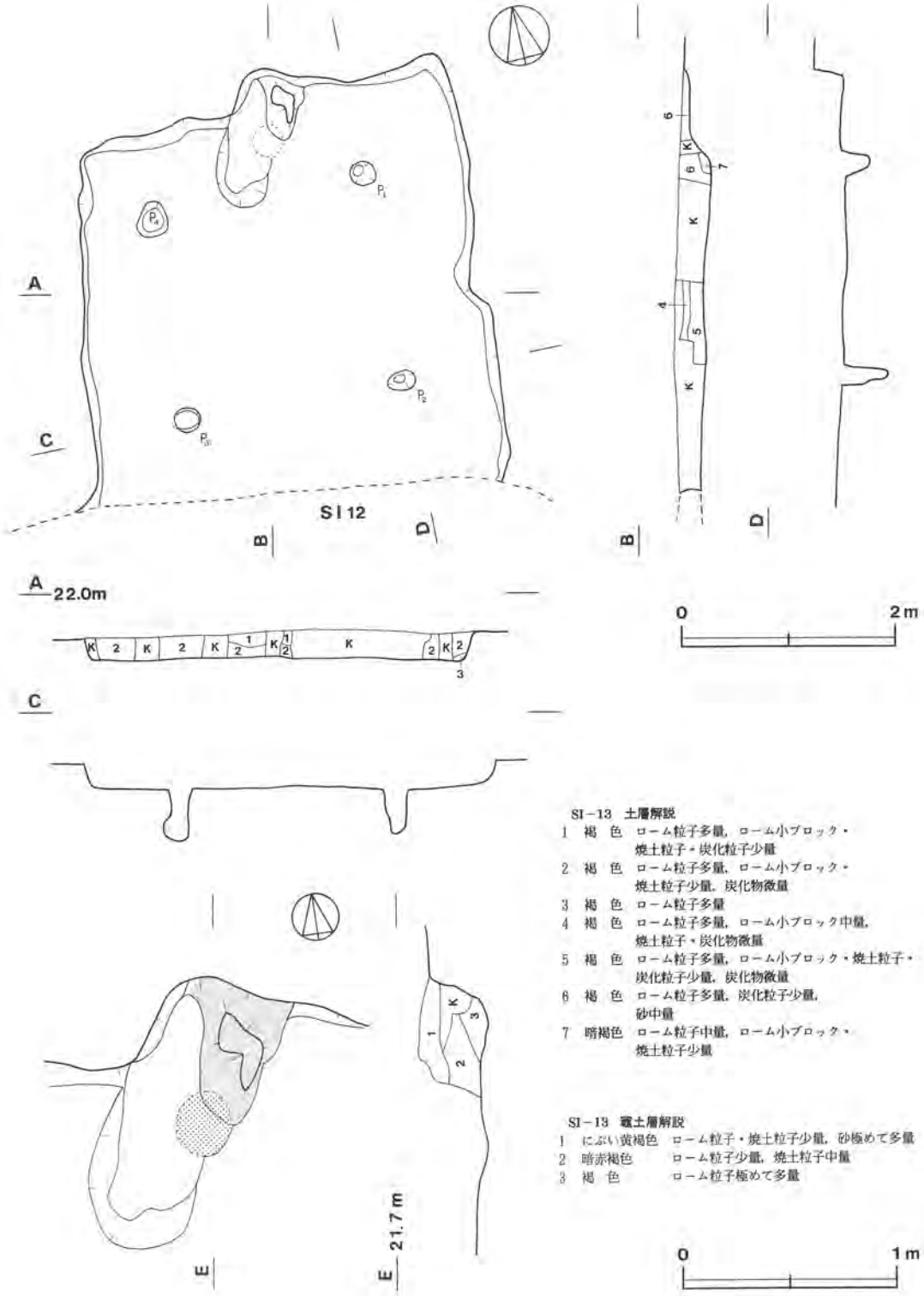
所見　本跡は，第12号住居跡を掘り込んでいることから，第12号住居跡よりも新しい時期に構築されたものである。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第33図　第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図1	甕 土師器	A〔19.4〕 B（8.2）	胴部下半欠損。頸部から口縁部にかけて丸みをもって外反する。	胴部外面斜位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P107　10% 覆土中層



SI－13　土層解説

1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子多量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物微量
6　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量，砂中量
7　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量

SI－13　竈土層解説

1　にぶい黄褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂極めて多量
2　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子中量
3　褐　色　ローム粒子極めて多量

第34図　第13号住居跡実測図

第14号住居跡（第36図）

位置　調査区の中央部，B2i_9区を中心に確認されている。

重複関係　東側が第15号住居跡と第9号土坑とに掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.65 m，短軸4.70 mの隅丸長方形を呈している。

長軸方向　N－34°－E

壁　壁高は29～55 cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　上幅14～30 cm，深さ9～12 cmを測り，断面形はU字状を呈し，壁下を全周するものと思われる。

床　平坦であり，よく踏み固められている。

ピット　10か所（P_1～P_{10}）が検出されている。P_1～P_4は径19～35 cmの円形を呈し，深さ35～58 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径49 cm程の円形を呈し，深さ18 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。その他のピットは径24～46 cmの円形を呈し，深さ15～23 cmを測り，補助柱穴と考えられる。

炉　長軸線上の中央部よりもやや北東側に偏在し，規模は，長径126 cm，短径84 cmの楕円形を呈する地床炉である。炉床は，床面を14 cm程皿状に掘り窪められ，火熱を受けた部分は赤変硬化している。

覆土　自然堆積と思われる。

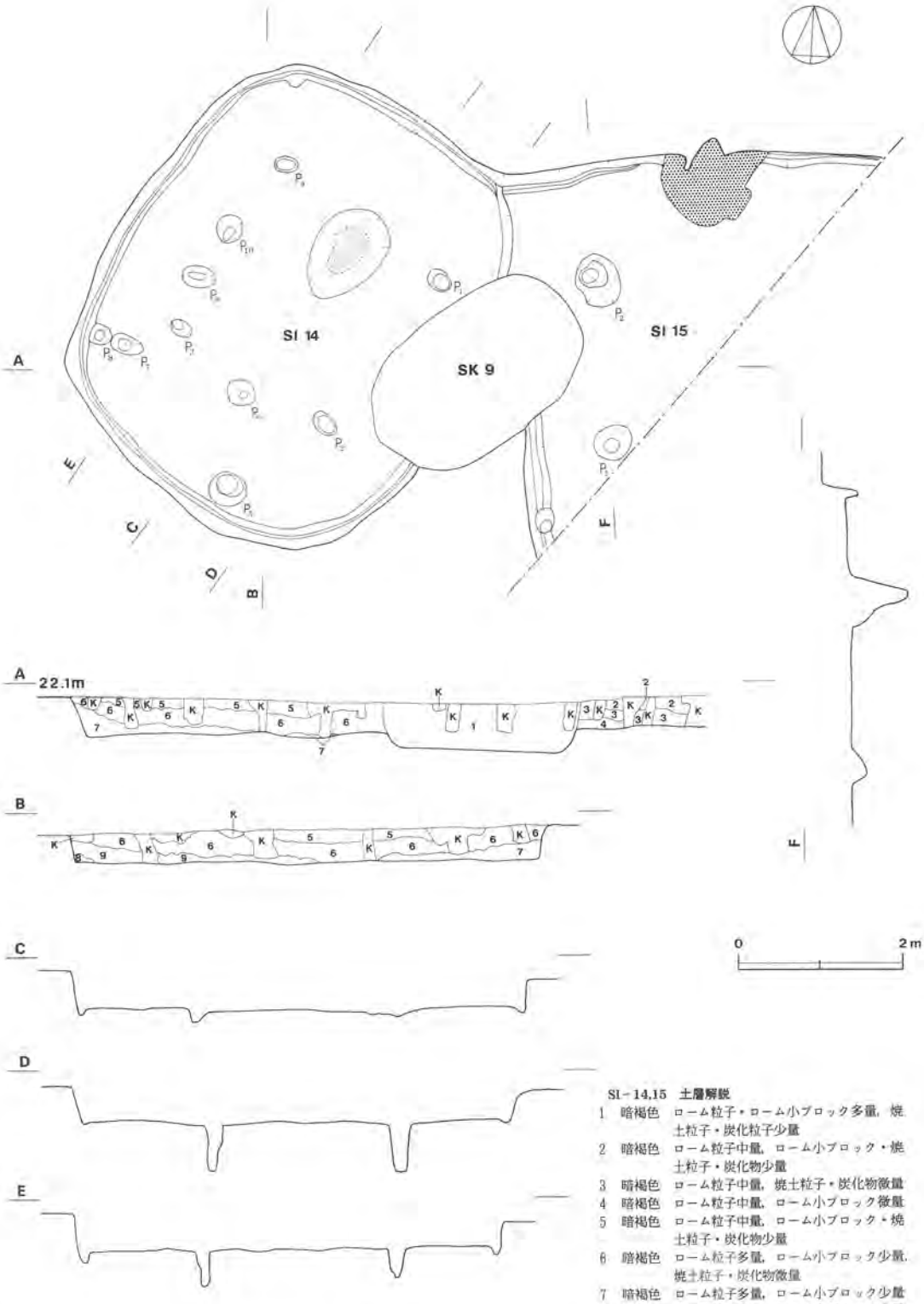
遺物　弥生式土器片77点（甕片，壷片）が，住居跡全域の床面及び覆土下層から出土している。土器片の大部分は十王台式土器の細片である。覆土上層からは，流れ込みと思われる多量の土師器片（864点）が出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から弥生時代後期に比定される住居跡と考えられる。

第14号住居跡出土遺物拓影図（第35図）

1～5は，口縁部片であり，櫛描の横走波状文が施されている。1～3，5は，口唇部には刻み目を有する。6～19は，頸部片であり，6は，附加条2種の縄文の上位に，波状文と縦位の沈線が施されている。7，8は，附加条2種の縄文の上位に，竹管による刺突文が施され，9は，附加条2種の縄文が施されている。10～12は，5本1条の沈線による波状文が施され，13は，附加条1種の縄文が施されている。15は，4本1条の波状文が，16，17は縦位の5本の沈線が施されており，18，19は，横走文が施されている。20～27は，胴部片で，いずれも附加条2種の縄文が施されている。28～31は，胴部から底部にかけての破片であり，いずれも，底部に布目痕を有している。

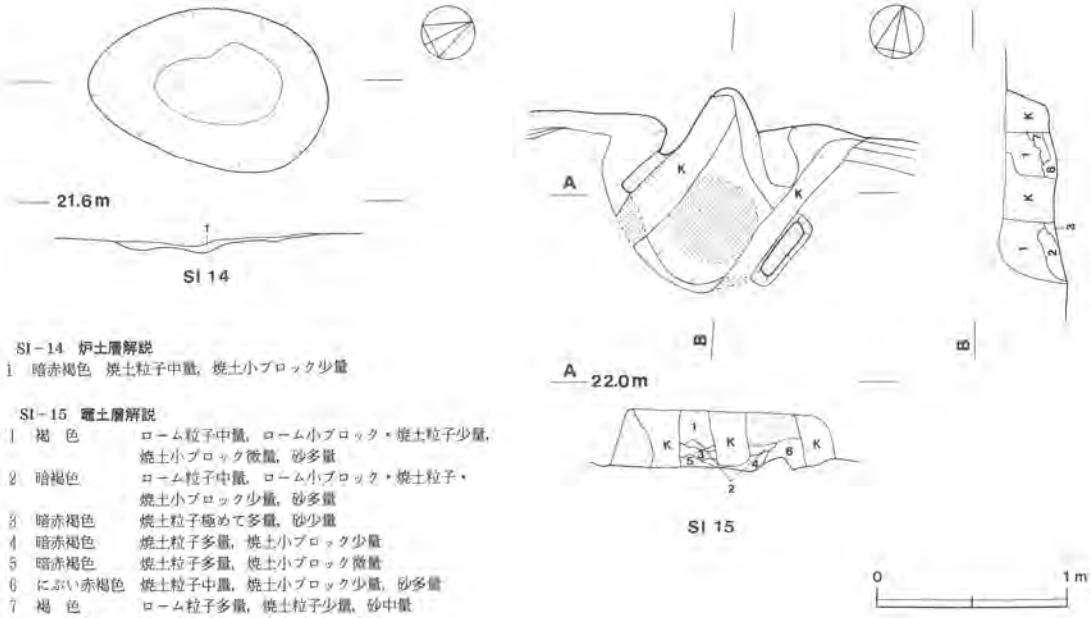
第35図　第14号住居跡出土遺物実測・拓影図



SI－14,15　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
6　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
7　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
8　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
9　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・ローム中ブロック少量

第36図　第14・15号住居跡実測図



SI－14　炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量

SI－15　竈土層解説

1	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，砂多量
2	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック少量，砂多量
3	暗赤褐色	焼土粒子極めて多量，砂少量
4	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
5	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック微量
6	にぶい赤褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，砂多量
7	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子少量，砂中量
8	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック中量

第37図　第14号住居跡炉・第15号住居跡竈実測図

第15号住居跡（第36図）

位置　調査区の中央部，B2h_0区を中心に確認されている。

重複関係　第14号住居跡を掘り込み，第9号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　南東部の3分の2程が調査区外に延びているが，一辺が5.40 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－13°－W

壁　壁高は28～31 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　西及び北壁下の一部に検出され，上幅12～30 cm，深さ14 cm程でU字状に掘り込まれている。

床　やや凹凸状を呈しており，竈付近はよく踏み固められて硬い。

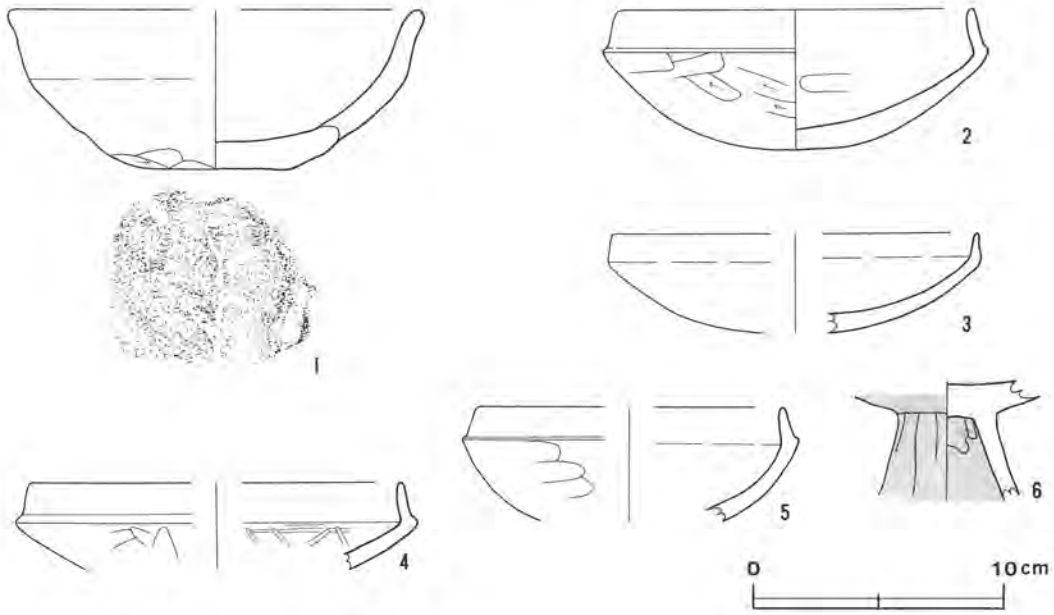
ピット　2か所（P_1・P_2）検出されている。P_2は径65 cm程の円形を呈し，深さ67 cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。P_1は径44～49 cmの円形を呈しているが，深さ19 cmと浅く，主柱穴とは考えにくい。

竈　北壁中央部からやや西よりに付設され，壁外へ21 cm程掘り込んで，砂と粘土で構築されている。規模は長さ110 cm，幅112 cmを測る。火床は床面を14 cm程掘り窪められ，レンガ状に硬く焼けている。煙道は火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片304点（甕片，坏片，高坏片），須恵器片2点（甕片）が，主に竈前方の床面及び覆土下層から出土している。第38図1の鉢は竈南西側の覆土中層から，2の坏は竈南西前方覆土下層からそれぞれ出土している。

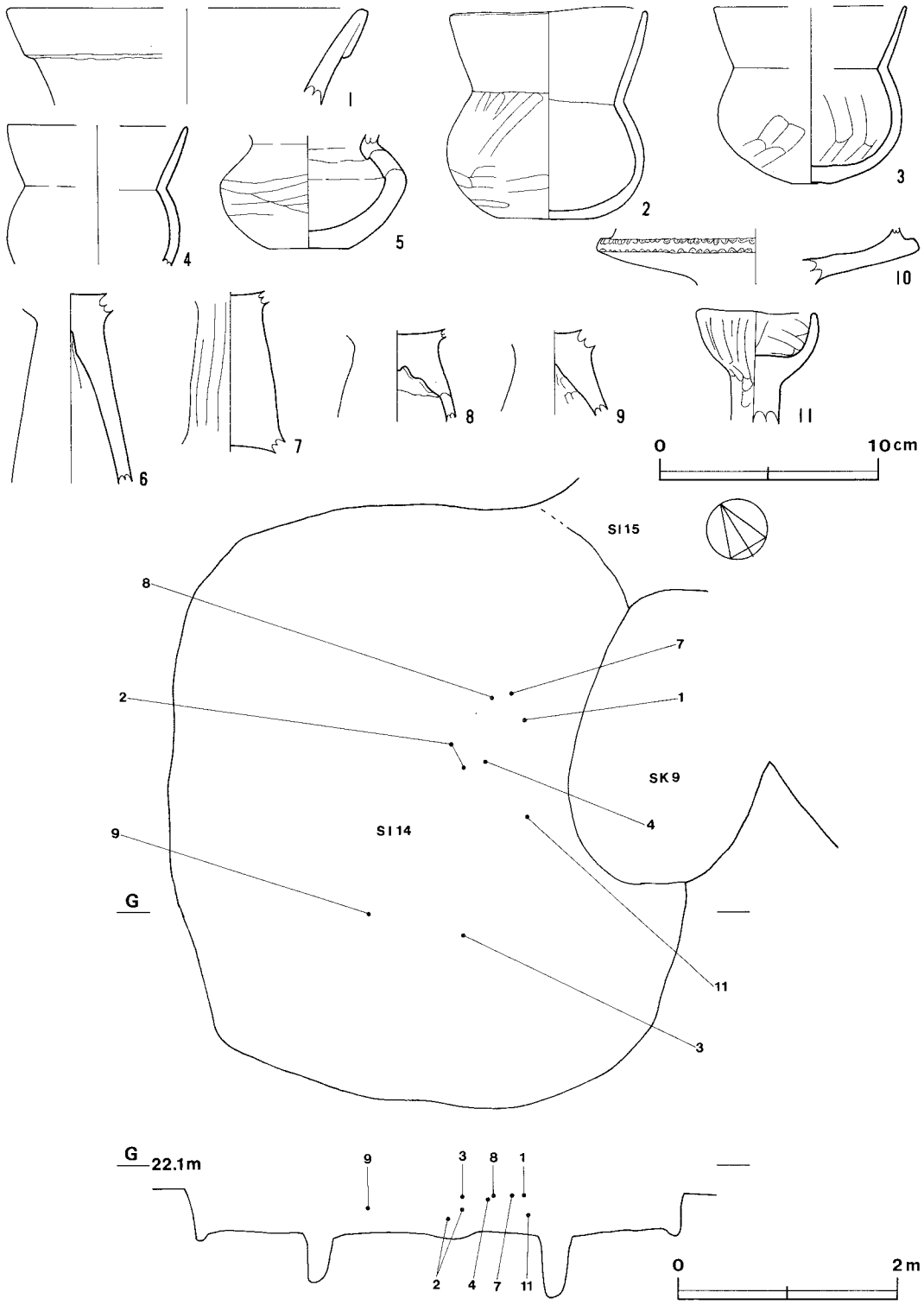
所見　本跡は，重複関係から第14号住居跡より新しく，第9号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第38図　第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	鉢 土師器	A〔16.3〕 B　6.4 C　6.0	平底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は外反する。	底部ヘラ削り。体部内・外面剥離のため調整不明。口縁部内・外面横ナデ。底部木葉痕。	砂粒・パミスにぶい褐色 普通	P 122　40% 竈南西側 覆土中層
2	坏 土師器	A　10.3 B　5.7	底部剥離。口縁部と体部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラナデ，内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色，普通	P 121　90% 竈前方 覆土下層
3	坏 土師器	A〔15.0〕 B（4.0）	口縁部と体部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P 123　15% 覆土中層
4	坏 土師器	A〔14.8〕 B（3.5）	口縁部と体部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミスにぶい黄橙色 普通	P 124　10% 竈前方 覆土下層
5	坏 土師器	A〔12.2〕 B（4.6）	口縁部と体部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 125　10% 覆土中層
6	高坏 土師器	B（4.8）	脚部は外反して外下方に開く。	脚部外面ヘラ削り，内面横ナデ。 坏底部内面ヘラ磨き。 内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア 褐色，普通	P 126　10% 覆土中層



第39図　第14号住居跡覆土上層投棄遺物実測・遺物出土位置図

第14号住居跡覆土上層投棄土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	甕 土師器	A〔16.4〕 B（4.5）	複合口縁を呈す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P114　5％ 覆土上層
2	坩 土師器	A　9.1 B　9.9 C　4.6	平底。胴部は内彎し，中位に最大径を有する。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ。 口縁部外面ヘラナデ，内面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P110　80％ 覆土上層
3	坩 土師器	A〔8.8〕 B　8.2 C　1.8	平底。胴部は内彎し，中位に最大径を有する。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部内・外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	P111　40％ 覆土上層
4	坩 土師器	A〔8.3〕 B（6.5）	胴部は内彎し，口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色，普通	P113　20％ 覆土上層
5	坩 土師器	B（5.3） C　3.7	平底。胴部は内彎し，中位よりやや上に最大径を有する。口縁部欠損。	胴部外面横位のヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P112　40％ 覆土上層
6	高坏 土師器	B（8.8）	脚部片。脚部は中空で直線的に開き裾部に至る。	脚部外面縦位のヘラナデ，内面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい黄橙色 普通	P115　20％ 覆土上層
7	高坏 土師器	B（7.5）	脚部片。脚部は中実で中位に膨らみをもち裾部に至る。	脚部外面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色，普通	P116　20％ 覆土上層
8	高坏 土師器	B（4.3）	脚部片。脚部は外反して外下方に開く。内部上端に接合痕を残す。	脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色，普通	P117　10％ 覆土上層
9	高坏 土師器	B（4.0）	脚部片。脚部は外反して外下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P118　10％ 覆土中層
10	装飾器台 土師器	B（2.6）	器受部片。受部端に上下並列の浅い穿孔を有する。	器受部外面ハケ目調整後ナデ。 内面横ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P119　5％ 覆土上層
11	手捏土器 土師器	A　5.4 B（5.2）	裾部欠損。	外部縦位のヘラナデ。 手捏ね。	砂粒・長石 橙色 普通	P120　50％ 覆土中層 高坏の模倣。

第16号住居跡（第40・41図）

位置　調査区の中央部，C1j$_7$区を中心に確認されている。

重複関係　第17号住居跡を掘り込んでいる。

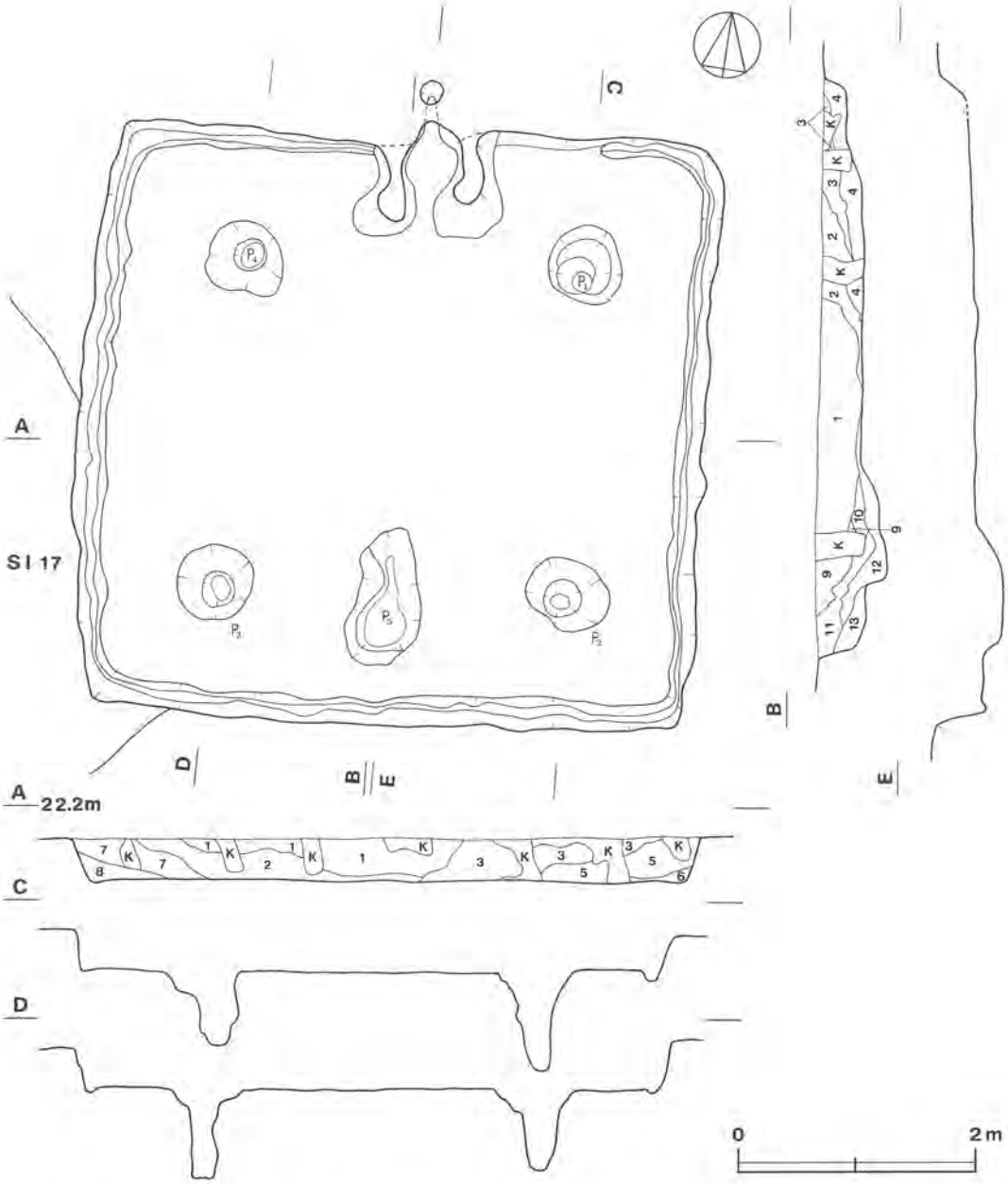
規模と平面形　長軸5.26 m，短軸5.07 mの方形を呈している。

主軸方向　N－3°－W

壁　壁高は35～44 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周し，上幅7～30 cm，深さ2～8 cmを測り，断面形はU字状を呈している。

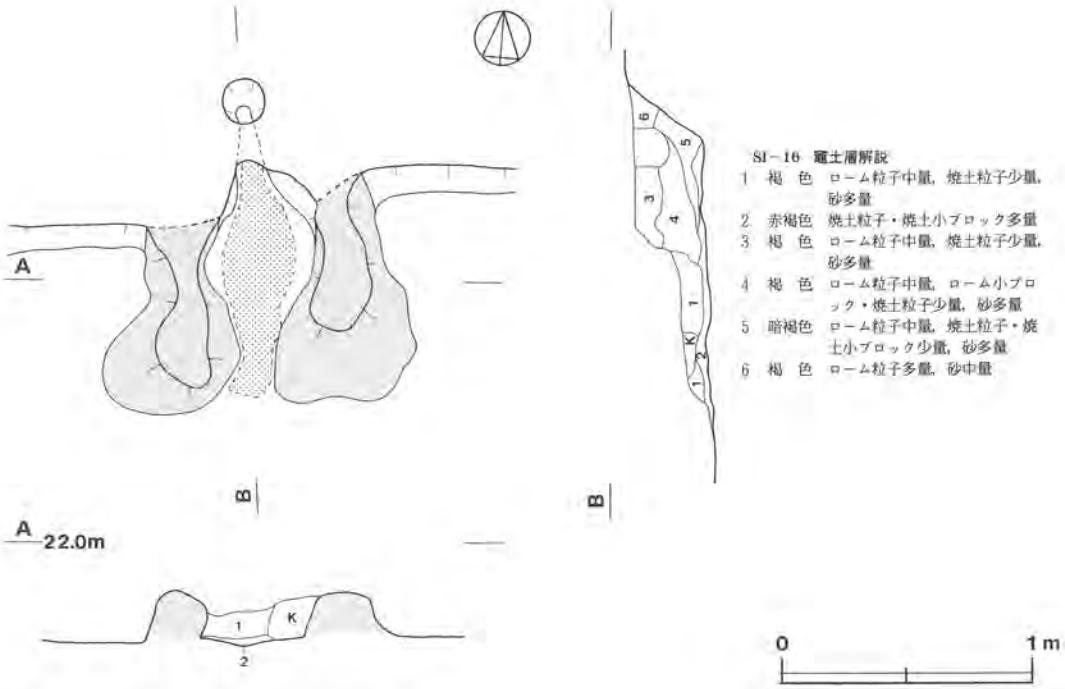
床　平坦で全体に硬く踏み固められており，特に中央部や竈前方の床面が堅緻である。



SI－16　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，
　　ローム中ブロック・炭化粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，
　　ローム中ブロック・焼土粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物少量
7　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
8　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
9　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック中量，
　　ローム中ブロック少量
10　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
11　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，
　　焼土粒子・炭化粒子微量
12　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
13　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

第40図　第16号住居跡実測図



第41図　第16号住居跡竈実測図

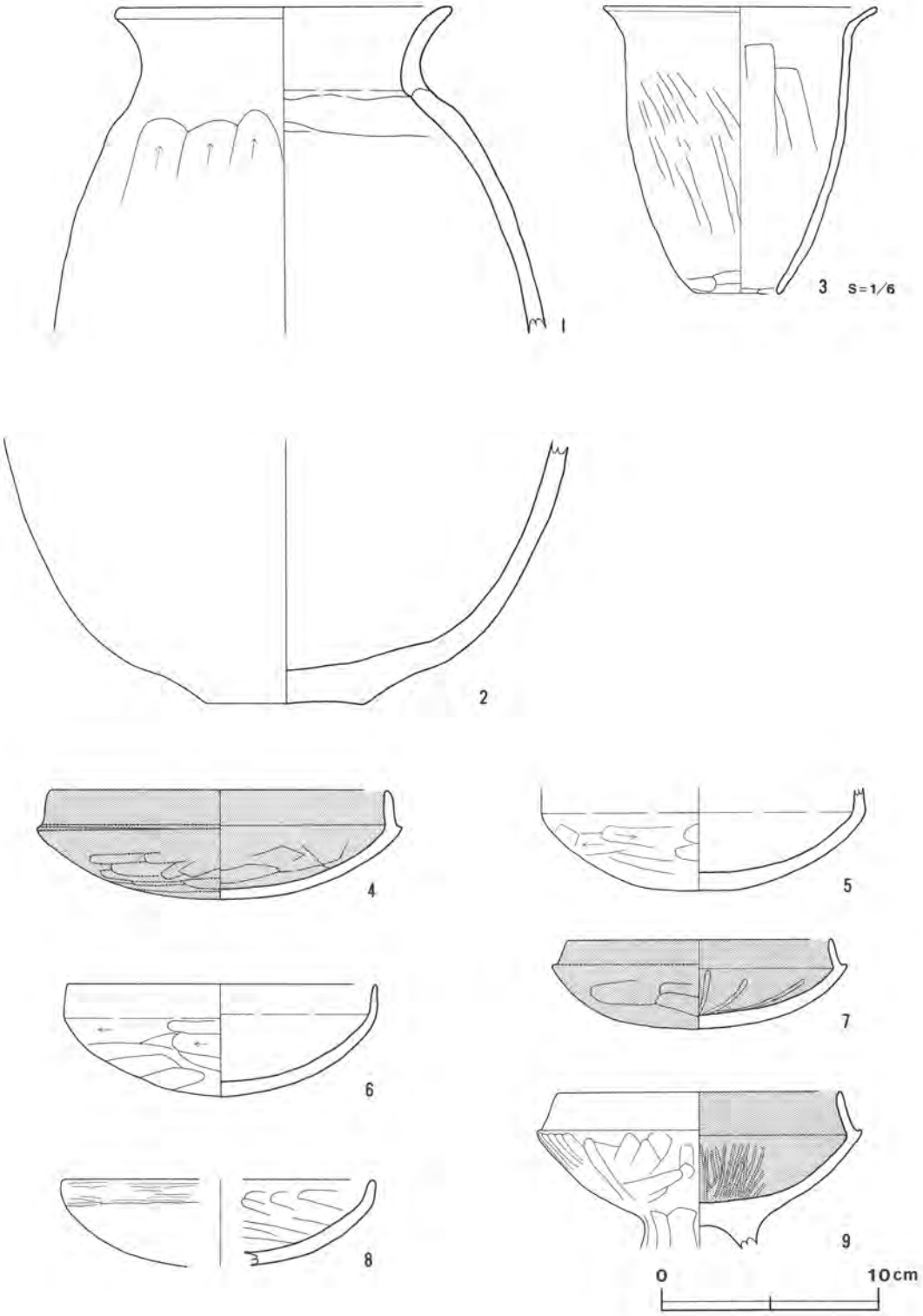
ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は径57～73 cmの円形を呈し，深さ64～84 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は長径120 cm，短径64 cmの楕円形を呈し，深さ24 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　北壁中央部に付設され，当調査区で検出された竈の中では最も遺存状態が良好である。壁を45 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ134 cm，幅124 cmを測る。火床は床面を僅かに掘り窪め，火熱を受け赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっており，煙道口は径18 cmを測る。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片249点（甕片，坏片，高坏片），須恵器片1点（甕片）が，主に竈周辺の床面及び覆土下層から出土している。第42図3の甑は竈左袖部付近から逆位で出土している。4，5，6，7の坏及び9の高坏は，竈西側付近の床面からほぼ完形で，正位の状態で出土している。第82図180の紡錘車は竈南西側付近の床面から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第17号住居跡より新しい時期に構築されている。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第42図　第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕 土師器	A 15.2 B（15.1）	頸部はくびれ，口縁部は外反する。	胴部外面ヘラナデ。 頸部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 明赤褐色 不良	P 127 A 30% 竈東側 覆土下層
2	甕 土師器	B（12.2） C 7.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ。	砂粒・パミス 明赤褐色 不良	P 127 B 20% 竈東側 覆土下層
3	甑 土師器	A 24.9 B 26.3 C 7.0	無底式。胴部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，口唇部は丸い。	胴部外面斜位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 不良	P 134 60% 竈西側 床面
4	坏 土師器	A 15.6 B 5.1	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部やや内傾する。	体部内・外面横位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・長石 黒色 良好	P 128 90% 竈西側 床面
5	坏 土師器	B（4.8）	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。口唇部欠損。	体部外面横位のヘラナデ，内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	P 129 80% 竈西側 床面
6	坏 土師器	A 14.4 B 5.2	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	P 130 70% 竈西側 床面
7	坏 土師器	A 12.2 B 4.1	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面横位のヘラナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理	砂粒・雲母・長石 黒色，普通	P 131 70% 竈西側 床面
8	坏 土師器	A〔14.4〕 B（4.0）	体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面ヘラ磨き。	砂粒・長石 褐色 普通	P 132 30% 覆土中層
9	高坏 土師器	A 13.0 B（7.2）	脚部欠損。坏部は内彎して立ち上がり，上位に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	坏部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・パミス 黒色 普通	P 133 60% 竈西側 床面

第17号住居跡（第43図）

位置　調査区の中央部，C2a$_6$区を中心に確認されている。

重複関係　東側が第16号住居跡に，西コーナーが第25号土坑に，それぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.64 m，短軸5.44 mの方形を呈している。

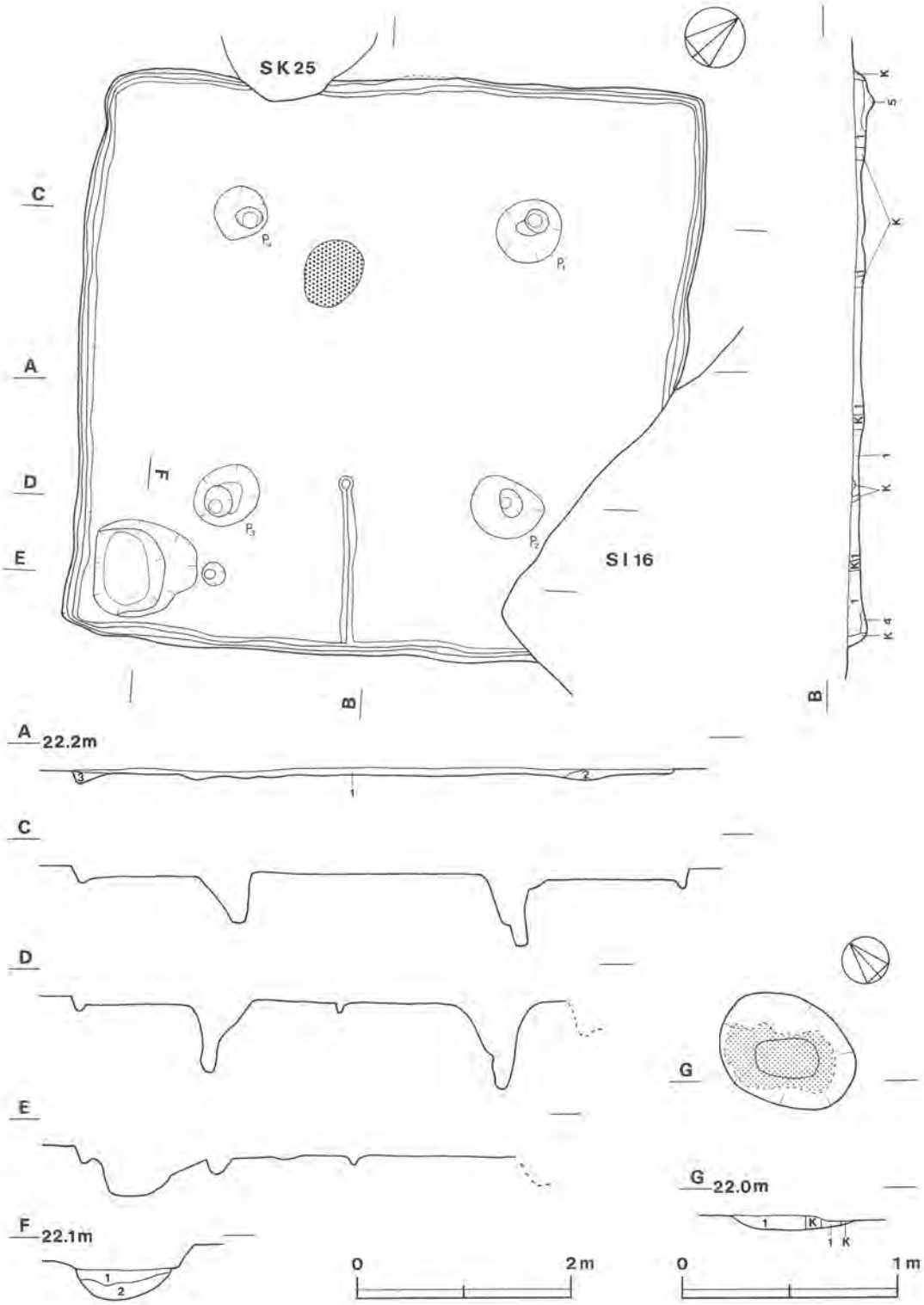
長軸方向　N－46°－W

壁　壁高15～25 cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　重複部を除いて壁下を全周している。上幅7～18 cm，深さ6～9 cmを測り，断面形はU字状を呈している。

床　ほぼ平坦であり，中央部がよく踏み固められている。南東壁中央部付近から北西方向に長さ155 cm，上幅10 cm，深さ8 cmを測り，断面形はV字状を呈する溝が検出されているが，間仕切り溝と考えられる。

ピット　4か所（P$_1$～P$_4$）検出され，径50～66 cmの円形を呈し，深さ50～80 cmを測り，規模や配置等から主柱穴と考えられる。

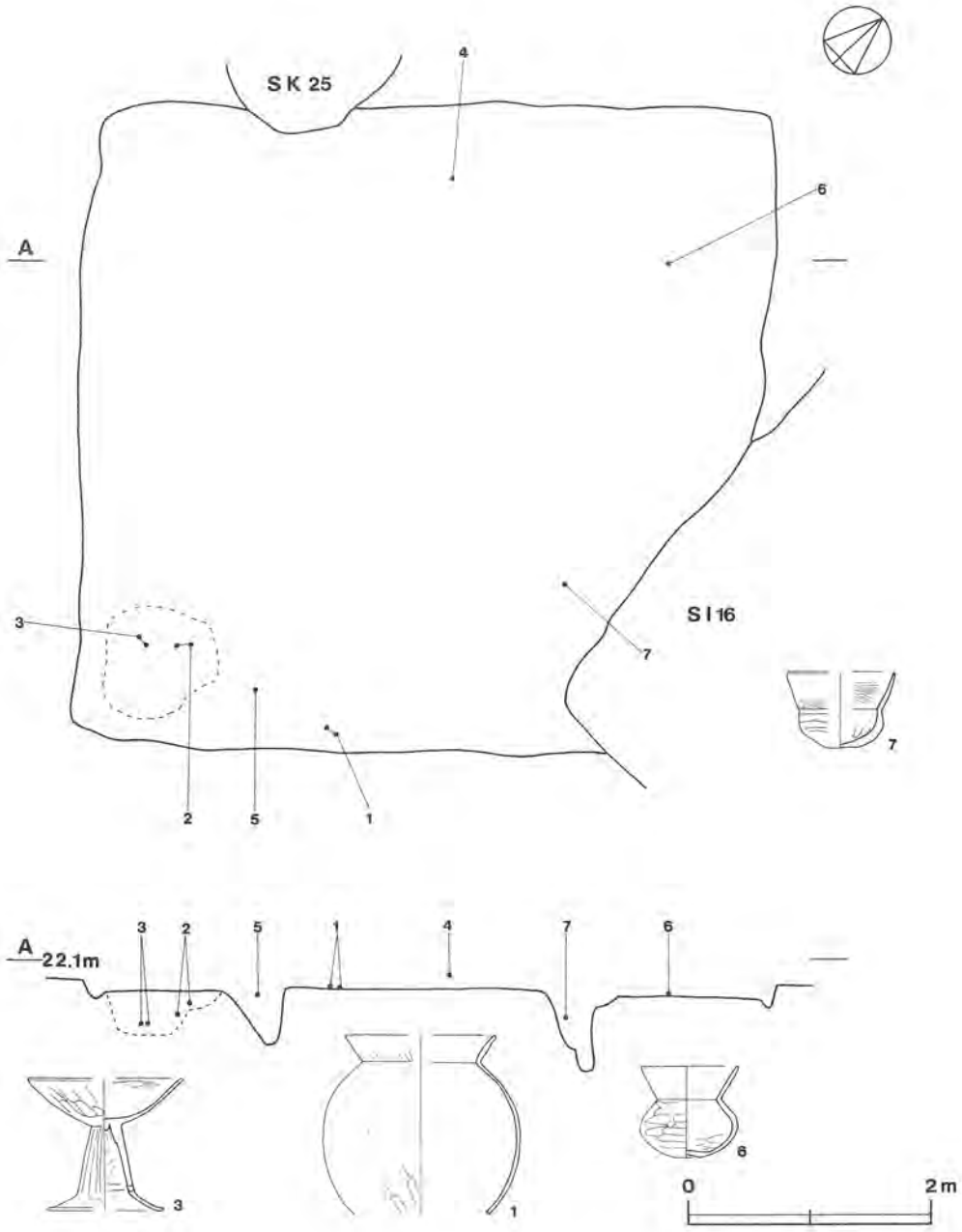


第43図　第17号住居跡実測図

SI－17　土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
3　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック微量
5　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック少量

SI－17　炉土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物中量

SI－17　貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物少量



第44図　第17号住居跡遺物出土位置図

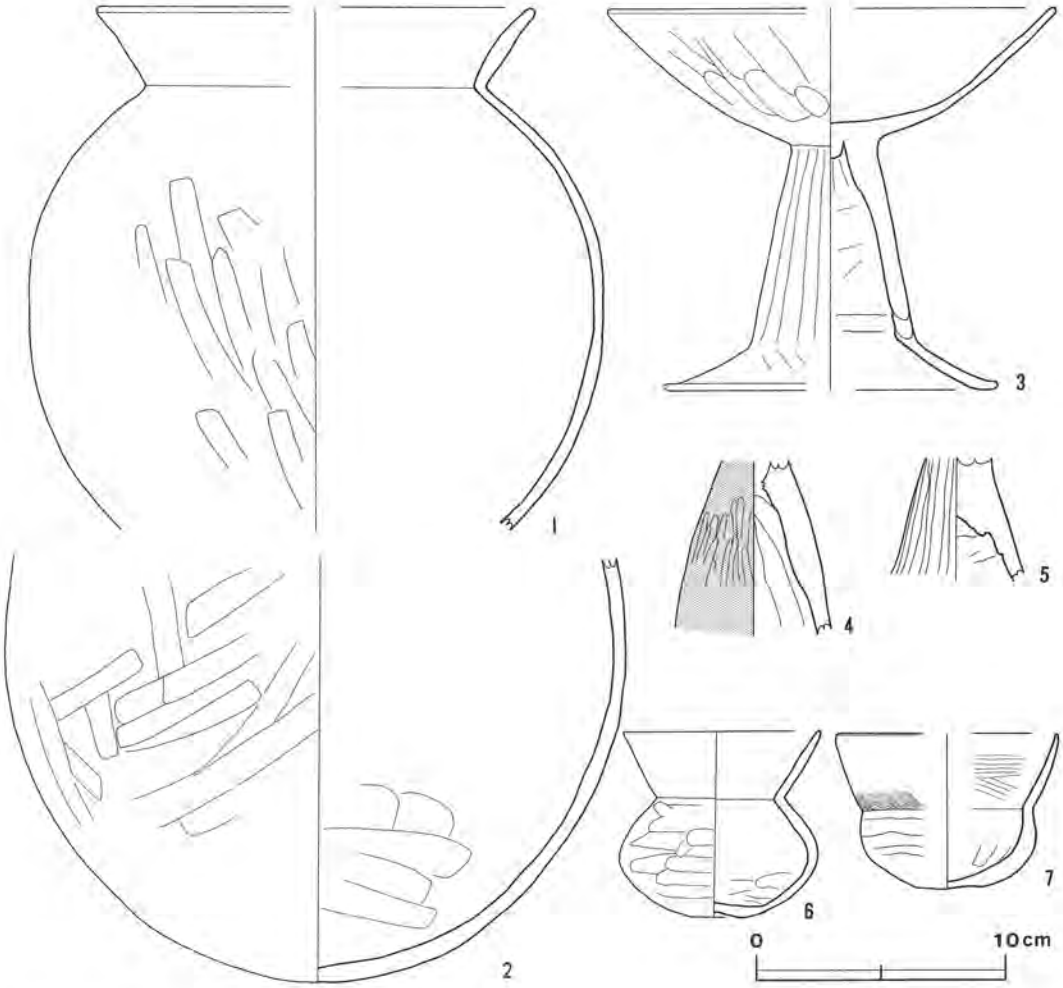
貯蔵穴　南コーナー付近に付設されている。長軸 90 cm，短軸 60 cm の隅丸長方形状を呈し，断面形は逆台形状で，40 cm 程掘り込んでいる。

炉　中央部からやや西寄りに位置し，規模は，長径 66 cm，短径 50 cm の楕円形を呈する地床炉である。炉床は，床面を 10 cm 程皿状に掘り窪め，火熱を受け赤変硬化している。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片 115 点（甕片，坏片，高坏片，坩片）が，主に炉の北側と貯蔵穴周辺の床面から出土している。第 45 図 3 の高坏は貯蔵穴の覆土から，6 の坩は北コーナー付近の床面から，それぞれ出土している。

所見　本跡は，第 16 号住居跡，第 25 号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態や遺物等から古墳時代中期に比定される住居跡と考えられる。



第 45 図　第 17 号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	甕 土師器	A〔17.4〕 B（21.0）	胴部は球体をなし，中位に最大径を有する。頸部はくびれ，口縁部は外反する。	胴部外面縦位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 135　25% 南コーナー付近 覆土下層
2	甕 土師器	B（17.2）	丸底。胴部は球体をなす。 上半分欠損。	胴部内・外面ヘラ削り。	砂粒 赤褐色 普通	P 136　50% 貯蔵穴 覆土上層
3	高　坏 土師器	A〔18.0〕 B　15.3 D〔13.4〕 E　10.0	脚部は中空でラッパ状に開く。坏部は内彎しながら立ち上がる。	裾部内・外面横ナデ。脚部外面ヘラ磨き，内面ヘラ削り。坏部外面縦位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P 139　60% 貯蔵穴 覆土下層
4	高　坏 土師器	B（7.0）	脚部片。脚部は膨らみを有して外反し，外下方に開く	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ヘラ削り。 外面黒色処理	砂粒・長石 黒色 普通	P 140　20% 炉北側 覆土下層
5	高　坏 土師器	B（5.0）	脚部片。脚部は外反して外下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・パミス 褐色 普通	P 141　20% 南コーナー付近 床面
6	坩 土師器	A　7.7 B　7.6 C　1.9	平底。胴部は内彎し，中位に最大径を有する。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面横位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P 137　80% 北コーナー付近 床面
7	坩 土師器	A〔8.8〕 B　6.3	丸底。胴部は内彎し，中位に最大径を有する。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ，内面ヘラ削り。口縁部外面下方ハケ目，上方横ナデ，内面ハケ目整形。	砂粒・パミス 橙色 普通	P 138　70% P_2覆土上層

第18号住居跡（第46図）

位置　調査区の中央部，C2b7区を中心に確認されている。

規模と平面形　東側3分の2程が調査区外に延びているため詳細は不明であるが，一辺が4.24m程の隅丸方形を呈する住居跡と推定される。

長軸方向　N－41°－E

壁　壁高は4～8cmで，外傾して立ち上がっている。

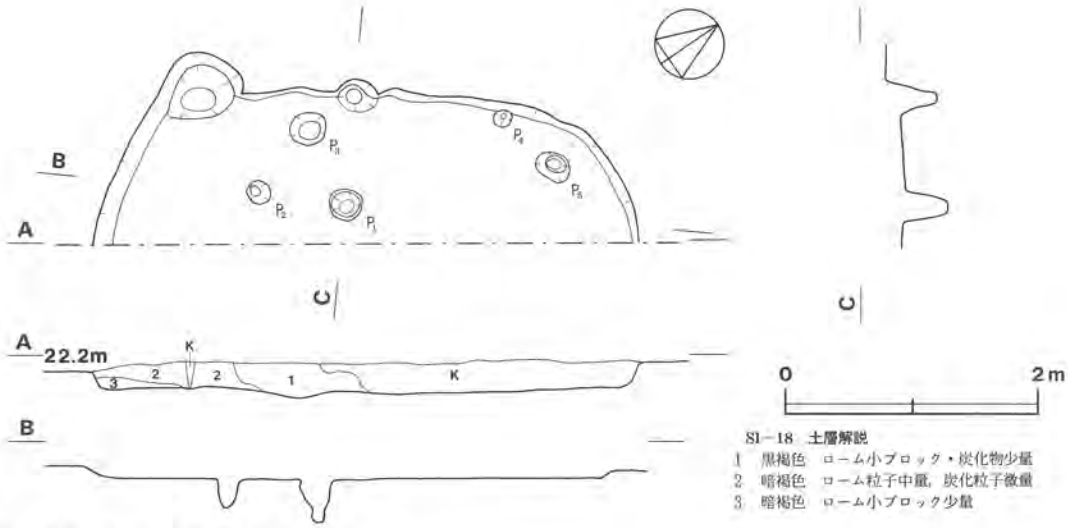
床　平坦であり，硬く踏み固められている。

ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1は径27cmの円形を呈し，深さ38cmを測り，規模や配置等から主柱穴と考えられる。P_2～P_5は径13～28cmの円形を呈し，深さ8～25cmを測るが，配置から主柱穴とは考えにくい。

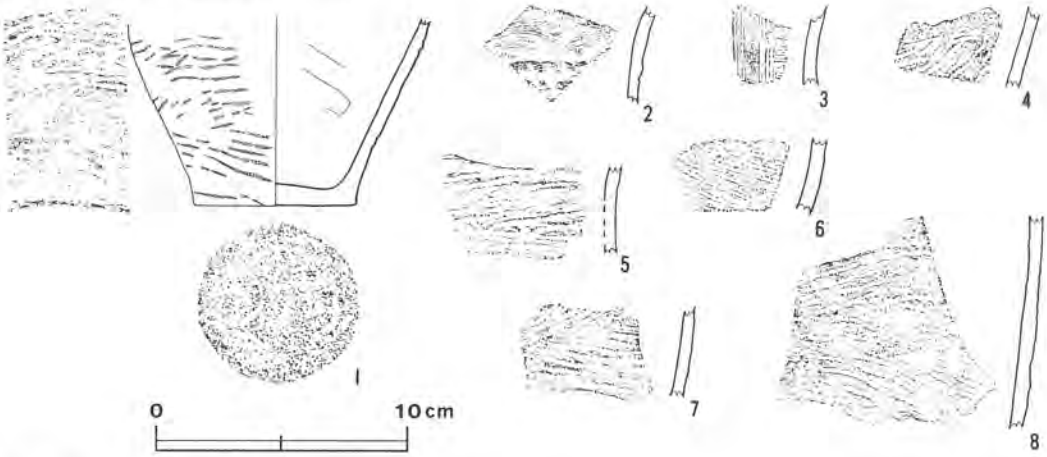
覆土　自然堆積と思われる。

遺物　弥生式土器片22点（甕片，壷片）が，床面から出土している。第47図1の壷底部は南部床面直上から出土している。土師器片28点（甕片，坏片）は，覆土上層から出土しており，流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から弥生時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第46図 第18号住居跡実測図



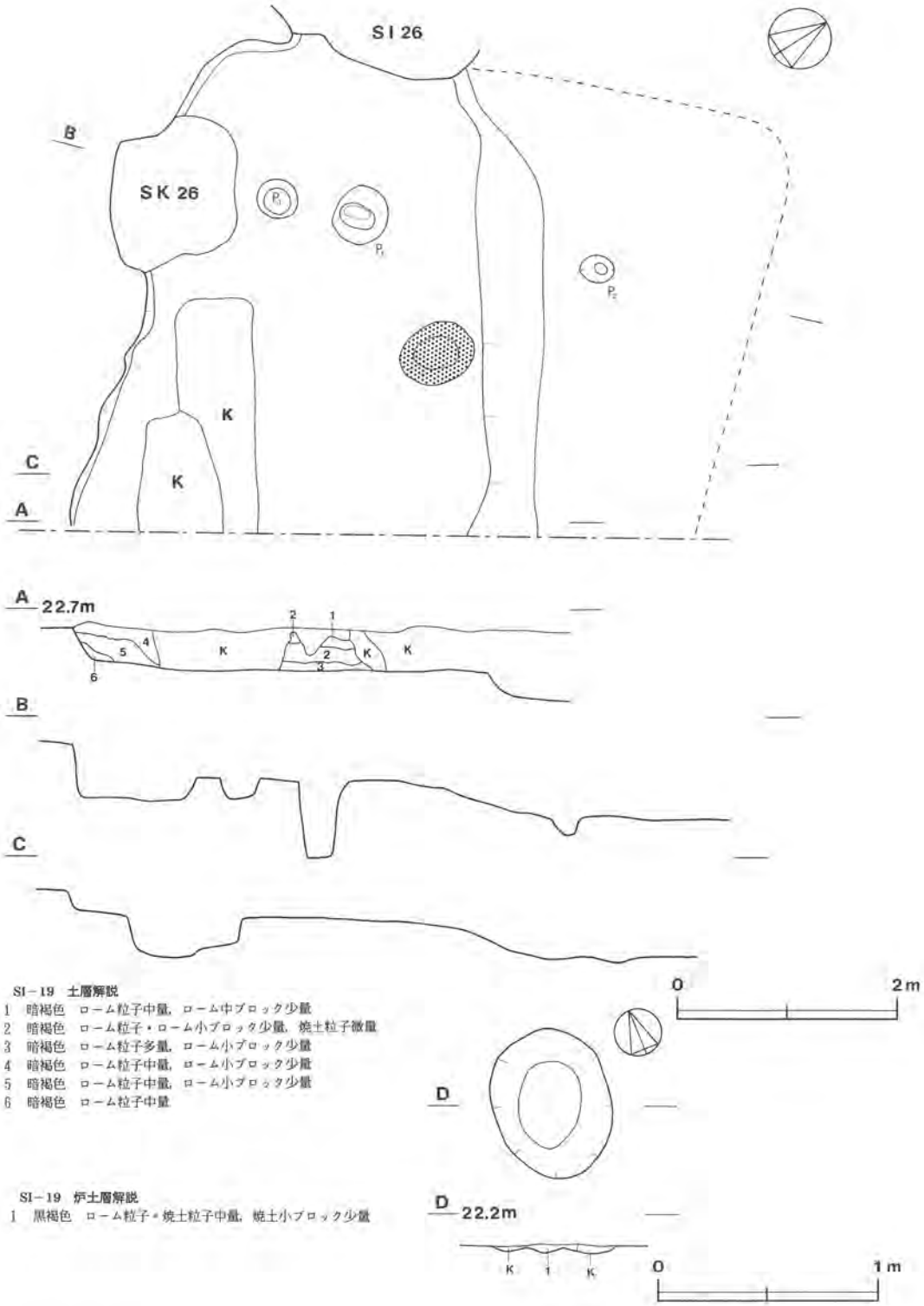
第47図 第18号住居跡出土遺物実測・拓影図

第18号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形及び整形の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第47図 1	壺 弥生式土器	B（7.6） C 6.4	底部から胴下半分にかけての破片。底部は平底で，不鮮明な布目圧痕を有する。胴下半部は底部から直線的に外傾し，外面は付加条1種の縄文が施されている。内面横ナデ。	砂粒・パミスにぶい橙色 普通	P142 30% 南部 床面

第18号住居跡出土遺物拓影図（第47図）

2，3は頸部片で，2は下向き連孤文が施され，3は4本1条の縦位の沈線が施されている。4～8は，胴部片であり，附加条2種の縄文が施されており，いずれも十王台式土器である。



SI－19　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　暗褐色　ローム粒子中量

SI－19　炉土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土小ブロック少量

第48図　第19号住居跡実測図

第19号住居跡（第48図）

位置　調査区の中央部，C2g_4区を中心に確認されている。

重複関係　北西側を第26号住居跡に，南西側を第26号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　東側の2分の1程が調査区外に延びており，調査区内の部分も大部分が撹乱を受けているため，全容については明らかではないが，長軸6.00 m程，短軸5.00 m程の隅丸長方形を呈する住居跡と推定される。

長軸方向　N－50°－W

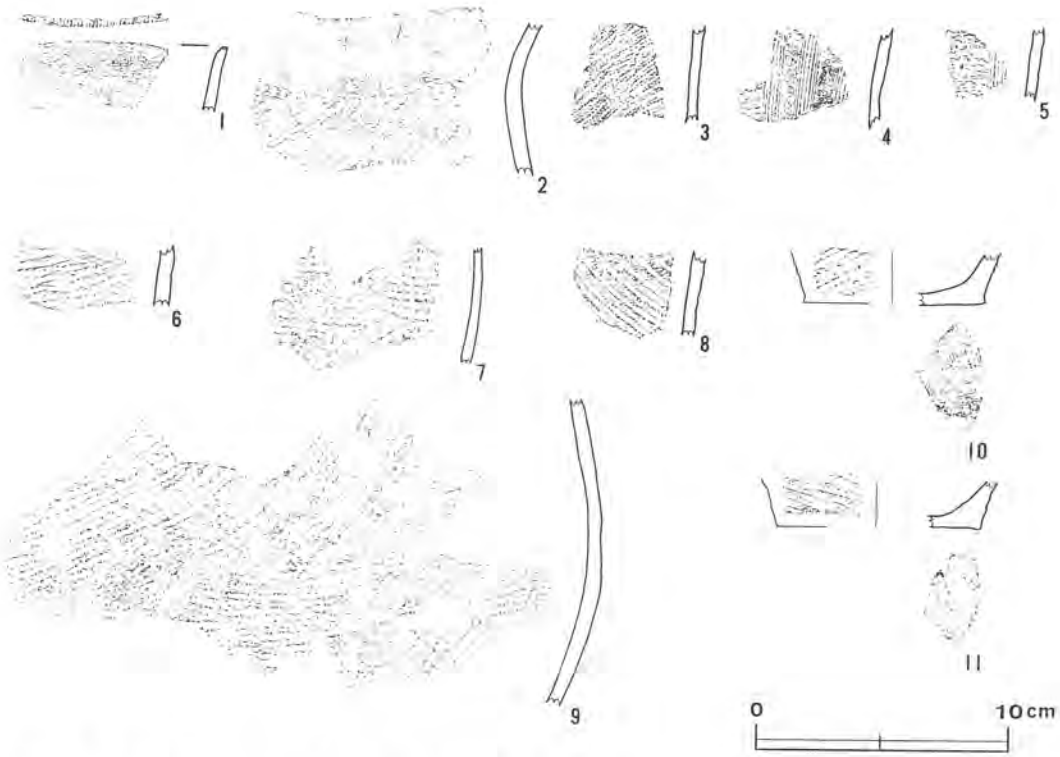
壁　壁高は10～28 cmで，外傾して立ち上がっている。

床　炉から南側にかけては平坦で，よく踏み固められている。

ピット　3か所（P_1～P_3）検出され，P_1が径54 cmの円形を呈し，深さ71 cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。P_2，P_3は径25～38 cmの円形を呈し，深さ18～22 cmを測り，補助柱穴と考えられる。

炉　住居跡のほぼ中央部に位置し，規模は長径67 cm，短径54 cmの楕円形を呈する地床炉である。炉床は，床面を8 cm程掘り窪められ，火熱を受け赤変硬化している。

覆土　自然堆積と思われる。



第49図　第19号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物　弥生式土器片29点（甕片，壷片）が，主に炉の南西床面から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

第19号住居跡出土遺物拓影図（第49図）

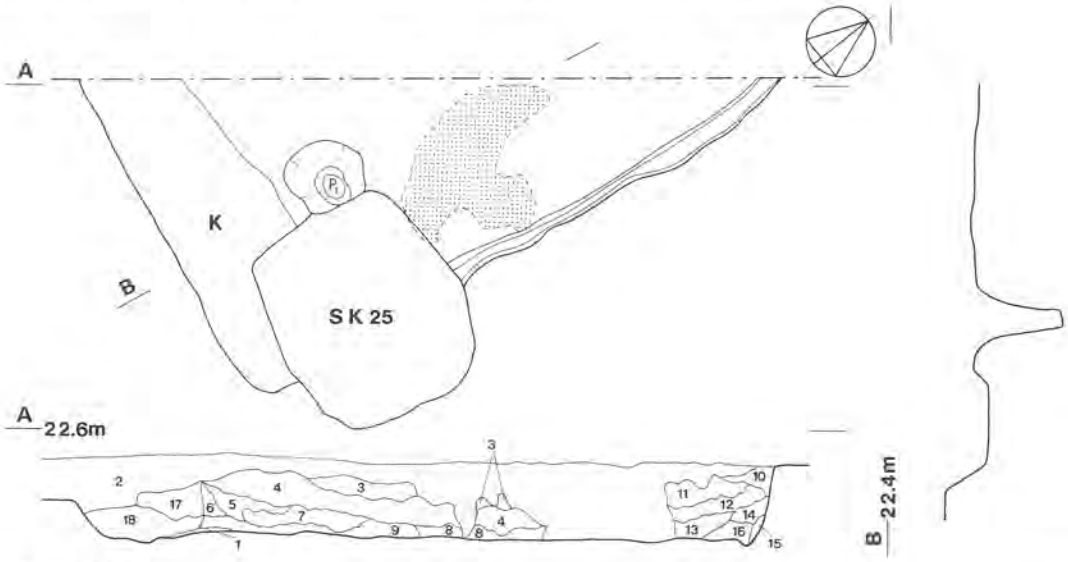
1，2は口縁部片で，無紋帯を有している。1は，口唇部に刻み目を有し，2は，附加条2種の縄文が施されている。3～5は，頸部片で，附加条2種の縄文が施されており，6～9の胴部片も，附加条2種の縄文が施されている。10，11は，底部片であり，布目痕を有している。

第20号住居跡（第50図）

位置　調査区の中央部，B2j5区を中心に確認されている。

重複関係　東コーナーが，第25号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　西側の4分の3程が調査区外に延びているため，詳細は不明である。



SI－20　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
3　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
5　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
7　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
8　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量
9　暗赤褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック中量
10　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
11　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
12　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
13　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック少量
14　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック少量
15　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量
16　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック中量
17　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，焼土粒子少量
18　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土粒子少量

第50図　第20号住居跡実測図

主軸方向　(N－8°－E)

壁　壁高は65 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　東壁下に検出され，上幅10～20 cm，深さ7～8 cmを測り，断面形はU字状を呈している。

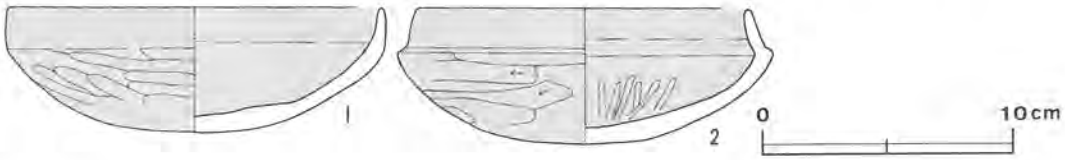
床　平坦でよく踏み固められ，堅緻である。

ピット　1か所（P_1）検出され，径55～66 cmの円形を呈し，深さ66 cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積と思われる。

遺物　土師器片80点（甕片，坏片，高坏片）が，主に覆土中層及び下層から出土している。第51図1の坏は北部の覆土下層から，2の坏は中央部の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，第25号土坑よりも古い時期に構築されている。床面に焼土がみられることから，焼失家屋と思われる。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第51図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第51図 1	坏 土師器	A　15.0 B　5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P 143　90% 北コーナー 覆土下層
2	坏 土師器	A　13.1 B　5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 144　80% 中央部 覆土下層

第21号住居跡（第52図）

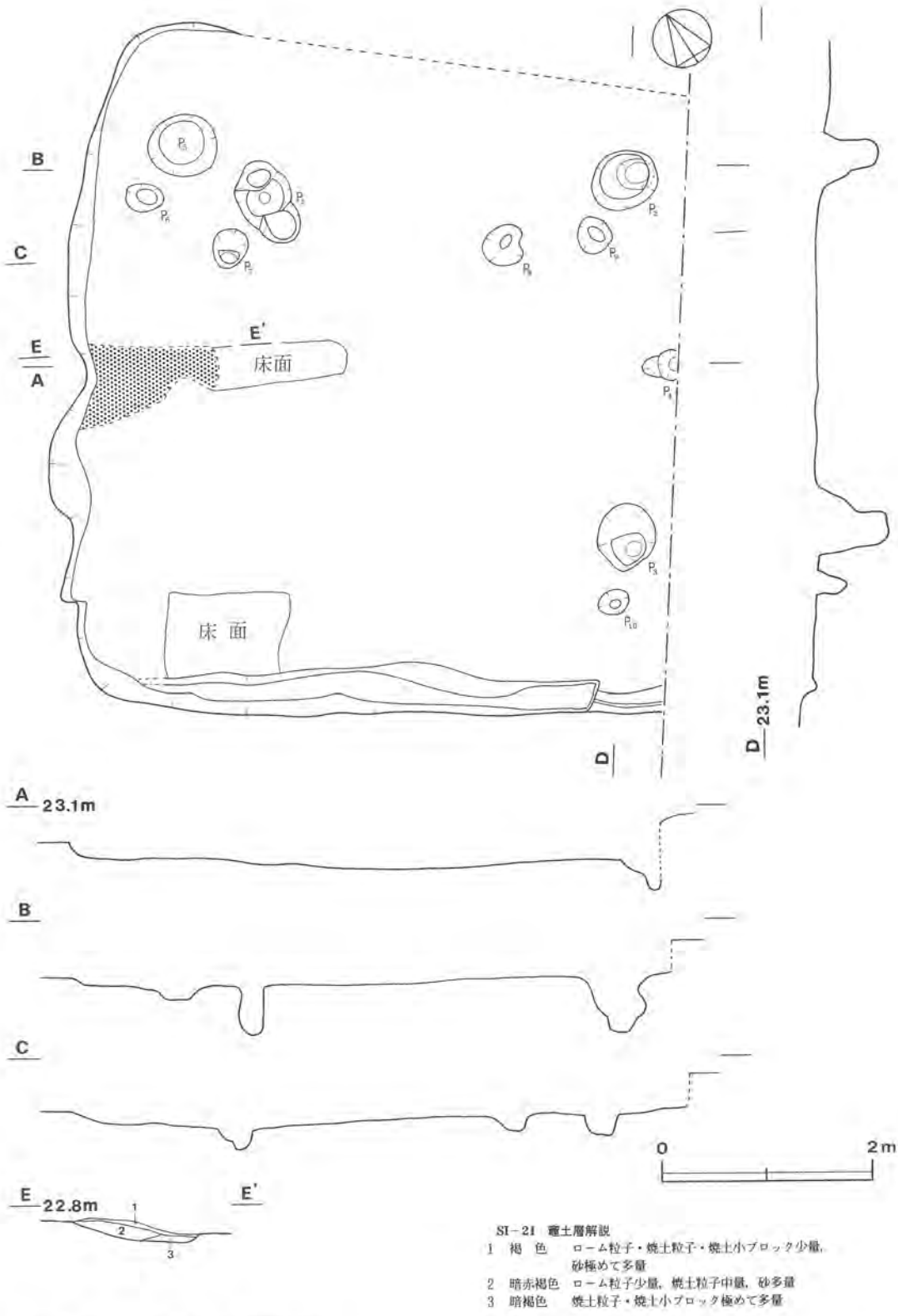
位置　調査区の中央部，C2h_3区を中心に確認されている。

規模と平面形　撹乱を受けているため詳細は不明であるが，一辺が6.00 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－53°－W

壁　南壁の一部が残存している。壁高は10 cm前後を測り，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であり，竈前方と西コーナーの一部は硬く踏み固められている。



SI－21 覆土層解説

1 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量，砂極めて多量

2 暗赤褐色 ローム粒子少量，焼土粒子中量，砂多量

3 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック極めて多量

第52図 第21号住居跡実測図

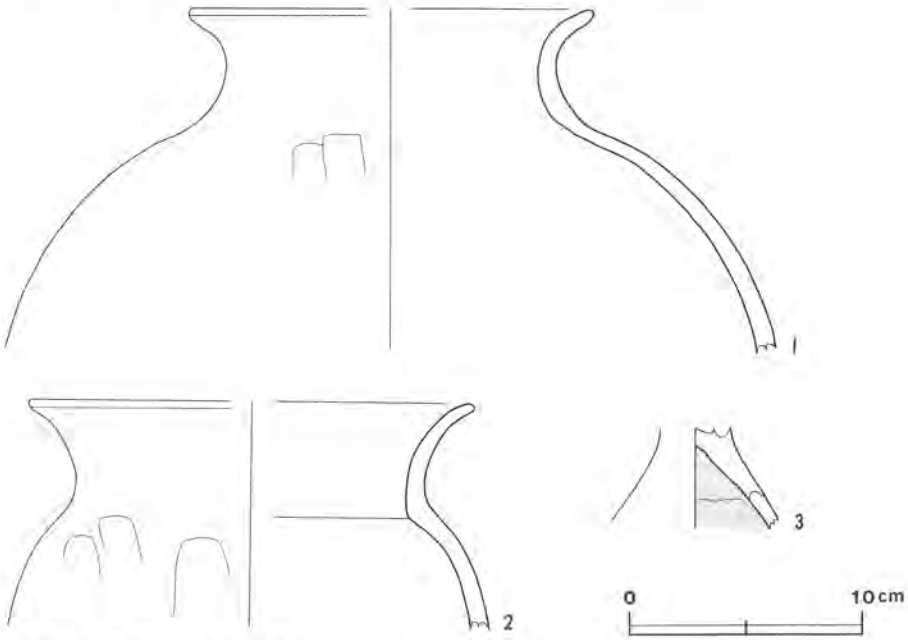
ピット　10か所（P_1～P_{10}）検出されている。P_1～P_3は径51～85 cmの円形を呈し，深さ47～66 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_4は径29 cmの円形を呈し，深さ29 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P_5～P_{10}は径25～65 cmの円形を呈し，深さ13～31 cmを測り，補助柱穴と考えられる。

竈　北西壁中央部に付設されていた。遺存状態が悪く，竈を構築していたと思われる砂や粘土と，火床部の焼土が覆土から多量に検出している。

覆土　覆土が撹乱を受けているため，堆積状況は不明である。

遺物　土師器片44点（甕片，坏片，高坏片），須恵器片3点（壷片）が，竈周辺の床面から出土している。第53図2の甕片は竈東側の覆土下層から出土している。

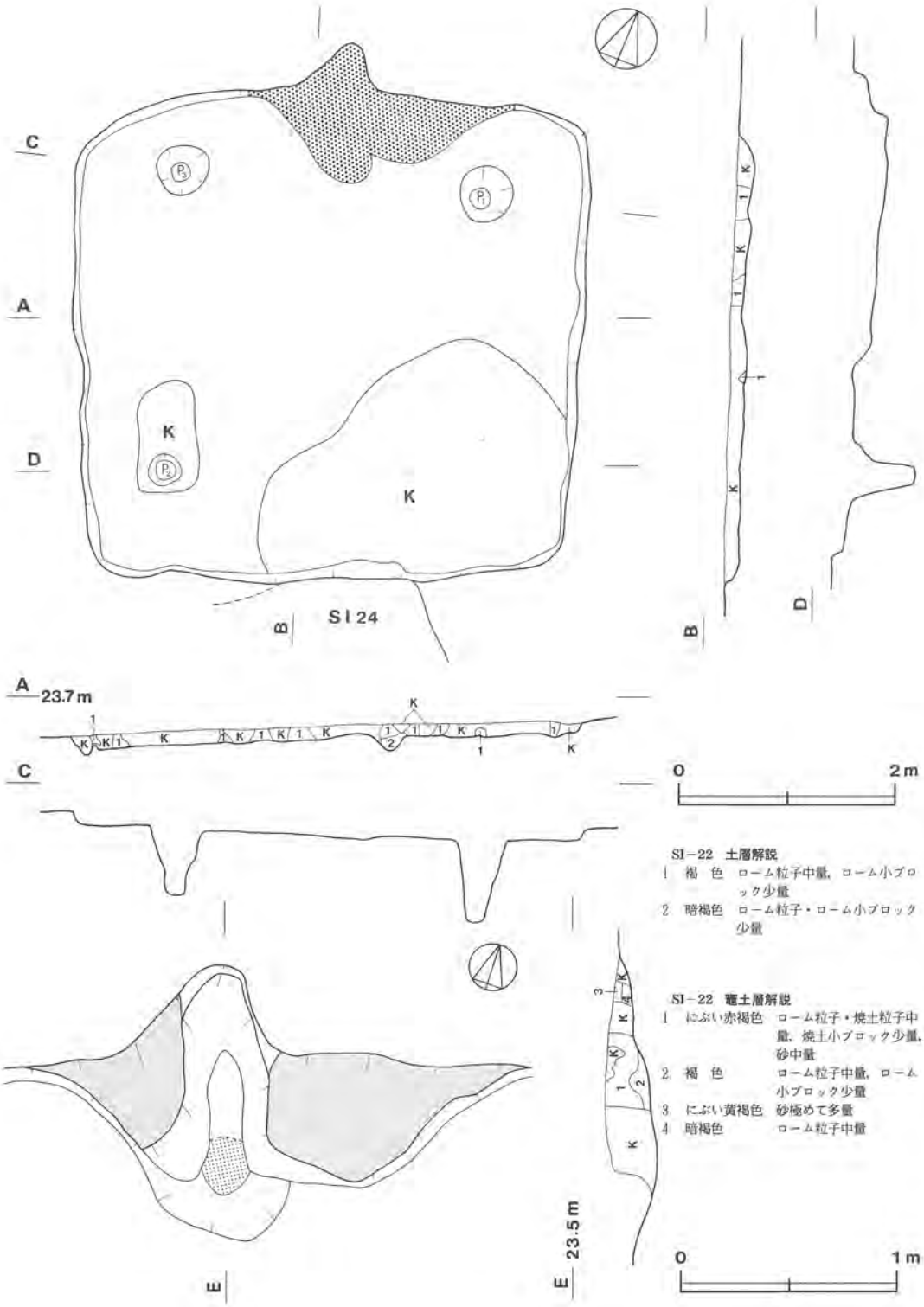
所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第53図　第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	甕 土師器	A〔17.2〕 B（14.8）	胴下半部欠損。頸部から口縁部にかけて，丸みをもって外反する。	胴部外面縦位のヘラナデ。 頸部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	P 145　20% 竈前方 覆土下層
2	甕 土師器	A〔19.2〕 B（9.8）	胴下半部欠損。頸部から口縁部にかけて，丸みをもって外反する。	胴部外面縦位のヘラナデ。 頸部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 褐色 普通	P 146　20% 竈東側 覆土下層
3	高坏 土師器	B（4.4）	脚部片。脚部は外反し，外下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ，内面横位のヘラナデ。 内面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P 147　10% 覆土上層



第54図　第22号住居跡実測図

第22号住居跡（第54図）

位置　調査区の南部，D1a$_9$区を中心に確認されている。

重複関係　南壁が，第24号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.74 m，短軸4.64 mの方形を呈している。

主軸方向　N－21°－W

壁　壁高は8～16 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈前方にやや硬質面がみられる。

ピット　3か所（P$_1$～P$_3$）検出され，径30～54 cmの円形を呈し，深さ58～72 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設されているが，撹乱を受けて遺存状態は悪い。壁を44 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ127 cm，幅124 cmである。火床は床面を20 cm程掘り窪められ，火熱により赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　覆土が撹乱を受けているため，堆積状況は不明である。

遺物　土師器片156点（甕片，坏片），須恵器片5点（壺片，蓋片）が，住居跡の覆土全体から出土しているが，土師器，須恵器とも細片であり，須恵器片は，流れ込みと思われる。北東部床面から管状土錘5点，球状土錘2点が出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。

第23号住居跡（第55図）

位置　調査区の南部，D2a$_1$区を中心に確認されている。

規模と平面形　東側の3分の2程が調査区外に延びているため全容は明らかではないが，一辺が5.00 m前後の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　（N－12°－W）

壁　壁高は8 cm程を測り，緩やかに立ち上がっている。

壁溝　西壁下の一部に検出され，上幅12～20 cm，深さ7 cmを測り，断面形はU字状を呈している。

床　ほぼ平坦で，西側に硬質面が残存している。

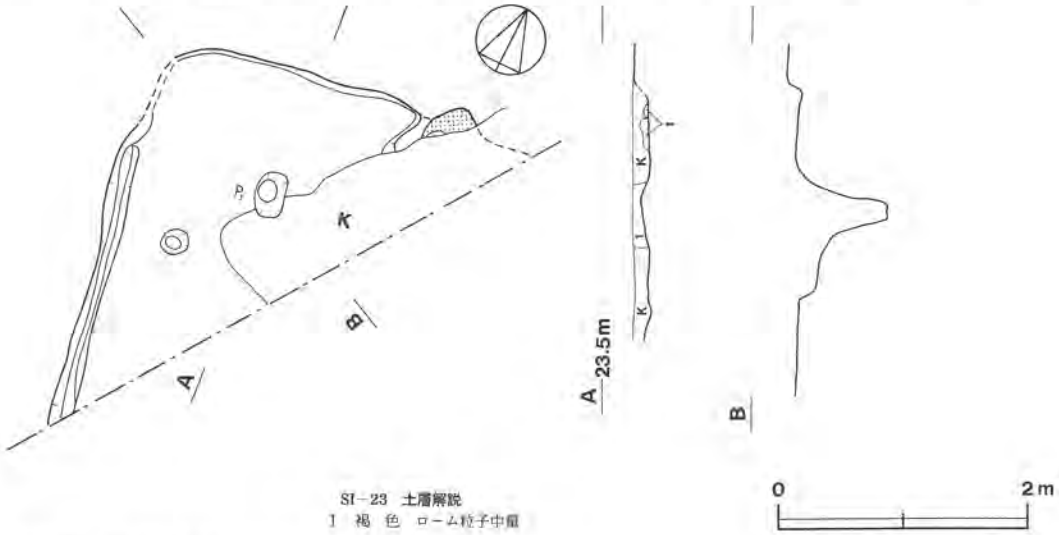
ピット　1か所（P$_1$）検出され，径35 cm程の円形を呈し，深さ74 cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設されていたものと推定される。撹乱により規模や平面形は不明で，土層観察により竈を構築していたと思われる砂質粘土と，その東側に焼土が確認されている。

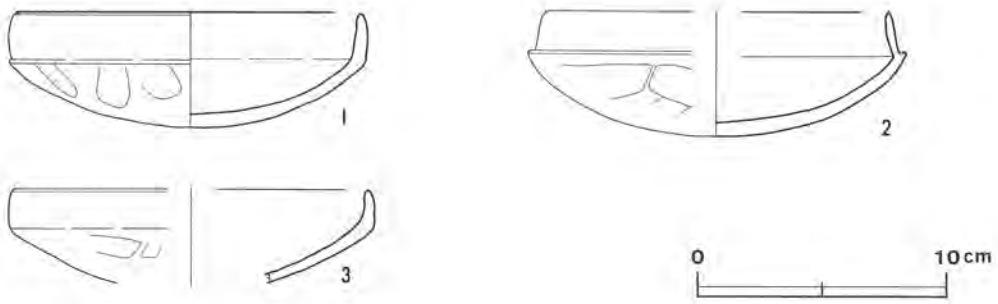
覆土　覆土が撹乱を受けているため，堆積状況は不明である。

遺物　土師器片20点（甕片，坏片）が，主に竈周辺の覆土から出土している。第56図の1，2，3の坏は北壁付近の覆土上層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



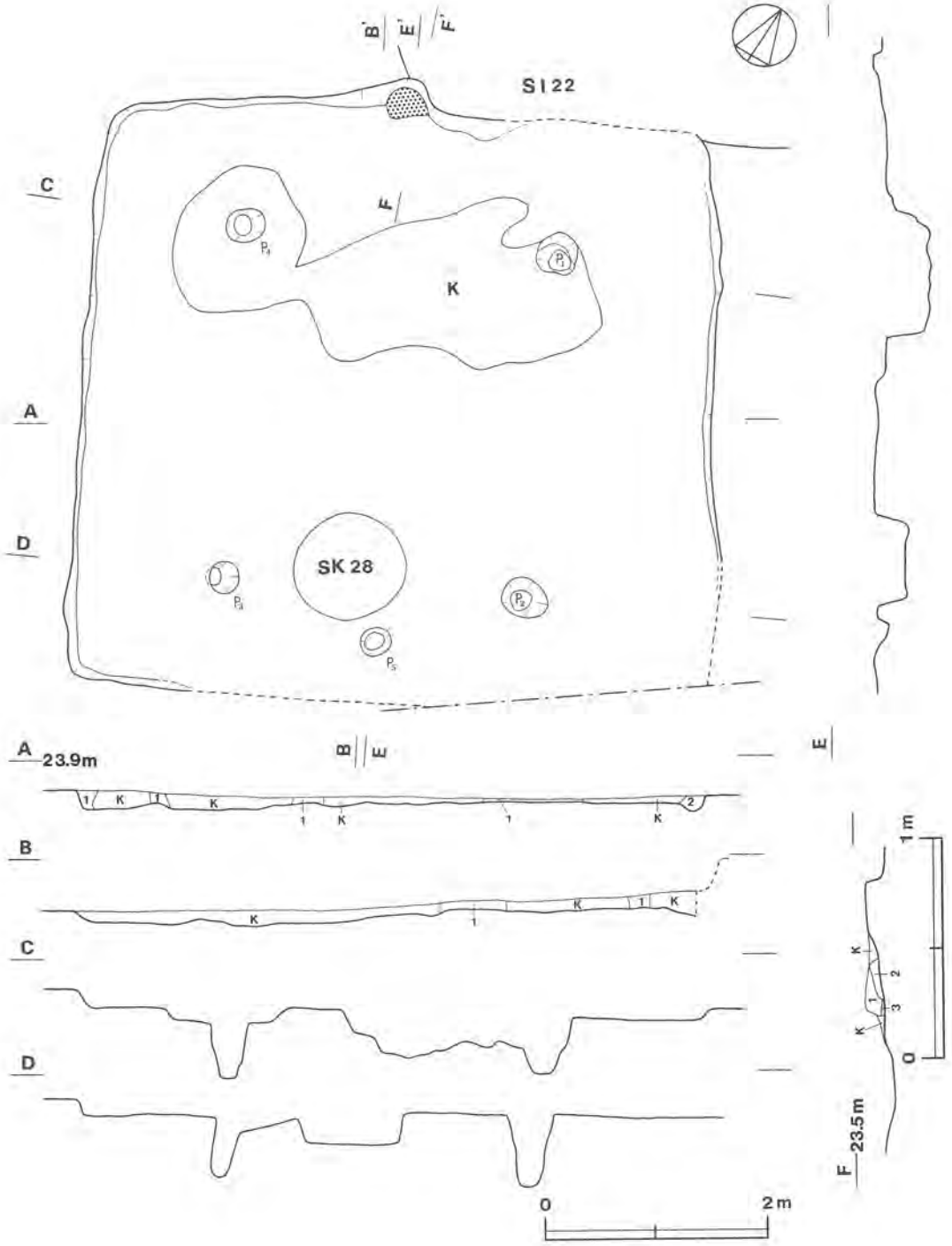
第55図　第23号住居跡実測図



第56図　第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	粘土・色調・焼成	備　考
第56図 1	坏 土師器	A　13.8 B　4.6	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミスにぶい黄褐色 普通	P 148　100% 覆土上層
2	坏 土師器	A〔13.8〕 B　5.0	体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミスにぶい褐色 普通	P 149　20% 覆土上層
3	坏 土師器	A〔14.4〕 B（3.8）	体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 150　20% 覆土上層



SI－24　土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

SI－24　竈土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子多量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　赤褐色　焼土粒子極めて多量

第57図　第24号住居跡実測図

第24号住居跡（第57図）

位置　調査区の南東部，D1b₀区を中心に確認されている。

重複関係　北側が第22号住居跡を掘り込んでいる。南部床面が第28号土坑に掘り込まれている。規模と平面形東コーナーが調査区外に延びているが，長軸5.70 m，短軸5.38 mの方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－34°－W

壁　壁高は，南西壁で10～20 cm，北東壁で8～10 cmを測り，緩やかに立ち上がっている。

床　全体がトレンチャーによる撹乱を受けているが，残存部分はほぼ平坦である。

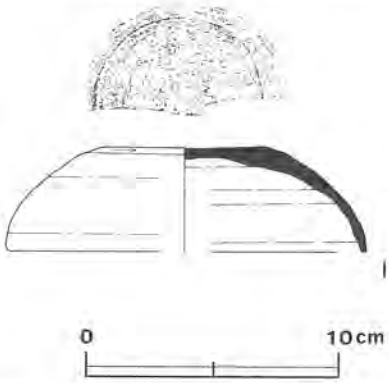
ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は径26～43 cmの円形を呈し，深さ50～65 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径26 cmの円形を呈し，深さ10 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　北西壁中央部に付設されていた。撹乱により規模や平面形が明らかではないが，火床と思われる部分から焼土が検出されている。

覆土　撹乱を受けているため，堆積状況は不明である。

遺物　土師器片91点（甕片，坏片）が，主に床面及び覆土下層から出土しており，ほとんどが細片である。第57図1の須恵器の蓋は南コーナー付近の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。



第58図　第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	蓋 須恵器	A〔14.2〕 B　4.2	天井部は平坦な上位から緩やかに下がり口縁部に至る。口縁部内側に不明瞭な段を有する。	天井部右回転ヘラ削り。 内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰色 普通	P 151　40% 南コーナー付近 覆土下層

第25－A号住居跡（第59図）

位置　調査区の南東部，D1c₉区を中心に確認されている。

重複関係　第25－B号住居跡及び第29号土坑とに掘り込まれている。

規模と平面形　南東側が調査区外に延びているため全容は明らかではないが，一辺が7.00 m前後の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－42°－W

壁　壁高は，22～32 cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，北西壁の竈周辺に，硬質面が残存している。

竈　北西壁中央部に付設されていた。撹乱を受け遺存状態が極めて悪く，規模や平面形は不明である。竈を構築していたと思われる砂質粘土と，火床部の焼土が検出されている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積と思われる。

所見　本跡は，遺物の出土がみられなかった。第25－B号住居跡及び第29号土坑に掘り込まれていることから，これら2つの遺構よりも古い時期に構築された住居跡と考えられるが，構築時期は不明である。

第25－B号住居跡（第59図）

位置　調査区の南東部，D1d8区を中心に確認されている。

重複関係　第25－A号住居跡を掘り込み，第30号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　南東側が調査区外へ延びているため全容は明らかではないが，一辺が5.20 m前後の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－43°－W

壁　壁高は，4～12 cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であり，竈周辺に，僅かに硬質面が残存している。

ピット　1か所（P_1）検出され，径68 cm程の円形を呈し，深さ94 cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。

竈　北西壁中央部に付設されていた。撹乱により規模や平面形は明らかではないが，竈を構築していたと思われる砂と粘土が検出されている。

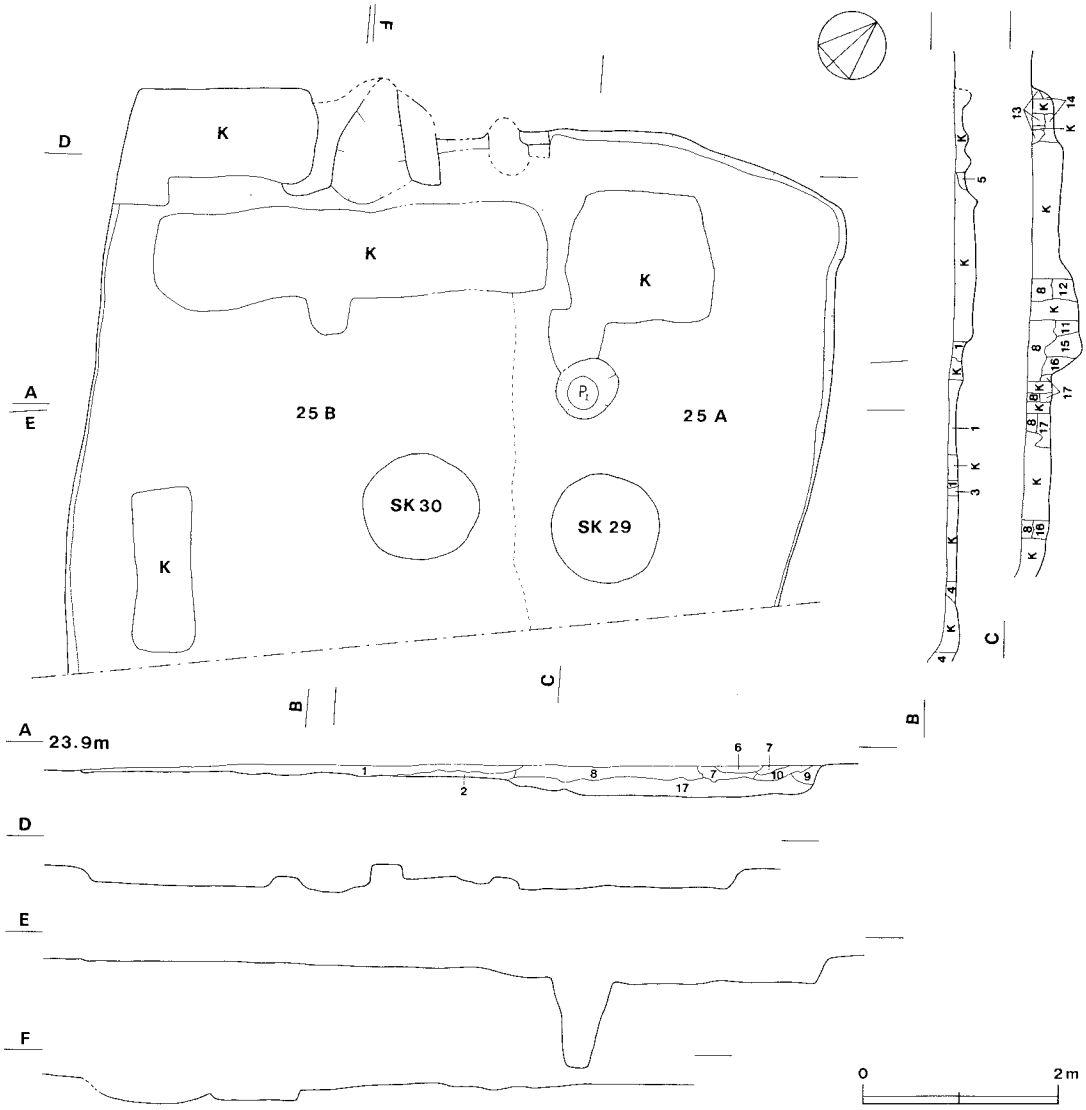
覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積と思われる。

遺物　土師器片197点（甕片，坏片，高坏片）が，主に床面及び覆土下層から出土しているが，ほとんどが細片である。

所見　本跡は，第25－A号住居跡を掘り込み，第30号土坑に掘り込まれていることから，第25－A号住居跡より新しく，第30号土坑よりも古い時期に構築されている。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。

第25－B号住居跡出土土器観察表

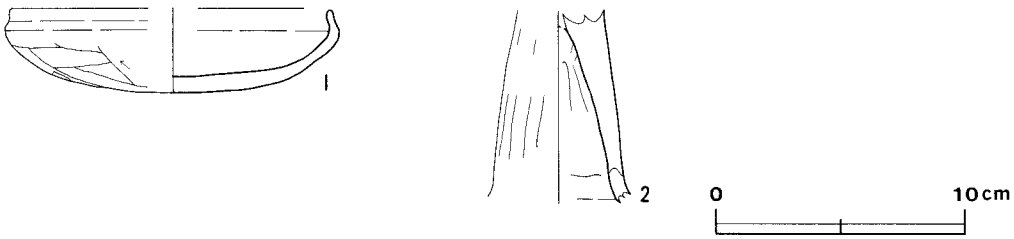
図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	坏 土師器	A〔12.8〕 B　3.4	体部は内彎し，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 152　20% 南部 覆土下層
2	高坏 土師器	B（7.8）	脚部片。脚部は外反して外下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P 153　20% 覆土中層



SI－25－A・B　土層解説

1	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化物少量，焼土粒子中量
2	暗赤褐色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物少量
3	褐　色	ローム粒子極めて多量
4	褐　色	ローム粒子多量，炭化物少量
5	暗赤褐色	ローム粒子少量，焼土粒子中量，砂多量
6	にぶい赤褐色	ローム粒子少量，焼土粒子極めて多量
7	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物少量
8	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
9	褐　色	ローム粒子極めて多量
10	暗褐色	ローム粒子多量，炭化粒子少量
11	褐　色	ローム粒子・ローム小ブロック多量
12	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
13	にぶい褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
14	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
15	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
16	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
17	褐　色	ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック少量

第59図　第25－A・B号住居跡実測図



第60図　第25-B号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡（第61・62図）

位置　調査区の南部，C2f₂区を中心に確認されている。

重複関係　西側が第29号住居跡を，南東コーナーが第19号住居跡を掘り込み，東側が第27号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.36 m，短軸5.16 mの方形を呈している。

主軸方向　N－15°－W

壁　壁高は，西壁で22～56 cm，南壁で20～52 cm，北壁で30～40 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。本跡は，傾斜地のため，東壁は立ち上がりのみを残し，ほとんどが，流出している。

床　全体的に平坦であり，中央部はよく踏み固められて堅緻である。

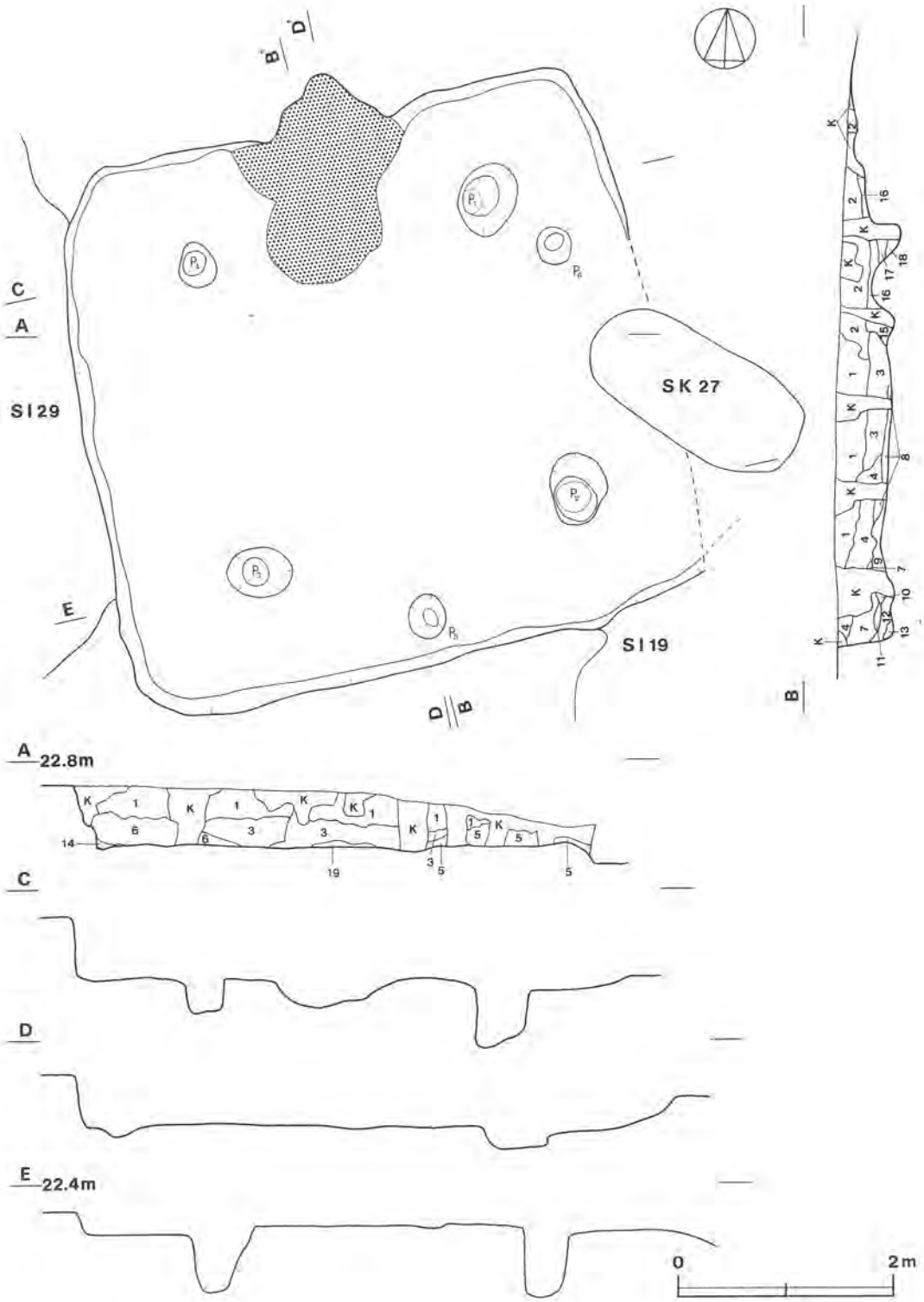
ピット　6か所（P_1～P_6）検出されている。P_1～P_4は径36～70 cmの円形を呈し，深さ30～67 cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。P_5は径43 cm程の円形を呈し，深さ10 cmを測り，出入口部施設に伴う梯子ピットと考えられる。P_6は径35 cm程の円形を呈し，深さ47 cmを測り，補助柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設されている。壁を53 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ195 cm，幅140 cmを測る。火床は床面を10 cm程掘り窪められ，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床から外傾して立ち上がっている。

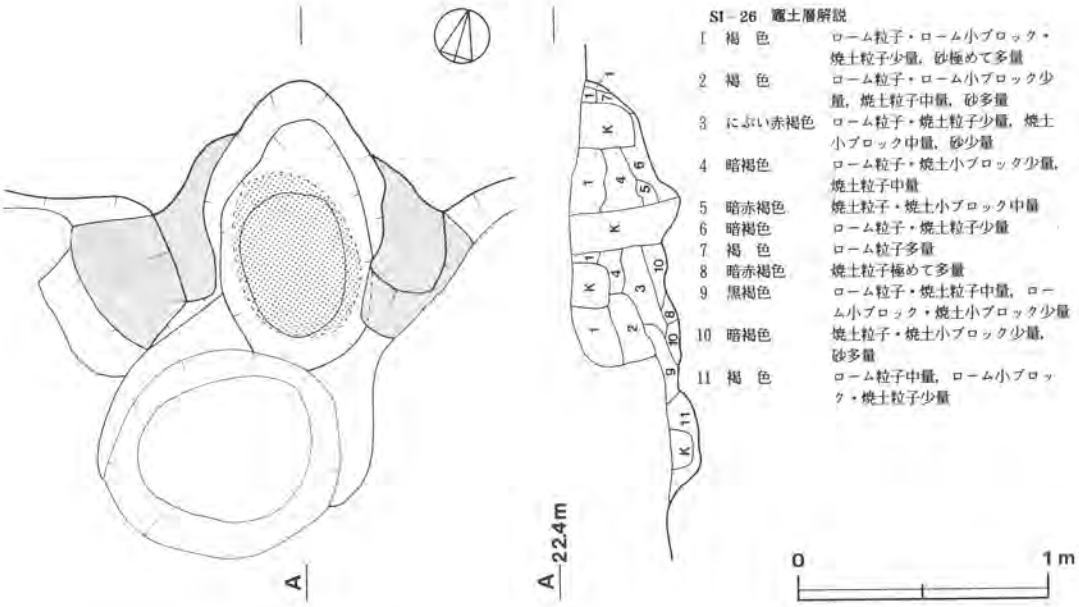
覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片797点（甕片，甑片，坏片，高坏片），須恵器片56点（甕片，坏片）が，主に住居跡西部の床面及び覆土下層から出土している。第63図9の須恵器の坏は西壁中央部覆土下層から，5の須恵器の坏は住居跡中央部の床面からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から，第29号住居跡より新しく，第27号土坑より古い時期に構築されている。遺構の形態や遺物等から奈良・平安時代に比定される住居跡と考えられる。



第61図　第26号住居跡実測図



SI－26 竈土層解説

1 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量，砂極めて多量
2 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子中量，砂多量
3 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，焼土小ブロック中量，砂少量
4 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子中量
5 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量
6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
7 褐 色 ローム粒子多量
8 暗赤褐色 焼土粒子極めて多量
9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック少量
10 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量，砂多量
11 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量

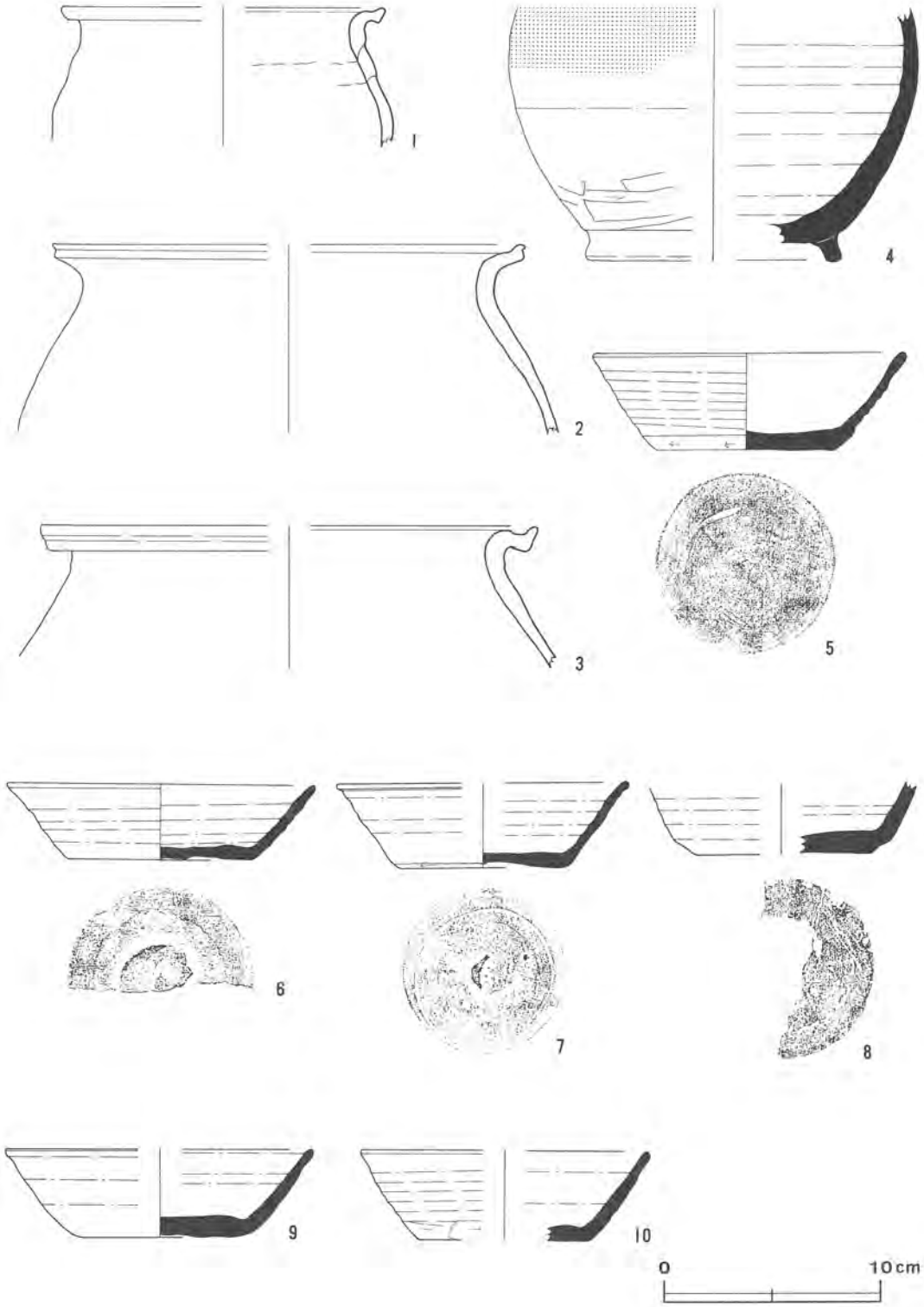
SI－26 土層解説

1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
3 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
4 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
5 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
6 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
7 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
8 黒褐色 ローム粒子多量
9 褐 色 ローム粒子少量，砂多量
10 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
11 褐 色 粘土多量
12 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・粘土少量
13 褐 色 ローム粒子極めて多量
14 褐 色 ローム粒子多量
15 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
16 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物少量
17 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
18 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
19 黒褐色 ローム粒子中量

第62図 第26号住居跡竈実測図

第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	甕 土師器	A〔14.8〕 B（6.4）	頸部は強く外反し，口唇部はやや肥厚する。	頸部から口縁部にかけて，内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P 154 20% 中央部 床面
2	甕 土師器	A〔21.8〕 B（8.8）	頸部は丸みをもって強く外反し，口唇部をつまみ上げる。	頸部から口縁部にかけて，内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 褐色，普通	P 155 10% 覆土中層
3	甕 土師器	A〔22.8〕 B（6.6）	頸部は強く外反して水平に開き，口唇部をつまみ上げる。	頸部から口縁部にかけて，内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色，普通	P 156 10% 南部 床面
4	壺 須恵器	B（11.8） D〔10.8〕 E 1.4	底部と胴部の境に，「ハ」の字状に開く高台が付く。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面下端横位のヘラナデ。高台貼り付け。自然釉	砂粒・長石 灰色 良好	P 158 20% 覆土中層
5	坏 須恵器	A 14.4 B 4.5 C 8.3	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。外面に稜が目立つ。口唇部は丸い。	底部全面及び体部下端回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄色，普通	P 159 60% 中央部 床面



第63図　第26号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第63図 6	坏 須恵器	A　14.2 B　3.5 C　8.4	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。外面に稜が目立つ。口唇部は丸い。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色，普通	P 160　60% 覆土中層
7	坏 須恵器	A〔13.3〕 B　4.0 C　7.5	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P 162　40% 覆土上層
8	坏 須恵器	B（3.3） C〔8.3〕	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。口縁部欠損。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰白色 普通	P 163　20% 覆土中層
9	坏 須恵器	A〔14.2〕 B　4.1 C　7.2	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母 灰黄色，不良	P 161　50% 西壁中央部 覆土下層
10	坏 須恵器	A〔13.1〕 B（4.2） C〔7.8〕	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。外面に稜が目立つ。口唇部は丸い。	底部全面及び体部下端に手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰黄色 普通	P 164　30% 覆土上層

第27号住居跡（第64図）

位置　調査区の南西部，D1a7区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.94 m，短軸3.85 mの方形を呈している。北西コーナーが僅かながら調査区外に延びている。

主軸方向　N－8°－E

壁　壁高は，10～16cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　全体にトレンチャーによる撹乱を受けているが，残存部分は硬くほぼ平坦である。

竈　北壁中央部からやや東側に付設されている。壁を26 cm程壁外に掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は，長さ87 cm，幅104 cmを測る。火床は撹乱を受けているが，火熱を受け赤変硬化している。煙道は緩やかに外傾に立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片35点（甕片，坏片）が，主に竈周辺の床面及び覆土下層から出土しているが，遺物は細片である。北東コーナー付近の床面から内面黒色処理の坏片が2点出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から奈良・平安時代に比定される住居跡と考えられる。

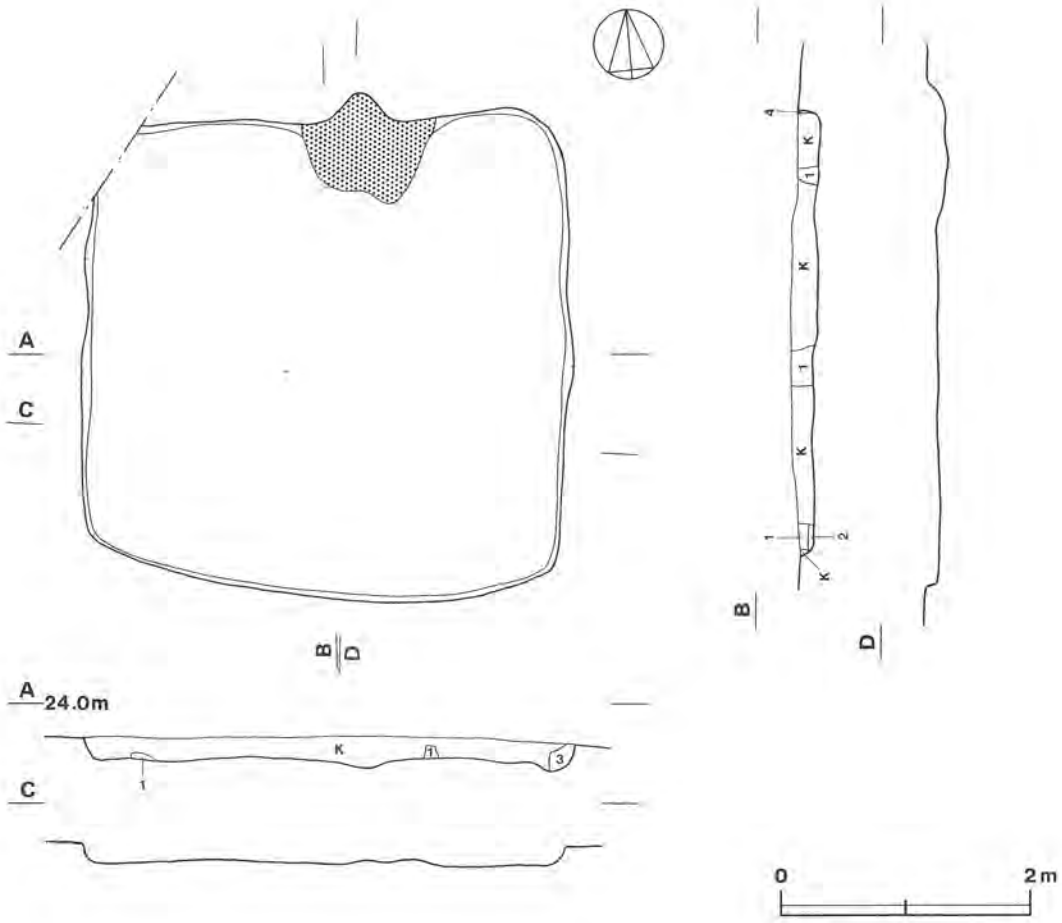
第28号住居跡（第65・66図）

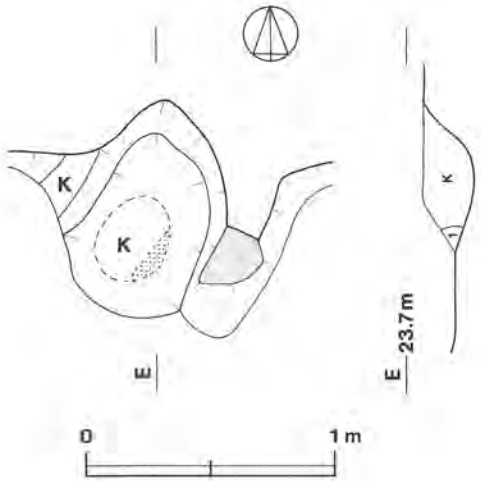
位置　調査区の南西部，C2f1区を中心に確認されている。

重複関係　第29号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　北西コーナーが西側の調査区外に延びているが，長軸5.40 m，短軸5.35 mの方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－8°－E





SI－27　土層解説

1　暗褐色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
2　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック少量
4　暗赤褐色　焼土粒子極めて多量

SI－27　竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子中量

第 64 図　第 27 号住居跡実測図

壁　壁高は35～46 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　上幅9～30 cm，深さ3～8 cmを測り，断面形はU字状を呈し，壁下を全周するものと思われる。

床　全体的に平坦であり，よく踏み固められている。特に，竈前方及び床中央部は堅緻である。ピット5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は径56～76 cmの円形を呈し，深さ68～78 cmを測り，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_5は径20 cm程の円形を呈し，深さ20 cmを測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

貯蔵穴　南壁中央部付近に付設されている。長径が114 cm，短径が79 cmの楕円形を呈し，断面形は逆台形状を呈し，45 cm程掘り込まれており，底面は平坦である。

竈　北壁中央部に付設されている。壁を41 cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されているが，天井部は崩落している。規模は長さ147 cm，幅115 cmを測る。火床は床面を僅かに掘り窪められ，火熱を受け赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　本跡は，当調査区内の遺構では遺物出土量が最も多く，土師器片2,348点（甕片，甑片，坏片，高坏片），須恵器片3点（甕片，坏片，瓶片）が，床面全域及び覆土から出土している。第68図2の土師器の甕は中央部の床面から潰れた状態で，第70図19の瓶片は貯蔵穴付近の覆土中層からそれぞれ出土している。竈から北東コーナーにかけての覆土下層及び床面から球状土錘が48点集中して出土している。

所見　本跡は，第29号住居跡よりも新しい時期に構築されており，床面から焼土，炭化物及び炭化材が検出されていることから焼失家屋と思われる。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期に比定される住居跡と考えられる。

第29号住居跡（第65図）

位置　調査区の南西部，C2g_1区を中心に確認されている。

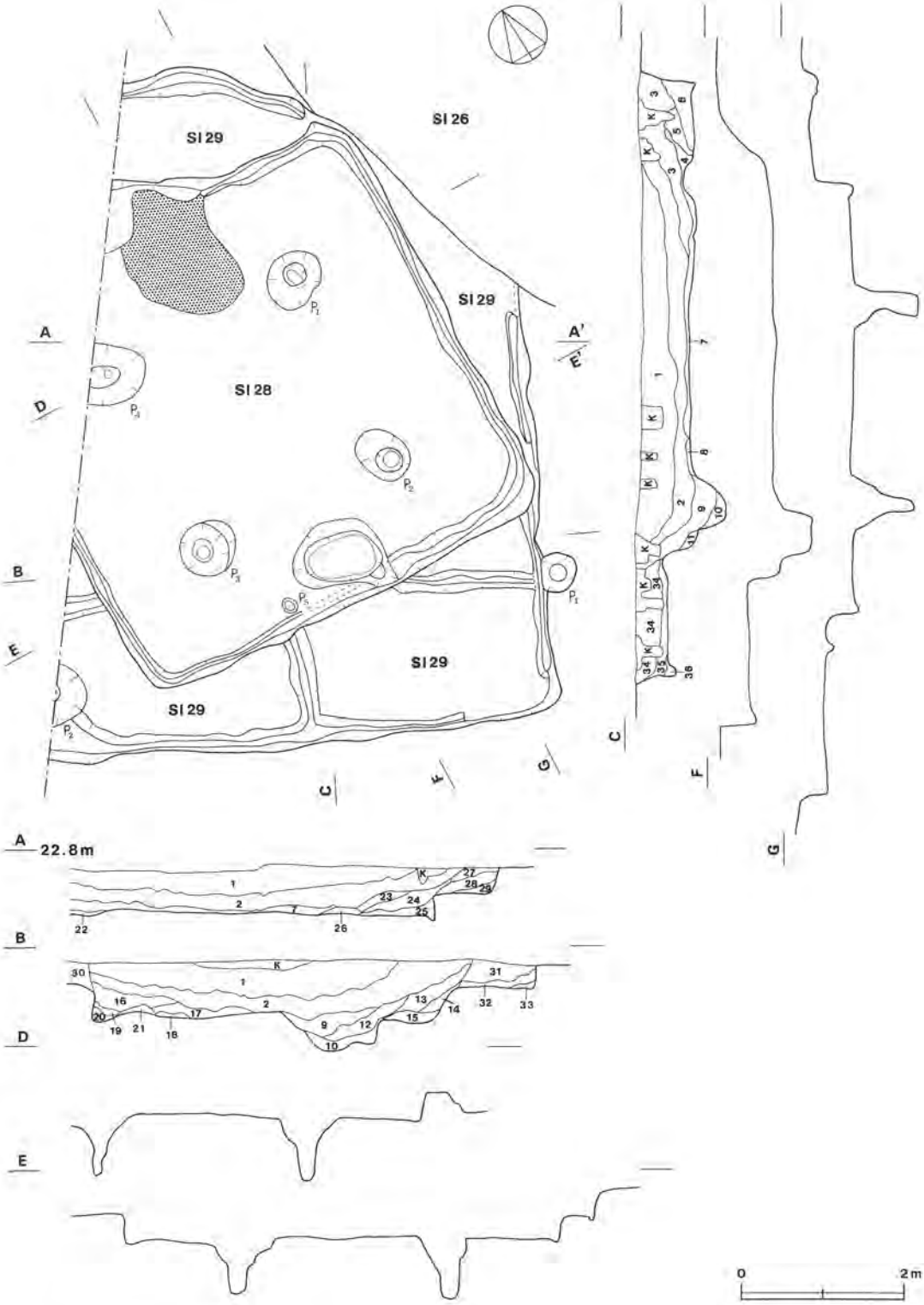
重複関係　第26号住居跡と第28号住居跡に，それぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　西側の4分の1程が調査区外に延びているおり，東コーナーが第26号住居跡に掘り込まれているため全容は明らかではないが，一辺が8.40 m前後の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－30°－E

壁　壁高は19～44 cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

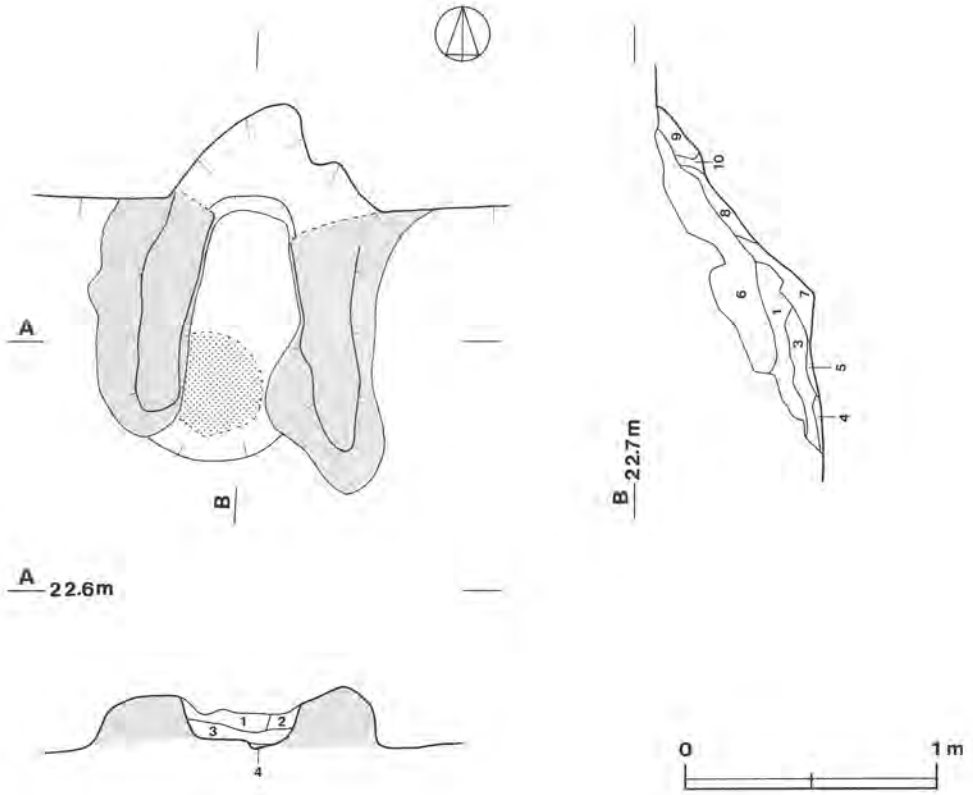
壁溝　北東，南東壁下及び南西壁下に検出され，上幅11～35 cm，深さ5～12 cmを測り，断面形はU字状を呈している。



第65図　第28・29号住居跡実測図

SI－28・29　土層解説

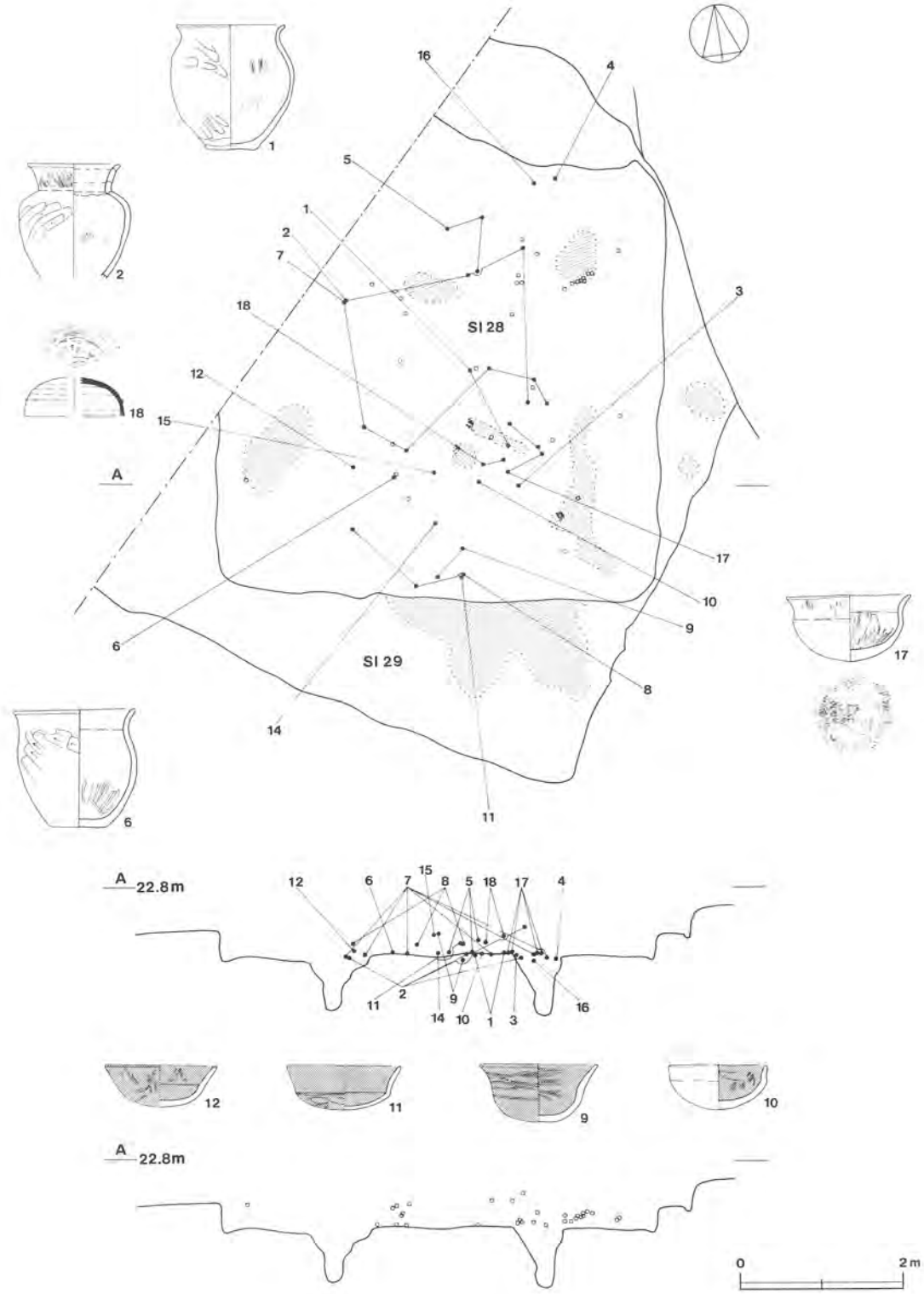
1　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物中量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・炭化物中量，焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化物中量，焼土粒子少量
4　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子多量
5　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子・炭化物少量
7　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量
8　褐　色　ローム粒子極めて多量
9　暗褐色　ローム粒子・炭化物中量
10　暗褐色　ローム粒子中量
11　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
12　暗褐色　ローム粒子中量，炭化粒子少量
13　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
14　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
15　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・粘土少量
16　暗褐色　ローム粒子多量，炭化物中量
17　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物中量
18　褐　色　ローム粒子極めて多量
19　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子中量
20　褐　色　ローム粒子極めて多量
21　暗赤褐色　焼土粒子極めて多量
22　暗褐色　ローム粒子中量
23　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物中量
24　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
25　暗褐色　ローム粒子中量
26　暗褐色　ローム粒子多量
27　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
28　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量
29　褐　色　ローム粒子極めて多量
30　暗褐色　ローム粒子中量
31　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
32　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量
33　褐　色　ローム粒子多量
34　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
35　暗褐色　ローム粒子多量，炭化物中量
36　褐　色　ローム粒子極めて多量



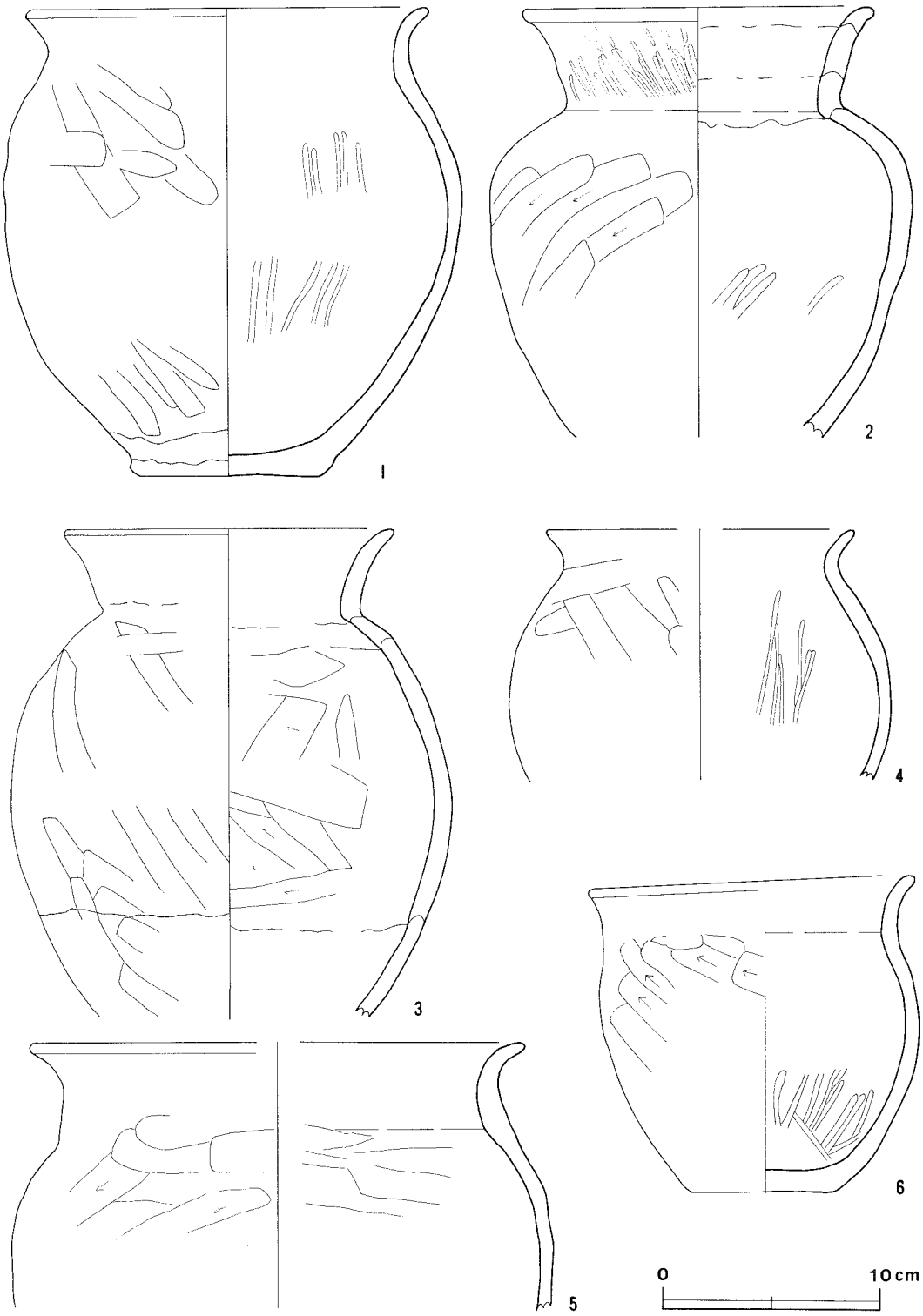
SI－28　竈土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，炭化物中量
4　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物中量
5　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物多量
6　褐　色　ローム粒子多量
7　黒褐色　ローム粒子多量，炭化物中量

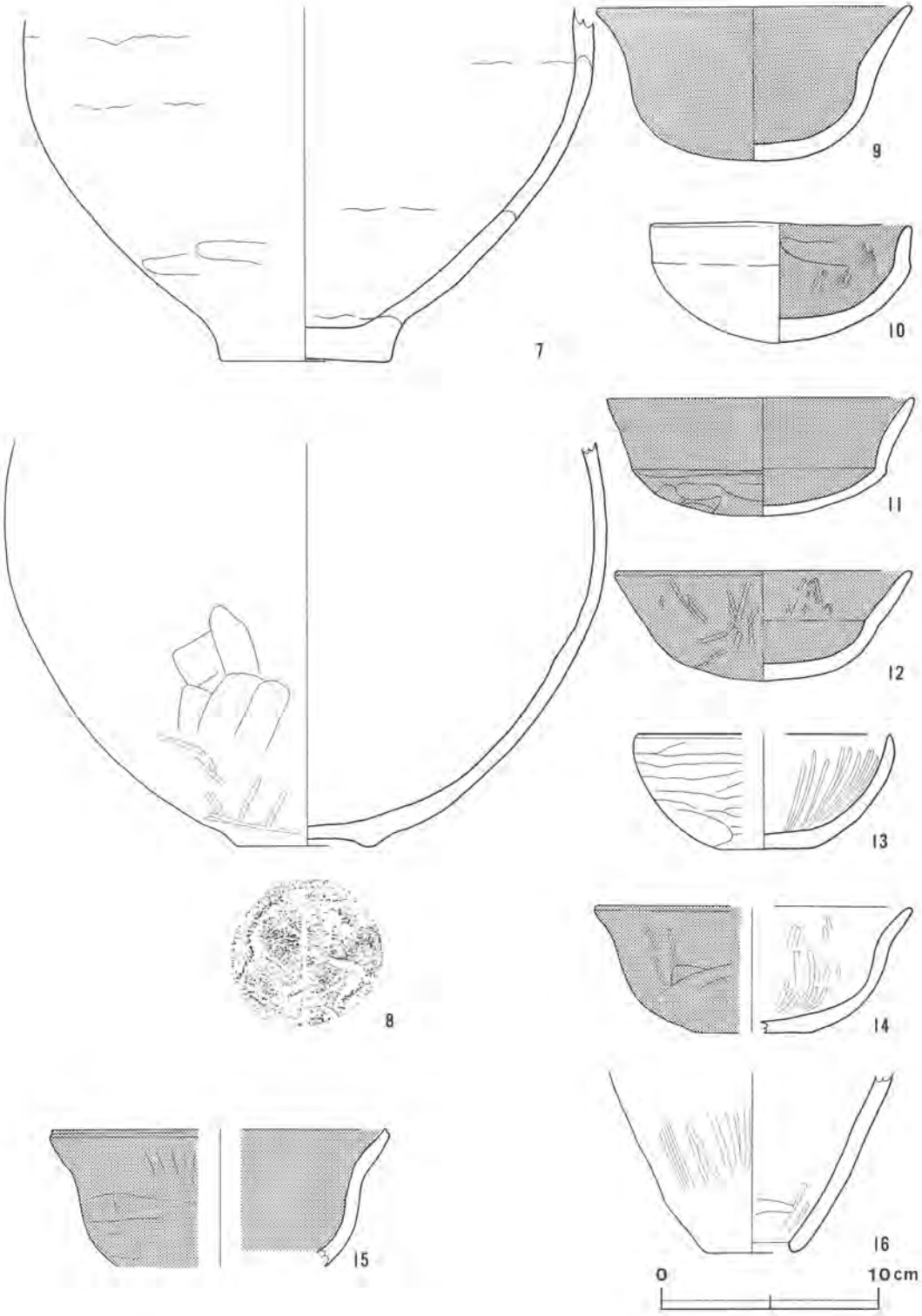
第66図　第28号住居跡竈実測図



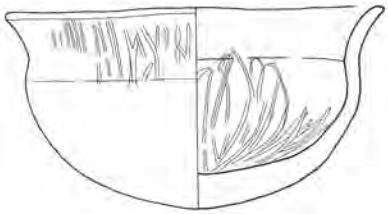
第67図　第28号住居跡遺物出土位置図

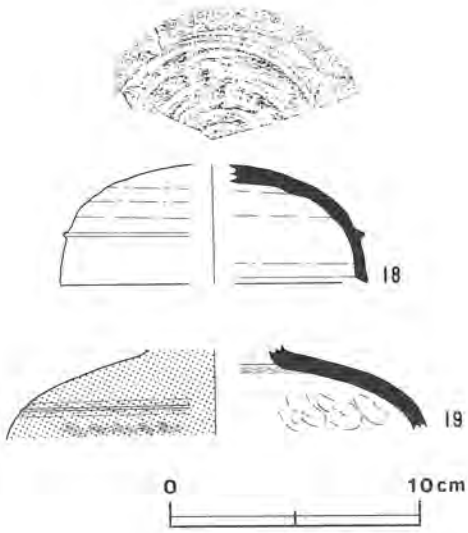


第68図　第28号住居跡出土遺物実測図 (1)



第69図　第28号住居跡出土遺物実測図（2）





第70図　第28号住居跡出土遺物実測図（3）

床　大部分が第28号住居跡に掘り込まれ，南西側に床面の一部が残存しているに過ぎない。残存している床面は平坦であり，よく踏み固められている。床面に2本の溝（A，B）が確認されており，いずれも上幅は20～32 cm，深さは10～12 cmを測り，断面形はV字状を呈している。Aは南東壁南コーナー寄りから北西方向に長さ1.80 m程，Bは南西壁の中央部から北東方向に長さ1.20 m程確認されている。このA，Bの溝は，間仕切り溝と考えられる。

ピット　2か所（P_1，P_2）検出されている。P_1は径49 cm程の円形を呈し，深さ54 cmを測る。P_2は2分の1程が調査区内に確認され，径79 cmの円形を呈し，深さ60 cmを測る。共に位置等から主柱穴とは考えにくく，補助柱穴と思われる。

覆土　自然堆積と思われる。

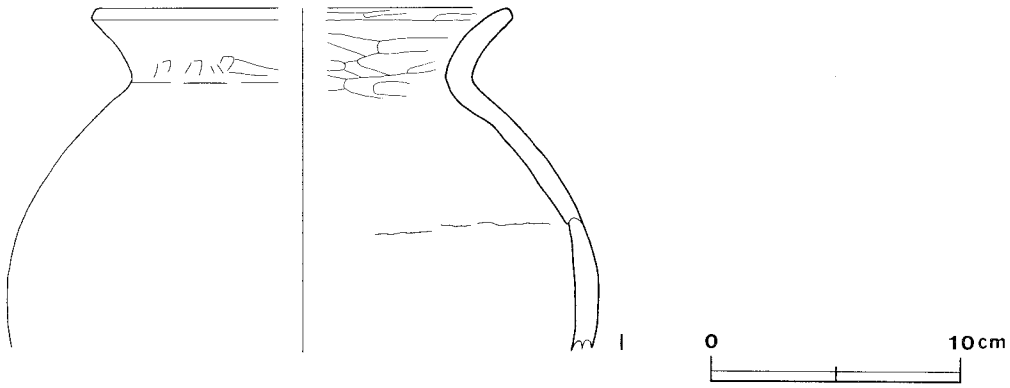
遺物　土師器片155点（甕片，甑片，坏片，高坏片，坩片）が，住居跡南部の床面及び覆土下層から出土している。第71図1の土師器の甕片は南西部床面から出土している。

所見　本跡は，第28号住居跡より古い時期に構築されている。東コーナー付近及び西側の床面から多量の焼土が検出されていることから，焼失家屋と思われる。遺構の形態や遺物等から古墳時代中期に比定される住居跡と考えられる。

第28号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	甕 土師器	A 18.3 B 21.8 C 8.2	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，胴中央部に最大径を有する。口縁部は外反する。	胴部外面斜位のヘラナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石にぶい橙色普通	P 165 90% 中央部床面
2	甕 土師器	A 16.2 B（19.9）	底部欠損。胴部は内彎し，胴上部に最大径を有する。口縁部は外反する。	胴部外面斜位のヘラナデ，内面ヘラ磨き。頸部外面ヘラ磨き，口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス赤褐色普通	P 167 70% 中央部床面

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 3	甕 土師器	A 15.0 B（22.9）	底部欠損。胴部は内彎し，頸部はくびれ，口縁部は強く外反する。	胴部内・外面ヘラナデ。 頸部，口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 166 60% 南東部 床面
4	小型甕 土師器	A〔14.0〕 B（11.6）	胴下半部欠損。胴部は内彎し，頸部から口縁部にかけて，丸みをもって外反する。	胴部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き 頸部，口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P 174 30% 北東コーナー付近 床面
5	甕 土師器	A〔22.4〕 B（12.4）	底部欠損。胴部は内彎し，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	胴部外面斜位のヘラナデ，内面横位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P 169 30% 覆土中層
6	小型甕 土師器	A 14.7 B 14.7 C 6.6	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は外反する。	胴部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P 173 70% 南部 床面
第69図 7	甕 土師器	B（16.4） C 7.9	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P 170 40% 中央部 床面
8	甕 土師器	B（18.7） C 6.4	胴上半部欠損。上げ底気味の平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ，内面ヘラ削り。内・外面ヘラナデ。底部に木葉痕。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	P 171 40% 覆土中層
9	坏 土師器	A 14.4 B 7.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	体部内・外面ヘラ磨き。 口縁部内・外面ヘラ磨き。 内・外面赤彩。	砂粒・パミス 橙色 普通	P 176 95% 覆土中層
10	坏 土師器	A 11.8 B 5.6	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面剝離，内面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。 内面赤彩。	砂粒・長石・石英 赤色，普通	P 178 95% 南部 床面
11	坏 土師器	A 14.0 B 5.5	丸底。体部は内彎し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削りの後軽いナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 橙色，普通	P 179 80% 覆土中層
12	坏 土師器	A 13.5 B 5.2	丸底。体部は内彎し，内面の口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は外傾する。	体部内・外面ヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。 内・外面赤彩。	砂粒・長石・雲母 橙色，普通	P 180 80% 南西部 床面
13	坏 土師器	A〔11.6〕 B 5.3 C 4.3	平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は短く，ほぼ直立する。	体部外面横位のヘラ削り，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P 181 60% 覆土中層
14	坏 土師器	A〔14.4〕 B（5.8） C〔5.5〕	平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ後ヘラ磨き。体部上位から口縁部内・外面赤彩。	砂粒・パミス 赤色 普通	P 182 40% 南部 覆土下層
15	坏 土師器	A〔15.4〕 B（6.3）	底部欠損。体部は内彎し，口縁部は外傾する。	体部外面横位のヘラナデ，内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面赤彩	砂粒・パミス 赤色 普通	P 183 25% 覆土上層
16	甑 土師器	B（8.3） C 4.4	無底式。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面ヘラ磨き，内面ヘラ削り後ヘラ磨き。	砂粒・パミス にぶい褐色 普通	P 184 30% 竈東側 床面
第70図 17	埦 土師器	A 15.0 B 8.2	丸底。体部は内彎し，上位に稜を有する。稜から上位はやや内傾し，口縁が外反する。	体部内面ヘラ磨き。 口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	P 177 90% 南部 床面
18	蓋 須恵器	A〔12.4〕 B（4.7）	天井部は丸みをもつ。口縁部は明瞭な稜を有し，やや外傾して下がる。口唇部は内傾する。	水挽き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 灰色 やや不良	P 186 30% 覆土上層
19	瓶 須恵器	B（3.7）	胴上半部片。5本1条の波条文を有する。	内面横ナデ。内面に指頭痕。 外面上部に黒褐色の自然釉。	砂粒・パミス 黄灰色 普通	P 187 10% 覆土中層



第71図　第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第71図 1	甕 土師器	A〔16.4〕 B（13.8）	底部欠損。頸部から口縁部にかけて丸みをもって外反する。	口縁部外面横ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P188　20% 南部 床面

第30号住居跡（第72図）

位置　調査区の南西部，D1c6区を中心に確認されている。

規模と平面形　西側が調査区外に延びているため，詳細は不明であるが一辺が3.53 m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N－37°－W

壁　北東壁が残存し，壁高は12 cm程を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　全体がトレンチャーによる撹乱を受けているが，残存部分はほぼ平坦である。

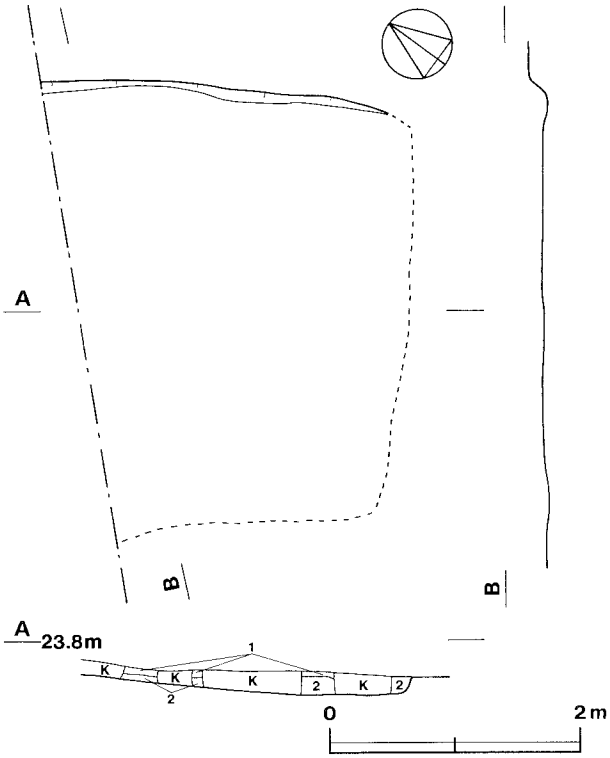
覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片5点（甕片），須恵器片1点（坏片）が，床面から出土している。第73図1の須恵器の坏は中央部やや西寄りの覆土下層から出土している。

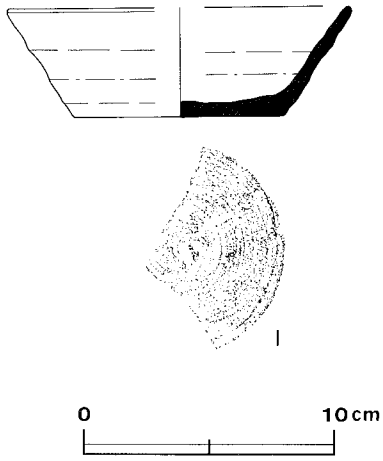
所見　本跡は，調査区内の遺構の中では最も撹乱を受けている。遺物の出土量も少なく詳細は不明であるが，遺構の形態や遺物等から奈良・平安時代に比定される住居跡と考えられる。

第30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量（cm）	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第73図 1	坏 須恵器	A〔13.6〕 B　4.4 C〔8.4〕	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。外面に稜が目立つ。口唇部は丸い。	底部回転ヘラ切り後ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 灰黄褐色 普通	P189　20% 中央部 覆土下層



SI－30　土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量



第72図　第30号住居跡実測図

第73図　第30号住居跡出土遺物実測図

表2　竪穴住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
1	A3f5	N－3°－W	方形	5.18 × 5.00	8～22	(平坦)	2	竈	自然	土師器片143点,土製品2点	SD－1と重複
2	A3h3	N－16°－E	(方形)	(3.06)× 5.28	16～26	(平坦)			自然	土師器片85点,土製品2点	
3	A3i3	N－1°－E	(方形)	6.70 ×(5.64)	20～40	凹凸	5		人為	土師器片189点,土製品2点	
4	B3a2	N－19°－W	方形	5.44 × 5.36	15～38	平坦	5	竈	自然	土師器片170点,土製品7点	
5	B3c2	N－0°	方形	7.10 × 6.88	35～65	平坦	5	竈	自然	土師器片643点,須恵器片1点,土製品10点	SI－6・7と重複
6	B3c1	N－23°－E	(方形)	(3.40)×(2.20)		(平坦)		竈	自然	土師器片30点,土製品2点	SI－5・7と重複
7	B3b1	N－5°－E	(方形)	5.15 ×(3.23)	15～28	平坦	1		自然		SI－5・6と重複
8	B2f3	N－21°－W	(方形)	(7.24)× 6.50	38～42	平坦	4		人為	土師器片423点,須恵器片3点,土製品4点	SD－2と重複
9	B3f2	N－14°－W	(方形)	(4.54)×(3.50)	36	平坦	1	竈	自然	土師器片169点,土製品1点	
10	B3d3	N－32°－E	(隅丸長方形)	5.40 ×(1.28)	16～18	平坦	4		自然	弥生式土器片30点,土師器片51点,土製品1点	
11	A3i6	N－4°－E	(方形)	4.18 ×(2.70)	21～26	平坦	1	竈	人為	土師器片66点,須恵器片1点,土製品2点	SI－12と重複

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
12	A3i_5	N－9°－E	方形	5.93 × 5.83	20～40	平坦	6	竈	人為	土師器片642点,土製品5点	SI－11・13と重複
13	A3h_8	N－8°－E	(方形)	3.70 ×(3.58)	22～29	凹凸	4	竈	人為	土師器片415点,須恵器片1点,土製品1点	SI－12と重複
14	B2i_9	N－34°－E	隅丸長方形	5.65 × 4.70	29～55	平坦	10	炉	自然	弥生式土器片77点,土師器片864点,土製品8点	SI－15, SK－9と重複
15	B2h_9	N－13°－W	(方形)	(4.58)×(4.50)	28～31	凹凸	2	竈	自然	土師器片304点,須恵器片2点	SI－14, SK－9と重複
16	C1j_7	N－3°－W	方形	5.26 × 5.07	35～44	平坦	5	竈	自然	土師器片249点,須恵器片1点,土製品2点	SI－17と重複
17	C2a_6	N－46°－W	方形	5.64 × 5.44	15～25	平坦	4	炉	自然	土師器片115点	SI－16, SK－25と重複
18	C2b_7	N－41°－E	隅丸方形	4.24 ×(1.20)	4～8	平坦	5		自然	弥生式土器片22点,土師器片28点	
19	C2g_4	N－50°－W	隅丸長方形	(4.50)×(3.10)	10～28	平坦	3	炉	自然	弥生式土器片29点,土製品2点	SI－26, SK－26と重複
20	B2j_5	(N－8°－E)	(方形)	(4.92)×(2.76)	65	平坦	1		人為	土師器片80点,土製品1点	SK－25と重複
21	C2h_3	N－53°－W	(方形)	6.00 ×(5.69)	10	(平坦)	10	竈	撹乱	土師器片44点,須恵器片3点,土製品2点	
22	D1a_5	N－21°－W	方形	4.74 × 4.64	8～16	(平坦)	3	竈	撹乱	土師器片156点,須恵器片5点,土製品7点	SK－24と重複
23	D2a_7	(N－12°－W)	(方形)	(3.20)×(3.00)	8	(平坦)	1	竈	撹乱	土師器片20点	
24	D1b_0	N－34°－W	方形	5.70 × 5.38	8～20	(平坦)	5	竈	撹乱	土師器片91点,土製品3点	SI－22, SK－28と重複
25 A	D1c_3	N－42°－W	方形	(5.20)× 2.50	22～32	(平坦)		竈	人為		SI－25 B, SK－29と重複
25 B	D1d_8	N－43°－W	(方形)	(5.20)×(4.40)	4～12	(平坦)	1	竈	人為	土師器片197点,土製品4点	SI－25 A, SK－30と重複
26	C2f_2	N－15°－W	方形	5.36 × 5.16	20～56	平坦	6	竈	自然	土師器片797点,須恵器片56点,土製品6点	SI－19・29, SK－27と重複
27	D1a_7	N－8°－E	方形	3.94 × 3.85	10～16	(平坦)		竈	自然	土師器片35点,土製品2点	
28	C2f_1	N－8°－E	方形	5.40 × 5.35	35～46	平坦	5	竈	自然	土師器片2,348点,須恵器片3点,土製品48点	SI－29と重複
29	C2g_1	N－30°－E	(方形)	8.43 ×(6.30)	19～44	平坦	2		自然	土師器片155点,土製品4点	SI－26・28と重複
30	D1c_6	N－37°－W	(方形)	3.53 ×(2.89)	12	(平坦)			自然	土師器片5点,須恵器片1点	

2　土坑

当調査区からは，29基の土坑が検出されている。全体的に小規模で，遺物の出土量も少ないため時期や性格を明らかにするまでには至らなかった。主な土坑2基については，以下のとおり記載し，他は一覧表の中に掲載した。

なお，第7号土坑については，地下式壙として別項に記載した。

第9号土坑（第74図）

位置　調査区の中央部，B2i_9区に確認されている。

重複関係　第14号住居跡と第15号住居跡の床面を掘り込んでいる。

規模と形状　長径2.80 m，短径1.75 mの隅丸長方形を呈し，深さは0.27 mである。

長径方向　N－50°－E

壁　やや外傾して立ち上がり，壁面はロームで硬く締まっている。

底部　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積と思われる。

所見　第14号住居跡と第15号住居跡よりも新しい時期に構築されている。

第20号土坑（第76図）

位置　調査区の南西部，C2c4区に確認されている。

規模と形状　長径1.73 m×短径1.35 mの楕円形を呈し，深さは0.48 mである。

長径方向　N－37°－E

壁　外傾して立ち上がり，壁面は粘土で硬く締まっている。

底部　鍋底状を呈し，やや丸みをもっている。

覆土　4層から成りたっているが，いずれもローム粒子，ロームブロック及び粘土を含む褐色土で，人為堆積と思われる。

所見　全体に5～12 cmの厚さで粘土が貼られ，特に底部が厚く構築されており，粘土貼土坑と思われる。遺物の出土がなく，時期は不明である。

表3　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模(m) 長径×短径	規模(m) 深さ	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
1	A3f7	N－25°－E	楕円形	1.13 × 0.93	0.38	垂直	平坦	人為		本跡→SD－1	第74図
2	A3g7	N－66°－W	楕円形	4.62 × 1.22	0.38	垂直	平坦	人為			第74図
3	B3a5	N－30°－E	（方形）	1.96 ×(0.85)	0.18	垂直	平坦	自然	弥生式土器片1点，土師器片3点，土製品1点		第74図
4	B3g1	N－37°－E	（楕円形）	1.10 ×(0.81)	0.12	垂直	平坦	攪乱	土師器片1点		第74図
5	B3b3		円形	1.00 × 0.94	0.14	傾斜	平坦	攪乱			第74図
6	B3c3		不整円形	1.10 × 1.08	0.10	傾斜	平坦	攪乱	縄文式土器1点，土師器片2点，土製品1点		第74図
8	B2h7	N－28°－E	不整方形	2.53 × 2.28	0.50	外傾	平坦	自然	縄文式土器片4点，弥生式土器片1点，土師器片19点，須恵器片1点		第74図
9	B2i9	N－50°－E	隅丸長方形	2.80 × 1.75	0.27	外傾	平坦	人為		本跡→SI－14・15	第74図
10	B2h8	N－62°－W	楕円形	1.50 × 1.20	0.10	外傾	皿状	攪乱			第74図
11	B2h7	N－38°－W	長方形	2.72 × 2.20	0.57	内傾	平坦	人為	縄文式土器片8点，弥生式土器片2点，土師器片29点，土製品1点	本跡→SK－12	第75図
12	B2i7	N－61°－W	不整楕円形	2.56 × 2.35	0.18	外傾	平坦	人為	弥生式土器片12点，土師器片2点	SK－11・15→本跡	第75図
13	C2b6	N－39°－E	不定形	2.40 × 2.15	0.34	傾斜	凹凸	人為	縄文式土器片8点，弥生式土器片4点，土師器片29点，須恵器片2点		第74図

土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模(m) 長径×短径	規模(m) 深さ	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
14	C2b$_7$	N－57°－W	楕円形	0.88 × 0.73	0.12	傾斜	平坦	人為			第74図
15	B2i$_7$	N－35°－E	隅丸長方形	2.08 × 1.66	0.30	外傾	皿状	人為	縄文式土器片1点，弥生式土器片1点，土師器片12点	本跡→SK－12	第75図
16	B2i$_6$	N－25°－W	隅丸長方形	2.11 × 1.38	0.82	垂直	平坦	人為	縄文式土器片9点，土師器片21点		第75図
17	C1j$_8$	N－36°－W	不整楕円形	1.00 × 0.51	0.22	外傾	凹凸	人為			第75図
18	C2c$_6$	N－45°－W	楕円形	0.60 × 0.40	0.34	外傾	凹凸	人為			第75図
19	C2d$_3$	N－57°－W	不整楕円形	0.92 × 0.74	0.57	外傾	凹凸	人為			第75図
20	C2c$_4$	N－37°－E	楕円形	1.73 × 1.35	0.48	外傾	鍋底状	人為			第76図
21	C2e$_4$	N－46°－E	不整楕円形	2.44 × 2.20	0.25	緩斜	皿状	人為			第76図
22	C2c$_3$	N－31°－E	(不整楕円形)	1.10 ×(0.38)	0.37	外傾	皿状	攪乱			第75図
23	C2d$_3$	N－25°－E	楕円形	1.40 × 0.64	0.34	外傾	皿状	自然			第75図
24	C2d$_3$		円形	0.77 × 0.70	0.66	外傾	鍋底状	自然	弥生式土器片1点，土師器片2点		第75図
25	C2j$_3$	N－77°－W	隅丸長方形	1.80 × 1.44	0.52	垂直	平坦	人為		本跡→SI－17・20	第76図
26	C2j$_3$	N－21°－E	不整方形	1.20 × 1.16	0.53	外傾	平坦	人為		本跡→SI－19・21	第76図
27	C2g$_3$	N－60°－W	長楕円形	2.12 × 0.97	0.35	緩傾	平坦	自然		本跡→SI－26	第76図
28	D1b$_6$		円形	1.22 × 1.20	0.25	垂直	平坦	人為		本跡→SI－24	第76図
29	D1d$_5$		円形	1.18 × 1.12	0.22	垂直	平坦	人為		本跡→SI－25 A	第76図
30	D1e$_5$		円形	1.10 × 1.12	0.24	垂直	平坦	人為		本跡→SI－25 B	第76図

3　溝

3条の溝が検出されているが，いずれも出土遺物が少ないため，それぞれの溝の時期や性格を明らかにすることは困難であった。ここでは，調査結果に基づきそれぞれの溝の規模や形状等を中心に記載する。

第1号溝（第77図）

位置　調査区の北側，A3区に確認されている。

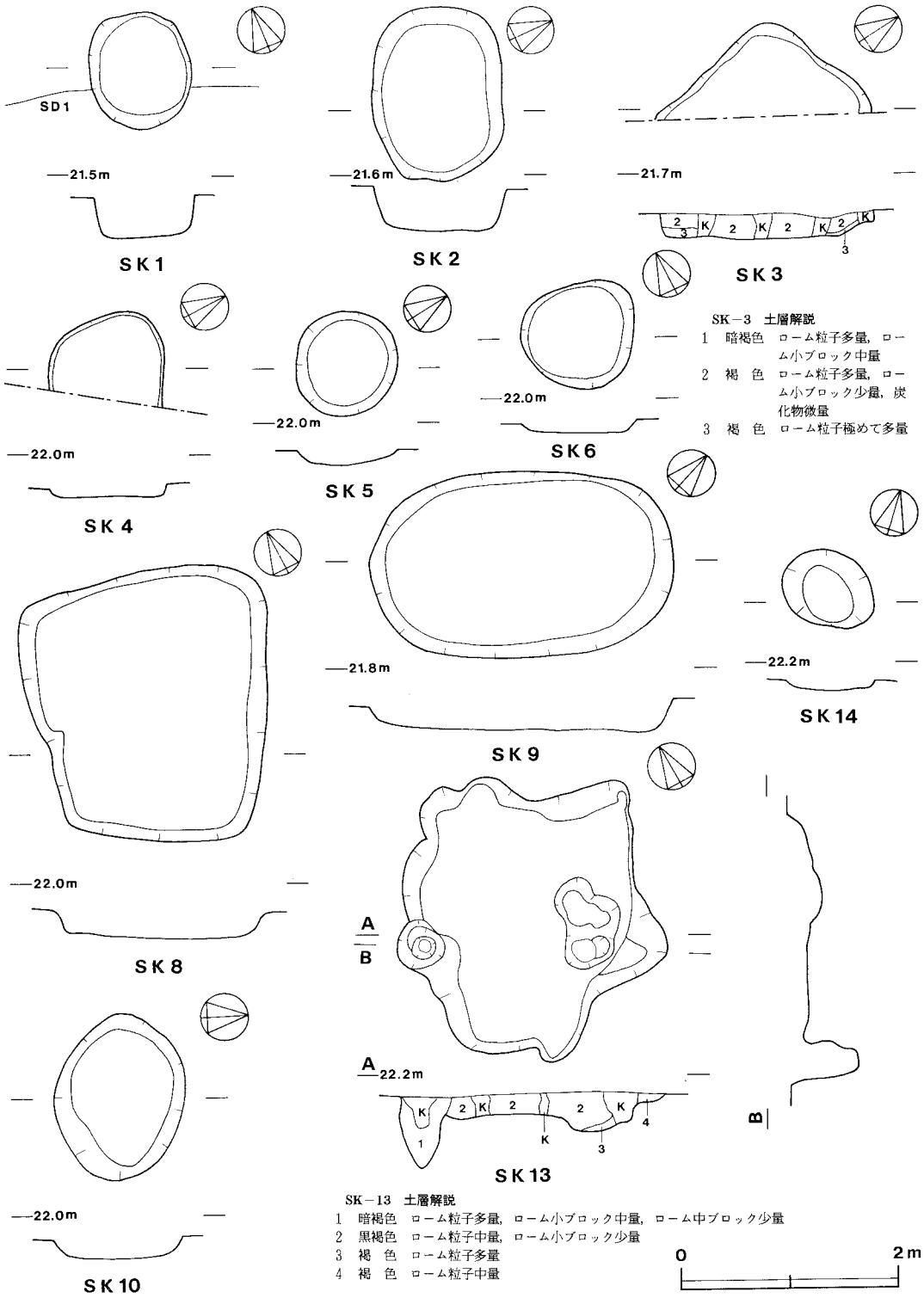
重複関係　A3f$_7$区で第1号土坑に，A3f$_5$区で第1号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　溝の全長は約13.70 mであり，上幅0.71～1.22 m，下幅0.24～0.60 m，深さ14～18 cmを測り，皿状に掘り込まれている。

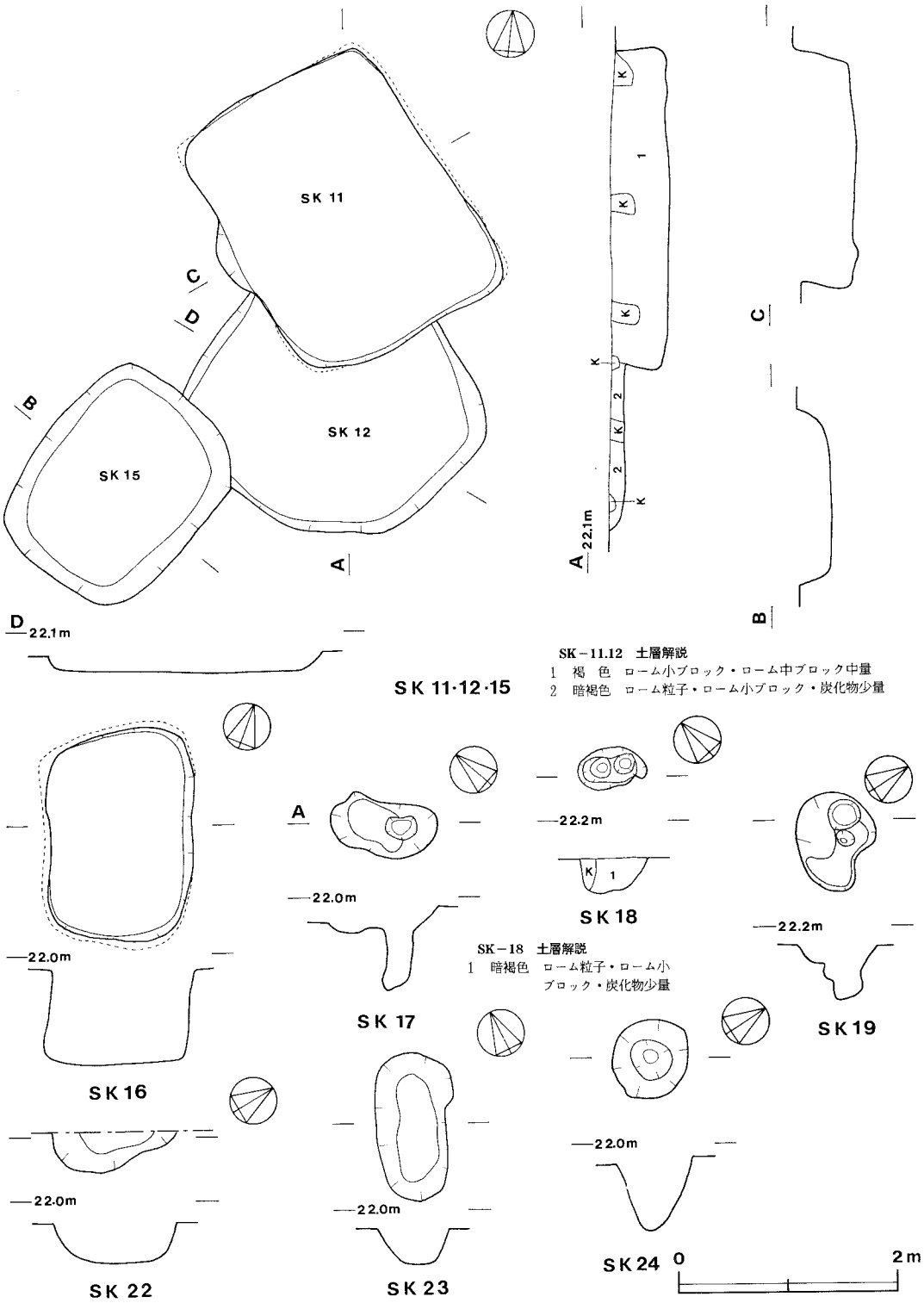
方向　A3g$_7$区から北西方向N－64°－Wへほぼ直線的に延びており，両端共さらに調査区外へ延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

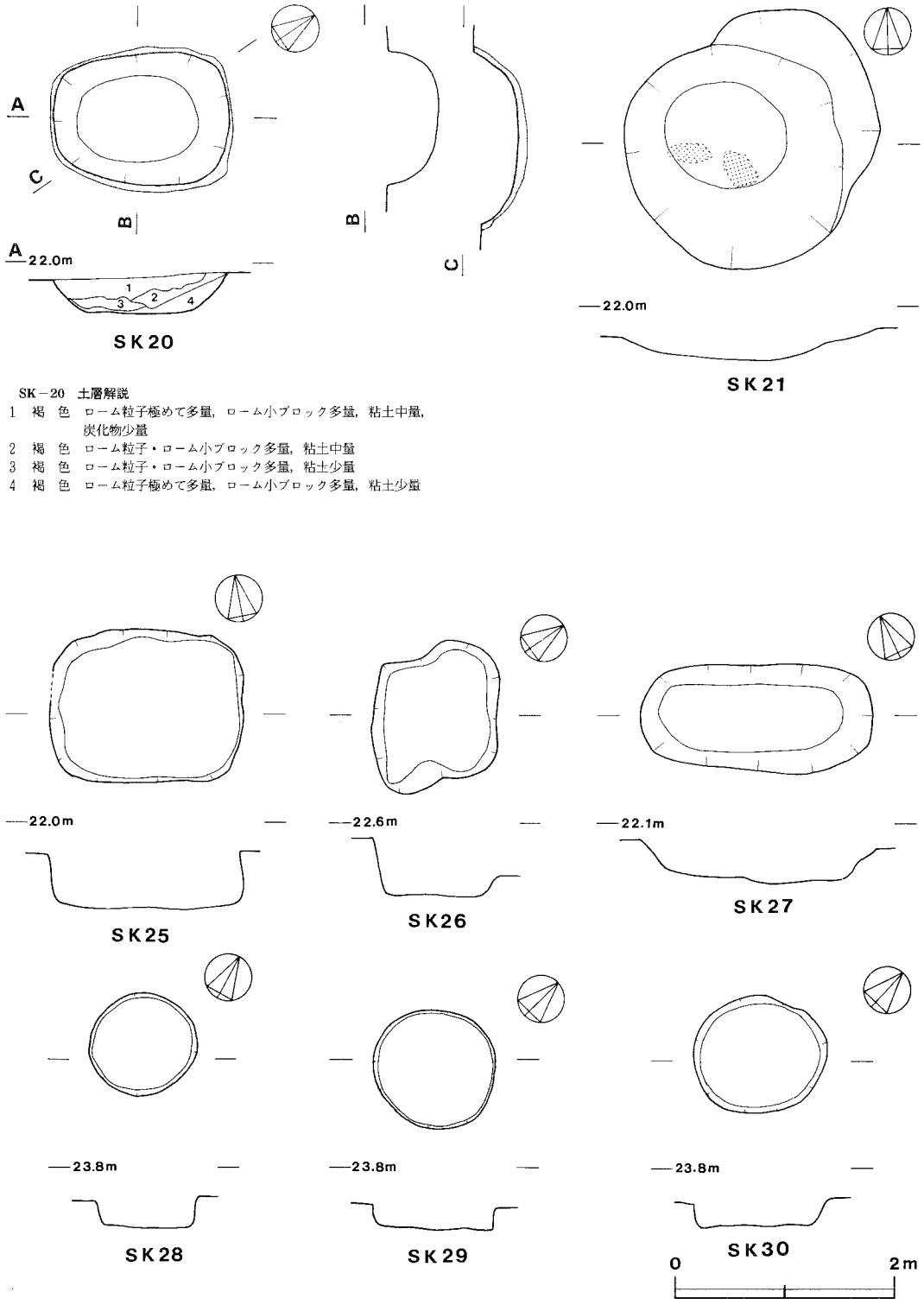
遺物　出土しなかった。


SD1
21.5m
SK1
21.6m
SK2
21.7m
SK3
SK−3 土層解説
1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
3 褐 色 ローム粒子極めて多量
22.0m
SK4
22.0m
SK5
22.0m
SK6
21.8m
SK9
22.2m
SK14
22.0m
SK8
A
B
22.2m
SK13
SK−13 土層解説
1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3 褐 色 ローム粒子多量
4 褐 色 ローム粒子中量
22.0m
SK10
0
2m

第74図 土坑実測図 (1)


SK 11
SK 12
SK 15
A
B
C
D
22.1m
SK 11·12·15
SK−11.12 土層解説
1 褐 色 ローム小ブロック・ローム中ブロック中量
2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量
22.0m
SK 16
SK 17
22.2m
SK 18
SK−18 土層解説
1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量
SK 19
SK 22
SK 23
SK 24
0
2m

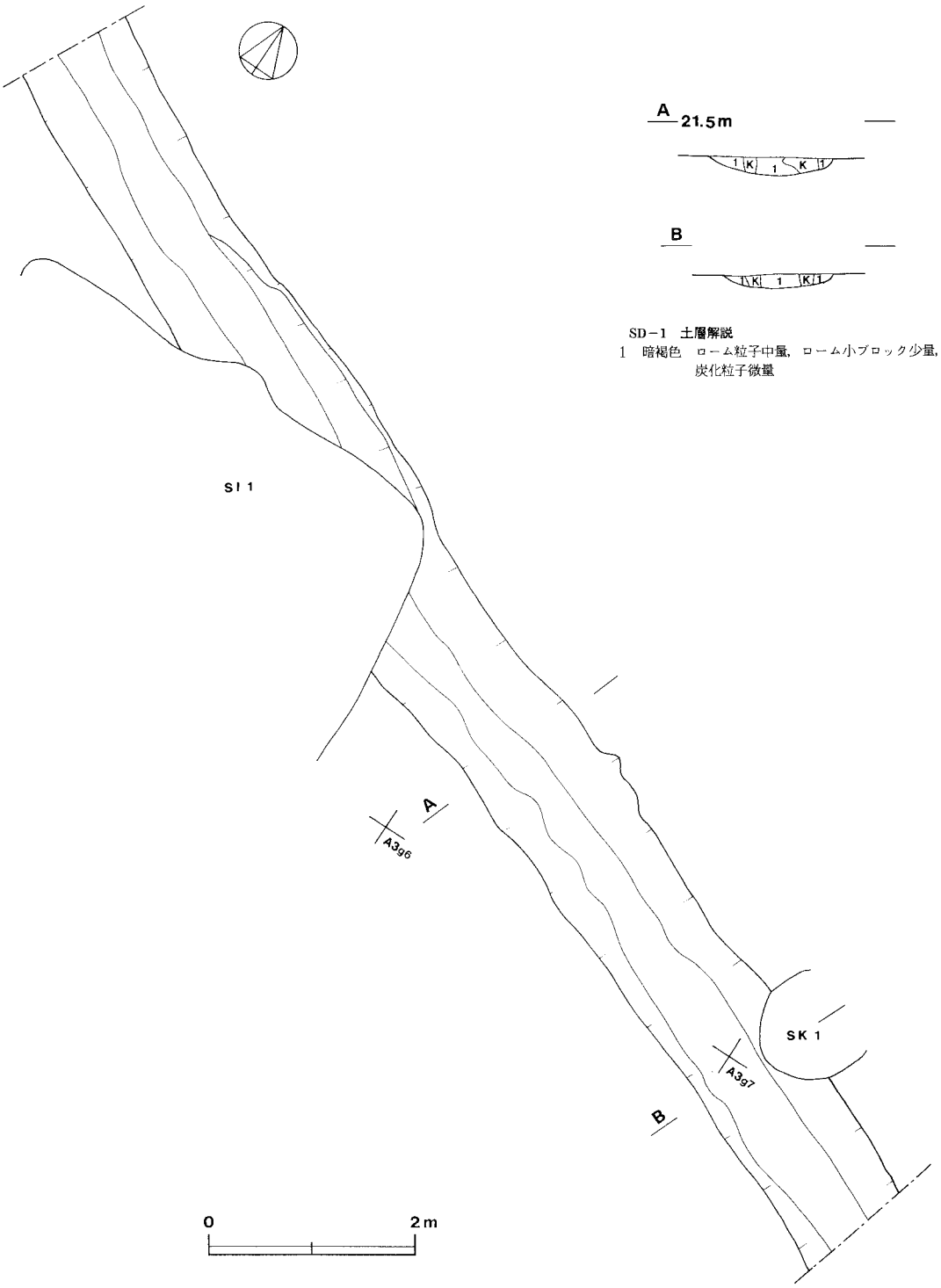
第75図 土坑実測図 (2)



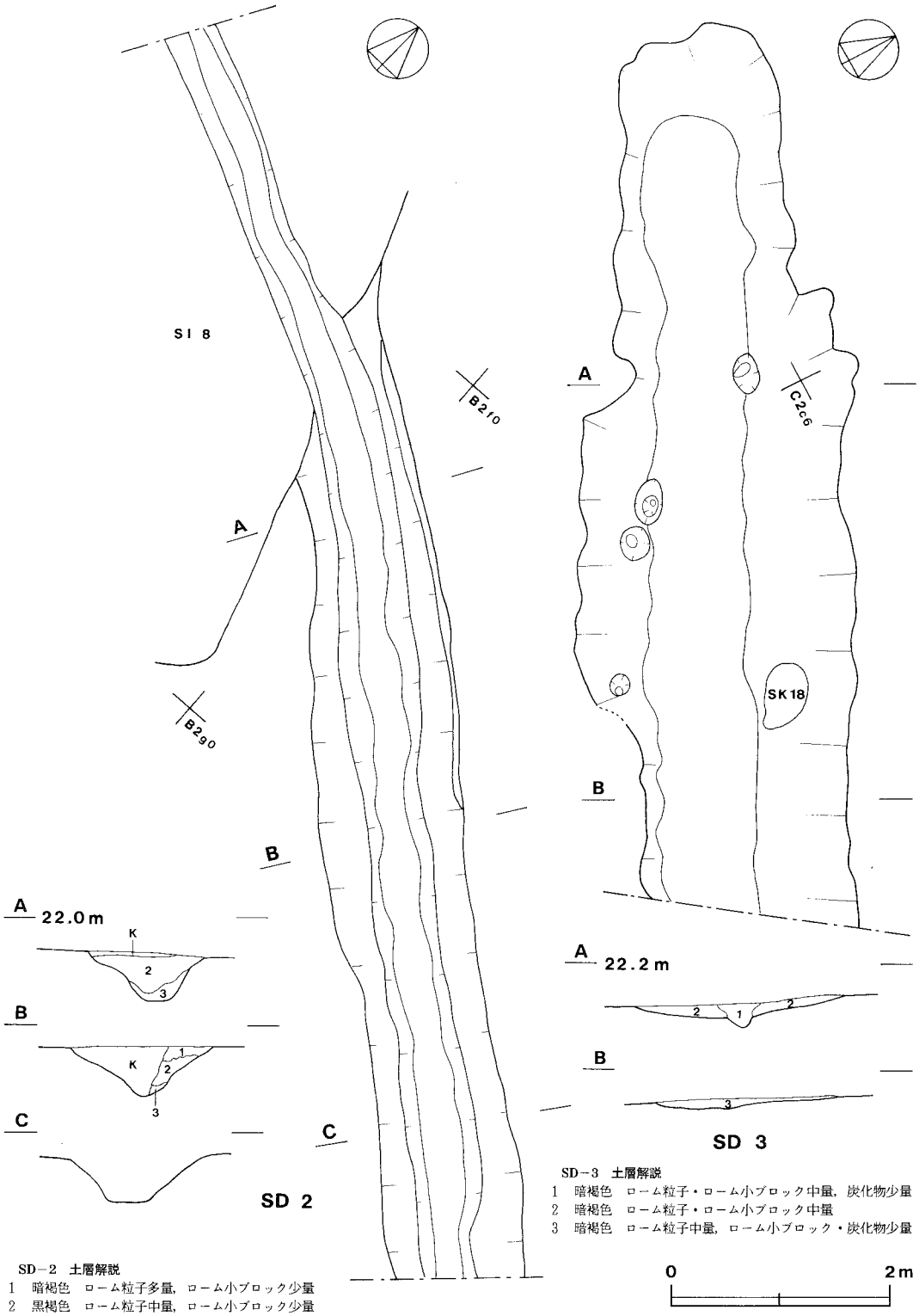
SK－20　土層解説

1　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量，粘土中量，炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，粘土中量
3　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，粘土少量
4　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量，粘土少量

第76図　土坑実測図 (3)



第77図　第1号溝実測図



SD－2　土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量

SD－3　土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物少量

第78図　第2・3号溝実測図

所見　本跡は，第1号住居跡に掘り込まれていることから，古墳時代後期もしくはそれ以前に構築された溝と考えられる。

第2号溝（第78図）

位置　調査区の中央部北側，B2・B3区に確認されている

重複関係　B2f_9区で第8号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　全長は約9.30mであり，上幅1.36～1.70m，下幅0.23～0.38m，深さ39～45cmを測り，薬研状に掘り込まれている。

方向　B3g_1区から北西方向N－50°－Wへほぼ直線的に延びており，両端共さらに調査区外へ延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片30点（甕片，坏片）。須恵器片1点（坏片）。縄文式土器片5点（深鉢片），及び弥生式土器片2点（壺片）。第82図172の管状土錘がB2f_9区の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，第8号住居跡より新しい時期に掘られているが，詳細な時期や性格については，不明である。

第3号溝（第78図）

位置　調査区の中央部南側，C2区に確認されている。

重複関係　C2c_6区で，第18号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　全長は約8.30mであり，上幅1.34～2.54m，下幅0.74～0.93m，深さ4～13cmを測り，皿状に掘り込まれている。

方向　C2c_7区から北西方向N－65°－Wへほぼ直線的に延びている。南東端はさらに調査区外へ延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器甕の底部がC2b_5区の覆土中層から出土しているが，流れ込みと思われる。

所見　本跡は，第18号土坑に掘り込まれているが時期や性格については，不明である。

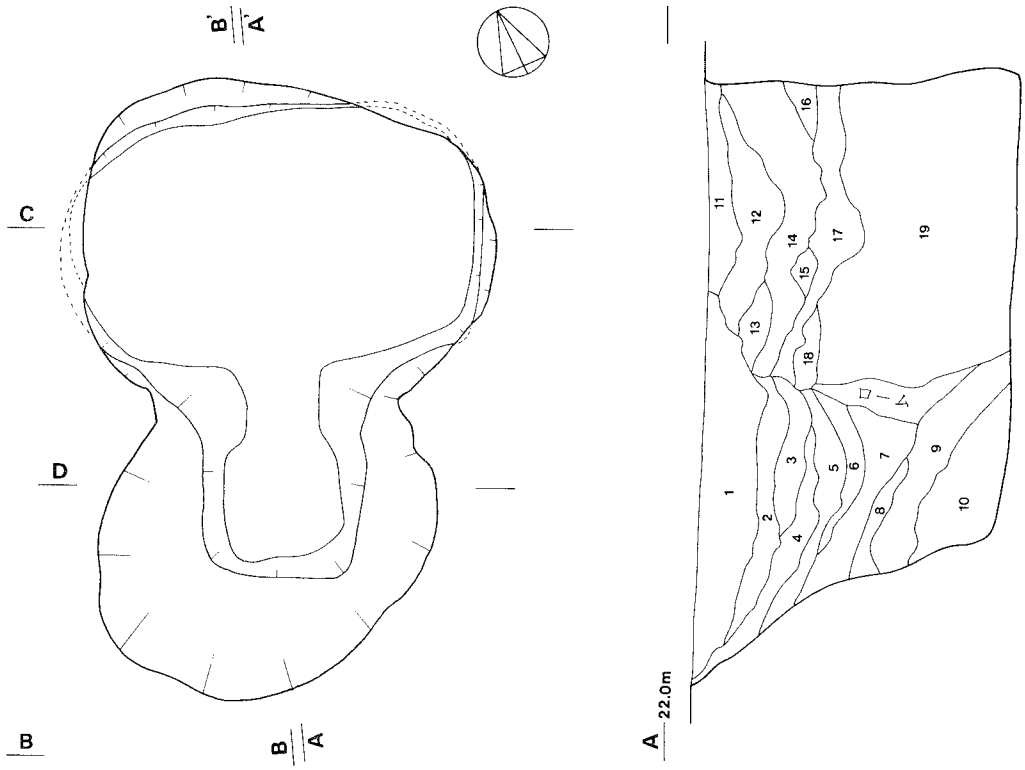
4　地下式壙

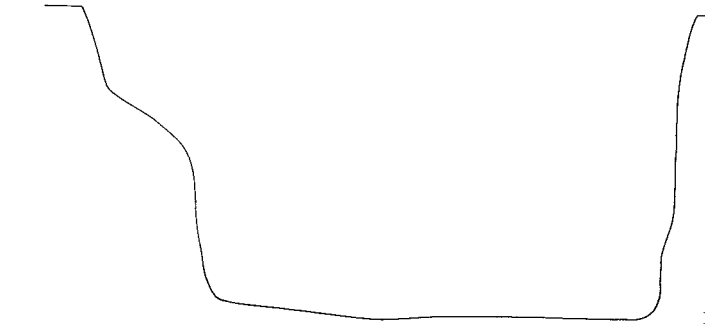
第1号地下式壙（第79図）

位置　調査区中央部，B2g_0区を中心に確認されている。

主軸方向　N－24°－Eを指し，全長4.93mを測る。

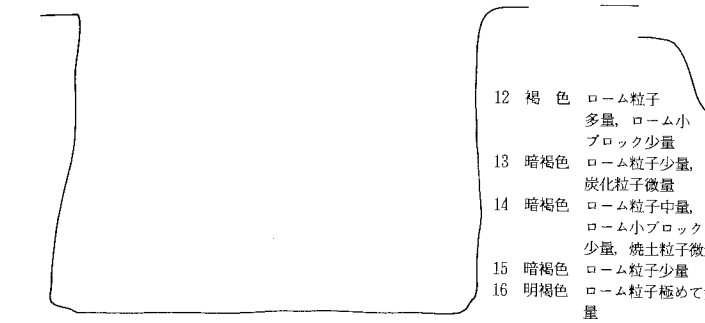
竪坑　平面形は楕円形を呈し，規模は長径2.90m，短径2.50m，深さは2.35mである。底部は，





第1号地下式壙　土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
7　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量，ローム中ブロック少量
8　褐　色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量
9　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量
10　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量，黒色土中量
11　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量



12　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
13　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
14　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
15　暗褐色　ローム粒子少量
16　明褐色　ローム粒子極めて多量
17　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
18　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
19　褐　色　ローム粒子極めて多量

0　2m

第79図　第1号地下式壙実測図

一辺 0.90 m 程の方形を呈し，ほぼ平坦である。長軸方向はN－63°－Eを指す。

主室　底部は平面形が隅丸方形状を呈し，規模は長軸 3.45 m，短軸 2.26 m で，ほぼ平坦である。確認面から主室底面までの深さは 2.47 m である。長軸方向はN－63°－Wを指す。

壁　竪坑は，ほぼ垂直に立ち上がる。主室の西壁及び北東コーナー壁は底面から 1.3 m の高さまでオーバーハングしている。

覆土　自然堆積と思われる。

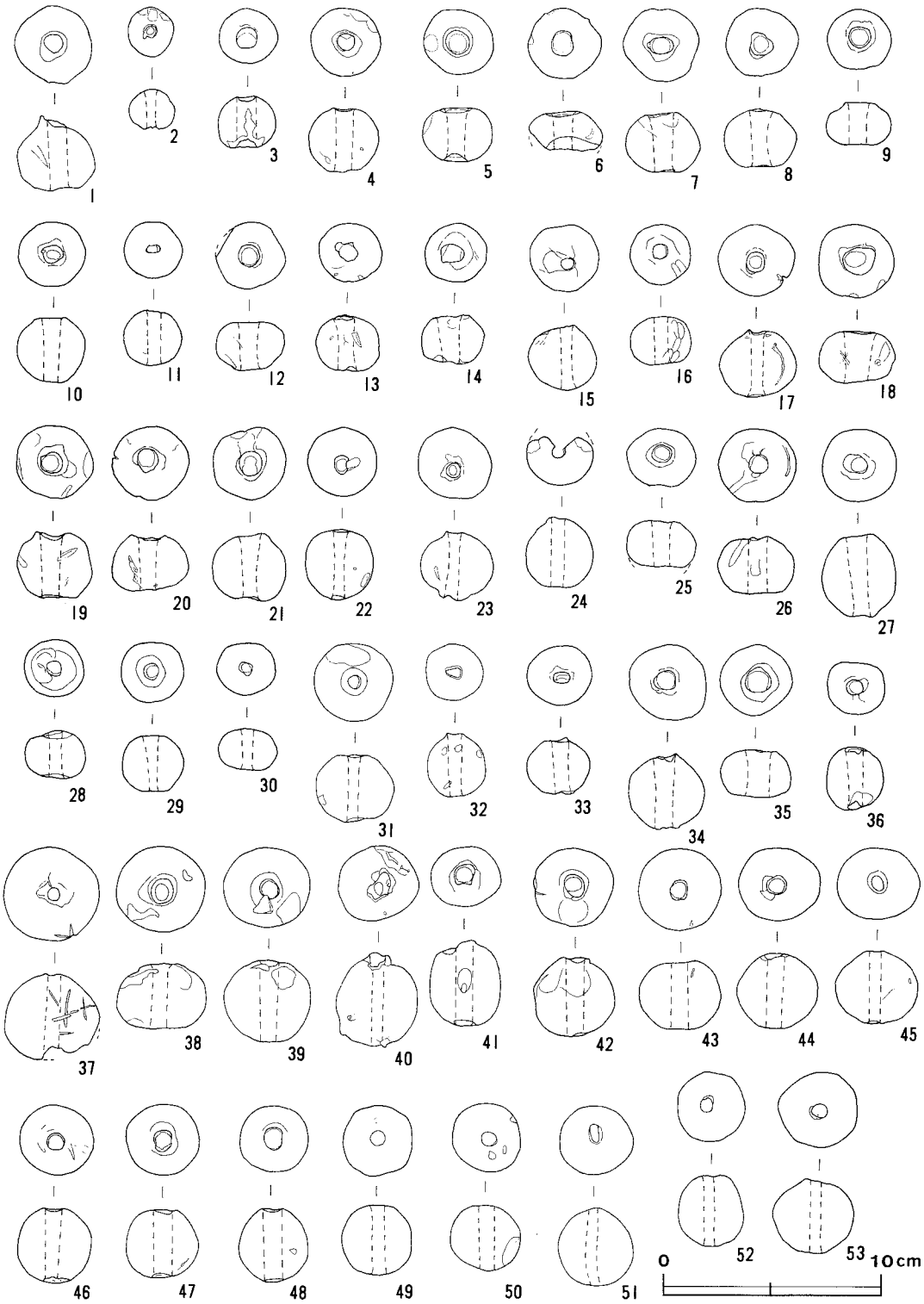
所見　本跡に伴う遺物が出土していないため，時期を明確にすることはできなかった。

5　土製品，石器，石製品，鉄製品

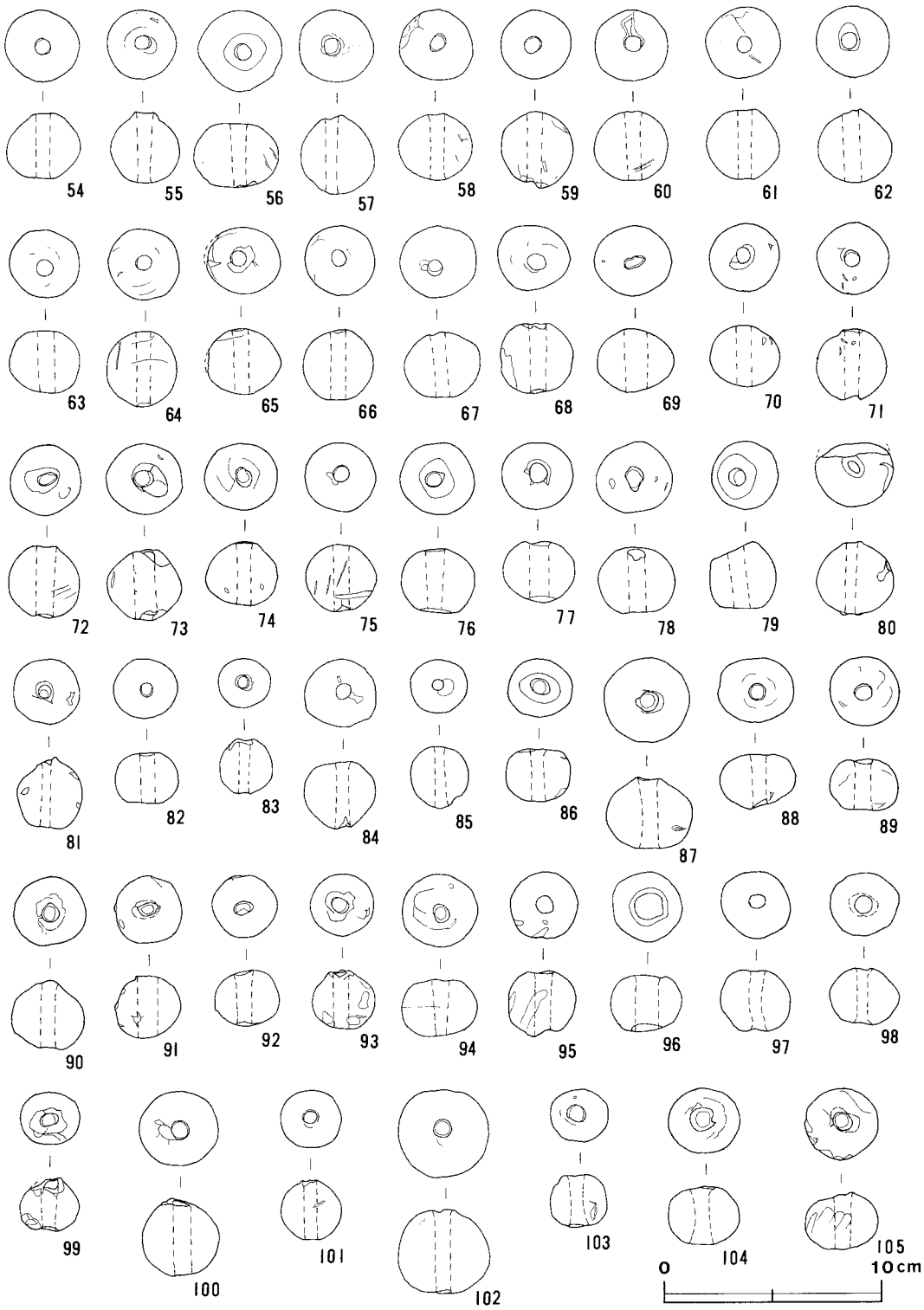
当調査区内から出土した土製品，石器，石製品及び鉄製品については，一覧表と実測図で，その一部を紹介する。

表 4　土製品一覧表

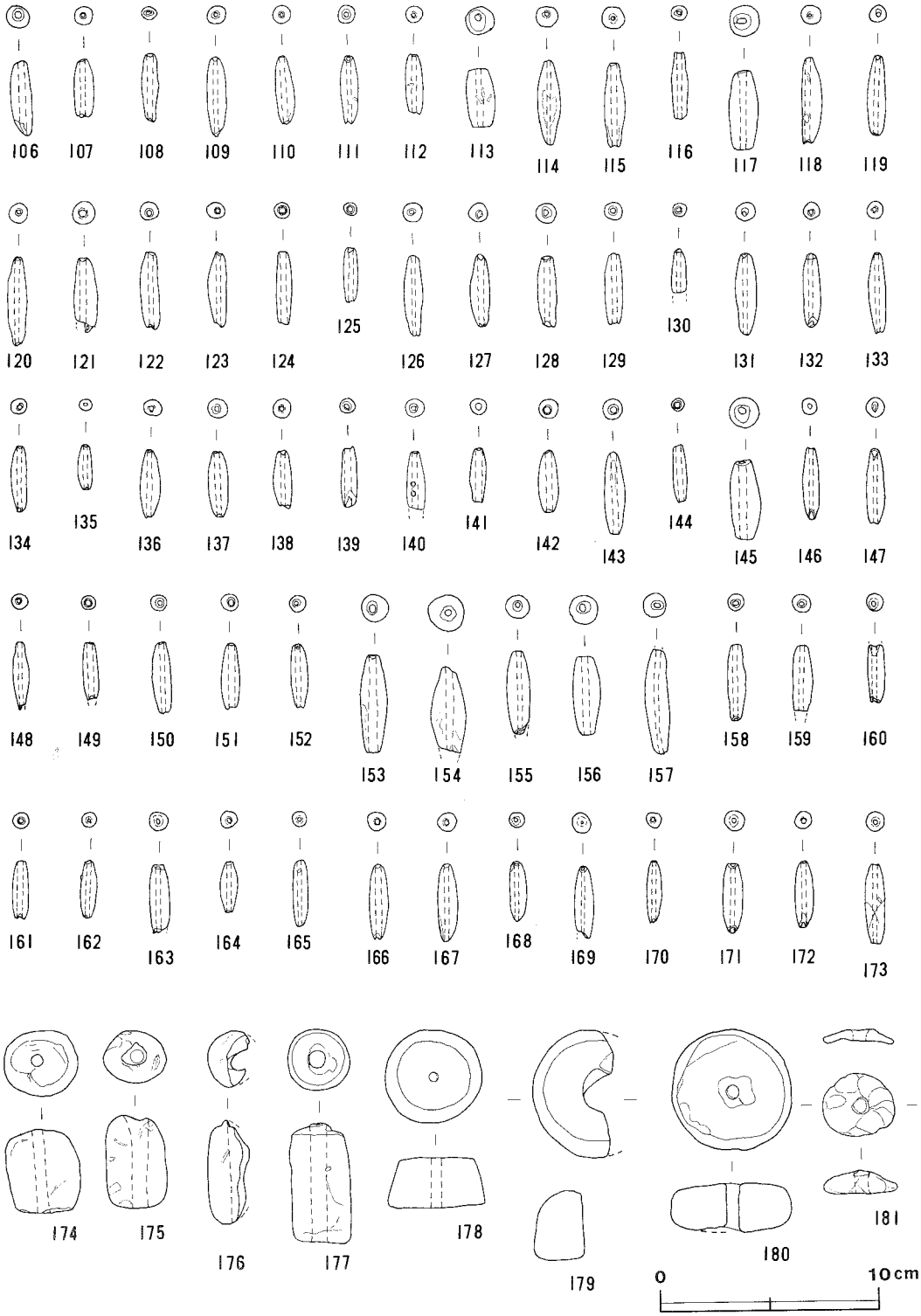
図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重量（g）		
第80図1	球状土錘	3.5	3.5	0.8	30.7	SI－1	DP－1
2	球状土錘	1.8	2.1	0.6	6.3	SI－2	DP－3
3	球状土錘	2.4	3.7	0.9	13.4	SI－3	DP－5
4	球状土錘	3.0	3.3	0.8	24.8	SI－4	DP－8
5	球状土錘	2.4	3.2	1.0	21.7	SI－4	DP－9
6	球状土錘	(1.8)	3.4	1.1	(14.2)	SI－4	DP－10　剝離欠損
7	球状土錘	2.7	3.4	1.1	28.5	SI－5	DP－15
8	球状土錘	2.7	3.3	1.1	27.0	SI－5	DP－16
9	球状土錘	2.0	2.9	0.8	14.5	SI－5	DP－17
10	球状土錘	3.0	3.1	0.9	27.7	SI－5	DP－18
11	球状土錘	2.5	2.6	0.7	16.7	SI－5	DP－19
12	球状土錘	2.2	3.2	1.0	(20.0)	SI－5	DP－20　剝離欠損
13	球状土錘	2.6	2.9	1.1	18.7	SI－6	DP－25
14	球状土錘	2.3	2.8	1.0	12.8	SI－6	DP－26
15	球状土錘	3.0	3.2	0.6	26.3	SI－8	DP－27
16	球状土錘	2.3	2.8	0.7	15.7	SI－8	DP－28
17	球状土錘	3.1	3.6	0.8	33.9	SI－9	DP－31
18	球状土錘	2.4	3.4	1.3	24.7	SI－11	DP－33
19	球状土錘	3.1	3.5	1.0	34.0	SI－12	DP－35
20	球状土錘	2.6	3.6	0.9	27.3	SI－12	DP－36
21	球状土錘	3.1	3.5	1.1	31.5	SI－14	DP－41
22	球状土錘	3.3	3.2	0.8	32.1	SI－14	DP－42



第 80 図　土製品実測図 (1)



第81図　土製品実測図 (2)



第82図　土製品実測図 (3)

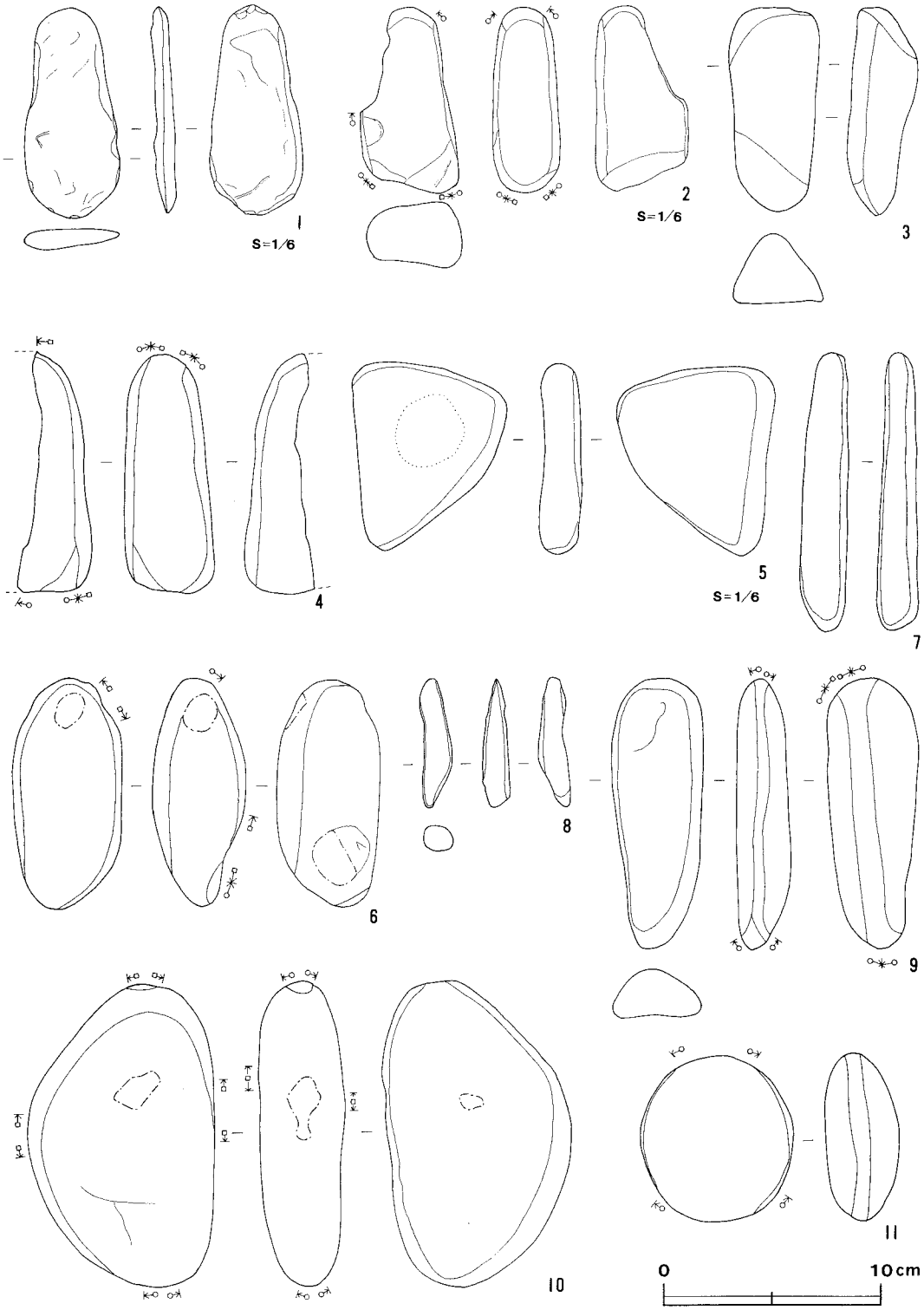
図版番号	器種	法量				出土地点	備考	
		長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重量（g）			
第80図23	球状土錘	3.1	3.4	0.7	30.5	SI－14	DP－43	
24	球状土錘	3.3	3.1	0.7	（19.0）	SI－14	DP－44	剥離欠損
25	球状土錘	（2.2）	3.2	0.9	（14.4）	SI－14	DP－45	剥離欠損
26	球状土錘	2.7	3.6	0.9	31.0	SI－16	DP－50	
27	球状土錘	3.9	3.3	1.1	38.8	SI－19	DP－52	
28	球状土錘	2.2	2.7	0.7	（15.1）	SI－19	DP－53	剥離欠損
29	球状土錘	2.6	2.9	0.6	21.8	SI－21	DP－55	
30	球状土錘	1.9	2.7	0.6	12.1	SI－21	DP－56	
31	球状土錘	3.2	3.7	0.6	35.1	SI－22	DP－57	
32	球状土錘	3.0	2.7	0.8	18.1	SI－22	DP－58	
33	球状土錘	2.6	3.0	0.8	20.7	SI－24	DP－64	
34	球状土錘	3.6	3.6	1.0	37.6	SI－26	DP－71	
35	球状土錘	2.2	3.2	1.2	19.8	SI－26	DP－72	
36	球状土錘	2.9	2.5	0.8	17.5	SI－26	DP－73	
37	球状土錘	（4.0）	4.3	0.6	（65.8）	SI－28	DP－79	剥離欠損
38	球状土錘	3.1	4.2	1.0	51.5	SI－28	DP－80	
39	球状土錘	3.8	4.0	0.9	52.7	SI－28	DP－81	
40	球状土錘	4.4	3.7	1.0	49.0	SI－28	DP－82	
41	球状土錘	3.9	3.2	0.9	33.7	SI－28	DP－83	
42	球状土錘	3.6	3.8	0.9	47.0	SI－28	DP－84	
43	球状土錘	3.2	3.8	0.8	43.6	SI－28	DP－85	
44	球状土錘	3.5	3.8	0.9	39.8	SI－28	DP－86	
45	球状土錘	3.5	3.7	0.5	40.2	SI－28	DP－87	
46	球状土錘	3.4	3.3	0.8	35.6	SI－28	DP－88	
47	球状土錘	3.2	3.4	0.9	33.7	SI－28	DP－89	
48	球状土錘	3.5	3.3	0.8	30.5	SI－28	DP－90	
49	球状土錘	2.7	3.2	0.9	32.4	SI－28	DP－91	
50	球状土錘	3.1	3.2	0.9	30.3	SI－28	DP－92	
51	球状土錘	3.7	3.5	0.5	36.7	SI－28	DP－93	
52	球状土錘	3.3	3.2	0.7	30.8	SI－28	DP－94	
53	球状土錘	3.5	3.6	0.7	38.3	SI－28	DP－95	
第81図54	球状土錘	3.0	3.4	0.7	31.4	SI－28	DP－96	
55	球状土錘	3.2	3.2	0.7	31.1	SI－28	DP－97	
56	球状土錘	2.9	3.8	0.9	37.5	SI－28	DP－98	
57	球状土錘	3.6	3.4	0.8	36.5	SI－28	DP－99	
58	球状土錘	3.0	3.4	0.8	31.4	SI－28	DP－100	
59	球状土錘	4.0	3.2	0.8	31.2	SI－28	DP－101	
60	球状土錘	3.2	3.4	0.8	33.5	SI－28	DP－102	
61	球状土錘	3.3	3.5	0.7	33.8	SI－28	DP－103	
62	球状土錘	3.4	3.4	0.8	33.5	SI－28	DP－104	
63	球状土錘	2.9	3.3	0.8	30.5	SI－28	DP－105	
64	球状土錘	3.5	3.2	0.7	33.5	SI－28	DP－106	

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第81図65	球状土錘	3.0	(3.4)	0.7	(27.5)	SI－28	DP－107 剥離欠損
66	球状土錘	3.2	3.3	0.7	30.7	SI－28	DP－108
67	球状土錘	3.0	3.5	0.7	32.4	SI－28	DP－109
68	球状土錘	3.3	3.3	0.7	(30.3)	SI－28	DP－110 剥離欠損
69	球状土錘	2.9	3.6	0.9	32.6	SI－28	DP－111
70	球状土錘	2.9	3.3	0.7	27.8	SI－28	DP－112
71	球状土錘	3.3	3.3	0.7	33.8	SI－28	DP－113
72	球状土錘	3.4	3.3	0.9	34.4	SI－28	DP－114
73	球状土錘	3.3	3.4	0.9	(32.8)	SI－28	DP－115 剥離欠損
74	球状土錘	3.0	3.4	0.8	29.2	SI－28	DP－116
75	球状土錘	3.2	3.3	0.8	31.2	SI－28	DP－117
76	球状土錘	3.7	3.5	0.9	32.3	SI－28	DP－118
77	球状土錘	2.8	3.3	0.8	24.8	SI－28	DP－119
78	球状土錘	3.8	3.6	0.9	33.0	SI－28	DP－120
79	球状土錘	3.1	3.2	0.8	27.1	SI－28	DP－121
80	球状土錘	3.4	3.6	0.6	(34.2)	SI－28	DP－122 剥離欠損
81	球状土錘	3.3	3.5	0.5	25.3	SI－28	DP－123
82	球状土錘	2.3	2.9	0.6	18.0	SI－28	DP－124
83	球状土錘	2.5	2.4	0.5	12.6	SI－28	DP－125
84	球状土錘	3.7	3.5	0.9	26.4	SI－29	DP－128
85	球状土錘	2.9	2.6	0.7	16.7	SI－29	DP－129
86	球状土錘	2.3	3.0	0.9	19.1	表採	DP－132
87	球状土錘	3.2	4.0	1.0	46.3	表採	DP－133
88	球状土錘	2.5	3.5	0.7	25.5	表採	DP－134
89	球状土錘	2.3	3.2	0.8	22.2	表採	DP－136
90	球状土錘	3.1	3.3	(0.8)	(28.4)	表採	DP－137 剥離欠損
91	球状土錘	2.9	3.0	0.9	26.6	表採	DP－139
92	球状土錘	2.5	3.0	0.9	21.3	表採	DP－140
93	球状土錘	2.7	3.0	0.8	19.7	表採	DP－142
94	球状土錘	2.6	3.5	0.8	29.2	表採	DP－143
95	球状土錘	3.1	3.1	0.8	26.3	表採	DP－144
96	球状土錘	2.6	3.3	1.1	23.2	表採	DP－145
97	球状土錘	2.9	3.3	0.8	27.1	表採	DP－146
98	球状土錘	2.7	3.2	0.9	20.1	表採	DP－147
99	球状土錘	3.1	2.8	0.9	(13.9)	表採	DP－148 剥離欠損
100	球状土錘	3.6	3.6	0.9	37.2	表採	DP－149
101	球状土錘	2.7	2.9	0.6	18.9	表採	DP－150
102	球状土錘	3.9	4.2	0.9	64.2	表採	DP－174
103	球状土錘	2.4	2.6	1.1	11.8	表採	DP－175
104	球状土錘	2.2	3.3	1.1	22.9	表採	DP－176
105	球状土錘	2.7	3.3	0.9	26.7	表採	DP－186
第82図106	管状土錘	3.4	1.0	0.3	(2.2)	SI－1	DP－2 剥離欠損

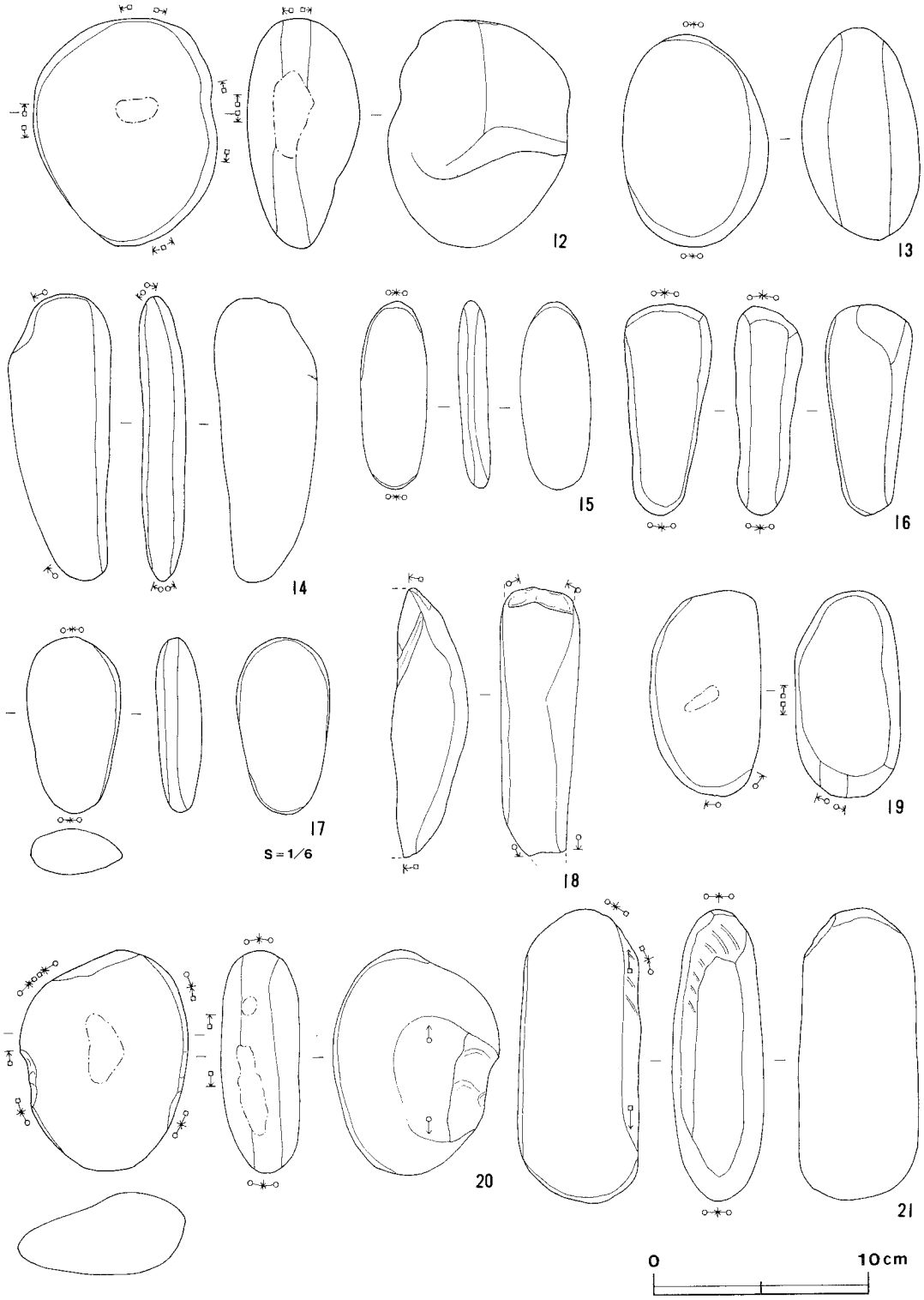
図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	孔径（cm）	重量（g）		
第82図107	管状土錘	2.7	0.8	0.2	1.6	SI－2	DP－4
108	管状土錘	3.2	0.7	0.3	1.4	SI－3	DP－6
109	管状土錘	3.7	0.9	0.2	(2.0)	SI－4	DP－11 剥離欠損
110	管状土錘	3.1	0.8	0.2	1.8	SI－4	DP－12
111	管状土錘	3.2	0.8	0.2	1.8	SI－4	DP－13
112	管状土錘	2.8	0.8	0.2	1.6	SI－4	DP－14
113	管状土錘	2.7	1.3	0.9	4.8	SI－5	DP－21
114	管状土錘	3.9	1.0	0.2	3.0	SI－5	DP－22
115	管状土錘	3.9	1.0	0.2	3.1	SI－5	DP－23
116	管状土錘	3.6	0.7	0.2	1.4	SI－5	DP－24
117	管状土錘	3.7	1.3	0.4	6.1	SI－8	DP－29
118	管状土錘	4.0	0.9	0.2	2.3	SI－10	DP－32
119	管状土錘	3.7	0.8	0.2	2.3	SI－11	DP－34
120	管状土錘	4.1	0.9	0.2	3.1	SI－12	DP－37
121	管状土錘	(3.4)	1.0	0.3	(2.9)	SI－12	DP－38 剥離欠損
122	管状土錘	3.5	0.9	0.2	2.2	SI－12	DP－39
123	管状土錘	3.4	0.9	0.2	1.8	SI－13	DP－40
124	管状土錘	3.3	0.7	0.4	1.4	SI－14	DP－46
125	管状土錘	2.5	0.6	0.3	0.8	SI－14	DP－47
126	管状土錘	3.7	0.8	0.3	2.3	SI－22	DP－59
127	管状土錘	3.3	0.9	0.3	2.2	SI－22	DP－60
128	管状土錘	3.2	0.9	0.2	2.5	SI－22	DP－61
129	管状土錘	3.2	0.8	0.2	2.1	SI－22	DP－62
130	管状土錘	(2.0)	0.7	0.2	(0.8)	SI－22	DP－63 剥離欠損
131	管状土錘	3.8	0.9	0.2	2.7	SI－24	DP－65
132	管状土錘	3.3	0.8	0.2	2.1	SI－24	DP－66
133	管状土錘	3.7	0.8	0.2	1.6	SI－25B	DP－67
134	管状土錘	3.0	0.7	0.2	1.2	SI－25B	DP－68
135	管状土錘	2.1	0.6	0.2	0.7	SI－25B	DP－69
136	管状土錘	3.1	0.9	0.2	1.7	SI－25B	DP－70
137	管状土錘	3.1	0.9	0.2	2.3	SI－27	DP－77
138	管状土錘	(2.7)	0.9	0.2	(1.4)	SI－27	DP－78 剥離欠損
139	管状土錘	(2.7)	0.7	0.3	(1.2)	SI－28	DP－127 剥離欠損
140	管状土錘	(2.3)	0.9	0.2	(1.9)	SI－29	DP－131
141	管状土錘	2.5	0.8	0.3	0.9	表採	DP－151
142	管状土錘	2.9	0.9	0.3	1.9	表採	DP－152
143	管状土錘	3.8	0.9	0.3	2.4	表採	DP－153
144	管状土錘	2.7	0.6	0.3	0.9	表採	DP－154
145	管状土錘	3.6	1.4	0.4	6.1	表採	DP－156
146	管状土錘	3.4	0.7	0.2	1.4	表採	DP－157
147	管状土錘	3.4	0.9	0.2	2.2	表採	DP－158
148	管状土錘	3.2	0.8	0.2	(1.4)	表採	DP－159 剥離欠損

図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第82図149	管状土錘	(2.7)	0.7	0.3	(1.0)	表採	DP－160 剝離欠損
150	管状土錘	3.3	0.8	0.2	1.8	表採	DP－162
151	管状土錘	3.0	0.8	0.1	1.5	表採	DP－163
152	管状土錘	2.9	0.8	0.2	1.4	表採	DP－164
153	管状土錘	4.5	1.3	0.3	5.5	表採	DP－165
154	管状土錘	(4.0)	1.6	(0.3)	(8.2)	表採	DP－166 剝離欠損
155	管状土錘	(3.8)	1.1	(0.2)	(3.9)	表採	DP－167 剝離欠損
156	管状土錘	3.6	1.3	0.3	5.2	表採	DP－168
157	管状土錘	(4.8)	1.0	(0.3)	(4.5)	表採	DP－169 剝離欠損
158	管状土錘	3.5	0.8	0.3	1.9	表採	DP－170
159	管状土錘	(3.0)	0.9	0.2	(1.8)	表採	DP－171 剝離欠損
160	管状土錘	(2.6)	0.8	(0.2)	(1.5)	表採	DP－172 剝離欠損
161	管状土錘	(2.6)	0.7	0.2	(1.1)	表採	DP－173 剝離欠損
162	管状土錘	2.7	0.7	0.2	1.3	表採	DP－177
163	管状土錘	(3.1)	0.9	0.2	(2.3)	表採	DP－178 剝離欠損
164	管状土錘	2.3	0.8	0.2	1.2	表採	DP－179
165	管状土錘	3.0	0.7	0.2	1.5	表採	DP－180
166	管状土錘	3.5	0.9	0.3	2.0	表採	DP－181
167	管状土錘	3.6	0.9	0.2	(2.4)	表採	DP－182 剝離欠損
168	管状土錘	2.7	0.7	0.2	(1.3)	表採	DP－183 剝離欠損
169	管状土錘	3.3	0.9	0.1	(1.9)	表採	DP－184 剝離欠損
170	管状土錘	2.8	0.7	0.2	0.9	表採	DP－185
171	管状土錘	3.2	0.9	0.2	2.7	表採	DP－188
172	管状土錘	3.0	0.8	0.2	1.8	SD－2	DP－190
173	管状土錘	3.7	0.9	0.2	2.6	SK－3	DP－189
174	管状土錘	3.8	3.4	0.5	45.7	SI 8	DP－30
175	管状土錘	4.2	2.9	0.8	29.6	SI－15	DP－49
176	管状土錘	4.7	(2.0)	(0.9)	(16.5)	SI－26	DP－75(50%)
177	管状土錘	5.6	2.8	0.8	48.2	表採	DP－187

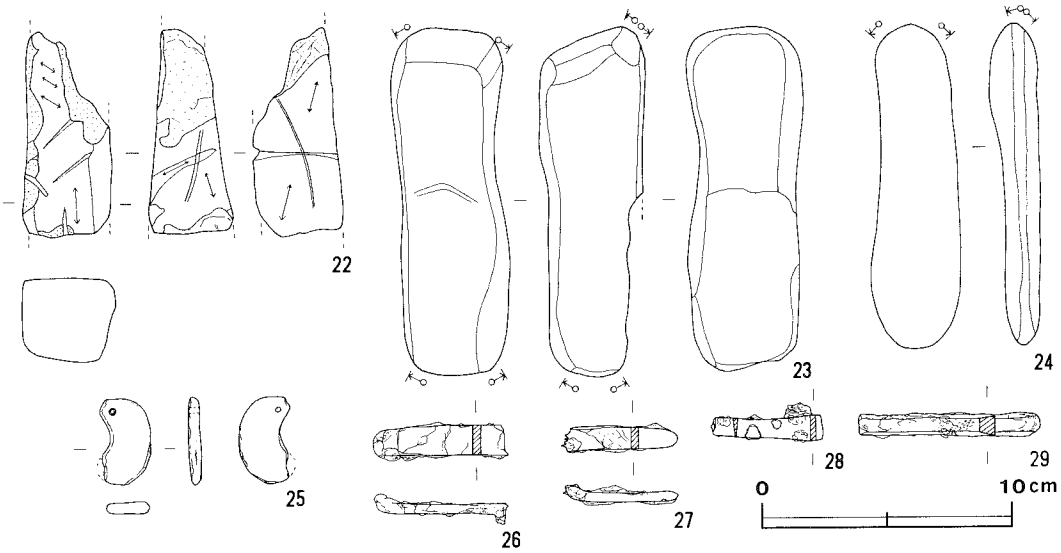
図版番号	器種	法量				出土地点	備考
		厚さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第82図178	紡錘車	2.3	4.5	0.5	54.6	SI－14	DP－48
179	紡錘車	(3.2)	(5.9)	(2.0)	(62.8)	SI－26	DP－76(50%) 剝離欠損
180	紡錘車	(2.3)	5.5	0.6	(80.8)	SI－16	DP－51 剝離欠損
181	有孔円板	1.0	3.4	0.8	4.7	SI－20	DP－54



第83図　石器実測図 (1)



第84図　石器実測図 (2)



第85図　石器・石製品・鉄製品実測図 (3)

表5　石器・石製品一覧表

図版番号	器種	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	台帳番号	備考
第83図 1	石鏃	19.1	8.7	1.8	390.0	粘板岩	SI－4	Q1	
2	敲石	16.9	8.9	7.0	1273.0	流紋岩	SI－5	Q2	
3	不明	9.4	4.2	3.4	144.4	チャート	SI－5	Q3	
4	敲石	11.1	3.5	4.1	200.0	粘板岩	SI－5	Q4	
5	石皿	17.5	14.5	3.9	1263.3	砂岩	SI－5	Q5	
6	磨石	10.6	5.0	4.3	295.3	安山岩	SI－6	Q6	
7	石棒	13.0	2.1	2.0	57.1	砂岩	SI－8	Q7	
8	不明	6.0	1.5	1.4	13.1	粘板岩	SI－8	Q8	
9	磨石	25.0	8.2	5.2	1214.5	砂岩	SI－14	Q9	
10	敲石	14.0	8.5	4.0	690.3	砂岩	SI－14	Q10	
11	磨石	7.8	7.2	3.5	265.1	石英	SI－14	Q11	
第84図 12	磨石	10.7	8.1	5.1	592.1	安山岩	SI－14	Q12	
13	磨石	10.0	6.7	5.4	540.0	砂岩	SI－14	Q13	
14	磨石	13.4	4.8	2.3	170.6	粘板岩	SI－14	Q14	
15	磨石	8.9	3.2	1.4	64.9	砂岩	SI－14	Q15	
16	磨石	10.6	4.1	3.2	167.6	安山岩	SI－14	Q16	
17	磨石	16.5	8.7	4.3	933.5	泊岩	SI－15	Q17	
18	磨石	12.7	3.7	3.7	249.5	結晶片岩	SI－15	Q18	
19	敲石	9.7	5.2	4.9	402.0	流紋岩	SI－26	Q19	
20	磨石	10.5	7.8	3.6	401.7	砂岩	SI－26	Q20	
21	磨石	13.9	5.6	4.3	549.2	砂岩	SI－30	Q21	
第85図 22	砥石	(8.3)	3.6	3.4	(137.1)	流紋岩	表採	Q22	
23	磨石	14.0	4.6	4.1	377.0	流紋岩	表採	Q23	
24	磨石	13.0	3.7	1.9	137.9	安山岩	表採	Q24	
25	勾玉	3.5	2.0	0.5	(5.2)	滑石	表採	Q25	90%

表6　鉄製品一覧表

図版番号	器　種	法　量			備　考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	
第85図 26	不明鉄製品	（5.4）	1.2	0.3	SI－5の南部覆土中層から出土　M1
27	不明鉄製品	（4.5）	0.8	0.3	SI－5の南部覆土中層から出土　M2
28	刀　子	（4.5）	1.0	0.2	SI－17の南部覆土中層から出土　M3
29	鏃	（7.0）	0.8	0.6	SI－25Bの南西部覆土中層から出土　M4

6　遺構外出土遺物

当調査区内の遺構外から出土した遺物について，一覧表，実測図及び拓影図でその一部を紹介する。

縄文式土器拓影図（第86図）

第1群の土器　縄文時代早期に比定される土器を本群とする。

a類　芽山式に比定される土器を本類とする。

1，2は胴部片で，沈線文が施されている。

第2群の土器　縄文時代前期に比定される土器を本群とする。

a類　関山式に比定される土器を本類とする。

3～5は，口縁部片で，狭い無文帯を有し，ループ文が施されている。6～13は胴部片である。6～9は，単節の縄文が施され，10～13は，組紐による縄文が施されている。

b類　黒浜式に比定される土器を本類とする。

14～20は，胴部片である。14，15は羽状縄文が施されており，16は単節LRの縄文が施されている。17は単節RLの縄文が施され，18～20は附加条縄文が施されている。

c類　浮島式に比定される土器を本類とする。

21は，口縁部片で，2本の沈線文の間に刻み目が施されている。22～25は，胴部片であり，2本1条の沈線文が施されている。

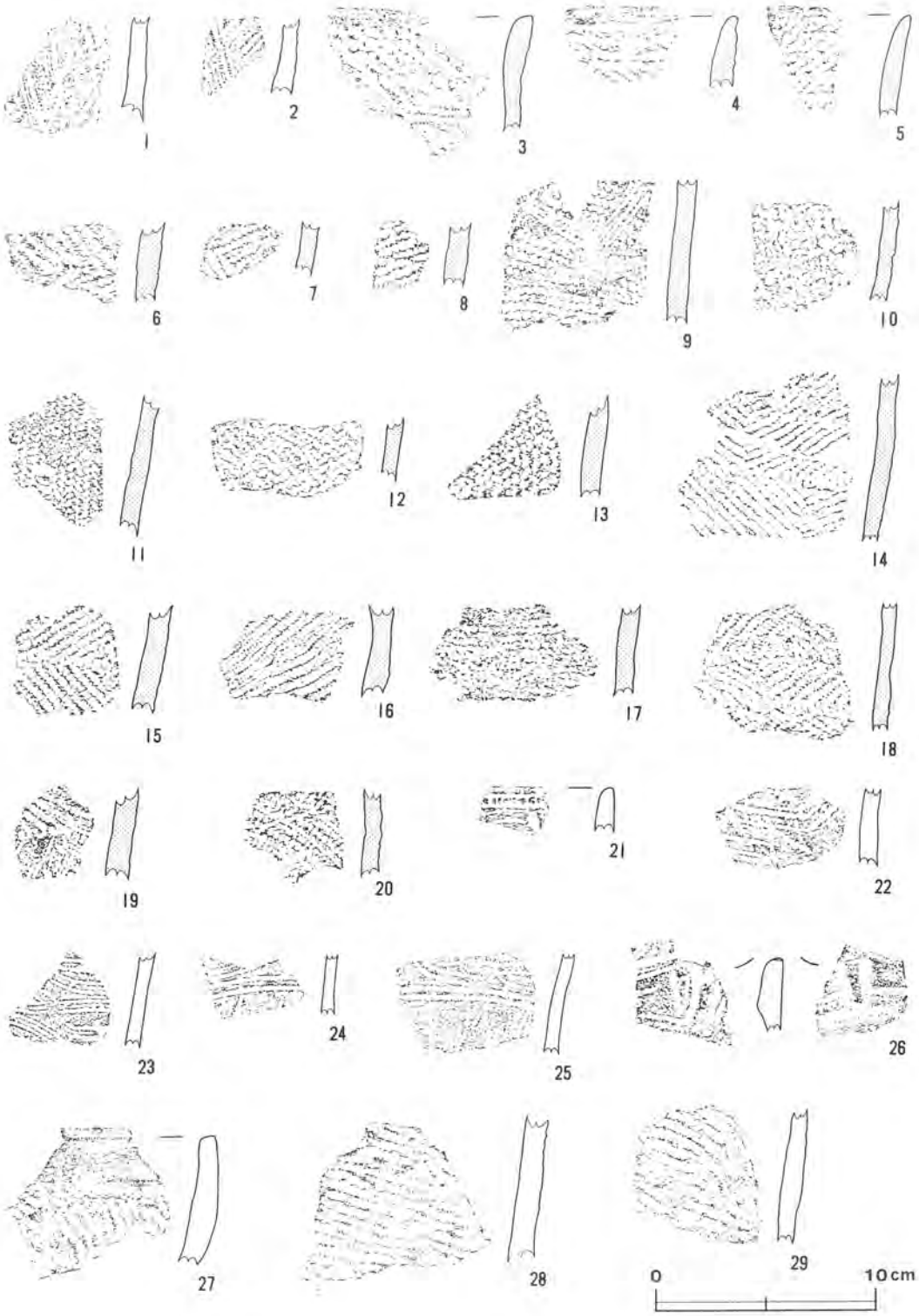
第3群の土器　縄文時代中期に比定される土器を本群とする。

a類　五領ケ台式に比定される土器を本類とする。

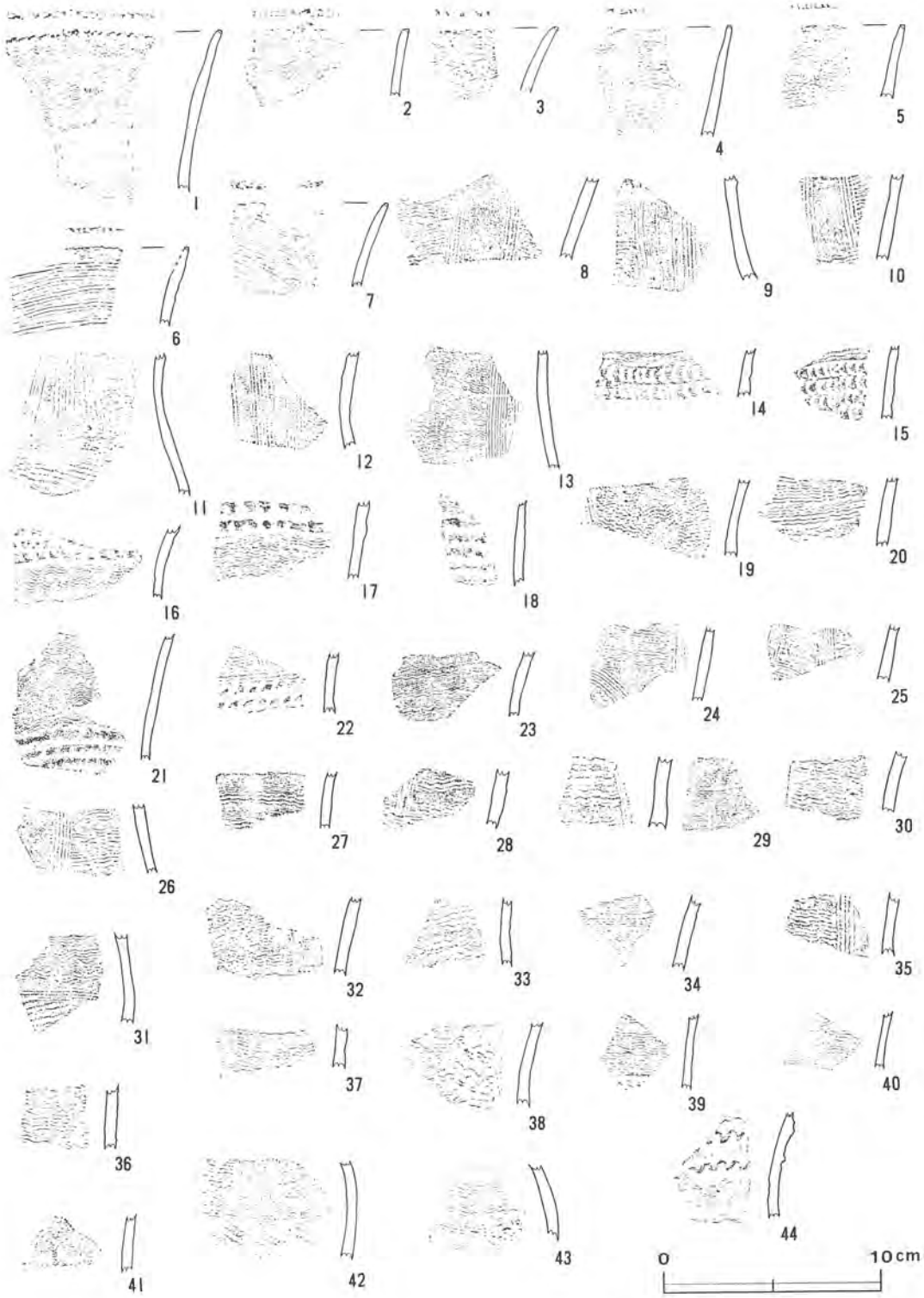
26は，口縁部片である。口唇部に刻み目を有し，小波状を呈している。沈線により区画し，内外面に断面三角の隆帯を有している。

b類　加曽利E式に比定される土器を本類とする。

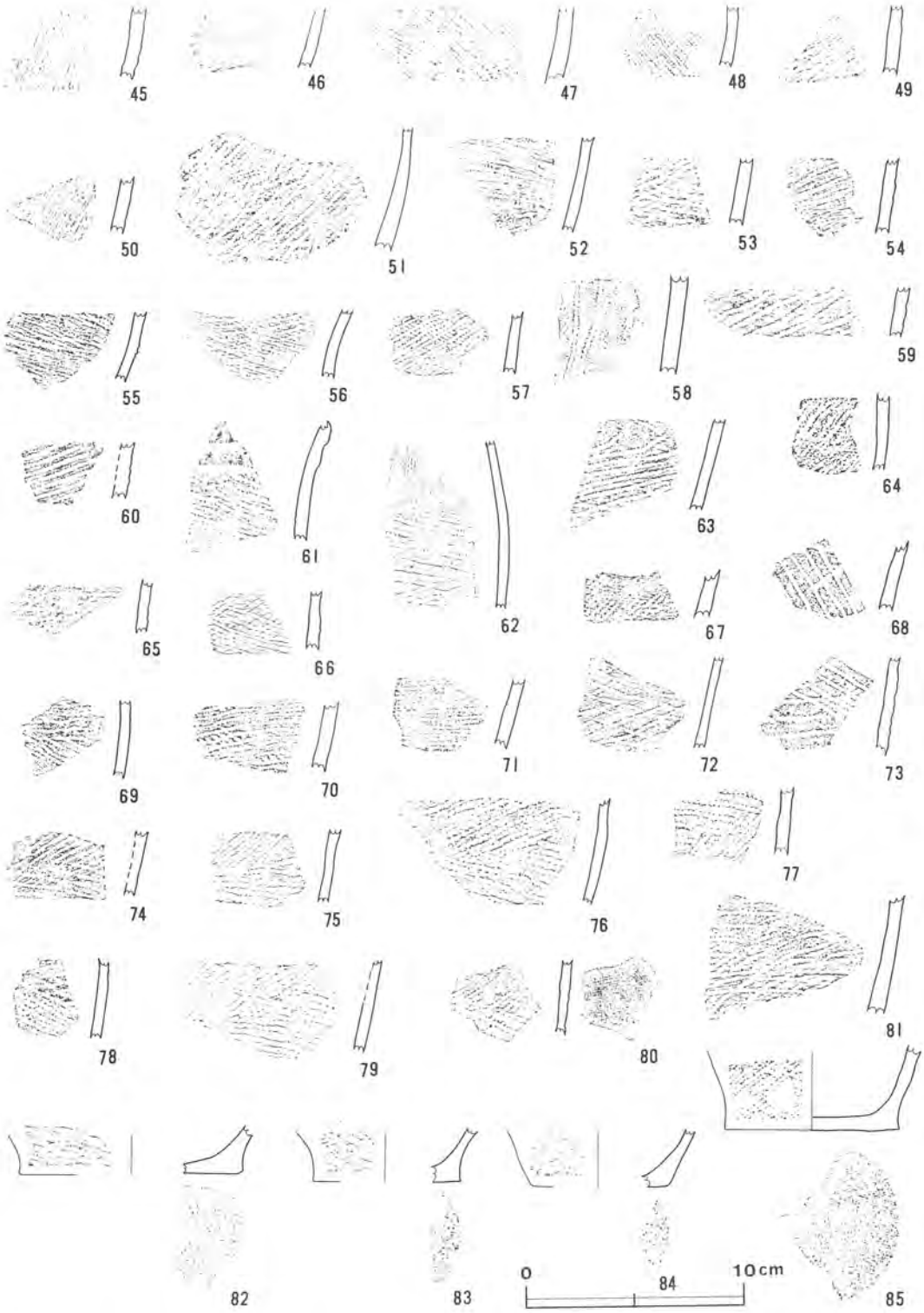
27は，口縁部片で，無文帯を有し，地文に縄文が施されている。28，29は，胴部片であり，地文に縄文が施されている。



第86図　遺構外出土遺物拓影図 (1)



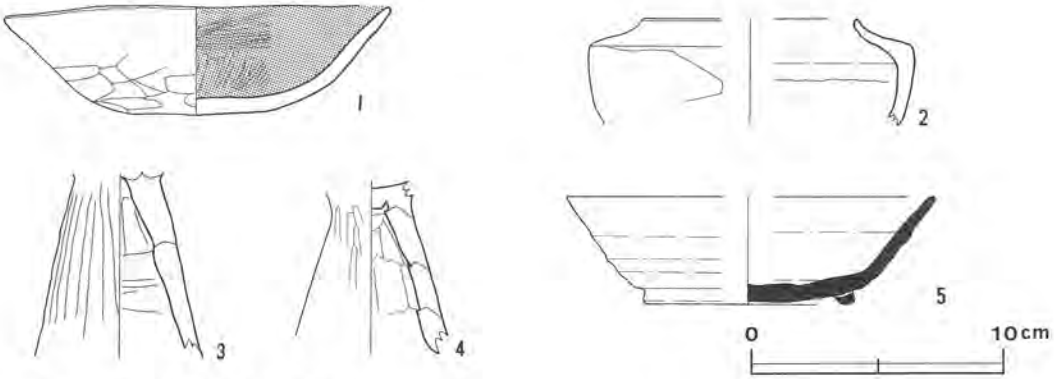
第87図　遺構外出土遺物拓影図 (2)



第88図　遺構外出土遺物実測・拓影図 (3)

弥生式土器拓影図（第87・88図）

1〜7は口縁部片で，口唇部に刻み目を有する。1，2は共に口唇部に突起を有し，同一個体と思われる。1〜5は，横走波状文が施されており，6は横位の沈線が施され，7は附加条2種の縄文が施されている。8〜44は，頸部片である。8〜13は，4〜7本単位の縦位の沈線が施されている。14〜18は，櫛描波状文の上位及び下位に隆帯を有し，14は隆帯に爪形文が施されている。19〜43は，3〜6本1条の横走波状文が施されている。24，25は連孤文が，26は格子目文が施されている。44は，隆帯文が施され，十王台式土器とは別のものと思われる。45〜81は，胴部片である。45〜50は，附加条1種の縄文が施されている。54，55は反の撚りの施文であり，その他は，附加条2種の縄文が施され，76〜79は，羽状を構成している。82〜85は，胴部から底部片である。胴部には，附加条2種の縄文が施され，底部には布目痕を有している。



第89図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土土器観察表

図版番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	坏 土師器	A 15.4 B 4.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ，内面縦位のヘラ磨き。口縁部外面横ナデ，内面斜位のヘラ磨き。内面赤彩。	砂粒・パミス 明赤褐色 普通	P 190　100% C 2 g_3 区の覆土
2	短頸壺 土師器	A〔8.5〕 B（4.3）	肩部が張り，頸部は内傾する。口縁部は，僅かに立ち上がる。	頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 192　10% B 2 h_6 区の覆土
3	高坏 土師器	B（7.4）	脚部片。脚部は外反して外下方に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ，内面横位のヘラ削り。	砂粒・パミス 橙色 普通	P 193　30% B 2 h_9 区の覆土
4	高坏 土師器	B（6.9）	脚部片。脚部は外反して外下方に開く。内部上端に接合痕を残す。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面縦位のヘラ削り。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	P 195　20% B 2 i_1 区の覆土
5	高台付坏 須恵器	A〔14.0〕 B 4.3 D〔8.2〕 E 0.5	平底。「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	水挽き。 高台貼り付け。	砂粒・長石 灰白色 不良	P 196　40% B 3 b_1 区の覆土

第3節　考　　察

ヨナ川遺跡の調査の結果，竪穴住居跡31軒が検出された。住居跡から出土した遺物の量は，遺物収納箱（60 × 40 × 20 cm）に40箱である。出土遺物は，土師器，須恵器が主で，他に弥生式土器片も少量出土している。器種は，日常使用される甕，壷及び坏等が主である。

当遺跡の調査は，幅15 m程，長さ150 m程の限られた範囲であるため，検出された遺構から集落について述べることはできないが，調査によって明らかになった住居跡の構造や出土土器の特徴から，Ⅰ期からⅥ期に分け，時代毎に概観したい。

なお，調査区域の関係で全掘できずに住居跡の規模，平面形のわからないものについては，資料から省いた。

Ⅰ期　弥生時代後期

Ⅱ期　古墳時代中期（和泉期）

Ⅲ期　古墳時代後期（鬼高期－1）

Ⅳ期　古墳時代後期（鬼高期－2）

Ⅴ期　古墳時代後期（鬼高期－3）

Ⅵ期　奈良時代から平安時代

1　弥生時代

弥生時代の住居跡は4軒検出され，住居跡内からは弥生式土器の壷形土器片が出土している。出土遺物のほとんどが，弥生時代後期に比定されるものであることから，Ⅰ期とした。

Ⅰ期　弥生時代後期

①出土土器について（第91図）

Ⅰ期の土器は，弥生式土器の壷形土器片である。壷の口縁部片1には，櫛描の横走波状文が施され，口唇部に刻み目が施されている。頸部片2は，5本1条の櫛描の波状文と，6本1条の沈線が施されており，胴部片3は，附加条2種の縄文が施され，底部片4は，布目痕を有している。内面には横ナデが施されており，弥生時代後期の範疇にある十王台式土器に比定されるものである。十王台式土器の類例としては，大洗町長峯遺跡，髭釜遺跡があり，両遺跡からは，壷形土器の完形品が出土している。

②竪穴住居跡について

Ⅰ期に属する住居跡は，第14号住居跡である。規模及び平面形をみると，長軸5.65 m，短軸4.70 m，床面積26.6 ㎡程の隅丸長方形を呈し，長軸方向は，N－34°－Eを指している。地床炉が付設されており，主柱穴も4か所検出されている。大洗町長峯遺跡，髭釜遺跡からも，隅丸長方

形を呈し，炉をもつ住居跡が報告されており，本跡とほぼ同時期のものと思われる。

2　古墳時代

古墳時代の住居跡は24軒検出され，最も数が多い。ここでは，古墳時代を4つの時期に分け，古墳時代中期（和泉期）をⅡ期，古墳時代後期（鬼高期）をⅢ期からⅤ期として記述する。

Ⅱ期　古墳時代中期（和泉期）

①出土土器について（第91図）

Ⅱ期の土器は，土師器の甕，高坏及び坩等である。甕5は，胴部が球体をなし，中位に最大径を有し，口縁部は外反している。胴部の外面にヘラナデ，口縁部内・外面に横ナデが施されている。高坏6は，脚部は中空でラッパ状に開き，坏部は内彎しながら立ち上がっている。脚部外面に縦位のヘラ磨き，坏部外面にヘラナデ，口縁部内・外面には横ナデが施されている。坩は，中位に張りをもつ球形状の胴部と，大きく開く口縁部が特徴的であり，口縁部が直線的に外傾するもの7，やや内彎するもの8がある。龍ヶ崎市南三島遺跡に類例がみられる。

当該期の土器の特徴としては，甕の胴部が球状を呈していることや，全体に器厚が薄いこと等が挙げられる。

②竪穴住居跡について

Ⅱ期に属する住居跡は，第17号住居跡である。規模及び平面形をみると，長軸5.64 m，短軸5.44 m，床面積30.7 ㎡程の方形を呈し，長軸方向は，N－46°－Wを指している。炉は，床面中央部からやや西側に付設されている。主柱穴が4か所検出され，南側コーナーからは貯蔵穴も検出されている。本期の住居跡には，炉が付設され，貯蔵穴を有し，主柱穴も4か所検出されている。Ⅰ期に比べ，規模は大きくなり，平面形は，方形を呈するようになる。Ⅲ期の住居跡と比較すると，掘り込みも浅く，壁高は低い。

Ⅲ期　古墳時代後期（鬼高期－1）

①出土土器について（第91図）

Ⅲ期の土器は，土師器の甕，坏及び須恵器の蓋等である。甕9は，平底で，胴部は内彎し，口縁部は外反している。胴部外面にヘラナデ，口縁部内・外面に横ナデが施されている。坏は，丸底で，体部は内彎しながら立ち上がっている。口縁部の幅が広く外傾し体部との境に稜を有するもの10，体部内面の口縁部との境に稜を有するもの11，口縁部が直立するもの12がある。体部外面にヘラ削り，内面にヘラ磨きが施され，赤彩されている。須恵器の蓋13は天井部に丸みをもち，口縁部には明瞭な稜を有し，口縁端部は内傾している。この蓋を陶邑の高蔵窯跡群での編年と対比させるとTK－47出土の須恵器と併行する時期のものと捉えられる。時期は，6世紀初

頭と考えられる。鉾田町烟田遺跡からは，当該期の類例が報告されている。

②竪穴住居跡について

Ⅲ期に属する住居跡は，第28号住居跡である。規模及び平面形をみると，長軸5.40 m，短軸5.35 m，床面積28.9 ㎡の方形を呈し，主軸方向は，N－8°－Eを指している。竈は，北壁中央部に付設され，主柱穴も4か所検出されている。Ⅱ期と比べ，掘り込みがやや深いものの，規模及び平面形については大きな変化はない。しかし，Ⅱ期にはみられなかった竈が，この時期には検出されている。

Ⅳ期　古墳時代後期（鬼高期－2）

①出土土器について（第92図）

Ⅳ期の土器は，土師器の甑，坏等である。甑1は，胴部は丸く張り，口縁部は外反している。胴部外面にヘラ削りが施されている。坏は，丸底で，体部は内彎しながら立ち上がっている。口縁部が直立しているもの2，口縁部が内傾しているもの3がある。体部外面にヘラ削りが施され，どちらも黒色処理がなされている。

時期については，当該期の土器群の器形等の特徴が，Ⅲ期よりも器厚が薄くなっていることから新しく，Ⅴ期の甑に比べては，プロポーションが古く，坏の口径も大きく器高も高いこと等から，別にⅣ期として時期区分をした。

②竪穴住居跡について

Ⅳ期に属する住居跡は，第4，12，22号住居跡の3軒である。規模及び平面形についてみると，長軸が4 m以上5 m未満1軒，5 m以上6 m未満2軒，平均床面積28.4 ㎡で，いずれの住居跡も方形を呈している。主軸方向は，N－9°－Eを指しているものが1軒，N－19°～21°－Wを指しているものが2軒である。竈は，北壁あるいは北西壁中央部に付設されている。主柱穴は，2軒の住居跡からは4か所づつ検出されている。Ⅲ期と比べ，規模や平面形の変化は見られない。

Ⅴ期　古墳時代後期（鬼高期－3）

①出土土器について（第92図）

Ⅴ期の土器は，土師器の甕，甑，坏，高坏及び須恵器の蓋，提瓶等である。甕4は，平底で，胴中央部に最大径を有し，口縁部は外反している。胴部外面には，ヘラ削りが施されている。甑5は，二孔式で，胴部は外傾気味に立ち上がり，口縁部は外反している。Ⅳ期の甑に比べ，胴部の膨らみがなくなり，直線的になっている。坏は，口縁部が外傾するもの6，口縁部がやや内傾し，体部との境に明瞭な稜を有するもの7，黒色処理がなされているもの8がみられる。9の高坏は，模倣坏に脚を付けたもので，坏部の内・外面に黒色処理が施されている。千葉県木更津市

花山遺跡に類例がみられる。いずれも，体部外面にヘラ削りが施されている。Ⅳ期の土師器の坏に比べ，口縁部が短くなり，器高も低くなるのが特徴的である。須恵器の蓋10は，天井部が平坦であり，口縁部内側に不明瞭な段を有している。この蓋を陶邑の高蔵窯跡群での編年と対比させるとTK－209出土の須恵器に併行する時期のものと捉えられる。時期は，6世紀後葉から7世紀初頭と考えられる。

②竪穴住居跡について

Ⅴ期に属する住居跡は，第1，5，16，24号住居跡の4軒である。規模及び平面形についてみると，長軸が，5m以上6m未満3軒，6m以上1軒，平均床面積33.0㎡で，いずれも方形を呈している。第5号住居跡は，当調査区で最大規模を有している。主軸方向は，N－34°－Wを指している1軒を除いて，他の3軒は，N－8°～0°－Wの範囲に収まる。竈は，北壁及び北西壁に付設されている。主柱穴は，3軒の住居跡からいずれも4か所の主柱穴が検出されている。Ⅴ期の住居跡の規模が，当遺跡の時期としては，最も大きくなっている。

古墳時代後期（鬼高期）は，Ⅲ期～Ⅴ期に分けたが，住居跡の規模については，若干の変化があるものの，平面形や竈，主柱穴等の形態については，大きな変化が見られない。

3　奈良・平安時代

奈良時代末期から平安時代初期の住居跡は3軒検出されたが，最も数が少ない。出土遺物としては，土師器の甕，須恵器の坏がある。時期区分は，当調査区のⅥ期とした。

Ⅵ期　奈良時代から平安時代

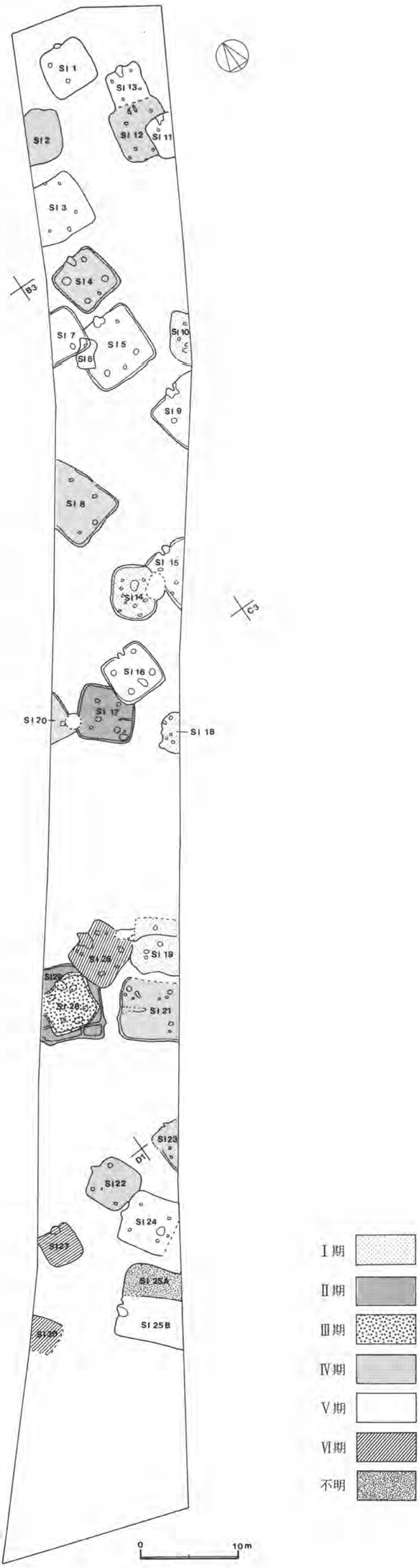
①出土土器について（第92図）

Ⅵ期の土器は，土師器の甕，須恵器の坏等である。甕11は，口縁部が外反し，口唇部はつまみ上げられている。頸部から口縁部にかけて内・外面横ナデが施されている。須恵器の坏12は，平底で，体部は外傾し直線的に立ち上がっている。底部全面及び体部下端に回転ヘラ削りが施され，体部内・外面には横ナデが施されている。この坏を木葉下窯跡の編年に対比すると，器形や技法の特徴から8世紀後葉から9世紀初頭に比定されるものと思われる。

②竪穴住居跡について

Ⅵ期に属する住居跡は，第26，27号住居跡である。規模及び平面形をみると，第26号住居跡の長軸は5.36m，第27号住居跡の長軸は3.94mを測り，どちらも方形を呈し，主軸方向は，N－15°－WとN－8°－Eを指している。竈は，北壁中央部に付設されている。主柱穴は，第26号住居跡から4か所検出されているが，第27号住居跡については，撹乱を受けており確認できなかった。

古墳時代後期と比べ，平面形については，どちらも方形を呈しているが，規模については小規模化し，第27号住居跡（15.2㎡）のような小さな住居跡が検出されている。



第90図　ヨナ川遺跡時期別住居跡配置図

当調査区で検出された土器と竪穴住居跡について，Ⅵ期に分け，時期毎に概観してきた。

竪穴住居跡についてみると，弥生時代後期には隅丸長方形を呈していた平面形が，古墳時代中期には方形を呈するようになるが，その後，平面形については，奈良・平安時代まで大きな変化はみられない。規模においては，古墳時代後期に大きさのピークを迎え，特に第5号住居跡の床面積は，約48.8㎡を測り，当遺跡の最大規模を有している。しかし，奈良・平安時代になると，その規模は小型化し，当該期の第27号住居跡の床面積は，約15.2㎡を測り，当遺跡では最小規模である。

また，同時期においても第5号住居跡（約48.8㎡）と第16号住居跡（約26.7㎡）のように，大きさの異なる住居跡があり，集落内に貧富の差や階層が存在していた可能性が考えられる。

出土土器についてみると，古墳時代中期には，胴部が球状を呈した丸底の甕が目立ったが，古墳時代後期になると，胴部が長胴化した平底の甕が多くなっている。丁度この時期には，炉から竈へと住居跡の形態も変化をみせた時期であり，それに伴って日常生活において煮炊きや貯蔵等に使用していた甕にも，変化があったことが考えられる。古墳時代後期には，丸底で体部が内彎し，口縁部が内傾，直立，外傾というようなバラエティをみせていた土師器の坏が，奈良・平安時代になるにつれ，平底で体部が直線的に外傾するという，ほぼ均一化された形の須恵器の坏に取って替わっている。

最後に，今回調査した台地上には，弥生時代後期から人々が定住し，古墳時代を経て，平安時代まで継続的あるいは断続的に集落が形成され，生活が営まれてきたものと思われる。

これらの土器の分類は，大洗町長峯遺跡，髭釜遺跡や，他の地域（鉾田町烟田遺跡，龍ヶ崎市三島遺跡等）の土器の編年を参考にしているが，隣接する周辺地域の資料の増加とともに，更に検討が加えられることを期待している。

注・引用参考文献

(1) 大洗町教育委員会 「長峰遺跡」 1973年

(2) 大洗町教育委員会 「髭釜遺跡」 1980年

(3) 茨城県教育財団 「南三島遺跡(3,4区)(Ⅱ)」 茨城県教育財団文化財調査報告第49集 1989年

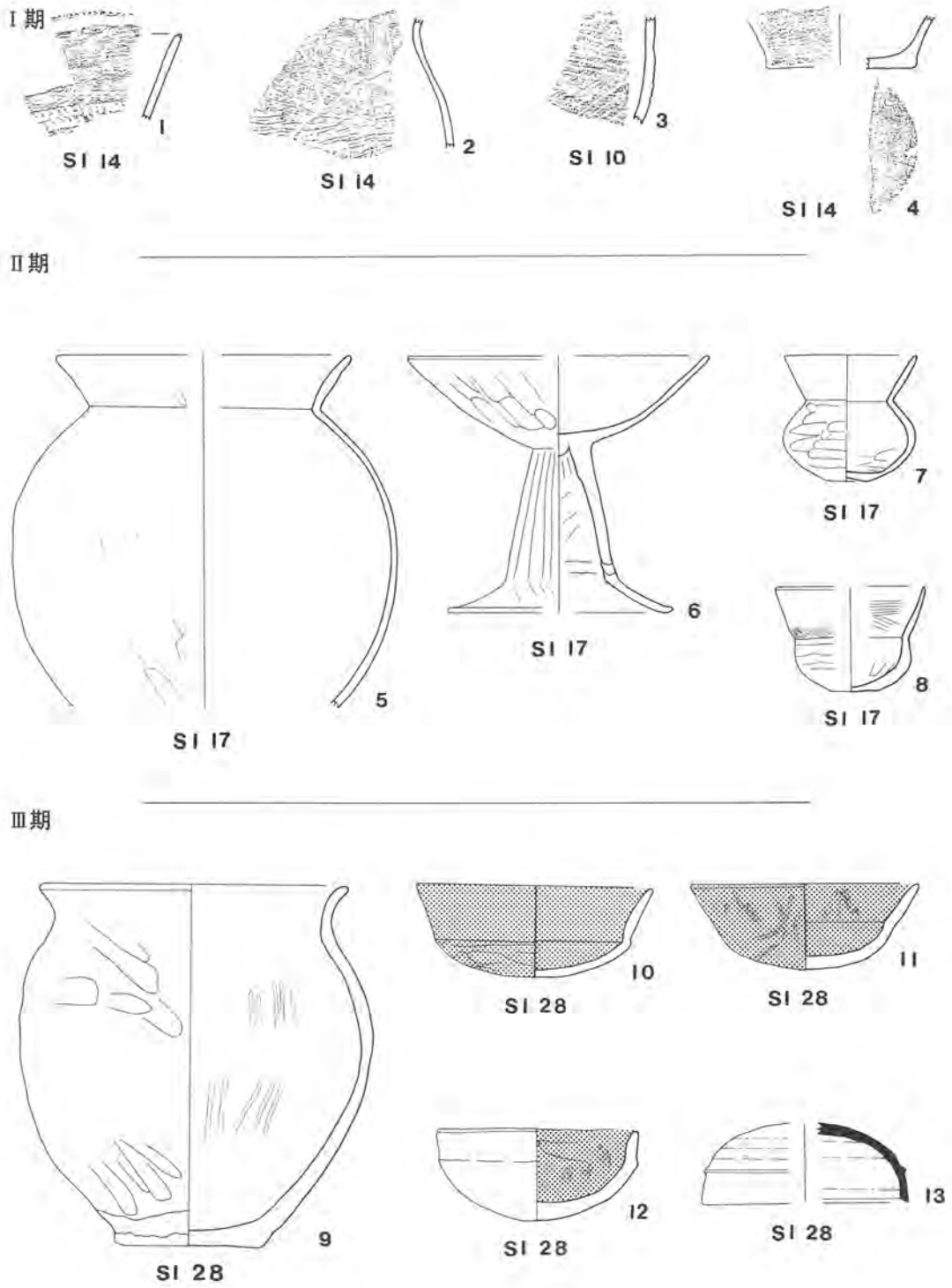
(4) 茨城県教育財団 「烟田遺跡」 鹿島線関係遺跡発掘調査報告Ⅵ 1980年

(5) 君津郡市文化財センター 「花山遺跡」 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第38集 1988年

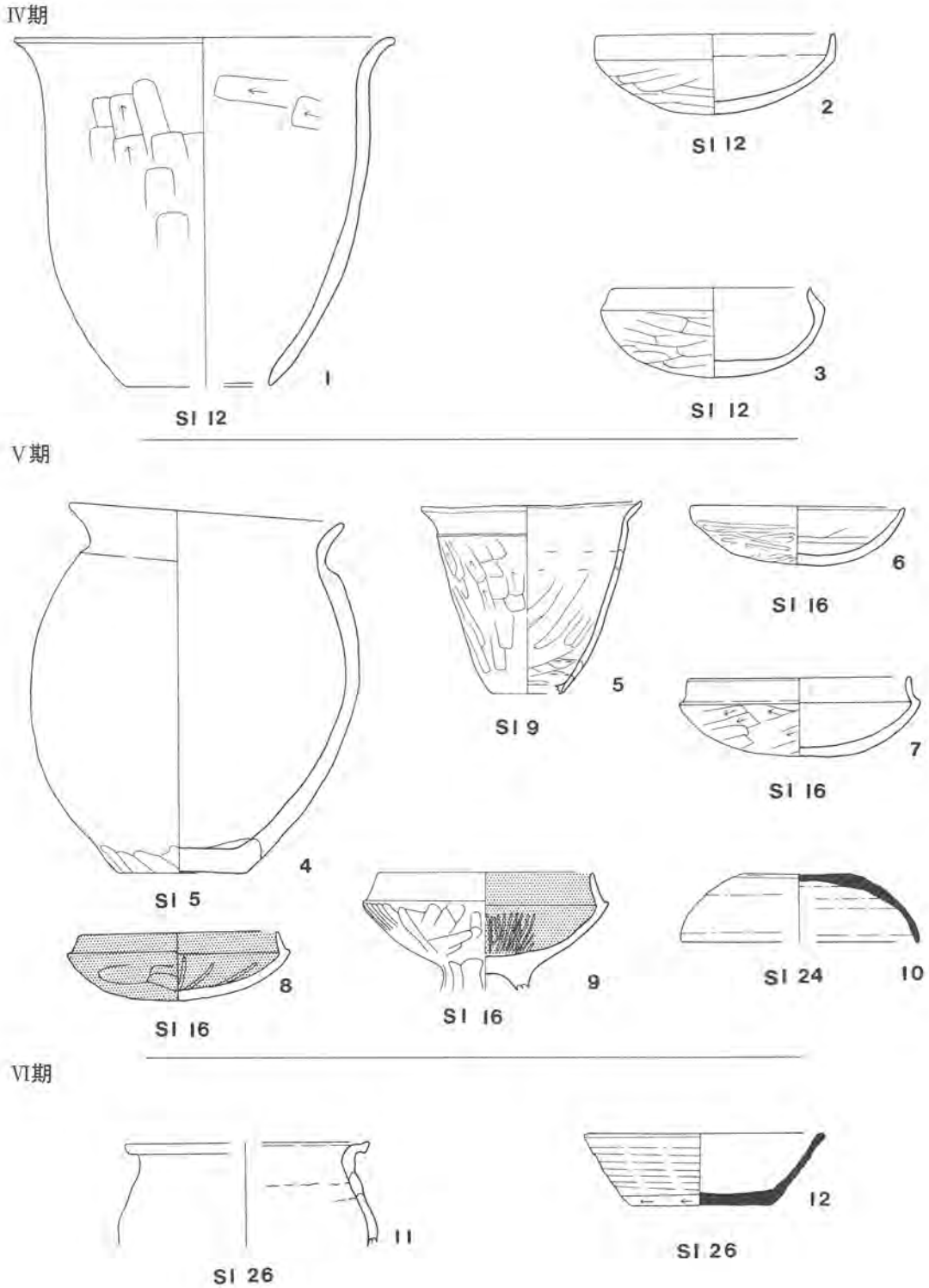
(6) 湖西市教育委員会 「西笠子第64号窯跡発掘調査報告書」 1987年

(7) 田辺昭三 『須恵器大成』 1981年

(8) 中村浩 『須恵器』 考古学ライブラリー5 1981年


Ⅰ期
1
SI 14
2
SI 14
3
SI 10
4
SI 14
Ⅱ期
5
SI 17
6
SI 17
7
SI 17
8
SI 17
Ⅲ期
9
SI 28
10
SI 28
11
SI 28
12
SI 28
13
SI 28

第91図　土器分類図 (1)


IV期
1
SI 12
2
SI 12
3
SI 12
V期
4
SI 5
5
SI 9
6
SI 16
7
SI 16
8
SI 16
9
SI 16
SI 24
10
VI期
11
SI 26
12
SI 26

第92図　土器分類図 (2)

第93図　大館・小館遺跡地形及び調査区域図

第５章　大館遺跡・小館遺跡

第１節　大館遺跡

１　遺跡の概要

大館遺跡は，大洗町の南西部，ヨナ川遺跡の南西約１kmの，西側に涸沼を臨む舌状台地の先端部に位置している。大館の東側は，台地が広がり畑地となっており，南側から西側にかけては，沖積低地が開け，水田地帯となっている。北側には，小さな支谷を挟み，約50ｍ程離れて小館遺跡が位置している。台地面と低地面の比高は，20ｍ程を測り，館跡は，耕作等によって一部削られた部分があるものの，土塁や堀を築いた跡が窺える。

調査区は，涸沼に面した大館の西側斜面の一部，面積は1,587㎡であり，標高は，約５～18ｍを測る。現況は，杉混じりの雑木林である。

調査の結果，斜面部に人為的に削平した跡が部分的にみられ，城郭としての防禦的機能を強化したことが窺える。

遺物は，出土しなかった。

２　調査経過と方法

当調査区の調査は，平成２年１月17日～３月26日まで実施した。調査区内に３本のトレンチをほぼ東西に設定し，北側からＡトレンチ，Ｂトレンチ，Ｃトレンチとした。規模は，Ａトレンチ幅1.5ｍ長さ29ｍ，Ｂトレンチ幅1.5ｍ長さ24ｍ，Ｃトレンチ幅1.5ｍ長さ20ｍ，と斜面の長さに合わせて掘削した。

調査は，トレンチ設定後，表土層を重機により掘削し，その後人力でトレンチ内を掘削して，土層断面を観察した。トレンチは，実測，写真撮影が済み次第，安全対策を施して，３月26日にはすべての調査を終了した。

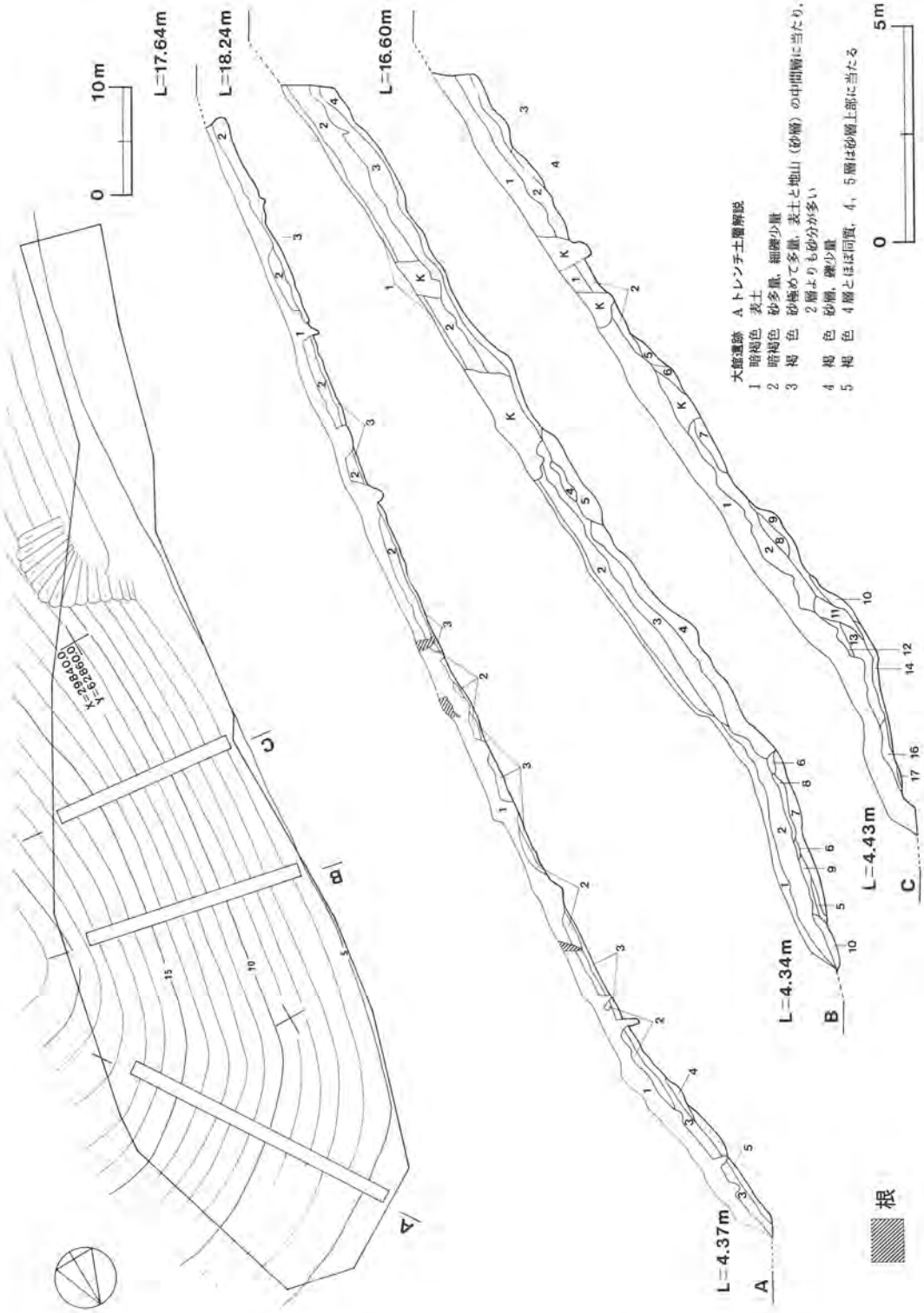
３　調査結果

(1)　Ａトレンチ（第94図）

Ａトレンチは，調査区の北部，大館の西側斜面と北側斜面の境で，尾根の部分に設定し，層の厚さは，60cm程である。層位は，第１層から第５層まで分けることができる。第１層は，表土であり，暗褐色を呈している。第２層は，表土と砂の混じった暗褐色土層，第３層から第５層までは，褐色を呈した土層であり，砂や礫の混じり具合で細分できる。第１層から第５層まで，地山に対してほぼ平行の層をなし，自然堆積の状況を呈している。

(2)　Ｂトレンチ（第94図）

Ｂトレンチは，調査区の中央部，大館の西側斜面中央部に設定し，層の厚さは，60cm～120



第94図　大館遺跡A・B・Cトレンチ土層断面・トレンチ設定図

大館遺跡　Bトレンチ土層解説

1　褐　色　表土
2　暗褐色　ローム粒子・砂少量，粘性，しまり普通
3　褐　色　黒色土少量
4　褐　色　黒色土・砂少量
5　黄褐色　砂層，礫多量
6　黒褐色　黒色土と砂の混じり，礫少量
7　黒褐色　黒色土層，砂・礫少量，粘性，しまり有り
8　褐　色　砂，表土の混じり，礫少量
9　褐　色　砂層，砂，表土の混じり
10　黒褐色　砂層，礫少量（根による撹乱）

大館遺跡　Cトレンチ土層解説

1　暗褐色　表土
2　褐　色　表土と砂層の混じり合った層，山砂多量，礫少量
3　褐　色　2層とほぼ同質の層，山砂が2層よりやや多い
4　褐　色　2層とほぼ同質の層，礫を多量に含む。
5　褐　色　砂層
6　褐　色　砂層，褐色土を含む
7　褐　色　砂層，砂極めて多量，礫少量
8　暗褐色　暗褐色土と砂の混じる層，礫少量
9　褐　色　暗褐色土と砂の混じる層，礫少量
10　褐　色　砂極めて多量，礫少量
11　暗褐色　砂極めて多量，黒色土中量，礫少量
12　暗褐色　黒色土多量，砂中量
13　黒褐色　黒色土主体，砂中量，砂は小ブロック状にまだらに入る
14　褐　色　砂極めて多量，黒色土中量，礫少量
15　暗褐色　14層とほぼ同質，黒色土がやや多い
16　黒褐色　黒色土主体，砂中量，礫少量
17　暗褐色　含有物は16層とほぼ同質，16層より硬くしまる

cm程である。層位は，第1層から第9層まで分けることができる。第1層は，表土であり，褐色を呈している。第2層から第6層は，黒色土と砂の混じった層であり，黒色土と砂の量で細分できる。第7層は，部分的に黒色土がみられる。32°程傾斜していた斜面が，この部分から15°程の傾斜に変化している。第8層から第9層は，砂と黒色土の混じった層であり，第9層は，草木の根による撹乱を受けている。上部から中部は，地山に対してほぼ平行な層をなし，自然堆積の状況を呈している。

(3)　Cトレンチ（第94図）

Cトレンチは，調査区の南部，大館の西側斜面南部に設定した。

上部から中部にかけての層の厚さは，60 cm～100 cm程であるが，下部の層の厚さは，130 cm程を測る部分がみられる。層位は，第1層から第17層まで分けることができる。第1層は，表土であり，暗褐色を呈している。第2層から第4層は，暗褐色土と砂の混じった層であり，暗褐色土と砂の量で細分できる。第5層から第11層は，中部から下部にかけての層であり，木の根による撹乱が多くみられる。下部の第12層から第17層は，黒色土が多くみられ，第14層を除いた層は，黒色土が主体になっている。上部から中部は，地山に対してほぼ平行な層をなし，自然堆積の状況を呈している。下部は，黒色土が多量に見られる。

以上，大館遺跡の3本のトレンチにより，斜面の土層を観察した結果，Aトレンチを入れた西側斜面と北側斜面の境付近は，自然堆積の状況を呈しており，Bトレンチを入れた西側斜面中央部においても，同様な結果がみられる。Cトレンチを入れた西側斜面南部においては，斜面下部に多量の黒色土が，自然堆積の状況を呈している。

第2節　小館遺跡

1　遺跡の概要

小館遺跡は，大洗町の南西部，大館遺跡の北側約50 m程の，西側に涸沼を臨む舌状台地の先端部に位置している。小館の東側は台地が広がり畑地となっており，北側から西側にかけては，

沖積低地が開け，水田地帯となっている。南側には，小さな支谷を挟み，約50 m程離れて大館遺跡が位置している。台地面と低地面の比高は，20 m前後を測り，台地上は，雑木林であるが，土塁や堀が遺存している。西側斜面の上方部，標高18 m程には，小館の腰曲輪と思われる平坦部があり，その上位には，高さ4～5 m程の土塁が，傾斜角40°～50°で築かれている。

調査区は，涸沼に面した小館の西側斜面の一部と平坦部の一部，面積1,089 ㎡であり，標高は約5～18 mを測る。現況は，雑木林である。

調査の結果，小館遺跡の西側斜面上部に人為的に削平した跡がみられ，城郭としての防禦機能を強化したことが窺える。

遺物は，出土しなかった。

2　調査経過と方法

当調査区の調査は，平成2年1月17日～3月26日まで実施した。調査区内，小館遺跡の西側斜面部に3本のトレンチをほぼ東西に設定し，斜面北側からAトレンチ，Bトレンチ，斜面上部の平坦部をCトレンチとした。規模は，Aトレンチ幅1.5 m長さ24 m，Bトレンチ幅1.5 m長さ24 mとし，平坦部のCトレンチは，幅1.0 m長さ3.5 m，深さ0.6 mである。

調査は，トレンチ設定後，表土層を重機により掘削し，その後，人力でトレンチ内を掘削し，土層断面を観察した。トレンチは，実測，写真撮影が済み次第，安全対策を施して，3月26日には，すべての調査を終了した。

3　調査結果

(1)　Aトレンチ（第95図）

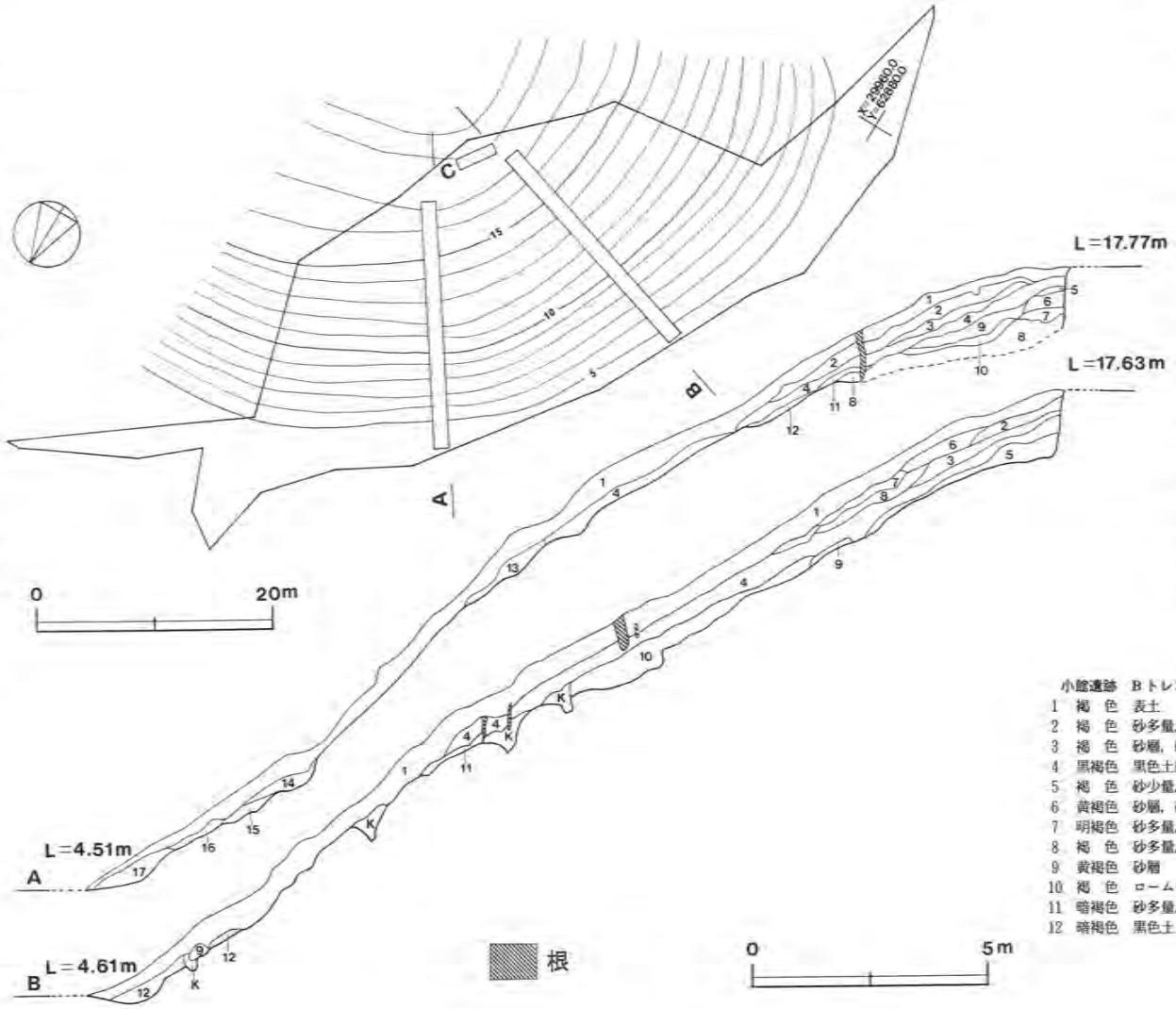
Aトレンチは，調査区の北部，小館の西側斜面北部に設定した。

層の厚さは，斜面上部において，120 cm～170 cm程であるが，中部から下部にかけては，40 cm～60 cm程を測る。層位は，第1層から第17層まで分けることができる。第1層は，表土であり，褐色を呈している。第2・3層は，砂層，第4層が黒色土層，第5層が，表土とローム層との漸移層，第6層から第10層は，ローム層である。中部は，2層に大別でき，第1層の表土（厚さ30 cm～60 cm）と第4層の黒色土層（厚さ20 cm～30 cm）のどちらも，地山に対しほぼ平行な層を呈している。斜面上部において，人為的に削平されたと思われる痕跡が，土層から観察される。斜面下部においては，表土と砂層の混じった層があるが，大部分は，地山とほぼ平行な土層になっており，厚さは，15 cm～40 cmを測り，自然堆積の状況を呈している。

(2)　Bトレンチ（第95図）

Bトレンチは，調査区の南部，小館の西側斜面南部に設定した。

層の厚さは，斜面上部において，110 cm～140 cm程であるが，中部から下部にかけては，40 cm～100 cm程を測る。層位は，第1層から第12層まで分けられる。上部において，第1層は，



小館遺跡　Aトレンチ土層解説

1	褐　色	表土
2	褐　色	黄褐色の砂を主体とし，黒色土が部分的に若干混じる
3	にぶい黄褐色	砂層，粘土ブロック多量
4	黒褐色	旧表土と思われる黒色土層，ローム粒子，砂，炭化粒子を少量含む
5	褐　色	表土とローム層との間層（漸移層），ロームを多量に含む
6	褐　色	ローム層
7	明黄褐色	KP（鹿沼土）層
8	褐　色	ローム層
9	褐　色	ローム層の斜面部の堆積，6層に比べやや層が乱れる
10	褐　色	9層と同質，KPを多量に含む
11	暗褐色	旧表土とローム層の間の層，ロームが多量に混じる
12	にぶい黄褐色	黒色土と砂（やや粘土質）が混じる
13	暗褐色	砂多量
14	褐　色	砂多量，礫少量
15	褐　色	砂が14層より少ない
16	暗褐色	砂より黒色土の方が多い
17	暗褐色	表土と地山（砂層）の間の層，砂・礫多量

小館遺跡　Bトレンチ土層解説

1	褐　色	表土
2	褐　色	砂多量，礫少量
3	褐　色	砂層，礫少量，黒色土少量
4	黒褐色	黒色土層，粘性しまりやや有り
5	褐　色	砂少量，粘性有り
6	黄褐色	砂層，礫多量，しまり弱い
7	明褐色	砂多量，礫少量
8	褐　色	砂多量，礫少量
9	黄褐色	砂層
10	褐　色	ロームを主体とする褐色土，粘性がやや強い
11	暗褐色	砂多量，細礫少量，砂層と表土の中間層
12	暗褐色	黒色土（表土）と砂層の中間層，砂極めて多量

第95図　小館遺跡A・Bトレンチ土層断面・トレンチ設定図

表土であり，厚さは30 cm程である。第2・3層は，砂層であり，黒色土の混じり具合で分けられる。第4・5層は，黒褐色及び褐色を呈した土層である。第6層から第9層は，砂層になっている。中部の土層は，第1層の表土（厚さ25 cm～50 cm），第4層の黒色土層（厚さ20 cm～50 cm），第10層の褐色土層（厚さ10 cm～70 cm）の，3層に分けられる。根による撹乱があるものの，ほぼ地山に平行な層をなしている。下部の土層は，厚さ40 cm～60 cm程を測り，層位は，3層に分けられる。第1層は，表土であり，厚さは20 cm～30 cmを測る。第12層は，黒色土と砂層との中間層であり，厚さは，20 cm～50 cmを測る。第9層は，厚さ20 cm程で，第12層の一部に混入している。斜面上部において，人為的に削平されたと思われる痕跡が，土層から観察されるが，中部から下部は，地山とほぼ平行な土層になっており，自然堆積の状況を呈している。

(3) Cトレンチ（第95図）

Cトレンチは，斜面の上位の平坦部，小館の腰曲輪と思われる部分に，ほぼ南北に設定した。トレンチの規模は，幅1.0 m長さ3.5 m，深さ0.6 mである。遺構確認のために，黒色土層の上面まで掘り下げた。

以上，小館遺跡の3本のトレンチにより，斜面部及び平坦部の一部の土層を観察した結果，小館の西側斜面部は，自然堆積と思われる状況を呈しているが，平坦部においては，人為的な削平の痕跡が見られたが，柱穴等の遺構は，検出できなかった。

第3節　考　　察

今回の調査は，舌状台地上に構築された大館，小館の西側斜面部の調査であり，遺物の出土もなかった。そこで，本節においては，すでに大洗町によって発掘調査されている小館遺跡についての報告書『茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告』や，現地踏査による大館，小館概念図等の資料を参考に，大館，小館の地理的環境，構造，歴史的環境の3項に分けて記述する。

1　大館，小館の地理的環境

大館は，西側に涸沼を臨む，舌状台地の先端部に構築されており，水田面との比高は20 m程である。東側は，台地が広がっているものの土塁や空堀がめぐらされ，外敵からの防禦を強化した跡が窺える。南側から北側にかけての三方は急崖をなし，崖下の低地は湿地帯となっている。

小館は，大館と同様に，同一の舌状台地の先端部に構築されており，水田面との比高は20 m程である。大館の北側と小館の南側の間には，小さな支谷が東西に入りこみ，約50 m程の隔りがある。東側の台地は大館と地続きになっているが，南側から北側にかけての三方は急崖をなし，その裾廻りを低湿地が囲むような地形になっている。

当時は，西側から涸沼の水が大館，小館の裾部まできていたため，東側を除く三方からの外敵の侵入を阻んだものと思われる。大館，小館は同一の舌状台地上に構築されており，この台地の東側から南側にかけての台地縁辺部には空堀が掘られ，東側の防禦的機能を高めていたものと思われるが，現在は，埋め立てられている。

2　大館，小館の構造について

一般に，中世の城は自然の地形を巧みに利用して築城されている。今回調査した大館遺跡，小館遺跡についても，涸沼に臨む舌状台地の先端部であり，三方が急崖で，その裾廻りを低湿地が取り囲むという場所に構築されている。大館，小館とも，このような自然の地形を最大限利用し，外敵の侵入に対して防禦の強化に努めていたものと思われる。

①大館

現地踏査による，館の地形観察や館の概念図を基に，大館の構造について検討してみると，主郭は第96図のⅠの郭(1)にあたるものと考えられる。主郭は，館の北西部に位置し最大東西幅約50 m，南北幅約60 mの規模で「勹」状を呈し，標高は23 m程を測る。西側の一部と東側を除く三方には土塁や空堀が残存している。

Ⅱの郭(2)は，主郭の東側に位置し，最大東西幅約35 m，南北幅約55 mの規模で，長方形を呈しており，主郭より，0.5～0.6 m程低くなっている。北側と東側には土塁が残存しており，北側の空堀も本来は東側から南側を囲むように掘られていたものと思われる。北東側には，折歪(5)と思われる部分が認められ，Ⅱ郭の北側土塁の中央部には，虎口(6)と思われる部分がある。

Ⅲの郭(3)は，Ⅱの郭の南側に位置し，南側及び東側が急崖になっいる。最大東西幅約80 m，南北幅約70 mの規模で，「勹」状を呈し，標高23 m程を測る。本郭の南側斜面には，二重の横堀(8)が掘られている。

Ⅳの郭(4)は，Ⅲの郭の南西側に位置し，最大東西幅約25 m，南北幅約25 mの規模で，方形を呈し，西側及び南側が急崖になっている。Ⅲの郭の南側斜面とⅣの郭の南側斜面の間には，縦堀(7)が掘られており，外敵の斜面での移動を困難にし，防禦機能を高めようとした跡が窺える。

②小館

現地踏査の概念図や，大洗町で実施した発掘調査を基に小館の構造について検討してみると，主郭は第96図のⅠの郭(9)に当たるものと考えられる。最大東西幅約40 m，南北幅約30 mのほぼ長方形を呈し，標高は約22 mを測る。主郭の南側には，虎口(10)と思われる部分があり，その南側下方には，馬出し(11)と思われる部分も認められる。東側には，折歪(12)と思われる部分があり，主郭を取り囲むように，腰曲輪(13)と思われる平坦部も認められる。主郭の東側，Ⅱの郭に当たる部分は，現在，鹿島臨海鉄道大洗鹿島線が通っている。『茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告』によると，Ⅱの郭には，土塁や空堀が検出され，西部及び北部を固めている。西部土塁の南側に

は土橋が検出され，北部土塁中央部から南へ20ｍ程の所には水甕安置処が検出されている。

このような，舌状台地の縁辺部を利用して構築された中世城郭としては，比較的近い位置に，北浦村神明城跡，鉾田町烟田城跡がある。

3　大館，小館の歴史的環境

霊亀元年（715年）の郷里制施行後鹿島郡は18郷となり，現在の大洗町は宮田郷，大屋郷に属していた。13世紀には，鹿島南条と鹿島北条とに分かれ，当町域は北条系に属していた。鹿島北条の地域は，大掾鹿島系の支配領域であったと考えられるが，在地領主層を明確にできる資料がない。大館，小館に関係する文献もなく，何氏がいつ頃構築したものなのか不明である。小館については，昭和53年に大洗町が調査している。その報告書によると，小館のⅡの郭に水甕安置処が検出され，大甕の破片が出土している。大甕は，鎌倉時代末の古常滑の流れをくみ，口縁に帯状の突帯をもつ折端口縁を有しており，時代としては，室町時代までは下らない建武中興時代から南北朝期までのものであろうと考えられている。

今回の調査は，舌状台地の斜面部という限られた範囲のため，大館，小館ともその全容は明らかにできなかったが，どちらの台地上にも土塁や空堀が残存しており，館が存在していたということは明白である。

縄張りからみた大館，小館は，折歪の屈曲が随所に見られ，時期としては，16世紀末の様相を呈しているという。特に，小館の虎口(10)には，馬出し(11)と推測される小郭を付設するなど，縄張りが斬新なものということである。

小館から出土した大甕については，ある程度の時期について捉えられており，縄張りの様相からも16世紀末の築城と思われる。

また，小館については，大館に付属した付城として存在していたという見方もあり，この点から考えると，大館，小館ともに，同時期に存在していたものと思われる。しかし，出土遺物や文献がなく，詳細については不明な点が多く，今後の研究に期待される。

主な参考文献（順不同）

(1)　大洗町教育委員会 「茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告」 1978年
(2)　茨城県教育財団 「神明城」 茨城県教育財団文化財調査報告第48集　1988年
(3)　茨城県教育財団 「烟田城跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第68集　1991年
(4)　大洗町教育委員会 「大洗町史」 1986年
(5)　龍ヶ崎市教育委員会 「龍ヶ崎の中世城郭跡」 1987年

第96図　大館・小館遺跡概念図

（作図　三島　正之　1991．2．17調査）

結　　語

平成2年10月から平成3年3月にかけて実施された大洗町成田町に所在する，ヨナ川遺跡，大館遺跡，小館遺跡の発掘調査は，主要地方道大洗友部線道路改良工事に伴うもので，平成3年4月から平成3年9月までの整理作業をもって完了する運びとなった。

調査の結果，ヨナ川遺跡からは弥生時代の竪穴住居跡が4軒検出され，その中の2軒からは，炉が検出されている。古墳時代の住居跡は24軒検出され，当遺跡では，最も数が多い。その中の1軒からは炉が検出され，17軒からは竈が検出されており，古墳時代において住居の形態が，炉から竈へと変化していったことが窺える。奈良・平安時代の住居跡は3軒検出され，その中の2軒からは竈が検出されている。その他に，土坑29基，地下式壙1基，溝3条が検出されている。

出土土器は，土師器を主とするが，少量の須恵器も出土している。その他，管状土錘，球状土錘，紡錘車等の土製品が出土し，石製品や鉄製品も少量出土している。特に，管状土錘，球状土錘は数も多く，当遺跡が涸沼の近くであり，古くから漁を営んでいたことが窺える。このように，ヨナ川遺跡の所在する，この台地上には，弥生時代後期から人々が定住し，古墳時代を経て，平安時代まで，継続的あるいは断続的に集落が形成されて来たものと思われる。

大館遺跡，小館遺跡については，土塁の西側斜面部の調査のみであったが，涸沼に面した舌状台地という自然の地形を巧みに利用し，外敵からの防禦機能を高めようとした築造の跡がみられ，文献には記されてはいないが，館が存在していたという事実が明らかになった。

最後に，本報告書が，今後，当地域の歴史を解明するため，ささやかな一助となれば幸いである。

なお，本報告書をまとめるにあたり，大洗町教育委員会をはじめ，関係各位から多くの御指導，御協力を頂いたことに対し，心から感謝の意を表したい。

写　真　図　版

ヨナ川遺跡

大館遺跡

小館遺跡

調査前風景

遺構確認状況

テストピット土層

第1号住居跡

第2号住居跡

第3号住居跡

第4号住居跡

第5号住居跡

第5号住居跡遺物出土状況

第6号住居跡

第7号住居跡

第 8 号住居跡

第 9 号住居跡

第10号住居跡

第11号住居跡

第12号住居跡

第12号住居跡遺物出土状況

第13号住居跡

第14号住居跡

第14号住居跡遺物出土状況

第14号住居跡覆土上層投棄遺物出土状況

第14・15号住居跡

第16号住居跡

第17号住居跡

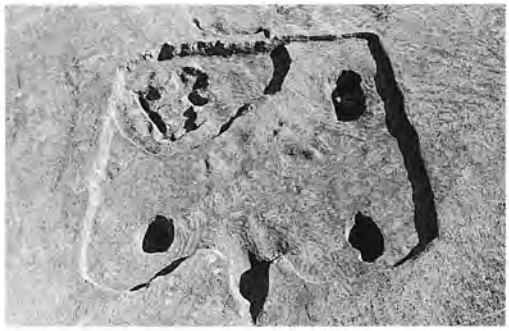
第17号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

第18号住居跡

第19号住居跡

第20号住居跡

第21号住居跡



第22号住居跡

第23号住居跡

第24号住居跡

第25－A・B号住居跡

第26号住居跡

第26号住居跡遺物出土状況

第27号住居跡

第28号住居跡

第28号住居跡遺物出土状況

第28号住居跡遺物出土状況

第28号住居跡遺物出土状況

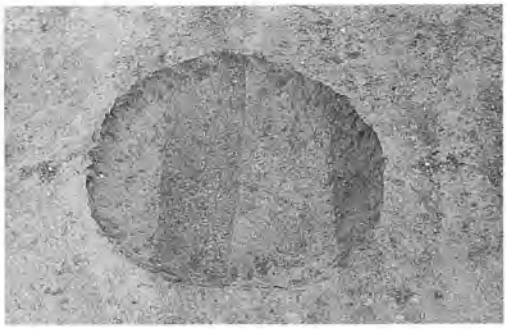
第28号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

第28・29号住居跡

第30号住居跡

第３号土坑

第４号土坑



第５号土坑

第６号土坑

第８号土坑

第９号土坑

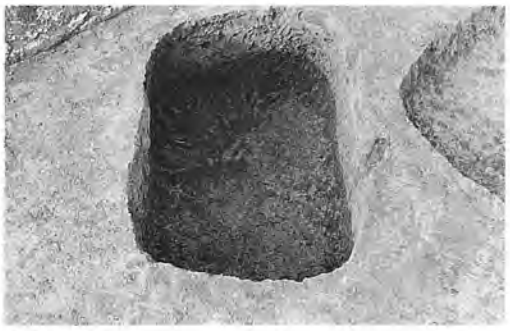
第10号土坑

第８・10・11・12・15・16号土坑

第11号土坑

第12号土坑

第15号土坑



第16号土坑

第17号土坑

第18号土坑

第19号土坑

第20号土坑

第20号土坑断ち割り断面

第１号溝　第１・２号土坑

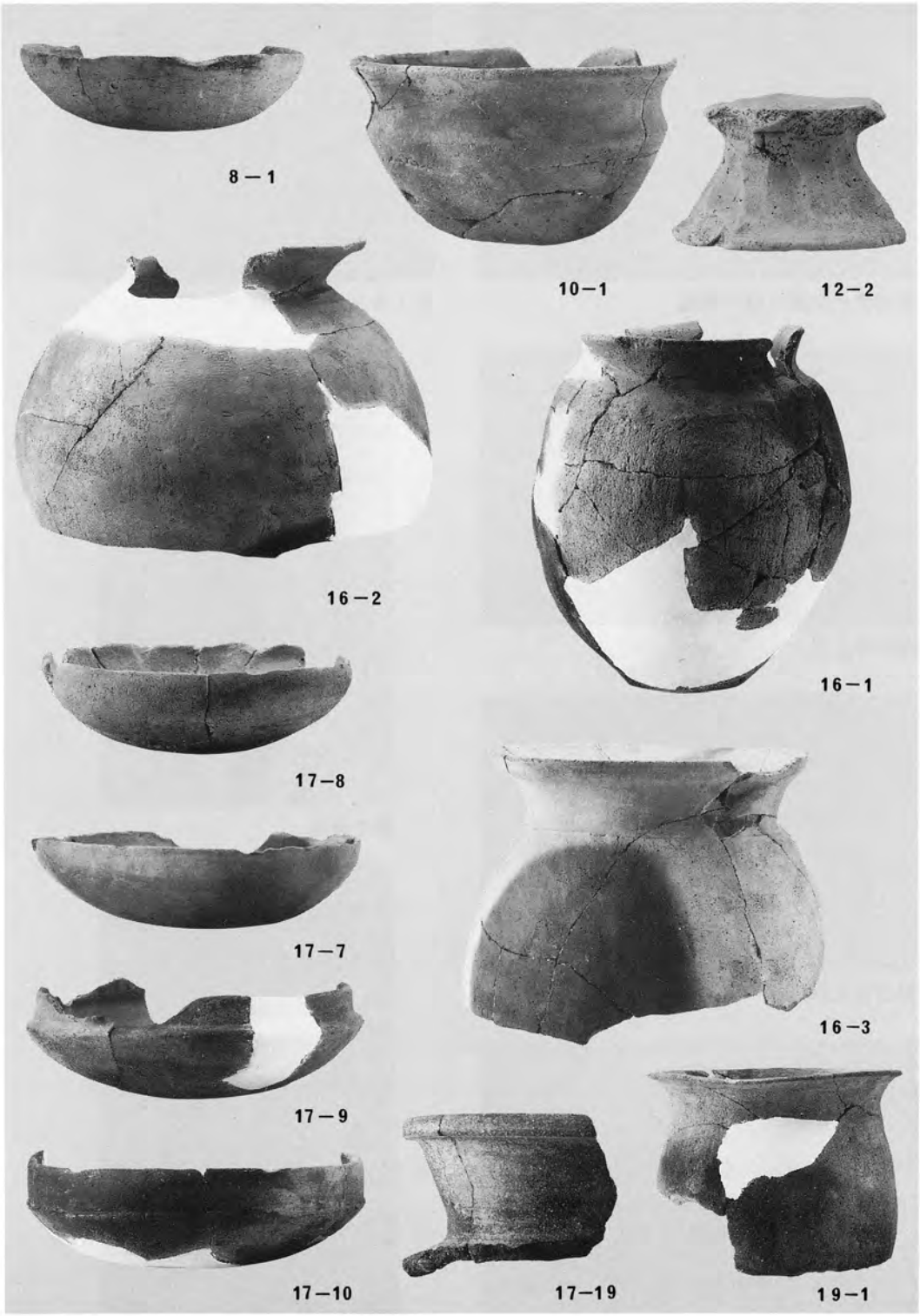
第21号土坑

第２号溝

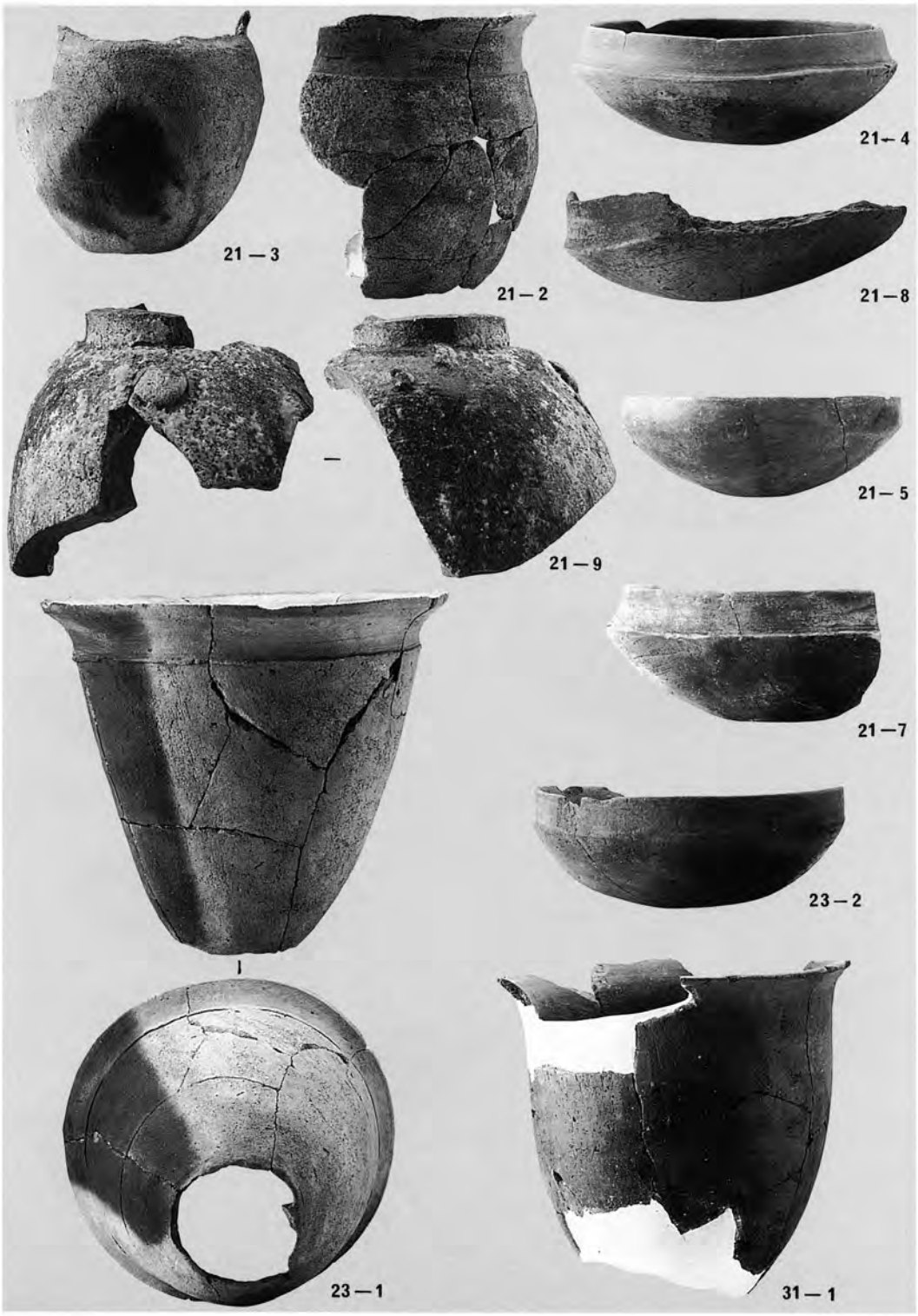
第27号土坑

第３号溝

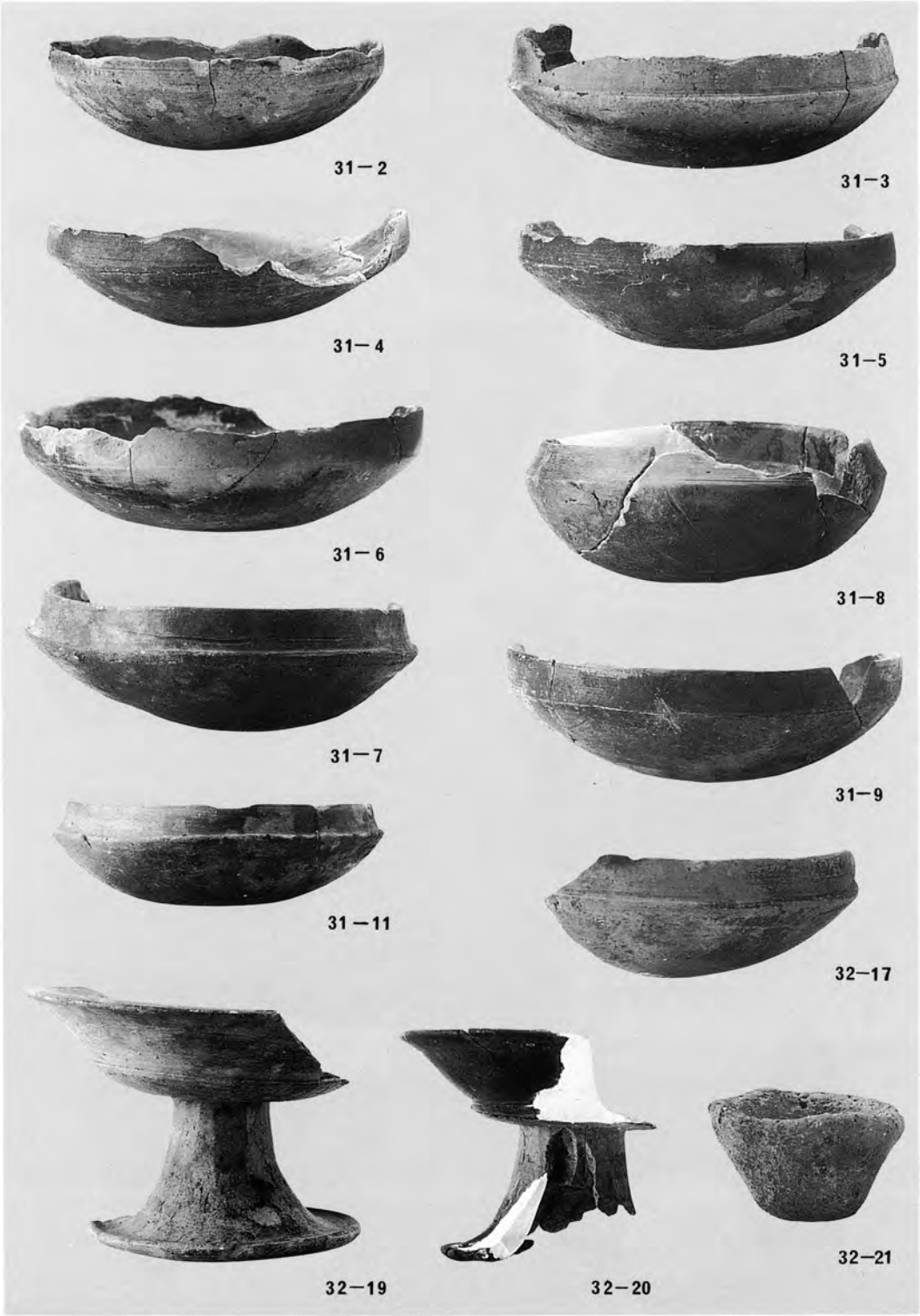
第１号地下式壙



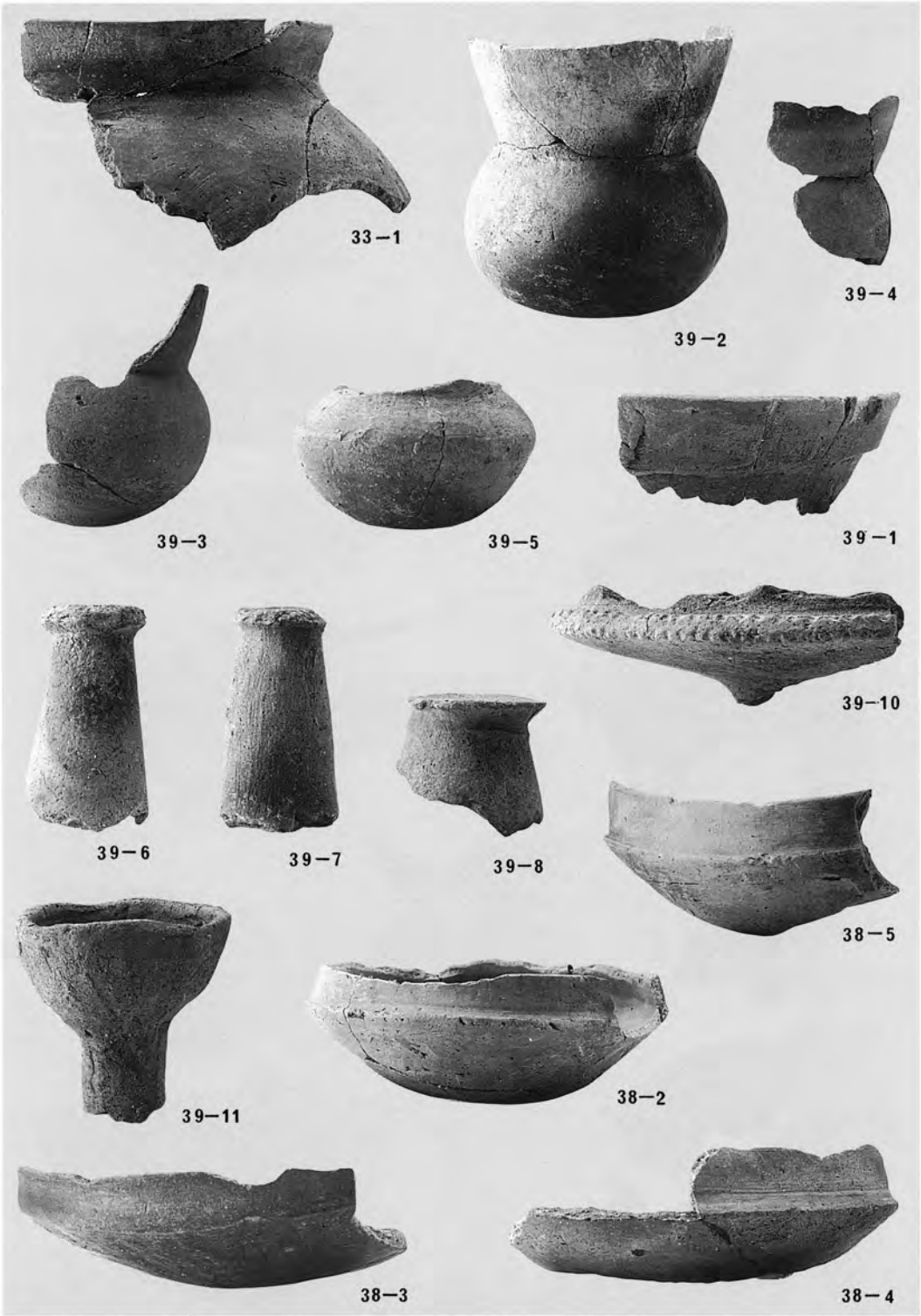
第2～6号住居跡出土遺物



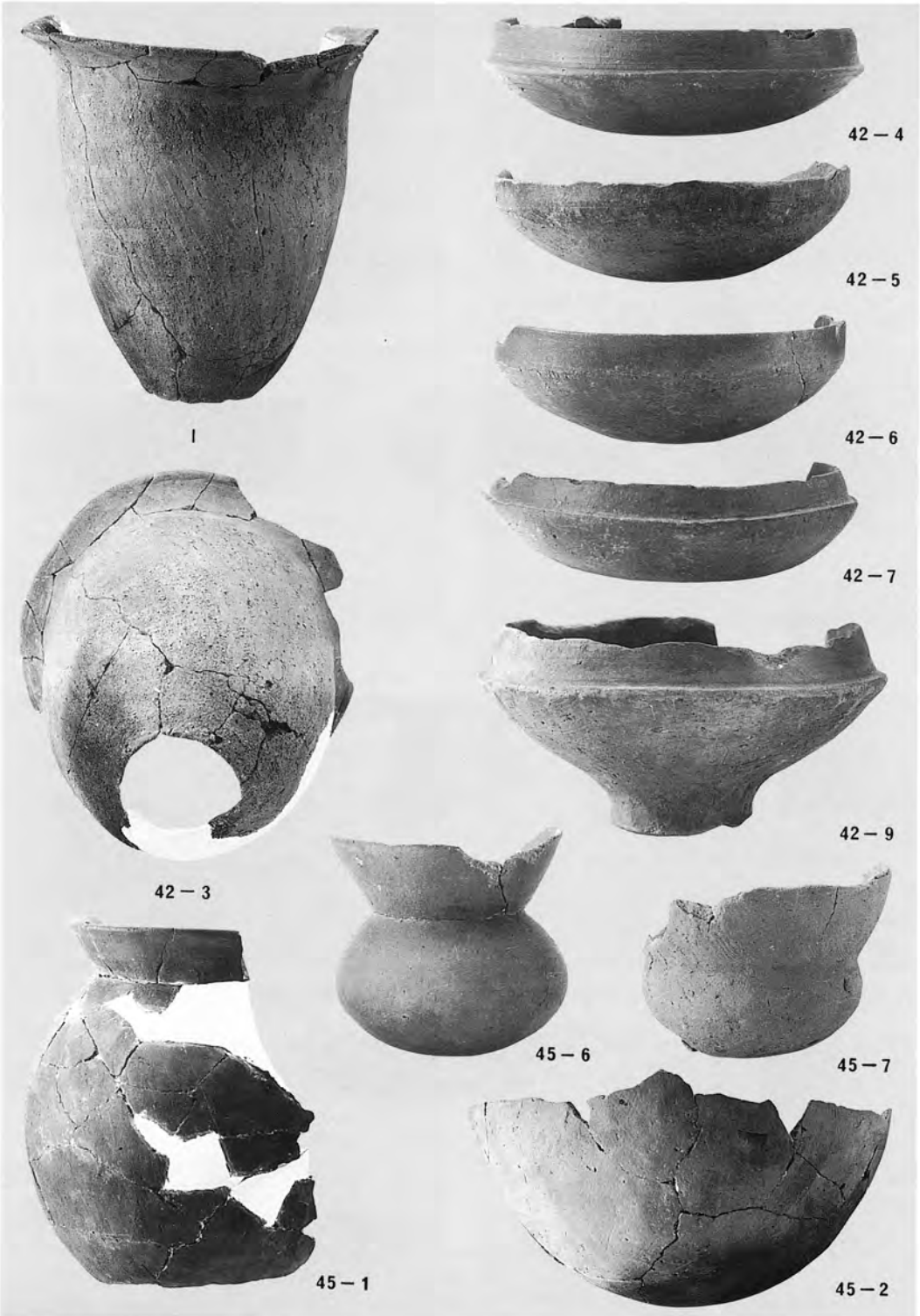
第8・9・12号住居跡出土遺物



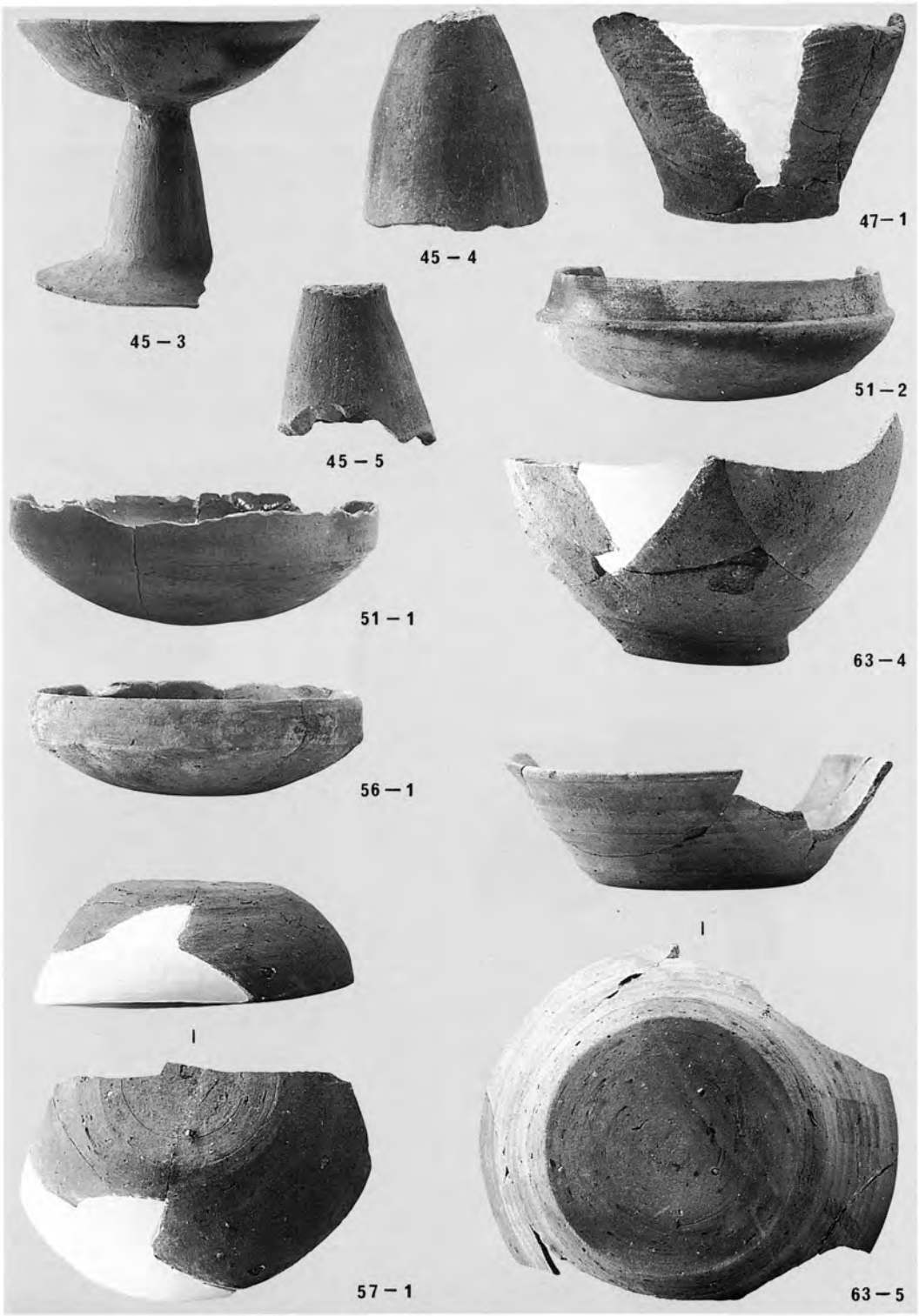
第12号住居跡出土遺物



第13・15号住居跡出土遺物，第14号住居跡覆土上層投棄遺物

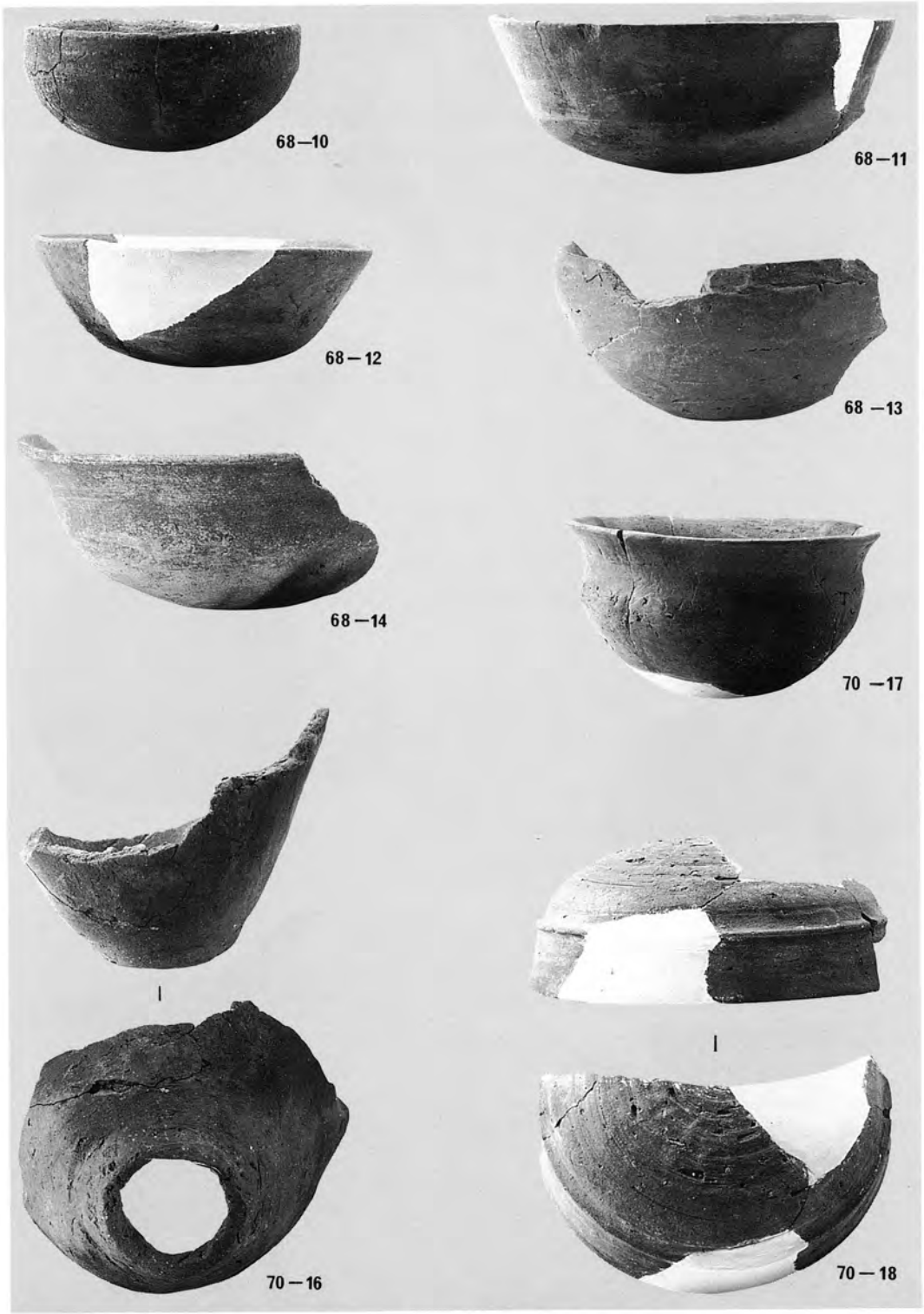


第16・17号住居跡出土遺物

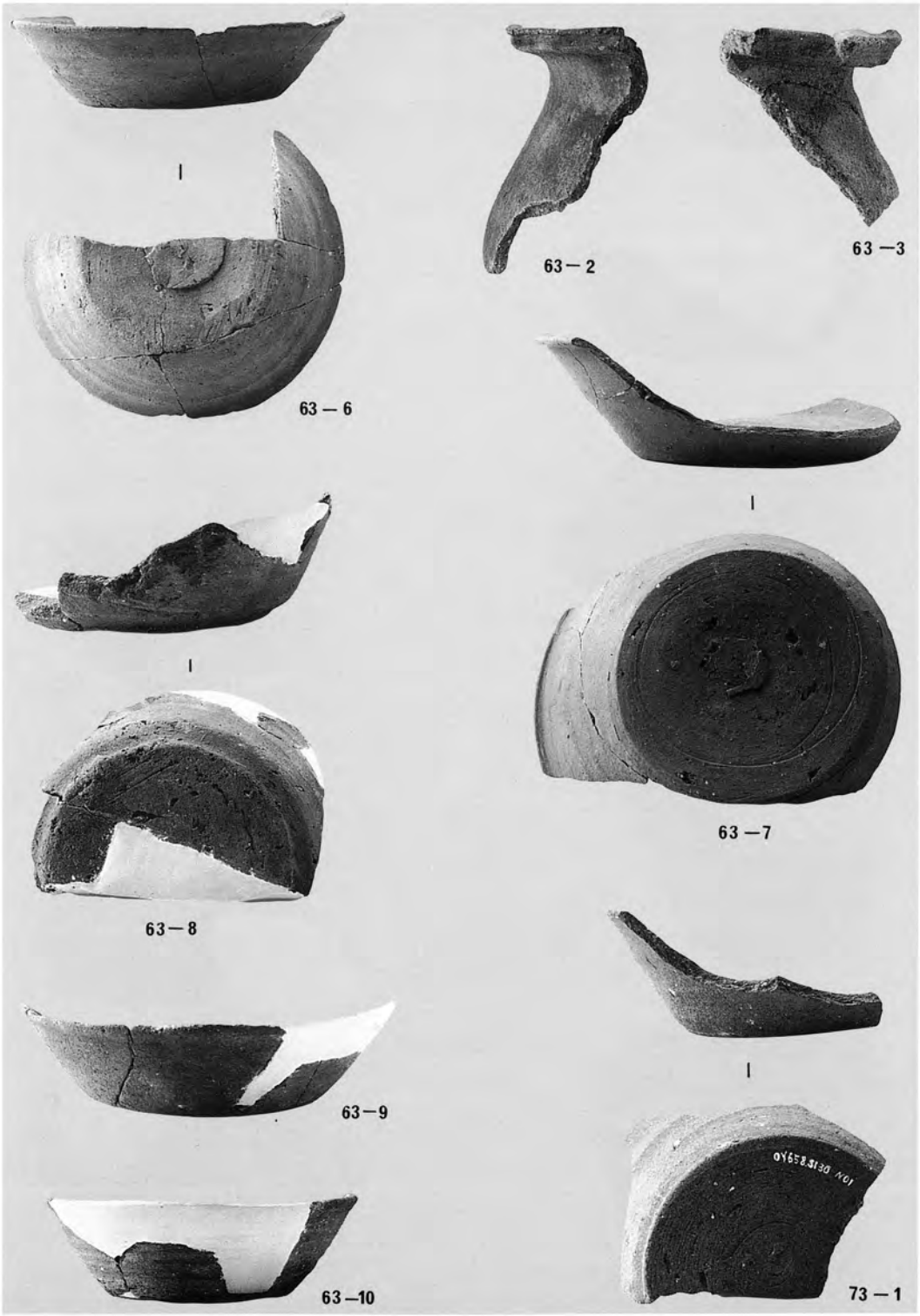


第17・18・20・23・24・26号住居跡出土遺物

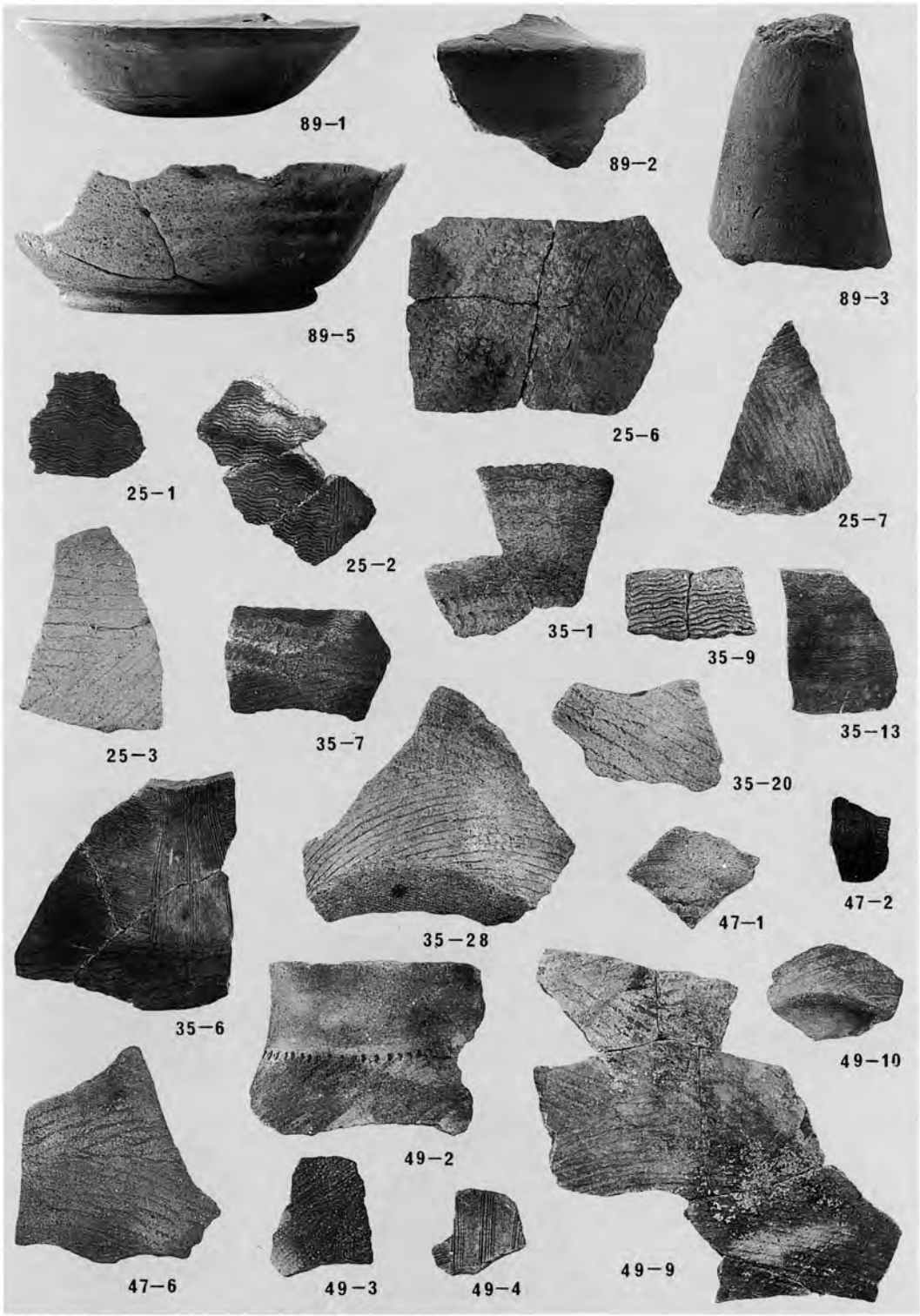
第28号住居跡出土遺物 (68－1(下)→68－2，68－7→69－7，68－9→69－9)



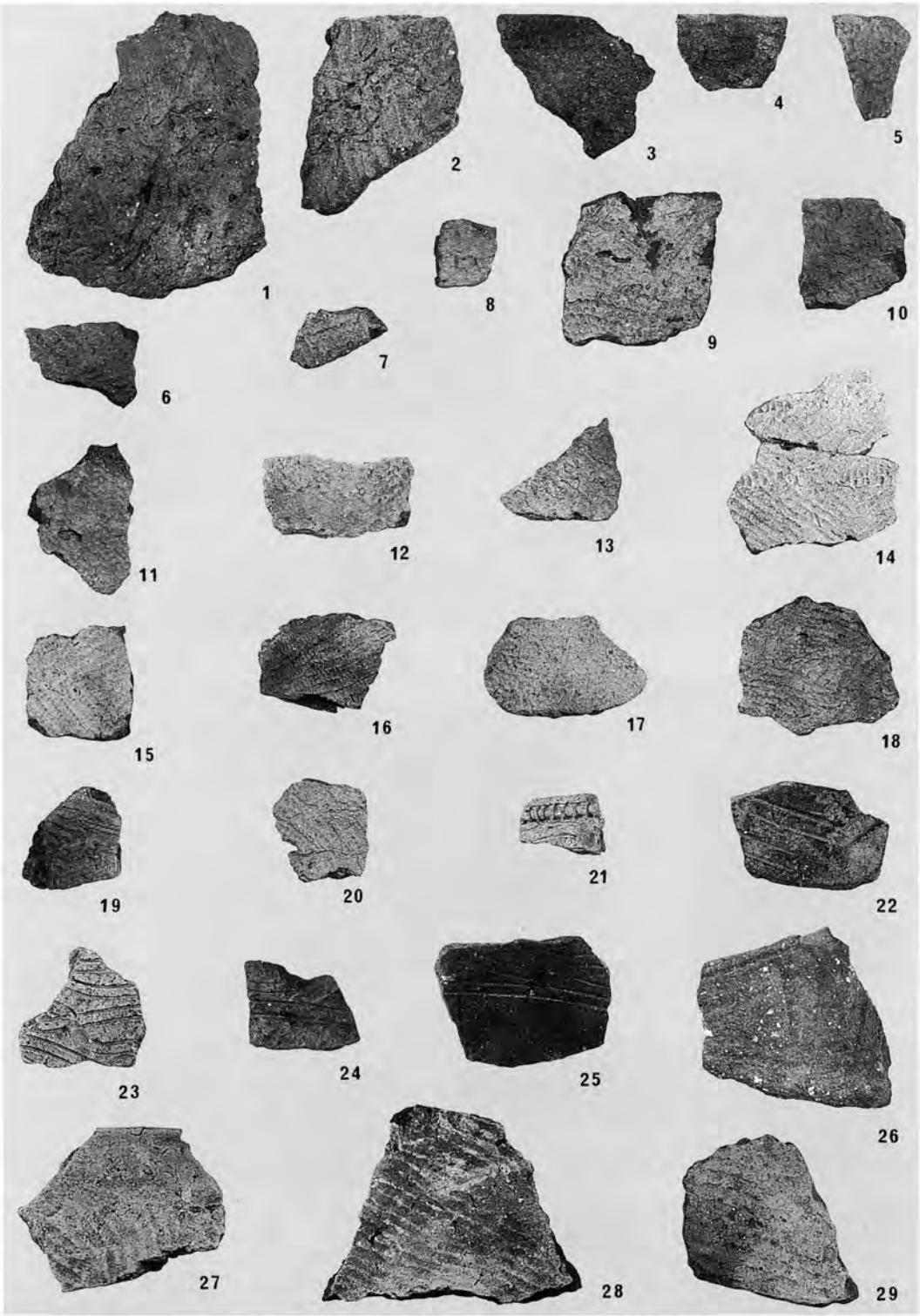
第28号住居跡出土遺物　(68—10→69—10, 68—11→69—11, 68—12→69—12, 68—13→69—13, 68—14→69—14, 70—16→69—16)



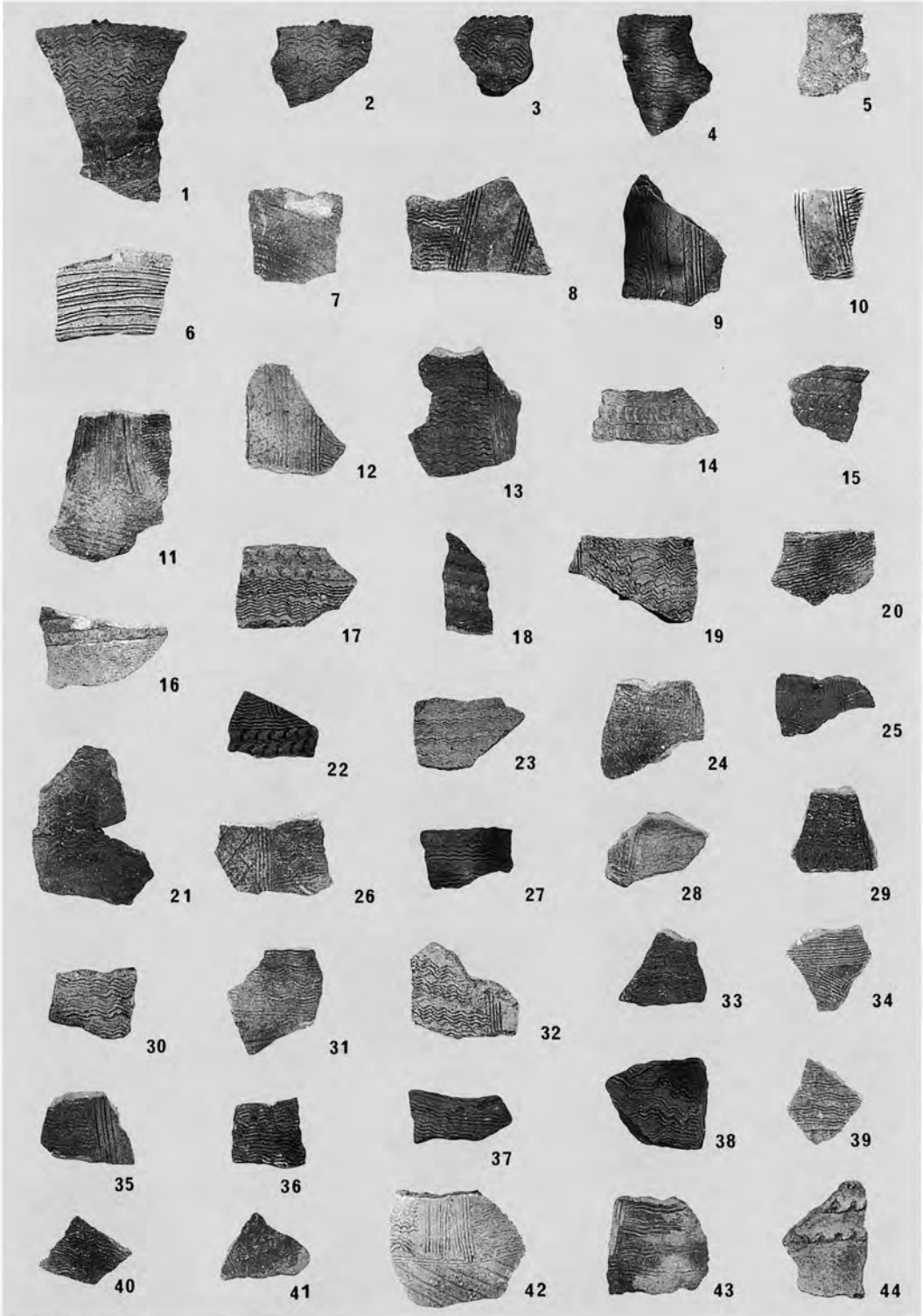
第26・30号住居跡出土遺物



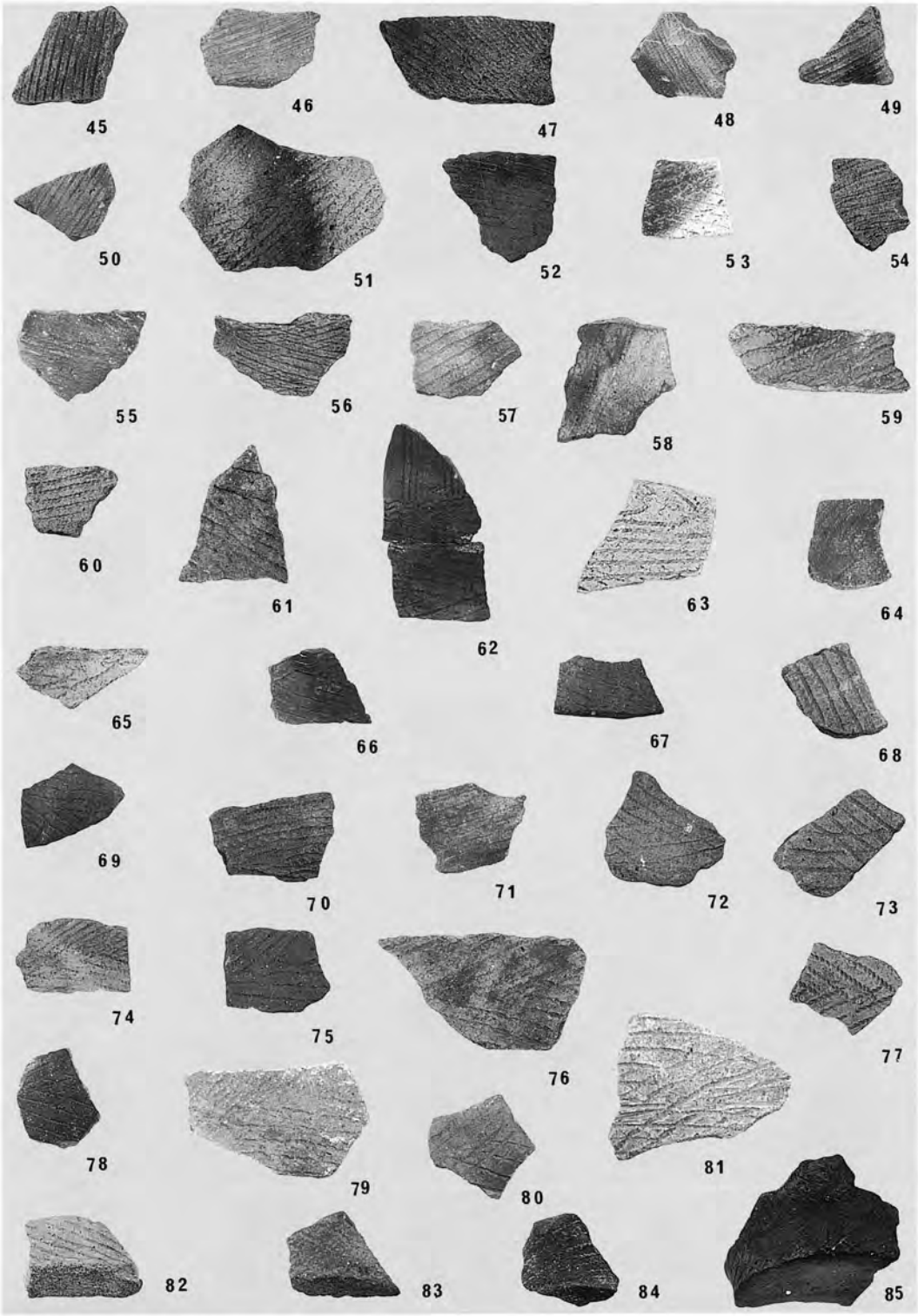
遺構外・第10・14・18・19号住居跡出土遺物　(47−1→47−2，47−2→47−3，47−6→47−8)



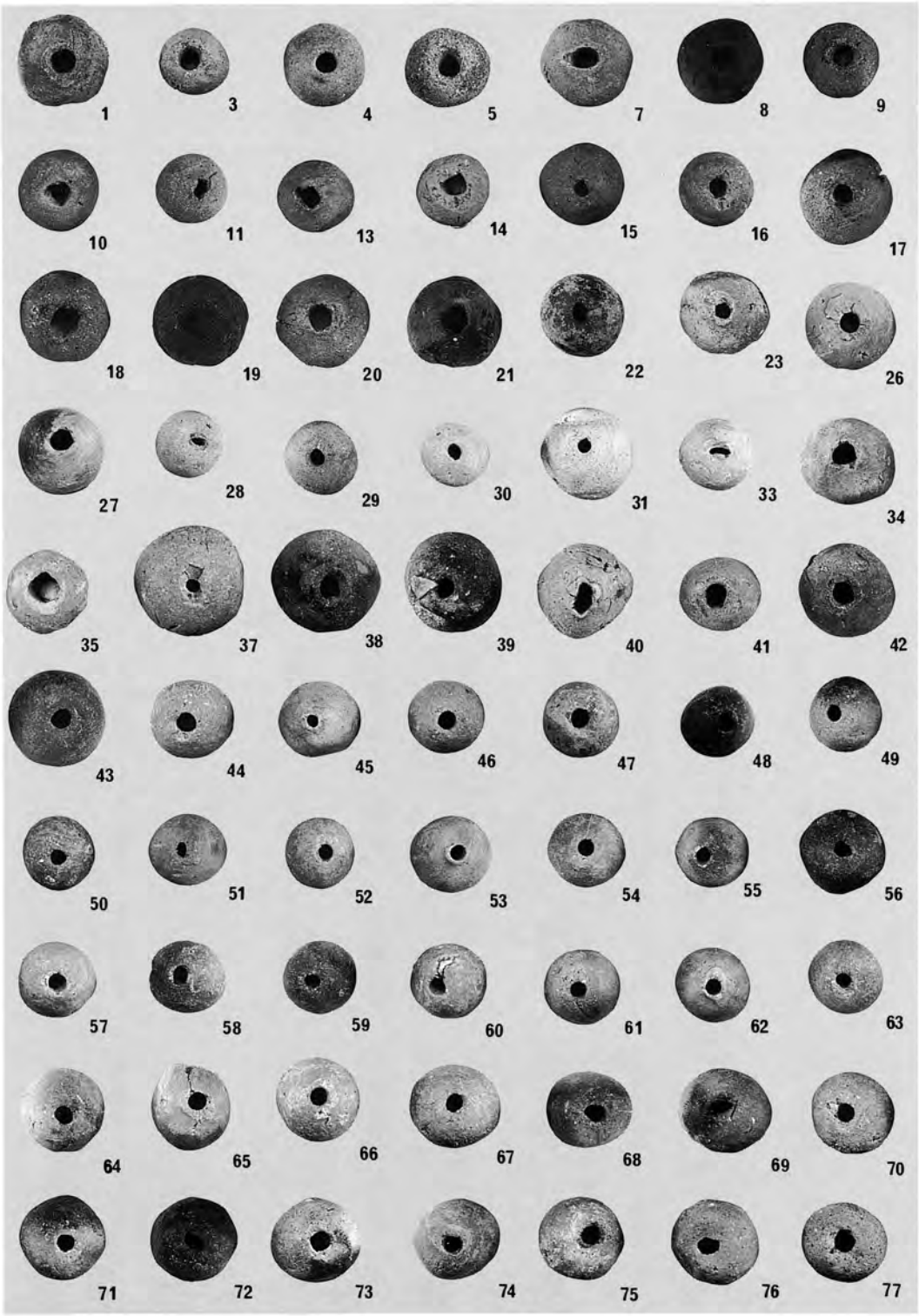
遺構外出土遺物 （第86図）



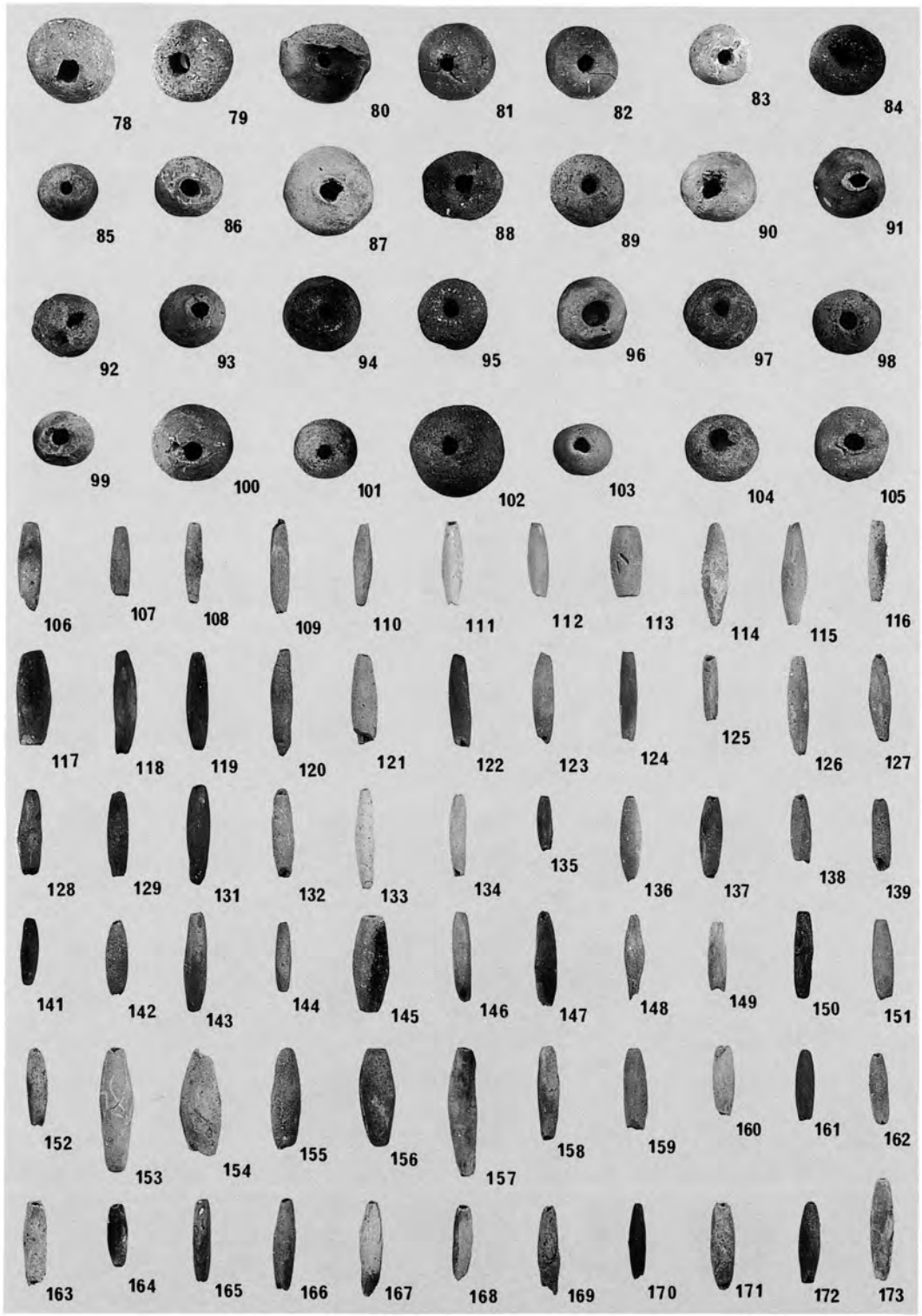
遺構外出土遺物 （第87図）



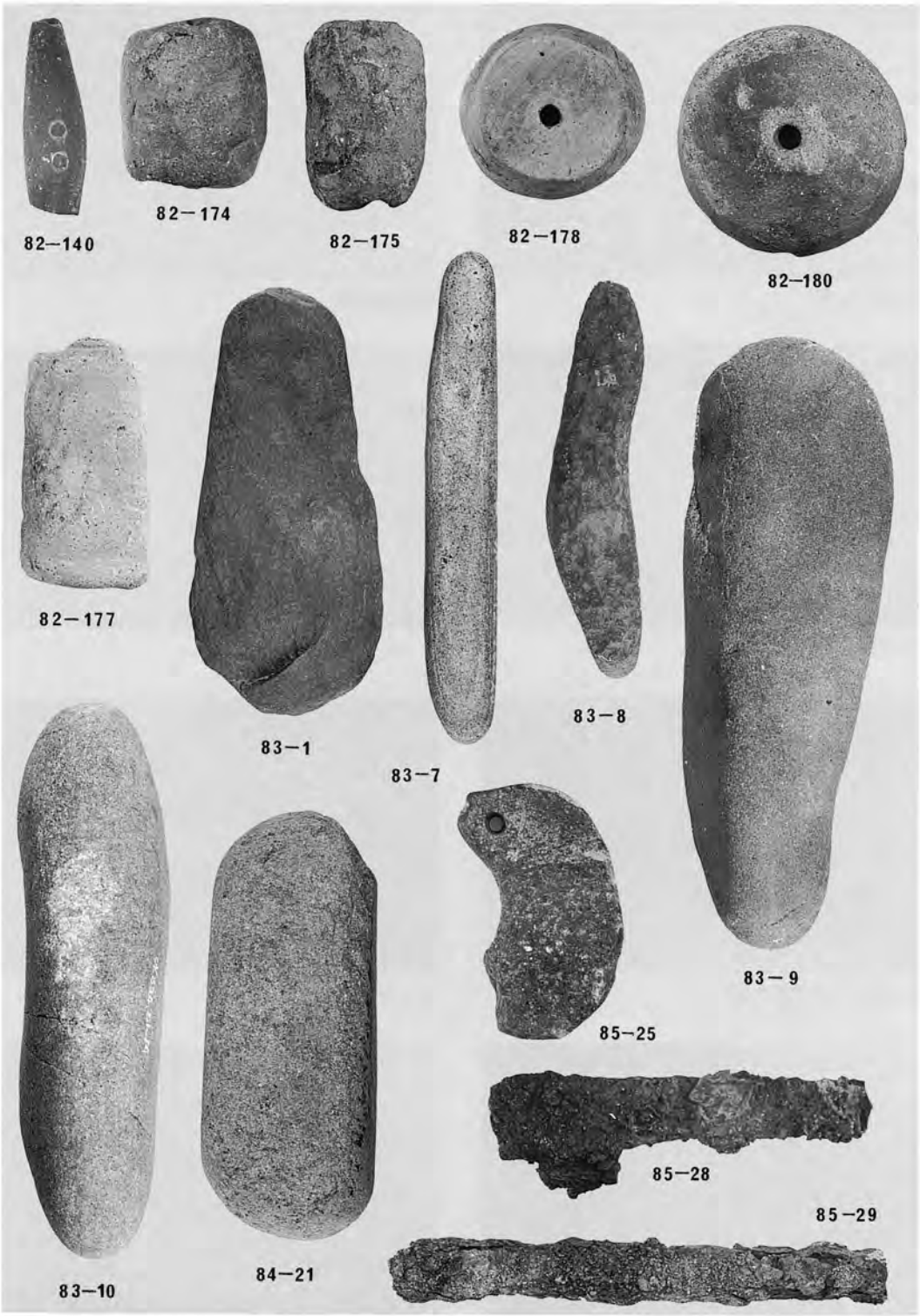
遺構外出土遺物 （第88図）


1
3
4
5
7
8
9
10
11
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
26
27
28
29
30
31
33
34
35
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77

球状土錘 （第80・81図）



球状・管状土錘（第81・82図）



土製品，石器，石製品，鉄製品

調査前全景

調査後前景

Aトレンチ全景

Aトレンチ土層

Aトレンチ上部土層

Aトレンチ上部土層

Bトレンチ全景

Bトレンチ上部土層

大館Ｂトレンチ下部土層

大館Ｂトレンチ中部土層

大館Ｃトレンチ全景

大館Ｃトレンチ上部

大館Ｃトレンチ下部

大館Ｃトレンチ下部土層

小館調査前全景

小館調査後全景

Aトレンチ土層

Aトレンチ上部土層

Aトレンチ中部土層

Aトレンチ中部土層

Bトレンチ全景

Bトレンチ上部土層

Bトレンチ下部土層

Cトレンチ全景

茨城県教育財団文化財調査報告第71集

主要地方道大洗友部線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

ヨナ川遺跡・大館遺跡・小館遺跡

平成３年９月25日　印刷
平成３年９月30日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町３丁目４番57号
☎　０２９２－２５－６５８７
印刷　ワタヒキ印刷株式会社
水戸市城東１丁目５番21号
☎　０２９２－２１－４３８１